

第5部 御殿下の青春



2008/10/25

思い出で綴るサッカー部史

戦時中の蹴球部

昭和 18 年卒業 渡辺隆二

府立四中では球技禁止

男の兄弟の多かった我が家に市川の叔父から革のボールが届いたのはまだ大正の末期であったと思う。すぐに弟たちとボールを蹴ることが大好きになった。そのころ入学した豊島師範の附属小学校はサッカーの盛んなところで、学校での楽しみは休み時間にゴムまりでサッカーの真似ごとをすることであった。身体は小さいが足が速くてすばしこかったので、5年生、6年生の時は朝日新聞主催の関東少年蹴球大会に選手として出場し、チームの主力として活躍した。

しかし、その後進学した旧制中学の府立四中では球技は一切禁止、器械体操だけが対外試合を認められていたので鉄棒や平行棒に明け暮れていた。その後、旧制の府立高等学校に入って今度こそサッカーが出来ると思っていたのに、兄が少し前の野球部のキャプテンをやっていたので、入学式の日先輩たちに口説かれて野球をやることになり、また断念せざるを得なかった。

そんな経緯で、大学でサッカー部に入ることを全く考えていなかった私のところに、高校同期の天野公義君がやって来たのは昭和 16 年の秋深くなったころだったと思う。「うちのヨーカン（横山陽三さん）がなべさん（私のこと）を呼んで来いと言っているんだよ」と。少し前の学内大会の工学部と法学部の試合で、私が今でいうハットトリック 3 得点を挙げたのがヨーカンさんの目に留まっただけ。高校時代、席は野球部でもクラス

戦などでは野球よりサッカーで活躍していたのも天野君の頭の中にはあったのかもしれない。そういわれると全くあきらめていたサッカーの虫にまた火がついた。

一抹の不安を感じながらも学生生活の最後を楽しもうと希望に満ちて御殿下のグラウンドに出て行ったのは 17 年の春ごろだったと思う。その年、須賀、大貫、三上、吉田氏らが入部されていた。

豚革のシューズに悩まされる

しかし、それからいろいろな苦労が待ち受けていた。まず野球のスパイクは何足も持っていたもサッカーシューズがない。戦争で最も物資不足の時代で革製品が買えない。三上君が親切にも自分で付き合っていた靴屋に連れて行ってくれて、交渉してやっと豚革でならということになった。

ところが豚革は見た目にはあまり変わらないが、固くて足にフィットしない。三上君の意見で保革油をたっぷり塗ったり、お風呂に長時間浸けたりしたがあまり変わらない。これには本当に悩まされた。

また身体が小さくて体重も 47 ～ 48 キロぐらいだったから、ほとんどが 70 キロ以上のメンバーの中での練習は容易なものではなかった。

さらに当時の監督の「のこさん」竹腰先生から全く相手にされていなかった。バックの人とワン・ツー・ワンで競り合って私が勝った場合でも相手の人に叱責がとぶだけである。正式に習ったことがなく、子供のころからの慣れとスピードと器用さだけでもっている私のサッカーが「のこさん」に認めてもらえなかったことは、今思えば当然であるが、当時としては淋しかった。一方太平洋戦争の戦況は次第に深刻になり、落ち着かない雰囲気

気の中でのクラブ生活は終わりとなった。

短い期間であったが当時の思い出は少くない。種田、菊池、大井上諸兄の切れ味鋭いシュート、大貫、須賀さんの豪快なキックなど今でも目に浮かぶ。帰りに赤門前の落第横丁の食堂で本村さん、奥瀬さんなどとよく飲んだり、不忍池岸にあった須賀さんの実家の中華屋に大勢でよばれたことなども思い出す。

戦後復員してからは仕事に追われ、地方勤務の時もあって東大サッカー部のことはしばらく忘れていた。昭和50年ごろ、サッカー部長をしていた弟、洋三から昔の縁で寄付金ぐらい付き合ったらと言われ、LB会に参加することになった。あまり役に立たないが、せめて会費だけは払い続けようと思っている。

最後のボールとシューズ

今から15年ぐらい昔、平成のはじめのころ、近所のスポーツ店が店じまいで売り出しになったとき、孫のものでもと出かけて行ったら、ちょうど手ごろなサッカーシューズとボールが目にとまり、欲しくなって自分用を買って来てしまった。当時、私立学校の役員をしていたので、学校に持って行って生徒の邪魔にならない時間に楽しんでいた。

小学校のクラス会でそんな話をしたのが府立高校サッカーOBの人に伝わり、OBインターハイのメンバーが足りなくなったのでぜひ参加してほしいと再三要望された。また、サッカーの虫がうずいたが御殿下から50年以上もブランクがあるので怖くて踏み切れなかった。

一昨年暮れに腰をいためて歩くのも不自由になり、最後のボールとシューズは昨年我が家に持って帰って物置にしまってある。今でもゴールポストの白い網の夢を見ることがある。大好きだったがいつも食い違っていて、恵まれなかった私のサッカー人生も終わった。

東大サッカー部の一層の活躍を心から祈り、須賀さん、浅見さんはじめLB会役員の方々のご努力に厚く御礼申し上げます。

戦中から蹴り続け超80歳に

昭和22年卒業 三井忠夫

ヤセッポチで、運動神経もあまりない小生が、今なお、グラウンドに立っているのは我ながら不思議に思う。考えてみたら、節目のたびに、どなたかに誘われて今日まで続けてこられたようだ。思い出すままに、そのあたりを述べてみる。

戦時中に小学校と中学で

1. 初めてボールを蹴ったのは、小学校5年のとき、担任の平川潔先生が、適当にチームを分けてやらせてくれた。小生のポストはCHであった。当時は「蹴球」と言った。

2. 府立高校尋常科（中学）3年のとき、東京で中学生新人戦があった。部員だけではメンバーが足りないといわれRHをやった。初めての本格的なサッカーで、先輩が教えてくれたが、彼のドリブルしたボールにさわることができなかった。

3. 戦争が激しくなり、生徒は全員がどこかの運動部に入ることになった。親しい友人に誘われて蹴球部に入ることになった。チームは、4年生10人、3年生1人（後に東大部員の高橋敏彦君）の強力メンバーで、中等リーグで好成績をあげた。

大学在学中に終戦

4. 高等科に入り、転勤で別居だった父親が蹴球を続けることに反対した。しかし、部長の森脇大五郎先生と、先輩の近藤健男さんが父を説得してくれて継続することができた。

5. 大学2年生の夏、戦争が終り、研究室の先輩の三上一郎さんに蹴球部員になるよう勧められた。学徒動員で軍隊に行った人が、まだ復員していないので、メンバーが足りない。教授には話しておくとのことだった。参加して、人数がギリギリなのに驚いた。RBをやった。教授には話してくれなかったらしく、就職のときにひやりとした。

理系の部員がいる早、慶とやる前の練習で、F

Wとヘディングの競り合いをして、肩の骨を外しプレイが出来なくなった。その後の試合は欠場となってしまった。

日立で蹴球部の新人指導

6. 日立製作所に就職して2年目、昭和24年に総務部長の永地良正さん(往年の名プレイヤー)に呼び出され、「蹴球部を作りたいので、高卒の新人を採用するとき、蹴球部員を優先する。君が指導しろ」とのこと。そして自分もR Iとして出場し、また、本社チーム(高橋英辰さん中心)を呼んで練習試合をするなど、強化に努めてくれた。お陰で横浜市民大会に優勝したり、日本鋼管と2チームが県代表で、神宮大会へ出たりした。

永地さんは蹴球に厳しく、仕事で欠場したら、「君は蹴球と仕事とどっちを大事にしてるんだ」とどなられた。結局、このチームには10年も在籍することになった。



昭和24年ころ、
御殿下グラウンドで

S O I でシニアのサッカー

7. 昭和50年高校OBサッカー(S O I : サッカーOBインターハイ)が始まった。府立高校も初期から参加した。参加は約30校、東京、京都で計年2回、15分ハーフ、交代自由のルールだった。このため、比較的容易に参加できるようだった。

8. S O I も毎年一つずつ年をとり、後輩が入ってこないのだから、次第に参加者が減ってゆく。そこで、ある時期(いつだか忘れた)からS O I の誰かが推薦すれば、誰でも加入できるように改められた。そして、幹事の小野津さんが、1カ月に10日くらいグラウンドを確保して、その日程を参加者に配布するようになった。当日グラウンドに行けば誰でも参加できる。現在はいつも30~50人くらいが集まっている。無理なぶつかり方をしないよう、高齢者をいたわるように気をつけている。現在の参加者の最高年齢は88歳である。

9. 他に、数年前から早、慶、東の3大学OB戦というのが始まった。これは、70歳以上、60歳、50歳の3世代の対抗戦である。小生が足を痛めて参加しなかったら、早、慶から、東大は若い者だけで勝ったと苦情を言われたとか。「ジャンケンだけでも出てください」と頼まれ、今は立っているだけの参加をしている。

80歳を超えた小生は、数年前の腰痛手術の後遺症で足が弱り、蹴ることはもちろん、駆けることも出来ない。でも、優しい仲間が、ユニフォームを着てグラウンドに立つことを勧めてくれる。その言葉に甘え、むかしの仲間に会うのが楽しく、ご迷惑を顧みず、グラウンドに出かけているのである。

戦後の復活とリーグ優勝

昭和23年卒業 高崎達也

東大ア式蹴球部の部誌(90年史)を作る理事長浅見氏の呼びかけでア式蹴球部の優勝メンバー

の会が企画され「東大優勝当時を語り合う会」として2008年4月4日、東大本郷の山上会館で開かれた。

東大ア式蹴球部は戦後の昭和23年度関東リーグで優勝したのだが、それから60年経った今日、当時の優勝メンバーは大部分他界しており、残っている者も体調を崩しているものが多く、その日集まった関係者は僅か6人であった。その日の発言を中心に当時の回想として断片的にまとめた。

その1. 昭和23年度の優勝

戦前の東大ア式蹴球部が関東大学リーグのトップクラスに位置して優勝を含めて常により成績を残してきた原因を探てみると、教育制度の問題に到達する。これは戦前、旧制の高等学校があり、その高校蹴球部卒業生のなかから優秀な選手が東京帝国大学に入り、東大蹴球部員として切磋琢磨の練習を積み重ね、当時としてはレベルの高いチーム作りに貢献したためと信じている。

戦前、官立帝国大学の予備校？として全国で公立、私立を含め30前後の旧制の高等学校があり、その高校蹴球部は1923年から始まった全国高等学校ア式蹴球選手権大会（インターハイ）で技を競い合い、極東大会、ベルリン・オリンピック大会（1936年）等で活躍した名選手を輩出したことは、日本サッカー史の事実として残っている。戦前の東大ア式蹴球部の部員は全員が高校ア式蹴球選手権大会（インターハイ）の出場者で占められていたので、他の大学と比べても選手層は質も量も高かったようである。

戦後の教育制度改革により、旧制高校最後の選手で占められていた昭和23年度の優勝を最後に、皮肉にも実力成績は降下の一途を辿ったように思われる。

その2. 玉音放送の思い出

昭和18年以降は戦争激化で欧米式球技スポーツの野球、庭球、蹴球等は禁止となり、戦争遂行のため贅沢禁止は勿論すべてが犠牲になる不幸な時代が続いたが、昭和20年8月の降伏宣言で旧



昭和21年の東西対抗戦、西宮の旅館前で

体制は終止符をうち、混乱のなかに民主主義体制国家がスタートした。

私は昭和20年8月15日に小田原から勤労動員で東京に通っていた弟と共に11時すぎに東京駅につくと、いまずぐ重大発表があるという異様な空気を感じたので、東京駅北口丸の内側の改札出口で待っていると、降伏宣言の玉音放送が駅のスピーカーから流れてきた。空襲でボッカリ穴のあいた東京駅のドームから差し込む真夏の暑い太陽の光が戦闘帽でゲートル巻きのお粗末な姿に差し込むのを、にじんだ眼で見ながら厳しく激しい安堵感と虚脱感を味わった複雑な体験は今でも新鮮さを失わない。

（注）その年4月、私の蒲田の家は空襲で焼失したので、疎開先の箱根湯本の借家から3時間位かけて東海道線経由、本郷の大学まで通学していた。

その3. 理科系で徴兵延期

小生、繰り上げ卒業で昭和19年10月東京帝国大学工学部に入学。当時は戦争末期で大部分の学生は勤労動員で学業は、ほとんど行われていなかった。旧制静岡高校の3年生だった私どもは集団で名古屋の陸軍造兵廠で武器生産の一翼を担っていた。夏ごろその宿舎で大学入試の説明があり、自分の内申書を自己診断して希望大学の学部等の選定を行ったが、ほとんどの人は無試験入学できたようである。

私は理科系だったので徴兵延期の恩典に浴したが、文科系の友人は学徒出陣で軍隊に徴兵され、

多くの学友蹴球仲間が戦場に行き、中には帰らぬ英霊となった不幸な友人のことは忘れられない。

その4. 蹴球部の復活

戦後の御殿下グラウンドは、戦時中に連日、学生の軍事教育訓練に使われていたので荒れ果てていた。終戦後9月になって御殿下グラウンドで古いサッカーボールを持ち出して蹴りあっている連中を見かけて、うらやましく眺めているうちに仲間に入れてもらったのが、小生の東大サッカー部入部のきっかけだったと思っている。

文科系の学生は兵隊に行っても未帰還が多く、大部分は工学部や医学部等理料系の連中だったと思う。お互いにボールを通じて戦前最後のインターハイ（昭和17年夏）のことなど語りながらボール蹴りを楽しんだ。この中には今は亡き三上、大貫さんその他懐かしい名前がたくさん浮かんでくる。

この連中をまとめて蹴球部を復活させるべく練習を指導したのは、近所に住んでいた横山・有馬の両先輩、さらに竹腰大先輩（通称ノコさん）であった。これら先輩の熱心な指導のおかげで年末には練習試合や対外試合ができる程度までチームがまとまっていた。

戦争直後の日本は物資不足や食料難。満足にボールを蹴ることはできないような状態の中で、何とか部活動ができたのは幸せな部類に属していたと感謝の気持ちは忘れないようにしている。お粗末なボールの油塗り、面倒な空気入れ当番といっても、現在それが判るサッカー選手は、ほとんどいないだろう。本郷三丁目の汁粉屋（エチソ

ウビル）にたむろしたり、食料不足を補うため、遠く日立で芋合宿をしたのも忘れられない。

東大ア式蹴球部の機関誌「闘魂」第5号（平成13年）によれば、昭和20年度はほとんどサッカーの試合は行われなかったことになっているが、21年1月の戦後初めての東西対抗戦（於関西・西宮）が行われ、小生は現役の部に関東学生代表として出場、関西選抜と試合をした記憶がある。西宮の旅館前で写した古い写真によると、現役では三上、本城、不破、遠山、二宮、松元、高崎が参加、OBでは大貫さんが参加している。

記録がないので判らないが、その写真には松丸さん初め早稲田、慶応、文理大など当時の有名選手の顔が見られる。

小生はRB（ライトフルバック）で出場、連携不足で試合は0-1で負けた。スパイクもパンツも継ぎはぎのお粗末な恰好だったホロ苦い記憶が残っている。

その5. 遠山直道のこと

遠山は永井、三井、古泉、高橋、小林君らと同じく府立高校蹴球部出身で戦後の東大蹴球部の有力メンバーだった。その中で大学同期卒業の遠山直道は早く飛行機事故（昭和48年）で逝ってしまった。知る人ぞ知る俊敏CF（センターフォワード）であったし社会人としても華麗な人生を送っていたので、今でも惜しいと思う。

彼は遠山音楽3兄弟の末子で、戦後大混乱の時に（昭和21年末ごろ）宗教音楽研究会の合唱団の設立を兄貴たちと企画して、翌年22年2月に銀座教会でスタートさせた。合唱団の男性パートが極端に不足していたので、私を含めて東大蹴球部から二宮、古泉ら3人が楽譜等読めなくても運動神経があればよいと強引に引っ張られ、宗教音楽研究会（宗研）合唱団に入団。週一回の合同練習と発声練習の特訓を受けたこともよい思い出となっている。この音楽体験と知識修得は、それぞれの人生に大きな影響を与えてくれたようである。



昭和25年1月朝日招待（西宮）、神戸大を破った東大チーム

その6. 私のサッカー歴とSOI

私は当時としては珍しく小学校時代（蒲田区相生尋常小学校）で蹴球を教えられたので、中学（川崎中学）に入り5年間蹴球部員となり、5年制で蹴球部主将を命ぜられ、甲神静大会に連続参加した（昭和15年ごろ一ポジションはHB）。昭和17年、高校（旧制静岡高校）入学、蹴球部に入り、戦前最後のインターハイに出場（昭和17年8月）。昭和23年東大蹴球部卒業後社会人となり、勤務地の各地（九州・北海道の炭鉱現場と東京本店）で実業団サッカーリーグなどに参加してきた。

昭和48年（1973年）ごろ、実業団チームの枠を越えた旧制高校OBによるサッカーインターハイ復活の機運が持ち上がり、昭和50年（1975年）第1回のインターハイ（SOI）が15校の参加でにぎにぎしくスタートした。その後旧制高校各校の蹴球部OBによる熱心な努力で参加校も年々増え続け、第12回大会（昭和61年）は28校が参加している。これら組織の代表者は小林孝正さん（五高、昭和14年東大蹴球部卒業、1992年逝去）で発足以来、試合記録の作成・年報の発行等を含めた並々ならぬ熱心な運営指導により春秋2回（東京／京都）の大会を続けてきた。

SOIはいわゆるサッカー愛好者の集まりで昭和55年（1980年）以降、毎年のように世界各地（欧米／東南アジア等）への海外遠征も行い、スポーツによる親善外交に寄与してきた。永きにわたるSOI活動は新しい老人サッカー組織に変わって活動しているが、昭和50年以降のSOI活動は、我が国サッカー界の底辺拡大と発展に大きく寄与し、平成5年（1993年）のJリーグ誕生にも大きく貢献してきたと信じている。

戦後の蹴球日誌から

昭和27年卒業 吉富 裕

立教に雪辱した思い出

昭和26年10月14日（日）

雨の為蹴球祭は延期、大学リーグのみ東大御殿下グラウンドにて行われる。ホームグラウンドではあるが昨夜来の豪雨の為全くの悪条件、水溜まりは殆どグラウンド一面に広がっている。第一試合早明戦は予定通り一時より雨の中で開始、明治の活躍で3対0と昨年一位の早稲田に完勝。

第二戦の東立戦は前の試合でめっちゃめっちゃに荒れた泥濘のグラウンドで始められた。

トスで負けて風下の、しかも足場の悪いサイド（武道館寄り）を守らねばならなくなった。結果的にはこれが幸いしたのだがゴール前は立てる場所も無い全くのぬかるみ、靴は泥の中にはまり込み中まで泥水が入ってきて冷たく重くなる。

キックオフ後十数分、殆ど我がゴール前での混戦、実力の差か敵の攻撃は圧倒的である。しかし伸びるべき球が水溜まりに止まり、あるいは伸びたりで敵のシュートは殆ど此のために威力を失う。度々のピンチもバック諸兄の捨て身のタックルやスライディングで切り抜ける。特に海老原朗の活躍は賞賛に値する。彼のお陰でどれだけ助かった事か、両軍全くの泥中での蹴りあいは凄絶さを加え、降り止まぬ雨の中での死闘がくり返さ



昭和26年納会

れる。前半最初のピンチをどうやら逃れ、相手サイドに大きく蹴った球が水溜まりに止まる事を見越した柴沼の好判断により殊勲の先制点を押し込む。こんな嬉しい事は無かった。その後たびたびピンチを迎えながら前半一点リードで終了。

がそのまま後半を守りきれるといいきれない。しかもゴール前は基盤のかたい攻めに有利な方なのだ。それが後半十分過ぎ敵ゴール前の混戦から菊井の会心のシュート決まる。何たることか二点も先取出来るとは。がまだ三十分以上ある。少しのミスも許されないと考えていたら、味方のクリアボールが相手方の竹村に渡し、すぐ竹下に。俊足の竹下单身ドリブル、高林へのパスを決められ一点を返される、調子づくとして続けに得点する立教の攻撃の波をなんとかかわしてタイムアップ。勝てるとは思えなかった一戦を全員の捨て身の奮闘でかちえたのだ。其の感激思わず目頭が熱くなる。有馬、海老原純、大埜、中村の諸先輩の慰労の声を身にしみて感じた。

長々と実況放送的に書いたが、今回の寄稿に当り古い日記帳を捜し出して書き写したものです。立教とは前年初戦で0対4と大敗、この年5月の全日本選手権関東予選決勝でもLBで出て2対4と全立教に敗れた二つの試合のリベンジを果たせた私にとって、記念すべき試合だったので書いていたのだと思います。



昭和 25 年山中湖合宿



昭和 25 年山中湖合宿、大埜さん

山中湖の合宿

大学時代のもう一つの思い出といえば山中湖での合宿があります。8月21日から28日までの一週間、この間の食事の献立も記録してありましたので話の種にと紹介します。食料事情もまだ十分ではない時代、20人あまりの食べ盛りの若者に苦勞して作ってくれた賄いの方々の心尽くしに感謝しながら。

21日 朝食 昆布の味噌汁 魚の干物 生卵 一個 沢庵 昼食 玉葱と肉を炒めホワイトソースをかけたもの 夕食 玉葱と鯨の肉 鯉と豆の煮物

22日 朝 豆腐とキャベツの味噌汁 卵一個 漬け物 昼 ハム サラダ 夜 ハムエッグ とろろ昆布の吸い物 玉葱と海老じゃこのテン普拉

23日 朝 昆布の味噌汁 卵 漬け物 昼 記載無し 夜 ライスカレー ハム サラダ トマト

24日 朝 卵二個となる 昼 フライ トマト 夜 ハヤシライス テン普拉

以下記載なし。御飯の量は書いていないが空腹とは書いてないので、そこそこはあったのではと思われる。

合宿最後の湖畔一周マラソン。14キロ位と思っ



昭和 25 年山中湖合宿

ていたが大変にへばった。何度かもう歩こうかと弱気をおこしかけたが、自転車で伴走の先輩方の声援もありなんとか完走することが出来た。石川、柴沼、安氏、加藤に次いで5番目、その後の一服の旨かったこと（合宿中禁煙）。ビールも。

翌日は湖で和船やヨットに興じ、旭ヶ丘からバスで御殿場に出て東海道本線で帰京。参考までに合宿費500円、国鉄運賃80円、ビール150円と書いてある。

現役当時の戦績は『闘魂』（東大の部誌）にあるとおり、2年の時は1勝2敗2分け、3年では1勝4敗1分けと全部で2勝しかなく、満足感に浸ることもなかったが、冒頭に書いた立教戦だけは鮮明に記憶してもらったので懐旧の思いで紹介した次第。

共に励んだチームメイト諸兄の一層の御健勝と今は亡き友の御冥福を心よりお祈り申し上げます。

旧制最後の蹴球部員

昭和28年卒業 坪田亜規良

旧制富山高からインターハイに

伝統ある東大ア式蹴球部は大正7年にスタートし創部90年。大正12年に始まった全国高校蹴球大会で活躍した選手が東大に入り、同15年から不滅の6年連続優勝の原動力になったという。インターハイは青春の懐かしい思い出であるとともに日本サッカーの源泉とも言えます。

昭和3年生れ、80歳の私は、昨年創立80周年を迎えた大連・聖徳小学校のグラウンドで初めてボールを蹴りました。昭和初期は波乱の時期、昭和4年の世界恐慌、6年の満州事変、12年の日中戦争、16年の太平洋戦争、20年の終戦。

私は昭和15年（小学6年生）に富山へ帰国、中学2年のときにサッカー部に入り軍事教練、勤労働員、食料難、用具不足の中も部生活を続け、富山高校（旧制）3年のとき、社会人の富山サッ



昭和28年五月祭、サッカー部の売店で、（左）坪田、（右）海老原朗

カー（東大・大槻氏、慶応・松丸氏、神商大・遠藤氏が在籍）の胸を借り互角に戦えるチームとなって、昭和22年秋のインターハイに臨みました。

築地の本願寺で合宿、銀座3丁目から電車で本郷へ。関東予選は一高、松本高に勝ち、全国大会は広島高に0対2で敗れてベスト・エイトに終わりましたが、昭和4年の初参加以来、9回目出場での初勝利を喜んで貰いました。

印象的な思い出は、着替えて帰路についたとき、暗くなった御殿下グラウンド一杯に丸い輪を作り、天を仰ぎ低い声でめくくりと「嗚呼玉杯に」を吟ずる一高選手たちのユニフォーム姿です。その胸中を思い「勝ちては君の胸に泣き、敗れて運命を恨み泣く、……涙に脆き子となりぬ」と寮歌を口ずさみ、宿舎の本願寺へ向かいました。

第1回大学選手権優勝

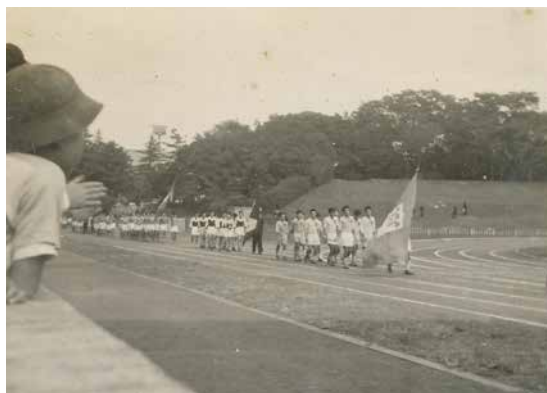
さて、旧制最後の自分が大学3年の秋に東大サッカー部史を汚すことになったのは痛恨の極みでした。昭和27年の関東大学リーグ一部で5敗1分けの最下位（総得点5、総失点17）。東大として入替え戦は初の恥辱と強く叱られ、二部1位の青学大に4対0の楽勝でも口惜しくて帰路は皆無言でした。

そして、第1回全国大学サッカー選手権大会に備えて年末も帰省せず、夕闇迫る御殿下グラウン

ドでボールを白く塗ってまでの練習、皆真剣でした。正月2日、寒い神宮外苑陸上競技場（現、国立競技場）で開会式、続いて京都学芸大学、東京医大、中大を連破し、準決勝は立大に勝ち、6日の決勝戦は早大を2対1で下し優勝杯を手にした。

第1回大会に参加できた幸運、さらにインターハイで果たせなかった全国制覇を成し遂げた感激は、サッカー部生活最後の贈物として海老原主将や若い皆さんに心から感謝しています。グラウンドで飛び跳ねて喜んでくれた横山監督、有馬さん、大埜さんたちの姿に思わず感涙、勝ち進むにつれ応援も増え、決勝戦ではお孫さんとご一緒の矢内原学長の応援に感激し、スタンドから応援歌“ただ一つ”が初めて響き渡りました。

全員で東大サッカー部史に大学日本一の文字を飾り、また秋のリーグ戦の宿敵を破ったのです。大会後、海老原兄から連絡を受け、日劇小劇場で



昭和26年関東大学リーグ入場式（神宮外苑）



第1回全国大学選手権大会決勝。対早大戦。早大のシュートがバーをたたく。昭和28年1月6日（国立競技場）

優勝を報じたニュース映画をそっと見てきました。後日、卒業論文審査の席でも教授の皆さんに喜んで貰いました。

走力、気力、体力

山中湖畔の夏期合宿は懐かしく、厳しい練習では特に50メートル競争、湖畔一周のマラソンが印象に残っております。競争相手として前者では岡野氏、後者では柴沼（晉）氏を思い出します。

オシム氏の言う通りサッカーでは走ることが基本です。「考えながら走る」さらに「ライオンに追われて逃げる兎が足に痙攣を起こすか」などオシム氏の言葉は痛烈です。高校時代、練習の最後にトラックを何回も声を掛け合って走り、校内のマラソン大会では上位に入りました。私は短距離、長距離とも子供のころから得意でしたが、ダッシュが苦手によく練習しました。一步の遅れがファウルや失点に繋がります。

サッカーでは走力とともに気力、体力も重視されます。気力は高校運動部では特に求められ、ファイト！の掛け声を何百回掛け合ったことでしょう。試合での声援も、頑張れ！負けるな！ファイト！から興奮のあまり、当たれ！削れ！潰せ！となります。気力横溢、精神力の強調は全く賛成ですが、それが高じて危険なラフ・プレイにならぬようにしたい。けがの少ない私でしたが、ヘディングの際に頭突きを受けて脳震蕩を起こし、1時間以上も記憶喪失のままグラウンドに立っていただけの何とも情けない試合をしました。

よく口ずさんだ言葉—子供のころは「成せば成る、成さねば成らぬ何事も、…」、高校時代は「ひとたびグラウンドに立てば鬼神もこれを避く、グラウンドを去れば子女これを慕う」—グラウンドでは別人のようになれと、寮歌の一節を借りて自分を励ます言葉でした。後年「男はハードでなければ生きて行けない。しかしジェントル（思いやり、フェアな態度）でなければ生きる資格がない」（レイモンド・チャンドラー氏、米）の言葉に共感を覚え、グラウンドは男の闘いの場、そこで必死にフェアなプレイをと願っています。

入替え戦の無念さを記しましたが、昭和32年の口惜しい降部から50年、半世紀たちました。その間、早大は転落の苦汁を乗り越えて一部復帰を果たし、正月の全国大学大会で日本一の栄冠も手にしました。「一部にあがるまでは死なねえ」とは創部80年の大埜さんの言葉です。創部90年、「茨の道を拓く魂（こころ）、加えるに己を責めるの努力」（注）を期待し、朗報を待ちながら創部百年をめざしたく思います。

（注）東大サッカー部の部誌「闘魂」創刊号に掲載の新田純興氏の巻頭言に引用された成句の一節

戦後の再建、寄付集めに苦労

昭和31年卒業 折原一雄

まず名簿作りから

私が入学したのは昭和26年。部には5年間お世話になりました（4年生のとき留年）。3年生、4年生と続けてマネジャーをやりましたが、寄付（会費）集めには特別思い出があります。

寄付集めは今も変わらぬ大きな苦労の種でしょうが、私たちのときは集金自体の苦労もさることながら、まず名簿の整理に取り組まねばならない苦労がありました。戦後まだ間もないころだったので音信不明の方が多く、引き継いだ名簿も半分ぐらいが空欄でした。判明している方だけから頂くのは不適切、不十分ですから、空欄を埋めて財源を広げるのが急務でした。竹腰さん（昭和3年卒業）など身近な先輩方に集まる情報を頼りに1人ずつ探し出しましたが、とても全部は埋め切れませんでした。

出来上がった名簿はガリ版刷り、手帳大で10ページ余り、いまから思えばとても貧弱なものでしたが、それでも「これで寄付を増やせる」と大喜びしました。

寄付集めの能率化と拡大化を図るため各部員が先輩を2～3人ずつ分担し、会社回りなどをしました。これは先輩に直接会って部の状況を伝える

一方、先輩との交流を深める意味も込めていました。当時先輩は約130人、寄付は1人1000円見当だったので、いまでも「年間目標13万円」という数字が記憶に残っています。寄付金の受け取りは、もっぱら直接頂くか、現金為替によっていました。現在みたいに便利な方法はありませんでした。

部員から徴収する部費は合宿費だけでしたが、法経25番教室で映画会を開いたり、五月祭で売店を開いて部費稼ぎをしました。部員の中には、経済的に苦しい者も少なくなく、合宿になると合宿費を借りにくる人もいました。

当時、部は関東1部リーグにいたものの下位をさまよい、このままでは2部に陥落してしまうという恐れがありました。現に2部との入れ替え戦を2度味わいました。学校は新制度に切り替え中で、部としては人材の安定的な供給源だった旧制高校が消え、将来の人材確保は期待薄でした。陥落をすこしでも先延ばしする方法はないのか。私はあれこれ思い惑い、こんなことを考えていました。

合宿所を作りたい

入学者は毎年2000人（当時の定員）いるのだから、入試が厳しいといっても1000人に1人ぐらゐの割で人材が入部するだろう。1学年2人、4学年で8人確保、そして残りの3人は素人を鍛える。素人でも3年鍛えれば4年目には戦力になるだろう。そして、その先は全く空想的なことを思い描いていました。素人たちを鍛えるには練習に通いやすい下宿先が必要だ。下宿費の補助は用意できないか。いや、いっそ部員全員を収容できる合宿所を借りたらどうだ。でも寄付金だけでは手が届かない。利子があっても僅かだ。そうだ、それには別立ての基金制度がいい。ゆくゆく充実させて、合宿所の家賃はその利子で賄ったらどうだ。こうしておけば、しばらくは持ちこたえられるだろう。そのうち次の手を打てばいい。

そんな実現不可能な空想を描きながら、学校に近くて合宿所向きの物件はないかと、西片町周辺

をうろついていました（バカ、そんなもん、あるはずないだろ。第一、金をどうすんだ！＝当時の住宅事情は最悪でした）。

その後、入部者は思っていたより多かったのですが、未経験者が多かったためか、途中で退部する人がかなりいました。

広島野島先輩から100万円

4年生の夏、関西遠征後に広島先輩を訪ねました。これは先輩との接触が東京と関西に偏りがちなのを改善して充実させようという考えからでした。同市には先輩が8人ほどおられました、着いた翌晩、野島福太郎さん（昭和3年卒業）のご配慮でみなさん料理屋に集まりました。私は部の現況を報告、ほかの先輩の動静を伝えましたが、会の半ば野島さんがこう切り出されました。「寄付集め、ご苦労さん。ところで、わたしが100万円を出すから、それを足がかりに基金でも作ったらどうだ。ノコさん（竹腰氏）に伝えて相談するように」——ビックリしました。空想が実現するのか！「ああ、同じことを考えている人がいる」100万円といえば、いまなら2000万円の価値があるでしょう。

広島では潮村浪雄さん（昭和5年卒業）のお宅に2晩お世話になりました。たつ日は早朝にもかかわらずご一家で見送ってくださり、そのうえ「ハイ、お弁当」とオニギリまで渡してくれました。広島のと四国の先輩を訪ねたのですが、松山に渡る小さな連絡船の船尾でオニギリをほおぼりながら、船が残す波の先の広島方面を見ているうちに「よかった。訪ねてきた甲斐があった」という思いがこみ上げ、次第に目がにじみ涙顔になってきました。そして、しばらくは「ありがとうございました」と立ち上がって最敬礼をしていました。

帰京後さっそく竹腰さんに伝え、日を改めて竹腰さんほか、新田純興、野津謙、乗富丈夫、有馬洪、横山陽三氏ら先輩方に集まっていたいて報告しましたが、大金のことゆえ、あとはすべて先輩方にお任せしました。私は卒業して永らく東京を離れていたもので、浄財がその後どのように扱わ

れていたのか知りませんが、間もなく基金制度設立の趣意書が届いたので「ああ実現するんだ」と感慨もひとしおでした。それにしても広島訪問時のことを思い巡らすと、あれこれ思い出されて、今でも胸が熱くなってきました。

水を飲むとはとんでもない

昭和30年卒業 藤本鉄也

でも、こっそり飲みました

今は信じがたいだろうが、昔は練習中に水分を補給することは禁止だった。今のようにグラウンドの脇に飲料水のボトルが置いてあることは、とんでもない話だった。

他のチームの話だが、鬼コーチが飲料水のバケツにグラウンドの土砂を投入して飲めないようにしたという。炎天下の練習で「うがい」はいいが「飲んでダメ」といわれていた水を、こっそり飲み込んだことを思い出した。

いまやスポーツの世界では脱水症状の予防のために水分補給をすることは常識となっているが、いつから常識が変わったのだろうか。ものの本によると、日本のスポーツには「軍事教練」が色濃く影を落としているという。「耐えることが美德」だったころ、のどの渇きを我慢することも、当然のように常識になっていたのであろうか。「熱中症」という言葉は、当時話題になっていたかどうか、確かではない。

昔のフォーメーションとは

昔のプレーヤーと雑談するとき、当時のフォーメーションの話を例に引くと話が早い。旧制高校時代のプレーヤーなら、バックは2バック・システムとっていい。左右のフルバックがお互いに上下するシステムで、それが並列のようになって、門のように「ゲート」となることが嫌われた。

3バックのWMシステムでは、センターハーフはバックラインの中央に位置取り、Mの底辺の

中央に位置する。いわば攻守の要で、WMシステムのカギとされた花形ポジションだった。FWではセンターフォワードが花形の一つであり、中学、高校では同様に上級生の占める花形ポジションの一つだった。

強いチームに名を連ねて

東京大学ア式蹴球部の歴史を眺めたとき、戦後の部では東大サッカー部が全日本の覇権を争った昭和33年(1958年)の「第38回天皇杯サッカー大会」に触れなければなるまい。

当時、日本サッカー界の強豪の常連は、大学の若手OBと現役の混成軍だった。慶応BRB、早稲田WMW、関学クラブなどが覇権を争う常連だった。そのなかで第38回天皇杯には東大LBも予選を勝ち抜いて本大会に出場したが、覇を遂げたのは関学クラブだった。東大チームが敗れた相手は八幡製鉄で、主力は無名の高校卒選手だった。当時は大学体育会サッカー部卒業の有力選手が何人チームのメンバーにいるかが、戦力評価の基準だった時代のことである。

実態はカモシカのように走り回る若い相手選手に比べて比較にならないような我がチームの基礎体力の差の大きさと記憶する。

貴重なダイヤモンド・サッカー

会社に入ってサラリーマン生活を送ったが、課長職の中で広報課長を担当した。宣伝も担当だった。東京12チャンネルのダイヤモンド・サッカーがスタートしたのが1968年4月だったというから、その間もなくだった時代のことだろう。12チャンネルの金子アナと岡野先輩の軽妙な語り口で始まり、前半と後半で放送日が違うなど離れ業もあったが、初めてサッカー専門番組として画期的な放送であった。

現在のようにサッカーがポピュラーだったわけではない。当時のサッカーではスタンドが満員だったことが記憶にない。

極めてレアケースだったが、家族を一度神宮競技場に招待したことがあった。お袋さんの迷コメ

ントは「どこにいるのか分からないけども、なかなか上手だったよ」だった。

ダイヤモンド・サッカーは三菱の篠島さんと諸橋さんの肝いりで始まったので、このスポンサーだけは動かすわけにはいかなかった。深夜や休日の午前中というように、ときどき放映時間は動かされたが、奇妙なことに視聴率は変動しなかった。唯一放映されている世界サッカーの生情報を、放映時間が変わっても日本のサッカーマンは熱心に見ていたに違いない。

WMフォーメーションの時代

昭和30年卒業 柴沼 晉

リーグ最下位、全国大会優勝

現役の学生に昔の東大のサッカーを紹介したいので、思い出話を書いてくれないかとの依頼を受けた。

私が東大サッカー部に在籍したのは昭和26～29年度の4年間、およそ60年近く前の話である。

入部早々、先輩に言われたのは「東大は関東大学1部リーグで最多の優勝回数を誇り、かつて2部に落ちたことがない。お前たちもしっかりその伝統を守るように」とのことであった。リーグ創設以来かつて東大が最下位になったことはなかった。

東大が最後に優勝した昭和23年の時点で、東大は9回優勝しており、2位の早大が7回だった。昭和26年春の時点では早大が9回で並んでいた。

サッカー部生活で特に印象に残っているのは、当時のボールは皮を縫い合わせただけで破れやすく、ボールを修復し、空気を入れて、ようやく毎日の練習が始まったこと。また現在のように運営資金の管理システムが整備されていなかったのも、マネージャーを中心に時間に余裕のある部員が、先輩を勤務先に訪ねて寄付金を頂くのに忙しかったことなどである。

2年生のとき東大サッカー史上初めてリーグ戦

最下位となり、2部の青山学院大との入れ替え戦に全員極度に緊張して臨んだが、幸い1部に残留することが出来た。

その年の冬の第1回全国大学蹴球大会で、リーグ戦では最下位だった東大が、リーグ戦で敗れた早大を破って優勝したのが思い出深い。

FBが攻め上がって叱られる

現在のサッカーは、FW・MF・DFが人数も役割も弾力的にピッチの上でプレーしているが、当時は5人のFW、3人のHB、2人のFBのフォーメーションで役割も固定されており、FWは攻撃に専念し、バックは守るべきそれぞれのゾーン内で相手FWをマークするようになっていた。

その優勝した試合に私はFBで出場した。試合中ボールを奪ったが、パスできる味方FWがいない。やむなくボールをキープしてドリブルしているうちに、いつの間にかハーフラインを越えたが、早大のバックもまさか相手FBがドリブルしてくるとは思わなかったのだろう。自分のゾーン内のFWのマークに追われてアタックに来ない。そのままドリブルして相手側ゴールラインからフリーでセンタリングしたボールをCFの岡野が決めて唯一の決勝点を挙げた。

その晩の祝勝会で、先輩に「得点に結びついたから良いが、FBがゾーンを守らずにあそこまで出て行くのはおかしい」と叱られてしまった。冗談半分の注意とはいえ、今のサッカーとの違いを如実に示している。

4年生になってキャプテンを引き受けることになった。当時の東大は現在のように整備された監督・コーチ制度はなかった。監督は勤務先の仕事で忙しく、練習はおろか、試合もたまに見にくる程度の名目的な存在にすぎず、キャプテンが監督兼コーチの役割を担っていた。また現在なら書店に行けば、戦法から指導方法に至るまでサッカー関係の書籍が数多く並んでいるが、当時私が唯一読んだのは「アソシエーション・フットボール」というタイトルの薄い小冊子で、日本にサッカーがもたらされた歴史とプレーの簡単な説

明をしているに過ぎなかった。そのような環境にあって、歴代のキャプテンは個人の優れた技術力と指導力を持ってチームをまとめ、関東大学リーグ1部で活躍していたのである。

大学リーグ1部に留まる

その後を継いだ私は技術的に劣り、従って指導力もなかったが、唯一の取り柄である頑健な身体で接触プレーを恐れず、1対1に比較的強かったのがキャプテンに選ばれた理由であったと思われる。

部員の協力と助言のもとに春の練習を終え、夏の山中湖合宿を経て秋のリーグ戦に突入した。ところがリーグ戦開始まもなく、FBとして出場した中央大戦で相手フォワードと激突、転倒、頑健なはずの私は動けなくなってしまった。当時のルールでは選手交代は認められない。やむなくウイングとポジションを交代してピッチの端に立っているだけとなった。

診断の結果は膝の靱帯断裂で3カ月の安静ということで、以後の試合ではピッチの外で声をからすだけの情けないキャプテンになってしまった。しかし、結果的に浅見君（次年度の主将）を中心に選手たちが結束して頑張り、最下位とはなったが入れ替え戦に勝って関東大学リーグ1部に留まることが出来た。キャプテンとして最小限の役割を果たせた喜びが最高の思い出である。

現在のサッカーとはルールを始め、戦法、指導体制、健康管理（当時は真夏の試合でも水分の補給は疲れるとの理由でご法度であった）など全く異なるアソシエーション・フットボール時代の昔話であるが、現役の学生の関東大学リーグ1部への復帰を目指してのステップアップに何らかの参考になることがあれば嬉しく思う。

東大LBで天皇杯3位

昭和35年卒業 小山富士夫

OB、現役16人で藤枝遠征

全日本サッカー選手権大会の歴史を眺めると、戦前活躍した東大LBは昭和21年と24年に優勝して以来振るわず、昭和31年に本大会出場を果たしたが1回戦で八幡製鉄に1-6で敗退している。そしてその2年後の第38回大会に、御殿下グラウンドで行われた関東予選で早稲田WMW、古河電工、全立教という当時第1級の強豪を連破して本大会出場を果たした。そのときの出場メンバーは次の通りであった。

監督	大埜 正雄 (昭和26年卒業)	RW	藤本 鉄也 (昭和30年卒業)
医務	岩動 洋二 (昭和15年卒業)	R I	中島 裕 (昭和31年卒業)
G K	長浜 毅 (現役3年)	C F	岡野俊一郎 (昭和32年卒業)
R B	柴沼 晉 (昭和30年卒業)	L I	浅見 俊雄 (昭和31年卒業)
L B	高田 宗昌 (現役4年)	L W	嶋田 武夫 (昭和32年卒業)
R H	服部 一郎 (現役4年)	S U B	安達 良英 (現役3年)
C H	海老原 朗 (昭和28年卒業)	S U B	小山富士夫 (現役3年)
L H	原 忠彦 (昭和29年卒業)	S U B	高場 真平 (現役2年)

以上16名が9月6日の開幕式にあわせて東海道線藤枝駅に降りた。マイクロバスで送り込まれた宿舎は「とくまん」。仕切りのふすまを取り払った2階の横長の大広間に魚河岸のマグロさながらに枕を並べることとなった。

準決勝で八幡製鉄に敗れる

試合会場は宿舎からほど遠からぬ藤枝東高校のグラウンド。白っぽいざらめのようなクレイで夏の日をいやというほど反射した。この年の残暑はことのほか厳しく、4日間ぶっ通しで戦う選手た



昭和33年9月、天皇杯に出場した東大LB。藤枝東高校にて

ちの体力を奪った。

1回戦の相手は京都紫光クラブ。延長戦の末に3-2で勝つには勝ったが、消耗激しく特にOBの方々の中には、すでに卒業して何年も経った方もいるわけで、後に問題を残した。

2回戦は東洋工業で、衆目の一致するところ勝負はなかったが1-0で勝った。岡野さんが取ったPKを浅見さんが見事に決めた。

ここで既に体力の限界と見てとった岩動ドクターが「最近武田薬品が出したアリナミンという薬が効くらしい」と言い出して、薬屋でアンプルを買ってきて注射することになった。ところが岩動先生、静脈注射をするときに腕に巻くゴムをお持ちでなかったもので、皮下注射となった。我々サブは高見の見物だったが、ビタミン剤の注射はことのほか痛いようで、先輩方は転げまわって痛がった。

それでもついにサイドハーフの原さんが3日目の八幡製鉄戦に出場不能となり、私が代わって出させていただいた。浅見さんがハーフに下がって原さんのポジションに入り、私はそれまで浅見さんが着ていた10番のユニホームを着て左のインナーになった。寺西プレーイングマネージャー率いる八幡製鉄には当時、井沢、佐伯、大石など強力フォワード陣がいて、下がり目でボールをキープする寺西御大からパスが出るスタイルだった。結果は善戦及ばず0-1で敗れた。

翌4日目、9月9日の最終日の3位決定戦では東大LBが地元の志太クラブを3-0で下し、決勝戦は関学クラブが八幡製鉄を2-1で破って優

勝した。この第38回大会に出場したあと、東大LBが全国レベルの大会に顔を出すことは絶えて久しい。

(注) 全日本サッカー選手権大会 大正8年(1919) イングランド・フットボール協会(FA)から純銀製の立派なカップが寄贈されたことに端を発して、大正10年(1921)9月10日に大日本蹴球協会が創立され、第1回全日本サッカー選手権大会が11月26、27日の2日にわたって日比谷公園グラウンドで開催された。優勝した東京蹴球団の山田主将にエリオット駐日英国大使からFAカップが授与された。ところがこのFAカップは不幸な末路を迎える。太平洋戦争の銀器供出で徴発されてしまったのだ。全日本サッカー選手権大会が「天皇杯」になったのは戦後のことである。昭和26年(1951)の第31回大会で優勝した慶応BRBが初の天皇杯を獲得した。

30年代はじめの ボールとスパイク

昭和32年卒業 嶋田武夫

ボールの空気を毎日詰め替え

ボールと空き地があれば世界中どこでも楽しめるサッカー。ボールは大事である。ようやく本革製のボールとスパイクが手に入るようになった当時でも、高価で大切に扱われた。特に先輩のオフィスまで出かけて頂いた寄付金は、ほとんどボール代に消えたと思う。

毎日の練習が終ると縫い目に沿って保革油を塗り、革製の口紐を丁寧に解き、チューブのヘソを取り出して空気を抜く。ボールの変形防止のためである。翌日の練習開始前にはポンプで再びチューブに空気を入れてゴム輪で留めて、表皮とチューブの当て革の間にヘソを押し込んでからニードルを差し込んで革紐を注意深く順次締め上げて球形を保つ。これがボール当番の日課であった。

ヘソの押し込みとニードルを器用に使った締め込みは熟練を要し、ニードルでチューブに穴をあけた新米は先輩に怒鳴られて下を向いた。パンクしたチューブはゴム糊でパチ当てするが下手に直すとボールは歪み、表皮の劣化もあって空中で不規則に揺らめいたものである。

ボールは重く、多分500g近い重量があり、雨でも降れば泥まみれでヘディングには勇気が必要だった。

食料不足の貧弱な身体に粗末な練習着、不揃いのストッキング、伸びきったアンクレット。それでも練習に励んだ合宿の一コマである。

こわばった筋肉を労りながらボール当番は今日も練習前にボールの準備を行う。部員の数もボールの数も現在とは桁違いに少ない当時の合宿風景は牧歌的でさえある。空気ポンプやニードルを入れたダンボールの「みつ豆缶詰」の中身は食べた記憶はないが、「受付は委員室へ」の張り紙には記憶がある。

スパイクも自分で修理

ようやく手に入れた本革スパイクも、砂利まじりのグラウンドでは、たちまちポイントが磨り減って、靴釘が内側に出て来て足裏が血だらけになる。

靴屋から革の切れ端を貰ってきて丸ポンチで打ち抜き、これを数枚重ねて、靴底に打ち付けてポイントを取り替える。

大卒初任給が1万円程度であった当時でも、安田のブランド靴は3千円くらいしたように記憶する。

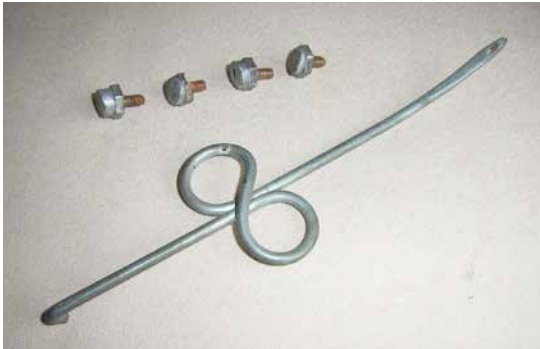
ポイントを何回も取り替えているうちに底革が割れてくるが、これを内側から当て皮をして修理した。部室にあった靴修理用金床はどこで調達したのか定かではないが、多分面倒見が良いオージーあたりが、どこかの靴屋から仕入れたものではなかろうか。その中で岡野さんが特注して作られた「80^{もんめ}匁」の超軽量スパイクが、うらやましかったのを覚えている。

懐かしいもの

昭和44年卒業 大塚 隆

実家の改修で物置を片付けていたところ、懐かしいものが出てきました。

添付写真ご覧ください。



ボールの口紐を締めるためのニードルと、アルミのボッチ（シューズのスタッド）

往時のサッカーボールの紐通し具

検見川合宿で全国高校選手権レベルの某高のボールと混在したさい、「このボールは締め具合が甘いのでうちのじゃありません」と、東大ボールを返してくれたことがありました。

チューブの口がきちんと納められ、十分に締めあげられていないと完全な球にならず、縫い紐部分が出っ張り、ヘディング時に痛かったこともありました。

雨の日の泥んこボールを顔に受けると、縫い目のあとが顔に写り、ぶざまな姿。硬いグラウンドで革がすり減ったボールが、標準規格外にまで大きくふくらみ、軽くなってバウンドがいつまでも減衰せず、なかなか追いつかない。革の減り具合が不均一でいびつなボールもあり、不規則なバウンドでドリブルがしにくかったこと。練習ボールは、みなそこはかとなく大きさが違う。

スパイクシューズのアルミポイント

御殿下グラウンドは土とは思えぬほど硬く、デコボコならし用レーキの齒の減りが激しかったこ

と。シューズのアルミポイントも硬いグラウンドで削られ、斜めにカットされています。ケチっていつまでも使っていると、ポイント底部の六角形ナット部まですり減って、道具をもってしてもつかめず、取れなくなる。そのうち中心のネジ部分が現れてくるまで短くなると、もはや、ひっかかりもなく、グリップの効きが悪くなる。

大会用の選手証

三本足のカラスが懐かしい。茶色のボール型バッチも残っています。本人の若いこと！？



戦術、練習法、用具の革新期

昭和41年卒業 平田 攻

クラマーの指導方法を取り入れる

昭和39年、全国民の願いを込めて日本の復興を世界に印象づけようと、東京オリンピックが開かれた。サッカーでは、ドイツからクラマーさんをコーチに招聘し、オリンピックで強豪のアルゼンチンを破るという快挙を実現した。

オリンピックのあと他の球技に先駆けて、リーグ戦方式の日本リーグを発足させ、次のメキシコでの銅メダル獲得につながっていく。こうしたサッカーの発展期にあって、全日本はたびたび本郷の旅館に集まって合宿し、御殿下グラウンドで練習したが、そのつど東大と試合を組んでくれて、私は八重樫主将をマークする仕事を与えられた。

“おい！靴紐が解けているぞ！”などと指摘されながら、むきになってマークしたものだ。楽しい思い出である。

3年の秋リーグ戦が終わって、GKの坂井君が「キーパー続けるならサッカー止める」と突然言い出し、退部していた同期の広瀬君の家を渡邊君、河島君と訪ね「部への復帰」を要請、快く了承され、坂井君のCFへのコンバートが実現した。またこの年から、監督が須賀先輩から高田先輩に代わった。須賀監督は「悪いな」と我々4年生を上野の焼肉屋へ招待してくださった。“このあたりは泉鏡花の歌行灯の舞台になったところだよ”という話は上の空で焼肉に集中したものだ。“こんなうまいものがあるんだ”と初めての経験に大満足のひとときであった。

高田新監督はクラマーさんの指導方法も取り入れ、新しい感覚でコーチングをされた。新入部員70名について、夏合宿まで渡邊君、藤井君にコーチを頼み、2部制で練習することにしたり、1、2年生中心に高校のチームとゲームを組んで、ボール拾いで終わらないように配慮した（2年生以下の対外試合は新人戦の直前以外はなかった）。夏合宿では、私は急造のCF坂井君と1対1を組まされ、彼の身体能力に引きずり回されながら、エースストライカーの誕生をみるのである。

PK失敗の苦い思い出

この年、我々は全日本のほか日本リーグのメンバーである三菱重工や古河電工と練習試合をして、相当な自信をもって秋のリーグ戦を迎えた。

初戦が成城で、この試合私がPKを外し0対0の引き分け。法政、上智にも引き分けて3位に甘んじた。法政対上智が引き分けて同率優勝となり、両者が入替戦出場権をかけて再び争うことになった。「もし、成城との引き分けがなければ、我々も入替戦の挑戦者決定戦に出られたのに！」と痛恨の思いがこの歳になっても残っている（この年法政は日体大に勝って1部昇格）。ワールドカップなどで名選手がPKを外す場面を見るとついこのことを思い出し「彼らはどんな気持ちでい

るかな」と余計なことを考えてしまうのである。

秋のリーグ戦が終わると2年生のGKが退部したためGKが不在となり、1年生に「誰かGKやる人いないか？」といったところ永峰君が手を挙げてくれた。そして新2年生だけの検見川の春合宿に広瀬君と参加し永峰君を指導、必死にボールに食らいつく姿をみてほっとしたものである。

練習後は、四季を通じて水道で身体を洗うのであるが、上級生は前をおっぴろげてわいわいと練習後の相談をしているのをみて、傍でボールの空気を抜きながらびっくりしたものだ。そのうち平気になり自分もやるようになったが……。

1～2年生の役割

さて1、2年のサッカー部の生活を振り返ってみよう！

梅村主将を中心とする4年生は威厳もあり、ただただ怖い存在であった記憶がある。ボール拾いで回りの塀に腰でもつけていようものなら、突然ボールが飛んできてじろりと睨まれたり、最後のランニングのときは中村さんが眼を光らし、遅れそうになると追い立てられたものだ。

1年の役割は、ボールの準備、グラウンドのライン引きと整備であった。

当時のボールは革製の外袋にゴム製の内袋という2重構造で、まず内袋に空気を入れ、口を輪ゴムで閉じて、十手（ニードル）を使って革紐で外袋の入り口を閉じていったが、なかなか締まらず苦勞をした。楽にやろうと空気圧を下げると2年生の「柔らかい、やり直し」の無情な宣告があり、詰めなおしたものである。

このボールはどこか歪んでおり、湿気を吸いやすく、雨の日ヘディングし閉じ目に当たるものなら、おでこに何針も縫った手術跡のような痣が残るわ、眼に泥は入るわで、悩まされたものである。

サッカー靴についても、今のスパイクはねじ込み式であるが、当時は、タガネで革をたたいて、円形に打ち抜き、それを自分の好きな高さに重ねて、靴釘で底革に留める方式で、うまく打たないとすぐ外れたり、釘が足裏に刺さったり、なかなか

か厄介な代物であった。

2年生になると、野村君が1、2年の取りまとめ役になり、持ち前の真面目さで役割を果たしていた。我々も体力がつき練習にもついていけるようになっていた。ボール、靴も3年のころには現在のような一体型になり、十手を使ったボールへの空気注入はなくなった。

戦術的にもWMシステムが、4-2-4のシステムに変わっていき、この時代、戦術、練習法、道具を含めて革新期にあったと思う。

よき先輩、よき仲間

このように役割分担はあったが、他大学の友達から聞いたような上級生によるしごきは皆無であった。その点はさすが東大生ということか？

練習後は各学年ごとの行動が多く、我々の学年はよく赤門前の扇屋で甘いものを中心に集まっていた。

時には1級上の石光さんなどと、ない金を遣り繰りして、やきとりの「白糸」で一杯やることもあった。

食べ物の思い出では、4年になったとき2級上の安達さんから1万円の差し入れがあり、これを軍資金に渋谷の井の頭線のガード下で3年生と10円寿司を満喫したことや、大内先輩の銀座での絵の個展を4年生で鑑賞後、先輩より中華をご馳走いただくことになり、水澤君が食べ過ぎてバンドが切れたことなど思い出される。当時は金欠で腹を空かせていました。

よき先輩、よき仲間に出会った4年間であったがここで我々仲間の寸評を私なりに紹介したい。

ひょろひょろしながらテクニクのあったFWの河井君、日本鋼管で日本リーグへの仲間入りに貢献。

関西弁丸出しでダンプといわれた突進型のFWの河島君、けがが多く最後はマネージャー。ハンサムで扇屋のおねーちゃんにもてました。

頭を横に小さく振りながらぼそっと駄ジャレを飛ばすFBの武田君、ヘッドが強く手堅い。守備の人でした、4年間中国語の塾に通っていました。

我々の学年で1番運動能力の高かったFWの中

岡君、国公立で教育大を破り優勝したときの立役者でした。

真面目で面倒見が良く“サッカー部の良心”といわれたFWの野村君、サッカーセンスは一番でバックの裏を取るのが得意でしたが、膝を壊して、選手を断念しました。ギターを奏で歌唱力随一。

熊さんのような身体でゴールを死守した広瀬君。

いつも岩波新書を携え国語審議委員長として我々仲間の言葉使いの間違いを指摘、もくもくと走り続ける温厚なFWの藤井君。戸田から宇佐美の伊豆半島横断に小西君とともに参加。武田君の家での初めての麻雀で見事大車輪完成、今でもLBで活躍！ 4年間無遅刻、無欠勤！一度怒った顔をみたいな！

バックのリーダー水澤君。試合になると練習では考えられない思い切ったスライディングを敢行、頼りになりました。頭の回転と言葉の繋がりが見どき故障しては笑いの中心に！ またお母さんの手料理もおいしくいただきました。

大学教授ながら未だにたどたどしい話し方のCBの渡邊君、入部時は一番強く、うまい選手でしたが、足首の故障で選手はやめて後輩の指導者になりました。44年卒はお世話になったのでは？

41年卒は以上ですが、卒業後25年になったとき、2年までサッカー部にいた人も含めてヤマハの“つまこい”に集合、ミニサッカーと宴会、ゴルフをしたのを皮切りに、以後定期的に夫婦参加の集いをしています。

私はMFでゲームメーカーをしていましたが、嶋田くんなど、やんちゃな3年生達に試合では随分助けられたものです。

三菱で天皇杯に出場

卒業後、まだサッカーを続けたくて三菱重工に就職し日本リーグに登録。三菱では片山、杉山、横山、継谷、落合、森など全日本の選手と一緒にプレー。サッカーへの取り組み方など、いろいろ教わる場所がありました。

昭和42年1月1日、国立競技場での天皇杯の早稲田との準決勝戦にFBとして出場。惜敗！

このまま釜本、森らを中心にした早稲田が東洋工業（現マツダ）を破って優勝！……その後、大学チームの優勝はないと思います。正月の国立競技場が高校サッカーの聖地になった今、貴重な思い出となっています。

日本リーグがJリーグに発展し、世界の一流選手のプレーを目のあたりに見られるようになり、日本のサッカーのレベルも上がったのは非常に嬉しいことです。願わくばワールドカップで日本が優勝するのを生きているうちに見たいものです。

東京にいるときはLB 50 で月2回ぐらい蹴っていたが、広島に帰ってから、その機会が京大戦くらいになったのは残念なことです。

東大のころ、「サッカーでたいせつなのは3Bである」といわれていました。

Ball Control、Body Balance、Brain の3つです。

東大の現役選手は、我々の世代にくらべれば、格段に技術は上です。体力もあります。東京都リーグで活躍していますが、恵まれた頭脳をフルに使って関東リーグに復帰して欲しいものです。

現役7年間に入れ替え戦4回

昭和32年、36年卒業 山本 修

創設以来初の入れ替え戦

私が東大に入学したのは昭和27年でしたが、駒場の教養学部で1年余計にいて、30年本郷へ進学、32年工学部機械工学科を卒業、2年後の34年化学工学科に学士入学して36年卒業と、前後7年間在学し、その間ずっとサッカー部員として過ごしました。この7年の間に、昭和27年、29年、31年、34年の4回の入れ替え戦を経験しました。

私が入学した27年といえば、旧制東大の最後の学年の最後の年であり、東大が旧制から新制へとまさに移り変わろうとしていたときでした。この年、東大は1分け5敗で1部リーグ最下位となり、大学リーグ創設以来、初めての入れ替え戦に

直面することとなりました。リーグ優勝回数が多いことと、一度も2部へ落ちたことがないということから、早大とともに関東大学リーグの名門の双璧を誇っていた東大が、初めて入れ替え戦に臨むとあってOB現役ともに悲壮な思いでした。しかし、入れ替え戦では青山学院大に4-0で快勝し、しかもこの後、この年から始まった第1回全国大学選手権大会で関東大学リーグの強敵を次々に倒して堂々たる優勝を飾り、旧制東大最後の面目を見せました（私はリーグ直前の練習で右手首を骨折し、このシーズンは応援だけでした）。

旧制の伝統を新制に引き継ぐには

完全に新制に切り替わった翌28年からの4年間は、旧制時代に築かれた東大の輝かしい伝統をどのようにして新制東大の手で受け継いでゆき、さらに新しい伝統をどのようにして創り出してゆくかの試練の日々であったといえましょう。

旧制から新制へ移ったことによる客観的条件の変化の中で最も大きかったものは、それまでの人材供給源であった旧制高校がなくなったことではないかと思います。旧制東大には、旧制高校で鍛えられ、インターハイで活躍した選手が入っていたのに引き替え、新制になって、新入生にそういう期待が持てなくなったからには、今後のサッカー部の部員を4年間の在学中にどのようにして鍛え、技術的にも体力的にも、そしてまた精神的にも一人前の選手に育ててゆくかが重大な問題でした。

このような意味から、東大サッカー部の将来はいかにあるべきかについて、当時私たちは私たちに真剣に考え、話し合い、その年その年にいろいろな試みを行ってはみました。

ついに2部転落

しかし、私たちの努力が至らなかったため、新制東大のよって立つべき新しい基礎をついに確立できないまま、4年後の2部転落という結果を迎えたのでした。

昭和28年 1勝5敗、6位。

昭和29年 6戦全敗、再び最下位。入れ替え戦は6-1で法政大に圧勝。

昭和30年 1勝5敗、明大と同率最下位（翌年から8校制となるため入れ替え戦なし）。

昭和31年、私たちが最高学年の年でした。この年、新しく監督に田村三郎先生を迎え、先生は自らの研究生生活を犠牲にしてまで、この1年間、私たちと練習を共にして下さり、私たちも何とかその期待に応えるべく、がんばったつもりでしたが、リーグ戦は7戦全敗で最下位となってしまいました。

時どき小雨が降る御殿下グラウンドの入れ替え戦。法政大相手に先取得点しながら、どうしても2点目が入らず、後半走りまけて1-2で敗れました。試合の後、田村監督が私たちに「泣くな！負けて流す涙には何の価値もない」と言いながら、ポロポロ涙をこぼされたとき、私たちは本当に無念でした。

人生に二度と来ない学生時代に、心から打ち込んで部生活を過ごしてみると、それはそれで勝敗を超越して意義のあることには違いありませんが、勝負である以上、勝ち抜いてこそ初めてそれだけ部生活に徹し切れていたという自信を持つことが出来るものだといえましょう。

1部復帰を達成できないまま卒業

昭和32年から東大は2部リーグにあって、1部復帰という十字架を背負った時代を迎えることになりました。私は32年に工学部機械工学科を卒業して帝人に入社、松山工場に2年間勤務して、帝人松山サッカー部を創設するなどした後、将来は化学プラント設計のエンジニアになることを新しい目標に定めて、34年工学部化学工学科に学士入学し、再び現役サッカー部員として2部リーグに2年間出場しました。

昭和34年5勝1分け1敗で日大と同率1位。優勝決定戦での2-1の勝利により2部で初めて優勝しましたが、入れ替え戦では0-2で法政大



昭和31年度の入替え戦。対法大。東大島田のシュートをGKがはじき、山本、津田が突っ込む。(御殿下グラウンド)

にまた敗れ、翌35年は4勝3敗の4位で終わり、ついに1部復帰の悲願は達成できないまま、36年3月卒業しました。

これ以後は、後輩の健闘を期待する立場となり、現役が入れ替え戦出場と聞けば必ず応援に駆けつけました。

1部復帰への挑戦は、37年0-1法政大、44年0-7中央大と敗退が続き、逆に降格の入替え戦、47年4-3明治学院大の後、52年1-2立正大と敗れ、関東大学リーグ2部から東京都リーグへ降格となりました。2部リーグ在籍21年の間に1部へ挑戦の入替え戦3回の後、2部への入れ替え戦2回目でした。昭和27年の初めての入れ替え戦から数えて8回目、25年後のことになります。

ごめん！ 痛恨のシュートミス

昭和43年卒業 中井 省

通算70日間の合宿

東京オリンピック開会式の日（昭和39年10月10日）も御殿下グラウンドでボールを蹴っていた。当日は抜けるような青空で、練習中の上空にジェット機の噴射煙で描かれた五輪マークが浮かんた。「ああ、俺も開会式のテレビ中継を見たかった」と、非情にも練習を命令したキャプテン

を恨んだものである。

大学を卒業して40年経ってみると思い出に残っているのは、サッカー部の練習とリーグ戦のことばかり。無理もない。東大生にとって最大の楽しみだった五月祭のときもOBとの対抗戦があり、ろくに見物もできなかった。そのせいばかりとも言えないが、大学生活4年間でダンスパーティー出席経験ゼロ、女性とのデートなしという情けないありさだった。

当時は、農学部のはずれにサッカー部専用の合宿所があった。春夏の休み中は検見川グラウンド、学期中は農学部の合宿所と頻繁に合宿があった。一番多かったのが確か2年生のときで、春合宿、新人戦合宿、国公立戦合宿、夏合宿、リーグ戦合宿と合計70日に及んだと思う。

これだけの時間的制約を受けたのだから、多感で悩み多き青春真っ盛りの大方の人間にとって部活動が長続きするはずもない。1年生の春には30有余人いた同学年の部員が次々に辞めていき、卒業時には6人になってしまった。

残ったのは、神奈川県高校選抜で技量卓越した小川主将（小田原高校）、サッカー大好き人間で馬力抜群の小西副主将（教大付）、高校でサッカー部員ではなかったが、体力を買われて試合に駆り出されていた小林（教大駒場）、高校での経験がなかったが根気良くサッカーを続けた諏訪（立教）、同じく経験がなかったがマネージャーという天職を見つけた中尾（麻布）、弱小だが一応サッカー部出身、しかし鈍足でスタミナ不足という欠陥を抱えた小生（立川）の6人。この少ないメンバーが4年生では、関東大学リーグの2部から3部への転落の危機と周りから思われたのは無理もない。

3部転落を免れたい

もとより当事者である我々も必死、3部転落の汚名を蒙りたくない一心で練習したが、そこへ1学年上の強力メンバーである熊谷、坂井さんが留年し、リーグ戦にも出場可能というニュースが飛び込んできた。これを聞いたときは、「助かった」

とホッとした反面、自分たちだけで苦境を打開しなかったのという思いが交差する複雑な心境だった。

ともあれ秋のリーグ戦は、この強力助っ人二人と名選手の多かった2、3年生の力が働いて開幕3連勝、一時は優勝するかと沸き立った。しかし、日体大戦に1-0と惜敗。以後、尻すぼみで5位に終わった。今振り返ると、当初の目標を3部転落阻止という低いところに置いていたため、3連勝で転落なしとなった時点で知らず知らずに緊張の糸がほぐれてしまったのではないかと思えてならない。翌年と翌々年の好成績で証明されているが、2、3年生の能力が高かった。緩まずに戦い続けていればと今でも悔やまれる。

リーグ戦最終の対青学戦だった。小川主将の感謝の気持ちの現われであろう。それまで公式戦に出る機会に恵まれなかったものの4年間地道に練習に励み、人気者で部活を明るくしていた諏訪が右のウイングで初出場した。同じフォワードのポジションの私は慣れない諏訪を助けなければと近くに寄ってパスを受けようとしたりしたが、そんな必要はなかった。4年間の練習の積み上げはむだではなく、その日の諏訪のプレーはレギュラー陣と遜色がなかった。それどころか、相手バックスを一人かわしたかと思うと右のライン沿いから絶好のセンターリングを右ゴールポスト近くに上げてきた。失礼ながらバック스에球を取られるかもと見ていた私は思わぬ展開に慌てた。それでも何とか落地点に間に合い、体を捻ってゴールに入れようとしたのだが捻りが間に合わず右に大きく外してしまった。右と左が逆だが、先日（2008年6月14日）のワールドカップ予選のタイ戦で左からのフリーキックを右ポスト脇にヘッドで流し込んだ中澤のような芸当ができれば入っていたのだが……。

爾来40年、諏訪の一世一代のセンターリングを外したと皆の酒の肴になり続けている。諏訪、ごめん。

東大紛争当時の主務

昭和44年卒業 小林喜一

安田講堂からテントを持ち出す

同期代表の石田からマネージャーの苦労話を書けといわれ筆をとりました。

苦労したことはありません。40年前ですから断片的な思い出を書きます。

卒業した昭和44年は東大紛争の最中で、1年先輩のキーパーが学生運動のために退部し、永峰が3年から正キーパーとして入ったこと、同期の馬郡が全共闘の一員として活躍していたのを思い出します。卒業も4月にずれこみました。

五月祭のとき安田講堂は封鎖されており、学生部長だった横山陽三先輩に頼んで話をつけてもらい、試合で使うテントを取りに安田講堂へ、入り口も中にもヘルメットとタオルで顔を隠した強面の他大学の学生ばかり、しかし事情を話すと親切に入り口まで運び出してくれました。

この五月祭の試合ではなった松岡の約30メートルのシュートは、この試合の審判をしていたので、今でも良く覚えています。恐らくそれ以後に見たプロの試合でもあれほどすばらしいボレーシュートはありません。

先輩方に面倒を見ていただく

主務（マネージャー）の仕事は、大学との調整、練習試合の時の審判、対外試合の調整、学連の仕事、先輩との連絡役、乏しかった部費の寄付金集めなどでした。

東京大学との調整役は、同期の杉山が「東大運動会」に入り何の苦労もありませんでした。

学連の仕事は代々木の日本サッカー協会の裏方さんです。協会には先輩の新田純興さんがおられて、国際試合などがあると狩り出され、人員の整理や国旗の掲揚などに何人かで参加しました。試合は無料で観戦できますから楽しみでもありました。

先輩には、よく面倒をみていただきました、浅見先輩が監督。前監督の高田さんや須賀さんには試合のたびにご指導をいただきましたし、月光下のドリブル伝説の竹腰先輩もグラウンドで何度かお話いただきましたし、卒業して間もない梅村さん、平田さんには新入部員の指導をしていただきました。須賀さんは上野に“てんぷら”「山下」を開業されていて、花見時期には、八林とともに皿洗いのアルバイトをさせてもらいました。また、資金不足の折、手分けして先輩を勤務先にお訪ねし寄付をいただきました。そのとき岡埜栄泉で岡野俊一郎さんにお会いできたのも懐かしい思い出です。

けがが多かったのも思い出

サッカーにけがはつきもの、北川がアキレス腱断裂をしたこと、1年の上妻が試合中にヘッドイングで意識朦朧となり東大病院の世話になったこと、同じく検見川合宿で1年の黒沢が5針も縫うけがをして近くの病院に担ぎ込んだことが思い出されます。

昭和43年、44年は関東2部で上位、当時東大サッカー部は強かったと思います。

国内の有力校がなかなか勝てない朝鮮大学校と対戦し、東大がリードしているため試合時間を大幅に延長されたこともありました。

2部の優勝がかかった農大との試合で大敗し1部との入替戦に出られず残念な思いをしたのも、敵の右ウィングの快足に藪内がスパスパ抜かれていたのも鮮明に思い出されます。

現役には、藪内監督のもとがんばってもらいたい。グラウンドに行けなくとも現役や樋口先輩からいただくメールで、皆さんの活躍の様子を祈る気持ちで拝見しています。

御殿下クラブで海外遠征

昭和 46 卒業 小柳 望

1. サッカーとの出会い

サッカーを始めたのは兄がサッカーをやっていたからだ。兄は小石川高校でサッカーをやっていた。私も小石川高校に入ったとき、何の疑いもなくサッカー部に入った。

当時は日本のサッカーの黎明期ともいえるべき時期で、デットマール・クラマーさんが日本代表を教えていた。クラマーさんのテレビやサッカー機関紙で、キックするときには足首を固定しないと正確なキックが蹴れないなど基礎的なことを学んだ。ボールリフティングを高い位置で蹴る自分のフォームはこのとき出来上がった。

高校時代は無心で練習した。当時、小石川高校は夜定時制の生徒が学習していたが、そのため校庭にはライトがついていた。我々昼の部員はこれを良いことに夜7～8時まで練習をした。定時制の先生から昼の生徒が邪魔だと怒られたこともあった。また、同僚の親から、子供がいつまでたっても帰ってこない、サッカー部はいつまで練習しているのか、というクレームをもらったこともあった。

1966年イングランド・ワールドカップの記録映画「GOAL」に大変感銘を受けた。ボールの動きばかりでなく、プレーヤーの表情を大きく映し出

した映像は、サッカーが単なるボールゲームではなく、人間が一つ一つのプレーを創りだしていることを感じた。また、ワールドカップの素晴らしさを始めて目の当たりしたのもこの映画を見てからと記憶している。

2. 現役時代の思い出

1年生のときからリーグ戦に出場させてもらったが、やはり体格の違い、スピードの違いを感じた。

3年生のときに浅見先生が監督になり指導を受けたが、浅見先生の指導が非常に印象に残っている。科学的な練習法、あるいは遊びを取り入れた楽しい練習法と、それまでやってきた練習と違う新鮮さを感じた。

中でも私にとって大きかったのは、システムとそれを支える選手の関係の考え方であった。システムがあってそれに選手を当てはめるのではなく、まず選手がいて選手の能力に応じてシステムが出来るという考え方である。どんな立派なシステムもそれを支える選手がいなければシステムは崩壊する。この考え方は、その後社会に出ても、組織と人間の関係を考える際に大変参考になった。

3年生のときの試合が一番記憶に残っている。検見川の夏合宿のとき、関学との練習試合でキーパーの頭を越えるコントロールシュートが決まり、1対0で快勝した試合。秋のリーグ戦前の朝鮮大学との練習試合で、いつまで経っても試合終了にならなかった試合などである。



シンガポールの新聞の試合予告「ジュビリーが日本の御殿下クラブと対戦」

3. 心残り

1) 3年生のときの農大戦に欠場したこと

農大戦に向けて前の週に行った練習で頭から落下した。吐き気と目まいがしたので大事をとって農大戦に欠場した。農大戦は優勝への道が残されるかどうかの重要な試合であった。結果は2対7と大敗に終わったが、無理をしてでも出ればよかったと思っている。

2) 4年生のときの入れ替え戦

4年生のリーグ戦では前半順調に勝利を重ね優勝し、1部との入れ替え戦の権利を得た。中央大学との入れ替え戦はスピードについていけなかったという記憶がある。1点目は私のマークする相手である安藤選手をマークはしていたが、いまいつ、つめきれずシュートされキーパー小原の上を越えゴールされてしまった。これが中央大に勢いを与えてしまった。さらに中盤の上妻がタックルを受け負傷退場したことなどが重なって7対0と大敗してしまった。もっと厳しくマークし最初の失点を遅らせていたら、展開は変わっていたかもしれないと心残りとなってしまった試合である。

3) 5年生のときのリーグ戦

5年生のときもリーグ戦に出場したが、5年目は試合に集中しきれなかった。ゴール前、フリーで待っていた私のところにボールが左から流れてきたが即座に反応できず、ボールは右に流れて

行ってしまった。足を出せば簡単にゴールできたはずである。5年目はなんとなく付け足しの1年となってしまったようで、大変残念であった。

4) 武田監督の補佐

卒業後武田厚が監督を任されたとき、卒業同期のメンバーで武田監督をフォローしようということになったが、十分役目を果たせなかった。藤原主将の時代であったが、国公立大会の試合で自殺点を入れ負けてしまった後、検見川でのミーティングに出席はしたが、会社の仕事でその後十分にフォローできなかった。5月連休とかは選手と一緒に面倒は見られるが、連休後は丁寧なフォローができなくなってしまったことなど、集団指導体制あるいは社会人がコーチを務めることの難しさを感じた。

4. 御殿下クラブのシンガポール遠征

1983年御殿下クラブの創立20周年記念としてシンガポールへ遠征した。12月27日に出発し、12月29日と31日にそれぞれ親善試合を行い、1984年1月1日に帰国するというスケジュールであった。相手はJubileeとChangi Unitedで、写真で見ると、どちらのチームも我々より大分若そうである。試合は両方とも負けてしまったが、我がチームにPKが与えられ点を取るチャンスがあったがポストに阻まれ、海外初の得点を上げられなかったことは残念であった。海外遠征する場合、同じレベルの相手を選ぶことが大切である。



御殿下クラブのシンガポール遠征、チャンギチームと



シンガポールの新聞「チャンギが日本の御殿下クラブを3対0で破る」(前半は1対0)

余談であるが、このシンガポール遠征は私にとって初めての海外旅行で、しかも家族（家内と子供2人）同伴で参加した。シンガポールに着いてから下の子が熱を出し、ホテルの医者が高いので地元の医者に診てもらうことになった。医者から薬を処方してもらい、強力な薬だから体温が高いときだけ飲むようにと注意を受けた。このときほど英語を真剣に聞き取ろうとしたことはなかった。とりあえず薬で子供の熱は下がりことなきを得た。

5. L B会のこれからの活動

これまでL B会の総会や活動に積極的に参加していなかったので、偉そうなことは言えませんが今次のように感じています。

L B会として大切なことの一つは社会に対して何を提供できるかであると思います。その意味で御殿下少年サッカークラブの運営や1月に開催される70歳以上の東西対抗サッカー大会の運営支援は重要な活動であると思います。

少年サッカークラブの方は設立当初参加していましたが、会社に入ってからなかなか時間がとれなくて出席していません。70歳以上の東西対抗サッカー大会もこれまでは参加していませんでしたが、来年はぜひ、この大会のサポートには参加したいと考えています。

4年時にリーグ優勝

昭和45年卒業 田代康之

リーグ戦の試合経過などの客観的な記憶は完全になくなっている。自分に関連したことが僅かに記憶に残っているだけなので、個人的な話の羅列になるが思い出すままに記す。

1. サッカー部を通して

1年生の早い時期に練習についていけず退部、2年で復帰。それ以後は部活動を続けたが、燃え

尽きるほど打ち込んだとは言えない。いい部員ではなかった。もっと練習に打ち込み、技術、体力をつけられなかったかという思いは残る。

しかし、こうした中でも、3年時には、入れ替え戦に一步及ばず、4年時には入れ替え戦で惨敗したもののリーグ優勝できたことは幸せだった。仲間に感謝。

2. リーグ戦

3年生のリーグ戦は内容の記憶は全くないが、がんばれたように思う。しかし、4年生のリーグ戦は良くなかった。

緒戦の成城大戦でヘッ드의競り合いで顔を強打し、気が付いたらグラウンド横で寝ていて、そのまま病院に運ばれた。顔が腫れた程度で大したけがにはならなかったが、その後の2試合は欠場した。

第6戦の大事な日体大戦もその前に風邪をひき、先発から外れた。しかし、この試合ではラスト10分位にセンターフォワードで出場（皆は憶えてないでしょう）、右サイドからのセンターリング（小柳？）をセンターで小生が待ち受け、シュートというところ、幸運？にも相手バックがハンド。P Kとなり、武田が決めて、同点に追いつき引き分けとなった。

入れ替え戦では惨敗。点差が離れた後であったが、自分のクリアしたボールが相手に当たりはね返ったボールが目直撃、左目がだんだん見えなくなった（網膜剥離）。

総じて、けがの多い4年時であった。

3. 合宿

山中湖、検見川の合宿。

山中湖では湖畔一周マラソン、検見川では疲れて食事満足に喉を通らず、体力のなさを痛感しただけであり良い思い出はないかな？

4. スキー

最初に行ったのは、谷川寮に泊まっての谷川温泉のスキー場。同期数人で行ったと記憶している。

オーストリアの結構美人のスキーヤーが華麗な滑りを披露していた。

その後も苗場（渡辺宏の親父の会社の寮）などに行った。当時はあまり写真を撮らなかったのかスキーの写真は少ないが、小柳、山田と行った八方尾根の写真があった。

誇りと悔いが織りまざり

昭和45年卒業 武田 厚

小学校・中学校・高校のころ

小学校5年生のころ（昭和33年）、担任の先生が突然サッカーボールを持ってきて、「これで遊ぼうや」と言って皆で追いかけて回したのが、私のサッカー人生の始まりである。

中学（大田区立東調布中）に入ってからサッカー部に所属した。梅沢先生という学芸大学でサッカーをされていた方の指導を受けた。ボールを蹴る、止める、運ぶという基本やポジションごとの動き方を習った。当時（35～36年ごろ）は中学でサッカー部のある学校は少なく、大田区では2校のみだった。従って東京都大会の区代表決定戦は、いつも1回戦がそのまま決勝戦であった。ライバル大森7中には、後の日本代表チームのストライカーとなる日高君がいた。

日比谷高校では、中学の1年先輩の町さんがサッカー部にいたこともあり、当たり前のようにサッカー部に入った。初めての夏合宿はきつかった。日比谷高サッカー部の先輩の中には東大でプレーしている方がいて、徹底的に鍛えられた。新井さんを中心に現役3～4名に1名ぐらいの割合でOBがいた感じである。

2年生のときの合宿では、臨時コーチとして東大の選手が来られた。畔柳さん、野村さん、平田さんらには、秋の練習のときも、ときどき指導していただいた。先輩たちのプレーに目をみはり、あこがれを感じたし、東大サッカー部がすごく身近なものとなっていった。

大学で部生活を続けたころ

高校時代から、サッカー中心の生活になじんでいて、あまりそのことに疑問を感じず、むしろサッカーの奥深さに魅せられていった。そして東大の先輩方との交流もあり、大学に入学して迷うことなく即入部した。1浪したせいで高校の同級生が1年上にいたりして、先輩からみると少し態度のでかい1年生だったかもしれない。

当初は同期で20名強が名を連ねていたと思うが、恒例の新入生歓迎コンパを経て夏合宿のころには半減して10名程度となった。卒業までの間、いろいろなことがあったが、残ったメンバーは結束力が固く、互いに信頼の厚い関係を築きあげた。

3年のとき、藪内さんが主将で、チームは快進撃を続けた。春から秋にかけての公式戦、練習試合には関東1部の大学とやっても全く気後れすることなく戦った。「負けた記憶がない」とはやや言い過ぎか。今でも鮮明に記憶しているのは、当時無敵の朝鮮大学に勝ったことである。しかし、秋のリーグ戦は農大戦で大敗を喫して3位となり、1部との入れ替え戦に出場できなかったことが悔やまれる。小柳君が風邪をひいて大事をとって休んだのが響いた。過日、彼もそのことを気にして「無理してもやればよかったかなあ」と。気付くのが遅すぎる!!

そして4年次で自分が主将となり、チームを率いていくことになった。しかし当時、学内外は騒然としていて、新年度がスタートできるのかどうか、定まらぬ状況だった。

それでも春にはなんとか練習を再開し、例年通りのチームづくりにとりかかった。

ところが、この年、東大入試が取り止めとなり、新入生が入ってこないという前代未聞の出来事が起こった。

サッカー部でいえば、1年生が不在。部員数は総勢25名程度。紅白戦がどうにかやれる人数であったと思う。しかし、前年のシーズンで活躍した2年生、3年生がいて、戦力としては正に少数精鋭であった。しかも練習する上では1年生がい

ないため、すこぶる効率よく、しかもチームの一体感はこの上なくとれていた。雑用も皆で分担してこなしたりして、結構「民主的」な運営であったと思う。

戴内さんのときは「負けた記憶がない」のだが、私が主将を務めたこの年も、どんな相手と戦っても負ける気がしなかった。上妻、俵、黒沢という2年生トリオのトップ、小柳、八林を中心とした中盤、田代、吉崎を中心とした最終ライン、GKは3年生の小原であった。

交代メンバーも古村、清木、桜井、金丸、戸井、鹿島……とそろっていて層も厚い。

リーグ戦は5勝1分1敗で優勝した。もちろん嬉しかったが、それ以上に入れ替え戦に勝って1部に昇格するというのが目標であったので、リーグ優勝は通過点という感じであった。しかし、入れ替え戦では中大に本端微塵に打ち砕かれた。完敗であった。

我々は勝負に対してナイーブすぎた。今思い返しても悔しい。そして私自身はもう1年留年して、なんとか目標を達成したいと考えていたが、何人かの後輩から「頼むから卒業して下さい」と言われた。留年してもサッカーはやらせてもらえない雰囲気であった。そんなに煙たがられていたのか……。

そんなこともあって、卒業して新日鐵に入社した。配属先は姫路にある広畑製鐵所。サッカー部は関西社会人リーグの1部にいた。浅見先生から教わったことの中で、今もなお心に残っていることを記す。

「チームとしての力というのは、結局のところ監督の力量、主将の力量に制約される。それ以上の結果は出ないものだ」

「今年の東大のチームはサッカーのうまい順に11人選んだとしたら、君はレギュラーメンバーには入らない。ただ、うまいやつだけで試合して、チームとして強いかというとそうではない。そこが難しくもあり、面白いところなんだ」

「広畑でよかったぞ。八幡では必死になって練習しても、やっと試合に出られるかどうか……仕

事もあるだろうし。むしろ広畑を強くするという目標をもったらどうか。(当時の新日鐵八幡は日本リーグの古豪として、メキシコ五輪の銅メダリスト5名を擁するチームだった)」

これらは自分が社会人としてどのように振る舞い、努力していけばよいのか示唆に富んだ教えとして、深く強く胸に刻んだ。

新日鐵広畑で続けた部生活

昭和45年4月、私は新日鐵に入社して広畑でサッカー生活を続けた。広畑のサッカー部は当時、発展途上で、高卒新人と途中入社のスカウトを活発に行い、日本リーグ2部を目指していた。私も仕事を習い覚えながら、週末には関西社会人リーグの試合をこなした。

特に高校生の採用は仕事そのもので、サッカーの強い工業高校を回り、入社後はサッカーのやりやすい職場に配属し、上司にもその旨を頼んだりした。ほとんど公私混同であったが、サッカー部強化と、会社の目指す方向は合致していると思い込んでいた。

そんな形で、49年7月に本社転勤となるまで、社会人選手として現役を続けた。この間、関西リーグでは2回優勝、毎年全国社会人選手権に出場していたが、その都度敗れ、ついに日本リーグ2部昇格は果たせないままに終わった。

私の選手としてのサッカー人生の終幕は、姫路・手柄山競技場で満員(2000人)の観衆を集めて行われた韓国浦項との親善試合だった。結果は1-3で敗れたが、多数の韓国代表メンバーで構成する浦項に善戦健闘したことは今でも大いに自慢に思っている。

51～52年度の東大監督時代

監督に至る経緯：私が監督をしたのは、昭和51年、52年度である。実は勤務の都合で卒業以来はじめて東京に戻り、再び御殿下グラウンドに顔を出すようになったのは49年の夏で、50年度には浅見監督に言われてコーチ格としてときどきグラウンドに顔を出していた。

浅見さんから「来年度から監督になってくれ」と言われたのは50年度シーズンが終わった某日である。確かな記憶にあるのは「考えてみろ、後事を託せるのはお前しかいないじゃないか」という趣旨のことを言われ、尊敬してやまない浅見さんから数々のほめ言葉をいただき「諾」としか言いようがなかったことである。

ところが、私の会社員としての立場は、そのようなことを自分の一存で決められるものではなかった。当時は新日鐵本社の労働部に所属していて、入社5年目という最も仕事上の負荷のかかるときであった。

上司ともいろいろ相談した結果「平日は午後3時から退出可、ただし業務に支障をきたさないこと」という条件で決着した。たまたま同じ労働部の1年上に小笠原さんという方がいて、やはり東大野球部の監督に推されていた。同時期に東大運動部の監督を2名出すということで労働部長はいたく感激して、結局、小笠原さんと私は当時の労務担当の常務から口頭で（正式な）辞令をもらって、勇躍サッカー部の指揮をとることになった。

監督としての決意：こうして後顧の憂いなく監督となった。当時の生活の基本パターンはおおよそ次の通りであった。

月・金	休養日（練習休み）
火・水・木	午後3時30分から御殿下グラウンドで練習
土・日	午後に練習もしくは練習試合

しかし月・金の休養日というのは、練習がない日ということで、監督、コーチ、若手OBスタッフらで練習内容の相談、選手のコンディションの把握、そして試合に向けての戦術の議論などをした。従って当然のことながら毎日毎日サッカーのこと、選手たちのことを考える生活であった。自分自身、年齢も20代後半で、まだ若く体も動くし、情熱も人一倍であったと思う。そして、こうした「気合い」は監督としての実力、現役選手の実力はさておいて、結局、自分の現役時代の思考パターンから抜けきれず、当然のこととして「関東大学

リーグ1部昇格」という目標を掲げた。自分が現役のときに果たせなかった夢を監督として実現しよう、と強い決意を持ったのである。

冷静な参謀として、私を支えてくれたコーチの兵頭君、池森君は選手諸君の状況をよく掌握し、日々の練習計画の策定に尽力してくれた。私が監督になるとき「若手OBが交代でグラウンドに行って、監督を補佐する」という一項目があった。しかし若手OBを特定せず、グラウンドに行く日時を特定せず、従って補佐の内容もあいまいなままのものであったため、私にとっては空証文みたいなものだった。従って必然的に毎日のように顔を合わせる兵頭君、池森君に頼ることが多かった。そして確か52年度シーズンは、春に大けがをしてシーズンを棒にふるってしまった山崎君にも加わってもらい作戦面を補佐してもらったと思う。

51年度の経過：無我夢中であった。練習・試合・練習・試合というサイクルの中で、何とかチームの形をつくろうともがいた。しかし手元にデータやメモがないので正確さを欠くと思うが「ほとんど勝利の記憶がない」のである。そしてリーグ戦の最終2試合だけ勝ち、かろうじて下との入れ替え戦を免れたのである。

この年はメンバーをある程度固定して戦えたが、一番の問題点はチームのリーダー格不在であったと思う。リーグ戦のほとんどの試合をキャプテン不在で、しかも3年生以下のメンバーで戦ったのではないかとにかくにも関東リーグに残留できてホッとした。

52年度の経過：前年度のシーズンで主力として戦ったメンバーのほとんどが残り、それに新戦力を加えて磨きをかける年となるはずであった。監督としての欲も出てきた。事実、春の対抗戦はともかく、国公立大会では優勝し、京大戦も勝って、シーズン前半はチームづくりの成果も出て手応え十分であった。けがで抜けた主将の山崎君の穴を埋め切ったかのようにもあったのだが。

結局、この年は1勝1分5敗で入れ替え戦に回

り、立正大学に敗れて2部降格の憂き目にあうことになった。

リーグ戦7試合のうち今でも覚えていて悔いが残るのは慶応大学との一戦だ。

2-1でリードしていた後半30分ごろか、中盤の湊君がバテバテで動きが悪くなり、井田君と交替した。それまで湊君はリズムよく中盤でボールを配し、チームの軸となって機能していた。「最後までがんばれ」と思ったが潮時をみて交替させた。そしてその後、1点を返され結局2-2の引き分けに終わった。

なぜこの試合だけを覚えているのか？ 慶応大学だからか？ それもあるかもしれないが、ちょうど4戦目、後半戦に向けての天王山だったのだ。勝てた試合でもあったからだ。選手はよく戦ったし、内容も伴ったものだったが、結果が出なかった。その後しばらくの間、この選手交替はトラウマのように私の頭を悩ませた。「勝っていれば次の試合に勢いをつけられたのに……代えなければよかったか……」と。

入れ替え戦で負けた日から、その後しばらくの間、余りのショックで思考停止の状態が続いた。後日、OBが集まったときに、小山さんから「今年の監督として来年のチームを建て直すポイントを話してくれ。今年の反省もふまえて」という趣旨のことを言われても、しどろもどろにしか答えられなかった。そんな調子だったので、現役の選手諸君にも、監督としての力量不足を謝らなくてはならないのに、結局、皆さんにきちんとした話をしなかったのではないかな……。

悔やむことが多い中で、やはり一番残念だったのは、山崎君の不在。そして痛み止めの注射を打って試合に出た平林君のこと、けが人が続出したこと、等々。だが、いずれにしても、2部降格という負の思い出を背負って卒業しなくてはいけなかった当時の4年生諸君に対しては、余りに遅すぎると思うが、当時の監督としてお詫びしたい。

53年以降～今日までのこと

私は52年度のシーズンのあと、会社の指示で

53～55年、西独に行った。これはもともと決まっていたことであるが、やはり2部降格を招いた監督の留任は考えられない。後任の古村君、そして内田君、吉澤君と苦労が引き継がれたことも気になる。私自身は2年間、西独に「傷心旅行」をして、見聞を広め、帰国後、新日鐵君津製鐵所に勤務した。そこでもやはりサッカー部の監督兼マネージャー兼選手をやり、地元の子供たちを集めてサッカースクールを設立、運営した。思えば、東大の現役の時、浅見さんの指導の下で少年サッカースクールの運営を手がけてから一つの行動パターンが決まった気がする。

新日鐵に入社して、広畑、本社、君津でサッカー部の運営をしながら選手としてチームを引っ張り、また地域の子供たちを集めてサッカースクールを開催して、サッカーの普及に努めたことである。勤務地でのサッカー部のレベルも目指すところも違っていたが、私自身は自分の年相応、できる限りのことをしながら充実した時間を持つことができたと思っている。

特にJリーグができてからは、大学サッカーの位置づけが昔とは大きく変わっているし、また、そもそもサッカー人口が膨大にふくらんでいる。昔は東大に入学して初めてサッカーボールに触れた部員もいて、そういう人が努力して試合に出たりしていたものだが、恐らく今の新入部員はほとんどが経験者なのだろう。

しかし、大学4年間の生活をサッカーに打ち込んで目標の達成に向けて邁進するという点では、昔も今もさほど変わりはないのではないかな。環境や諸条件の変化はいつもあるものだから、結局現役諸君がサッカーに対してどのくらい強い気持ちを持って臨むのかによってくると思われる。

「サッカーを通して充実した人生」を送ることができた私は幸福だと思う。同じことを後輩に望むことは愚の骨頂と思うが、それでもなお強いリーダーシップを持った後輩が出てきて、東大の快進撃が始まることを夢にみる。そして、もし可能ならば自分もその快進撃に一枚かんでみたいものである。

我がサッカー断章

昭和45年卒業 吉崎英雄

卒業して40年ほど経つと記憶は薄らぎ、断片的なものばかりである。その断片的な思い出を思いつくままに綴ってみる。

入部

大学に入ったら高校時代のサッカー漬けとは少しは違うことをしたいと思っていた。入学後2ヵ月ほどたったある日、駒場キャンパスから本郷キャンパスに行ったときに御殿下グラウンドでサッカー部の練習を見て、体のうちから血肉のたぎるのを感じ、大学でもサッカーを続けることに決めた。

サッカーは中学校時代に始め、高校でもプレーを続けたものの、1年の浪人を入れると2年ほどのブランクがあった。そのために、当初の練習に体が悲鳴を上げていたこと、特に猛暑の中の検見川合宿の厳しい練習のあとは食事でも喉を通らなかったことなどが、脳裏に焼き付いている。しかし、入部を決心した以上はサッカーに打ち込むという覚悟は、その後の4年間揺らぎのないものであった。

リーグ戦、そして入れ替え戦

当時の東大は関東リーグの2部であったが、当然のことながら1部昇格が悲願であった。チームが、また各人が1部昇格を胸に練習に励んだ。幸いにも、2年次（昭和42年）のリーグ戦から出場の機会を得た。

ポジションは、4-2-4システムのセンターバック、高校時代にWMフォーメーションの最後尾センターハーフをやっていたので、落ち着いてプレーできるポジションであった。基本に忠実なプレー、セーフティ・ファースト、味方に声を掛ける（掛け合う）ことを目標に、特にポジションに腐心した。

2年次（昭和42年）のリーグ戦は、初戦から3連勝をしたものの、その後は勝てず、3勝1分け3敗の結果に終わった。

翌昭和43年は、上妻、黒沢、俵というそれぞれ個性豊かな有能な新入生がフォワードに加わって、得点力がアップし、チーム力も向上した。日体大、東京農大、東大が5勝1分け1敗で並んだが、得失点差で3位となり、入れ替え戦出場を逃し無念の涙を飲んだ。

4年次（昭和44年）は、前年の悔しさをバネに今年こそその思いで臨んだ。結果は、東大、日体大、東京農大の三つ巴は前年と変わらず、5勝1分け1敗で3校並んだものの、東大が得失点差で優勝した。

入れ替え戦は1部リーグ最下位の中央大であった。代々木グラウンド、前夜来の雨、また試合中も降り続く小雨で、滑りやすい芝のピッチコンディションであった。チーム全体が緊張感のためか、試合開始早々から思いがけないミスや、要の上妻が相手選手に削られ退場を余儀なくされた不運もあったが、チームとしてそれまでやってきたことすら出来ぬまま、ズルズルと大量得点を許し、結果は0対7の惨敗であった。

スコアほどの実力差はないと信ずるものの、気力、出足、スピード、組織的プレー等、1部リーグで揉まれて来ていただけに相手が一枚上だと実感した。ぶざまな試合で、先輩始め多くの方々の期待を裏切ったことを恥じるとともに、翌年こそ夢実現をと後輩に託す気持ちでいっぱいであった。

少年サッカー

浅見監督の発案であったと思うが、昭和44年（私の4年次）に少年サッカー教室が始まった。対象は小学生から中学生まで。教えるのは我々現役のサッカー部員で、毎週日曜日の午前中、1時間半ほどの教室であった。私の担当は小学生の低学年で1年生から3年生のグループであった。

小さな子供たちにサッカーをどう教えるかに最初は戸惑ったが、子供たち自らが向上心を持つには、サッカーが楽しいものでなければならないと

考え、遊びを取り入れた練習に心を砕いたものである。同時に、守るべきマナー、礼儀、躰にも注意を払った。グループに2年生の女子児童が一人加わっていて毎週熱心に参加した。男女の分け隔てない家庭の教育方針に感心もし、私自身も男女の別なく練習をさせた。自ら学ぶものが多かった経験であった。

今なお御殿下少年サッカーが続いているとのこと、嬉しいことである。

シニアサッカー

一昨年（平成18年）の9月に還暦を迎えたが、その時期に母校小石川高校のシニアサッカーチームが結成され、私もそれに加わった。サッカーをプレーすることには縁遠くなっていたものの、46歳を迎えたときに、鈍った体を鍛え直すべくスポーツジムに通い始めた。以来週2回のトレーニングを続けていたので、体力的には何ら抵抗感なくシニアサッカーに入り込めた。

しばらくして小石川シニア（シラク）と東大LBシニアが対戦する機会が何度かあり、そうこうするうちにLBでもプレーするようになった。今や、LBとシラクの掛け持ちである。10年以上もの先輩の元気澁刺なるプレイにいつも刺激を受けている。こうした先輩を見習い、長くサッカーを楽しみたいものである。

農学部 旧合宿所

昭和47年卒業 宮路康利

試合の前日は全員が寝泊まり

今から40年弱前、我々が現役のころ、農学部構内地震研のすぐ東隣の土地に東大サッカー部の合宿所がありました。現在の部室から至近距離の所です。木造平屋建てで、部員の使える部屋が大小四つ、管理人（大学の職員）の家族の部屋が二つほどありました。だいたい前にOBの方々が資金を集めて建ててくれたもので、当時すでにかなり

の年季が入っていました。我々が新入部員のころは、息子さんが帝京高校のサッカー部員だった方が管理人でしたが、その後間もなくおばあちゃん、その息子夫婦とその娘で3歳くらいの女の子（それに猫一匹）の4人家族に交代しました。

我々が2年生のときからだったと思いますが、リーグ戦の前日には全員そこに寝泊まりし、朝飯を一緒に食べ、グラウンドへ向かうパターンが始まりました。このやり方は、我々が卒業するまで続きました。一応合宿所の使い方としては、期待されるあり方です。

2年生の後半になり、だんだん部の中心的存在になってくるところから、リーグ戦のときのみならず、ここを生活の根城にする部員も出てきました。とにかく家賃はタダだし、食事は学食で食べれば安くつく、管理人がいても我々を管理するわけではなく、だれでも出入り自由だったので、ここを住居としたわけです。苦学生の部員のことも念頭に置いた（？）建築当初の目的からすると、これも期待される使い方であったと思われます。ただ当時すでに東大は、学生の親の所得が日本一高い大学になっていましたから、彼らが苦学生であったかどうかは別話です。

期待されない使い方

自宅から通学していた連中もちょうちよく寝泊まりしていました。当時の学生は、麻雀をよくやり、練習後でも4人集まると合宿所で卓を囲むということも結構ありました。夜遅くなると、管理人の迷惑にならないよう毛布をかぶせて牌を混ぜてやったものでした。これが高じて徹マンをやった後、練習に出てきた者もいましたが、これはいけません。OBからも麻雀をするなどは言わないが、何時間も続けるのはサッカー選手にとって良くないと訓示を受けていました。おまけに合宿所は雀荘のように椅子に座るわけではなく、畳の上に胡坐をかきながらのマージャンですから、特に腰に良いことは何もありません。試験が近付くと何人が集まってノートの交換をしたり、勉強に利用することもありました。ただ記憶するかぎ

りでは、そうした場合以外に合宿所で部員の勉強する姿を見かけたことはなく、もっぱら麻雀その他遊びや暇つぶしだったような気がします。

中にはひどいのがいて、管理人が飼っていた猫に生体実験と称してビールを飲ませたり、しばしば火をつけて反応の素早さを計ったり、あらぬところに刺激を与えて反応を見たり、いろいろ悪さを仕掛けたものがありました。それでもその猫は、どういうわけか我々を恐れず、よくなついてそばに寄ってきましたが、これらは決して期待されない合宿所の使い方でした。

コンパの後の惨状

部員全員が合宿所に集まる機会が年2回あります。一つは新入部員歓迎コンパ、もう一つは4年生の追い出しコンパでした。歓迎コンパの後は、生活の場である合宿所が、必ず入るのに二の足を踏むような惨状と化しました。酒の経験の少ない新入部員に先輩が片っぱしから酒を飲ませるため、悪酔いする者が続出しあたりかまわず吐き散らします。おれたちが新入生のころは、窓まで我慢して這って行き外へ吐き出したもんだ、などとそこで威張っても後の祭りです。畳や布団に臭いが染み付きます。畳は何回も雑巾で拭き、布団は虫干しします。臭いが消えるまで数日間かかりますが、その間も麻雀はしていました。

追い出しコンパは、そんな惨状にはなりません。が、愚痴、涙、不満、その他いろいろ飛び交いました。

管理人の家族の中では、おばあちゃんがもっとも気を使ってくれました。息子夫婦の方は、我々の生活ぶりにあきれたのかどうか、あまり関心を示すふうはありませんが、おばあちゃんの方は土間で会うと、昨日は遅くまでやってたけど大丈夫か、とか声をかけてきました。我々のようすをよく見ているようでした。1人でいたりすると、他の人には内緒だよと言って、果物や菓子をくれました。聞くとほかの連中ももらっていたようなので、おばあちゃんが我々学生を手なづける術だったのかもしれない。

先輩が期待したのかもしれないような生活ではなかったものの、本当にいろいろお世話になった合宿所でした。

けがを押して関東2部を死守

昭和52年卒業 小野田莊平

おそろおそろ入部

5年間お世話になった東京大学ア式蹴球部を卒部してもう30年以上経つ。おぼろげな記憶をもとに書くわけだから、間違った記述もさぞ多からうと思うし、近い年代の人にしか通じない文章と思うが、その辺は平にご容赦頂きたい。

昭和47年、都立西高校から一浪して理科Ⅱ類に入学した。多分4月の中旬頃、御殿下グラウンドへア式蹴球部の練習を見学に行った。この時、同期の堀井と上妻さんの弟も見学に来ていたと思う。高校からサッカーを始めた下手くそな私が、関東リーグ2部所属で伝統のある大学の本チャンサッカー部でやれるか不安はあったが、東大病院側のベンチに座って見ているうちに、何とかやれそうな気がして入部した。高校サッカー部の1年先輩の天野さん、高校同期だがストレートで入った遠藤さんが2年生でいたことも入部決断を後押ししたものと思う。

4年生は上妻さん一人

安田講堂事件のあおりで昭和44年は入試がなかったため、4年生（5年生？）は上妻さん一人しかいなかった。従って今年は危機だという認識が2年生以上には強かったものと思う。練習は主に3年生の佐々木さんがリードしていた。「おまえら、だいたいねー」で始まるお小言をたくさん頂戴し、同期の間ではこの「だいたいねー」が流行語となった。夏の検見川合宿まではFWをやらせてもらったが、FWでは務まらないと思われたのだろう、合宿中にFBへコンバートされた。このおかげで1年次から1軍半くらいに上がったものと思う。秋のリーグ戦は準レギュラーとして、

大半の試合、途中出場あるいは先発で起用して頂いた。

結果は2部7位に終わり、下との入替戦に出場するはめになった。相手は明学大、場所は駒沢競技場だったと思う。私は右FWで先発出場した。何か言いようのない重圧感があった。前半、私のGK吉沢さんへの不用意なバックパスをカットされ失点してしまった。結果は辛うじて逆転して4-3で勝ち、関東リーグ2部残留が決まったが、冷や汗ものだった。以降、下との入替戦は絶対に避けなければという思いを強くした。

5年目もサッカーをする決心

4年次は痛恨の思い出がある。4年生となりレギュラーの座も獲得し、同期の池森、南谷、影本と不動のディフェンス陣を組んで練習に励んでいた。秋のリーグ戦を控えた夏の終わりの検見川合宿での古河電工との練習試合中、相手FWの鬼塚選手にスライディングタックルを仕掛けた時、右肩にのしかかれ、右鎖骨を骨折してしまったのである。このけがで秋のリーグ戦出場は不可能となった。右肩も痛かったが、心が一番痛かった。同期の皆と同じグラウンドに立ってリーグ戦を戦えなかったことがすごくさびしかった。

私は教養課程から専門課程に進学する際に留年し、2年生を2回やっていて、もう1年在学期間があった。5年目もサッカーをやろうかどうかはそれ以前から迷っていたが、このけががもう1年やることを決定付けたと思っている。

半月板激痛をこらえて最後まで

最終の5年次は武田新監督のもとスタートした。有能な新人も多く入ったが、秋のリーグ戦は最初から苦戦続きだった。緒戦から連敗が続き、第6節の一橋大戦には勝ったものの、最終節の拓大戦は負けたほうが下との入替戦という厳しい状況に追い込まれた。前半早々、私のハンドリングでPKを与えてしまった。GK青山がうまく防いでくれて助かったと思ったのもつかの間、今度は競り合いで相手FWのひざが私の右ひざ半月板あ

たりに入り、激痛が走った。痛みがひどくダメかと思ったが、すぐ最後までやらなきゃと思い返し、痛みをおさえてグラウンドに戻った。ピンチを凌ぐうち、後半の後半、FWの阿部がドリブルでゴールエリア左サイドに持ち込み、不得意な左足のシュート体勢となってダメかと思われた瞬間、切り替えして得意の右足でゴール。残り時間この1点を何とか死守して、勝利した。

試合終了後、山上御殿側の斜面に陣取ったOBに挨拶している時、不意に涙がとめどなく溢れ出た。何とか関東リーグ2部を死守したという安堵感と、もうこんなに真剣にサッカーをすることもないだろうという寂しさからだったと思う。

今でも東大ア式蹴球部時代のこの5年間のことを思うと胸が熱くなる。入りたては何も分からない若僧が、何とか関東リーグ2部を死守しよう(古いOBの方々にはお叱りを受けそうだが)と必死にボールを追いかけてながら少しずつ成長していく、そんな場を与えて頂いたと思っている。私を鍛え、育て、生涯の友との出会いをくれた東京大学ア式蹴球部に心から感謝するとともに、現役諸君に熱いエールを送りたい。

女子マネ第1号

昭和53年卒業 岡本(西山)由美子

苦労した記憶はない

私が伝統ある東大ア式蹴球部の初代女子マネージャーとのことで、当時の監督でいらした浅見先生より原稿の依頼をいただきました。わずか2年ほど在籍しただけの私が寄稿するのは、おこがましいのですが、大恩ある先生からのご依頼ですので書かせていただきます。なにしろ出産のため勤務先である監査法人を辞めて独立したとき、駆け出しの子連れ公認会計士に最初の仕事を下さったのが、浅見先生です。今でも先生のいらっしゃる本駒込には足を向けて寝られません。

原稿の依頼文には「女子マネとして苦労した思い出などを」とありましたが、実は全く苦労した記憶はありません。むしろ、浅見監督始め、部員の皆さんやOBの方々の方が、いろいろと気を遣ってくださってご苦労されたのではないのでしょうか。検見川での合宿や遠征旅行の折も、女子は私1人という状態でも違和感や孤立感を持ったことはありませんでした。御殿下グラウンドで、砂ぼこりと戦いつつ練習を見ているのは楽しかったです。

先輩の男子マネージャー

私が1年生で入部したとき、先輩マネージャーは3人いらっしゃいました。4年生の兵頭さん。この方とはとにかく真面目で黙々と練習しておられました。暑い夏場の練習でランニング途中に気を失いながらも走り続け、グラウンドのコーナーを曲がらずに壁に激突した、という逸話の持ち主です。それを他の部員から聞かされたとき、驚きながらも、さもありなんと思いました。

3年生は2人で、谷本さんと茅野さん。私にマネージャーの仕事を教えてくださったのは主に谷本さんです。当時の私は、銀行での振り込みもしたことのない世間知らずでしたから、よく「かま、かま」とからかわれました。「かまと」の「かま」です。通帳の入出金はまとめて1件ずつにして、摘要を記入すれば通帳がそのまま帳簿になることや、OB宛の大量の郵便物の効率的な作り方などを教わりました。封筒を少しずつずらして、一度にのりづけする方法、切手シートの一部だけに切れ込みを入れて素早く切手を貼っていく方法などなど。現在会計事務所を営んでいて、何通も郵便物をつくるとき、いまだにそのワザは役立っています。

もう1人の茅野さんは、いつもニコニコと穏やかに笑っておられたのが印象に残っています。プレーイングマネージャーとして練習熱心だったのも覚えています。マネージャーの仕事があるため1人だけ早く練習を切り上げなければならないときは残念そうにしておられました。

包丁持ったことないだろ？

そういえば1点だけ苦労がありました。学期の始まりや終わりなど、節目節目にキャンパス内の合宿所で飲み会があって、その際の料理担当が1年生だったのです。私が初の女性ということで献立作りから任されましたが、なにしろ高校卒業までロクに料理をしたことがなく、当然レパートリーなどありません。また、実家の父は下戸でしたので、お酒に合うつまみも知りません。日本酒にスパゲッティなど、変な取り合わせの料理を食べさせられて、当時の部員の方々は大変だったでしょうね。台所でも、一緒に調理している他の1年生部員に「かま、包丁持ったことないだろ」と、見破られました。こうして思い出すと、苦労したのは私ではなくて、まずい料理を食べさせられた部員の皆さんだったようです。

2年生で学連担当も

2年生になってからは、関東大学サッカー連盟（学連）担当になりました。当時東大ア式蹴球部は学連の2部に所属しており、1部・2部所属の各大学のマネージャーがつくる学連の会合に定期的に出席しました。私は2年生で学連の中でも下っ端でしたから、あまり仕事の内容は覚えていませんが、構成メンバーが個性豊かで、楽しく過ごすことができました。各大学のカラーが如実に各マネージャーに現れるのです。早稲田はちょっとダサいけれども優秀で、慶応はとにかくオシャレ、青学もオシャレ。日体大は本当にスポーツマンという感じ。国士舘と拓大は、私たち女子にはやさしいけれど、自校の下級生には目つき鋭くドスがきいていて怖かったですね。

学連の仕事で一番楽しかったのは連盟の試合の場内放送です。石神井など東京の地名を間違って読むという失敗もしましたが……。また国立競技場での大きな試合の裏方のお手伝いも楽しい時間でした。一般の観客が入れない場所にいるというのが面白かったのかもしれませんが、主催者側の端くれにいるというのが楽しかったのかもしれない

せん。また、仕事ではありませんが、学連の女子マネで、にわかサッカーチームを作り、何かの大会に出場したのもよい思い出です。もちろん大負けでした。

浅見監督や、OBでは特に小山さんという方に可愛がっていただきました。浅見先生には渋谷のロシア料理を、小山さんにはお寿司をご馳走になったのを覚えています。どちらも貧乏学生の身には大変なご馳走でした。小山さんに連れられて、銀座の高級クラブ(?)に足を踏み入れたこともあります。私の(いまだに)一生に一度のクラブ体験です。

とにかく、あまりお役に立てなかった半端マネージャーでしたが、大勢の方々にお世話になりました。あらためてこの場をお借りしてお礼申し上げます。またマネージャーだったのはン10年前のこととて、記憶が定かではなく、文中に誤りがあるかもしれません。どうぞお許しください。

練習が厳しかった

昭和56年卒業 牛窪(旧姓山川)健一
すごいところに入った

卒業してはや26年がたった。昨年(2006年)の京大戦を京大農学部グラウンドで久々に見たが、8月の炎天下の中で恐るべきスタミナで動き回っている現役選手を見て、自分が現役のときにもこれくらいエネルギーに動き回っていたのだろうかと思ふ懐かしい気分になった。

私自身は新人戦を除いて公式戦出場がなく、東大代表チームを語るのは他の活躍された選手に譲り、裏方としてゴール裏からまたは本部席からチームを支えた一員として記憶を綴ることとした。

私が入部したのは昭和52年5月の連休明けの土曜日であった。最初に先輩に案内された御殿下グラウンド下の部室のあまりの古さ、汚さに愕然としたことを覚えている。

高校時代に1年余りサッカー部に所属したとはいえ1、2回戦負けの弱いチームであった。ただただ入学時に渡された運動会報のア式蹴球部ページに「大学から始めても丁寧に指導するので、すぐに上手になれる」という言葉に励まされたためであった。当時二軍の指導に当たってくれた加川先輩に感謝する次第である。

確か入った次の週の日曜に関東大学サッカー春季対抗戦が土砂降りで水溜まりだらけの御殿下グラウンドであり早大と対戦した。こんな土砂降りの中でまさか試合はやらないだろうと思ったが念のため出かけたら、部室は今から公式戦という熱気と緊張感に包まれていた。試合は雨中の肉弾戦となった。ゴール裏で球拾いをしていた私にはGK青山先輩の獅子奮迅のセービングや味方を鼓舞する声、SW吉野先輩のよく飛ぶキックや1対1の強さを憧れの気持ちで見ている。前半は牧野先輩の2ゴールで2対2と当時大学No.1であった早大と互角に渡り合った。結果は2対5で敗れたが、すごいところに入ったものだと思ふ(当時は東大サッカー部の歴史など何も知らなかった)。

計27日間の検見川合宿

その後の思い出は、ただただ練習が厳しかったことしか覚えていない。武田監督の尽力で遠い釜石まで合宿に行ったこと、夏の検見川が暑かったことを覚えている。

秋季リーグ戦が始まったが惜しい試合を落とし勝ち点が伸びず結局7位。下部への入れ替え戦を駒沢陸上競技場で戦い立正大に1対2で敗れ、創部以来初めて東京都リーグへ陥落した。それ以来、上部との入れ替え戦までは行っても関東リーグには復帰できておらず、これまでのところ、我々の代が関東リーグを知る最後の年代となっている。

昭和53年は古村新監督、宮キャプテンの下、「一年で関東リーグ復帰」を目標に臨んだが、東京都リーグ一部6位という東京都リーグのレベルの高さを思い知る結果となった。チームのレベルを上げるには猛練習しかないという古村監督の方針のもとで例年になく厳しい練習量をこなし、計27

日間の検見川合宿が長かったことを覚えている。このときはボールをつないで運ぶサッカーを志向し、今のオシムサッカーの Moving Football に通じるものがあったが、残念ながら私には基礎技術も頭もついていけなかった。

昭和54年は主力選手が4年生に多く残り、上に上がるならこの年と期待された年であったが、今から思えば東大の得点源である平林先輩、飯島先輩が徹底的にマークされ、結局は秋季リーグ5位と、上位4チームに与えられる関東大会出場権を2年続けて逃すという結果になった。

昭和55年は我々が4年生となり責任年代となった。4年になった時点でいたのは福田キャプテン、安藤副キャプテン、松元、田河、新加入の田中、牛窪の6名であった。チームは支え合い助け合うことが必要と考えたが、それには少し心もとない人数であり、また、福田が膝の故障で試合にほとんど出られなかったため、後輩たちの力を借りてチーム作りを進めた。

一橋大戦で微妙なPKに恵まれる

この危機感がチームとしての結束を生んだのか、秋季リーグ戦4位となり、関東大会ではあと一つ勝てば上との入れ替え戦というところまで行った。このときのリーグ最終戦は東大対一橋大であり、東大が勝つか引き分ければ4位、一橋大が勝てば4位という試合であった。試合は後半40分まで一橋大に0対1でリードされ、本部席で見ていた私は「4年間のサッカー部人生も今日で終わりか」と半ば観念していたところに、東大がCKを蹴ったときに相手GKがゴール前にいた東大FW清水（当時2年）を押したとの判定でPKとなり、これを斉川（当時2年）が決めて1対1となり、東大が4位となり関東大会へ進むことができた。

関東大会1回戦は千葉大に2対0で勝ったものの、これに勝てば上との入替戦という準決勝では明治学院大学に0対2で敗れ、我々のサッカー部人生は11月末に幕を閉じた。

なお、このときのPKは味方である私も「取ら

なくてもよいのでは」と思うくらいの微妙な判定であり、この判定で涙をのんだ一橋大の選手にはとても申し訳ないと思っていた。

あれから25年たち、関西在住者で東大・一橋大・京大同世代OBの合同忘年会を開催した。そのときに当然このPKの話題となり、その試合で一橋大CFだった日置君（新日鐵）より「（東大に関東大会を）譲ってやったんだ」と言ってもらい私は随分救われた思いをした。

卒業して26年という自分が大学生であった年齢より永い年月が過ぎ、こうして昔戦った仲間が集まり思い出話をできることをうれしく思うし、来年こそ関西で東大・一橋大OB連合軍対京大OBの試合をできるようにトレーニングに励んでおこうと思う。

（2007年12月29日、大阪府茨木市にて）

東京都リーグで上位を維持

平成8年卒業 松行輝昌

私は大学時代を東大サッカー部で過ごすという幸運に恵まれた。この間の経験は、その後の私の人生に大きな影響を与えている。ここでは、記憶を頼りに当時の状況を主観的、かつ断片的に記すことにする。

当時の状況

私が入部した1992年度（平成4年度）のチームは戦力が充実し、現実的に関東2部リーグ復帰の可能性があったように思う。当時のメンバーには、有馬（GK）、星川、前田（DF）、清水、信国（MF）、瀬戸（FW）各先輩方をはじめとして東京都リーグにおいても突出した選手が多く在籍していた。ポストプレーを軸につないで組み立てる攻撃と4バックのラインディフェンスを採用した守備は、東大サッカーの象徴であった。

1992年には東都1部で4位になり、関東選手権でもあと1勝で入れ替え戦というところまで勝

ち進んだ。当時の部の雰囲気は非常に家族的であり、照明設備の整った農学部グラウンドと、隣接する2階建ての部室、優れた指導者など、サッカーを真剣に楽しもうとするものにとっては理想的な場だったと思う。

1993年以降のリーグ戦はいずれも楽ではなかったが、チームワークを軸に善戦していたと思う。特に印象的なのは1995年のリーグ戦で、同期の前川主将の強烈なキャプテンシーを軸に、GK西馬君や畏友DF島君を中心にした鉄壁のディフェンスで、リーグ戦総失点がわずか1であったことは特記に値する。

名将吉田監督

私たちの世代は幸運なことに、吉田隆監督にご指導いただけた。吉田さんは寡黙でありながら部員一人一人にまで目を配られ、愛情に満ちた指導をしてくださった。練習メニューは多彩で、各選手は自分の頭で考えることを求められていたように思う。技術・体力に劣る東大を指揮し東都リーグで戦うことは容易ではなかったはずである。

また、扱いづらい東大生を率い、OBからの過大な期待を受け、苦慮なさったことも多かったと思う。

そのようななかで吉田監督はサッカー指導者としての優れた能力を発揮され、東大サッカー部をコーチ時代を含め約10年のあいだ支えてくださった。東大が東都リーグで上位を維持することができたのは、吉田監督という傑出した指導者によるものである。

吉田監督の攻撃理論の一部は、氏が当時サッ

カーマガジンに連載された『ゴールへのシナリオ』に記されている。また、1993年にはブラジル人のマリオ氏が招聘され、ブラジル流ドリブルなどの基礎技術を習う機会を得た。

以後、東大サッカー部選手の足元の技術が大きく向上したことを記しておきたい。

私たちの世代は、吉田監督と巡り会えたという幸運に感謝し、当時から今にいたるまで大きな敬愛の気持ちを抱き続けている。

サッカー部の人たち

私は、東大サッカー部に在籍したことにより、かけがえのない知己を数多く得た。先輩・同期・後輩の方々とともに兄弟のように過ごした幸福な経験は、私の人生を豊かに彩っている。当時の五月祭や納会などではOBの方々が多く駆けつけてくださった。

特に、元全日本の大壁さんをはじめとして、先輩諸兄が東大の関東リーグ復帰のために熱く語られるのを拝聴し、胸が熱くなるのを感じたものだった。また、私たちが現役の頃から、原先輩を中心にOBの方々がサッカー部復興のために組織的に活動をされていた。

私たちが、夜遅く練習しているときにOBの方々がグラウンドにおいでになり、ボール拾いなどをされるのを見て頭が下がる思いだった。このように、私は東大サッカー部で高度なサッカーに触れ、楽しんただけでなく、生涯の友人と出会うことができた。そして、このことは私の人生に起きた思いがけない幸運であったと確信している。

我がサッカー人生

泥蹴会の応援団

堀井由美子

昭和51年卒業の同期会

1975年11月、リーグ戦終了後に実施した修学旅行で、年に1度はみんなで集まって試合をしようということで結成されたのが、昭和51年卒業の同期会「泥蹴会」です。以来30余年、毎年11月23日に原則全員参加でサッカーの試合をしました。

私は1981年、結婚を機に参加（応援）しました。出産と重なった一回を除くと皆勤賞です。私が欠

席した1985年は、結成10年ということで、下田で一泊旅行という特別企画の会でした。しかし、このときは、試合当日は晴天にもかかわらず、前日の雨によりグラウンドが使えず、試合が出来ませんでした。泥蹴会はいつも天気恵まれ、試合が出来なかったのはこのとき1回だけです。他に1回だけ、かなり雨に降られたこともありますが、グラウンドが御殿下（人工芝）だったため、試合には支障がありませんでした。

以後は、私が参加してからの記録なので、泥蹴会そのものとは5年の時差があります。

最初の10年、メンバーも30代。学生時代の延長で、思い描くサッカーが出来ていました。新日鉄の国分寺グラウンド（現早実高校）で、相手



2007年11月検見川



泥蹴会とダックスOBチーム



一橋OBチームの試合と試合後の懇親会



泥蹴会のメンバー、1996年ころ

チームも、新日鉄のサッカーチーム。宴会は新日鉄の山谷寮（代々木参宮橋）でした。南谷、植村、池森諸氏は既に結婚し、その後、茅野氏を皮切りに2年間結婚・出産ラッシュが続きました。泥蹴会は家族参加という決まりだったので、このころの宴会は幼稚園さながらでした。3ヵ月に満たない娘を連れサッカー観戦をしたと、あとで両親のひんしゆく響ひんしゆくを買ったものです。みんなオムツ持参の大荷物。でも、紙おむつが普及し始めていたので助かりました。当然、主人たちのサッカー応援どころではなく、土手で子供たちと戯れる日々でした。

子供たちが戦力に

次の10年、海外転勤者続出で先輩、後輩それに京大同期の永井氏の手を借りる一方、息子たちが戦力になってくれました。俊敏なドリブルに親父たちはついていけません。とはいえ、まだ中学・高校生、なにせ軽量。メンバーに当たり負けをしていました。

一方メンバーは、頭では学生時代の華麗なプレー（30代では可能でした）のつもりで、無茶な走り込みをするものの、多忙で日々のトレーニングもおろそかな40代のメタボな身体故に、故障の多い時期でした。毎回誰かがびっこを引き引きの帰途でした。

このころは、興銀の浜田山グラウンド、東大の御殿下グラウンドで試合をしました。相手は興銀チームや東大職員チームのダックスでした。子供たちも大きくなり、私たちもゆっくりサッカー観戦ができるようになりました。

そしてこの5年。大学入試・就職と忙しい子供たちの足は遠のき、無邪気なメンバーの応援は妻たちのみとなりました。仕事でも戦士から管理職になっていき、それぞれシェイプアップし、メタボを返上。地元のサッカーチームに所属したり、シジュウカラというおじさんチームに参加したり、LB会に参加すると共に、アスリートサッカーからエンジョイサッカーに方向転換。意識も走りこんでボールをゲットするのではなく、「ボールは足元に」を鉄則にする余裕が出来、故障も少な

くなりました。

妻たちのメタボ対策

加えて、日ごろからボールに接触する機会が多くなった分（主人は40代までは年1回でしたが、50になって月2回はサッカーをしています）、皆以前より身体が動いているようです。40代には見られなかった華麗なプレーを目にするようになりました。

グラウンドは検見川。相手チームはダックスOBチームと一橋OBチームの三つ巴戦です。以前は泥蹴会 only の宴会でしたが、検見川のクラブハウスでの宴会は、いつも3チーム合同なので、今回のみならず、昨年の試合にまで遡って、話がとても盛り上がっています。

普段とても元気なメンバー。40代までは若さに任せ、さほど心配なかった健康面でしたが、さすがに50に入ると、長年の不摂生が祟ってか、それぞれ成人病系が危うくなってきました。本人たちもタバコをやめたり、防メタボ対策をしたり。そして、それを支える妻たちです。

泥蹴会は同期の会、妻の抱える悩みも似たり寄ったりです。サッカー観戦しながら、妻たちは夫の健康に関する情報交換しき頻りです。熟年を過ぎ、今後はさらに役立つ情報が飛び交うことでしょう。

いつまでも続いて欲しい泥蹴会です。それがメンバーの、そして家族の、心と体の健康の証であると思うからです。

（筆者は昭和51年卒業 堀井茂夫人）

膝半月板損傷、 外科医志望に転向

昭和53年卒業 山崎隆志

膝半月板損傷

膝半月板は大腿骨と脛骨の間にある繊維性軟骨様組織で、荷重の緩衝作用すなわちクッションのような働きをしています。高齢者では変性断裂と

いう加齢による自然断裂もあるのですが、若年者では多くがスポーツによる損傷です。半月板は骨ではないのでレントゲンには写りませんが、MRIという磁気を用いた画像検査により可視化できるため、今では半月板損傷は比較的容易に診断できます。

軽度な場合は放置しておいても構いませんが、生活やスポーツに支障がある場合は手術が必要になります。半月板は血流が乏しく成人では自然治癒力が非常に小さいからです。

関節鏡手術がスタンダードで、血流が残存している部位では縫合術、それ以外の部位では半月板切除が行われます。1センチ程度の傷が2ヵ所つくだけで、入院期間も3～4日と短く、またスポーツへの復帰も程度によりますが1ヵ月程度で可能です。

4年生の公式戦初戦で

私は4年生の公式戦初戦、4-1で敗れた早稲田とのゲームで右膝半月板を損傷しました。当時、名の知られている中盤選手に膝外側から当たられ、“ぐしゃっ”とした感じが膝にありましたが最後までプレー続行が可能でした。帰宅途中は膝の違和感を覚える程度でしたが、翌日に激痛となり近所の医者に診てもらいました。レントゲンの異常なく、しばらく様子を見るようにとの指示で2週間もすると歩行や階段など日常生活には差し支えない程度に回復しました。

しかし、サッカーは無理でした。練習が5分を超えると、膝の痛みが増して走れなくなりました。もう少し休めば治るかと考え、練習をさらに1週間控えましたが、やはり練習すると5分程度で膝が痛くなってきました。さらに休めば治るかと、休んでは練習再開を繰り返しましたが、一向に良くなる気配はなく、プレーできず主将の責務を果たせない、いらだちが募りました。

いくつかの整形外科で診察を受けましたが診断がつかず、代々木のスポーツ診療所の膝専門医から確定診断には関節造影が必要といわれ、東大病院に一泊入院して検査し、やっと半月板損傷との

診断がつかしました。

治療の一環として筋力強化を指示されましたが、大腿四頭筋は廃用性萎縮により健常側より周径は3～4センチ細く、全く改善のきざしがなかったので手術を受けることにしました。結局、シーズン中にプレーができたのは第1戦のみで、実質的に練習に参加できないシーズンとなり、チームのみんなには多大な迷惑をかけてしまいました。

都リーグ陥落を病院のベッドで聞く

留年して来期のリーグ戦出場を目指し、その年のリーグ戦終了後に手術をする予約をしていました。しかし、リーグ戦では1勝1分5敗の7位となり、“全くの想定外”といえは嘘になりますが、下との入れ替え戦になり、東京都リーグへの陥落の知らせを都立大塚病院のベッドで聞きました。

7センチ程度膝関節を切開する手術であったので約1ヵ月入院し、その後リハビリに励み、5年生としてサッカー部に残りました。膝の痛みはほとんどなかったのですが、けがの多い身体となり残念ながらチームへの十分な貢献はできませんでした。

専攻の物理より打ち込んできたサッカー部の5年間は、対戦成績やプレーとしては不満いっぱいの結果でしたが、一言では言い表せないほどの有意義で充実感にあふれていた学生時代として、今では懐かしく思い出します。

物理学科修士課程に進みましたが、物理学上の新発見をする才能がないことを自覚し、東大医学部に再入学し、膝の手術を受けたこともあり整形外科医になりました。

この20年で医療は進歩しました。私は整形外科では背骨を扱う脊椎外科を専門としていますが、医師になったばかりのころは、術後1ヵ月以上ベッド上の安静を強いる手術も多くありました。それが今は大きな手術でも術後2日で歩行練習を開始し2週間程度で退院できます。

現在の医療水準であれば、私の半月板損傷も早

期に診断がつき、鏡視下手術で十分秋のリーグ戦には間に合ったでしょう。そうすれば、入れ替え戦敗戦のホイッスルをみんなと一緒にグラウンド（pitch）で聞き、落ちる瞬間の感情を共有できたであろうと残念です。私たちの世代は時代の流れに抗する力がなかったのだと、今では過去を受容しています。

北里大学水産学部での 最終講義

昭和 41 年卒業 渡辺 翼^{たすく}

サッカー部の仲間が駆けつける

昭和 41 年卒の渡辺翼です。4 年生の始めに足首の骨折をして試合に出るのをあきらめ、以後 1 年生の教育や河島洋征主務の手伝いなどをしていたので、ほとんどサッカー部に貢献しておりませんでした。

この平成 20 年（2008 年）65 歳になり、勤務しておりました北里大学水産学部を定年退職することになり、2 月 29 日に最終講義をいたしました。1 月くらいから 41 年卒業の仲間からいつ最終講義をするのか、と聞かれていたのですが、まさか大学のある岩手県の三陸まで来てくれるとは思ってもいませんでした。

ところで最終講義とは制度的に決まっているものではなく、一部の学生や教員がやってくれと依頼して初めて行うので、演者にはそれをどうこうすることは建前上できません。それをみんなにやいのやいの言われるのでしようがなく、普通最終講義の段取りを決める私の研究室の准教授（昔の助教授）に頼んで 2 月 29 日に決めて貰いました。

まさか、と思っていたことが現実になりました。平田攻主将をはじめ、安藤毅、河島洋征、藤井俊治、水沢雅武の 5 人が三陸まできてくれたのです。

サッカーのシステムを材料に

私は、北里大学に 11 年勤めたので、それに引っかけ、講義の一部をイレブンと称してサッカーの

話をしました。私たちが入部した昭和 37 年の夏、お茶の水女子大学の写真部の学生が秋の大学祭で使う写真を撮りたい、ということで何度か御殿下グラウンドにきており、写真を撮っていました。

1 年生の写真も撮っていたのでしょう。私と安藤、武田勝年、藤井の写っている写真を後でくれました。僕が貰ったのを紛失してしまったので、安藤に貸してもらいデジタル化しました。写真 1 がそれです。



写真 1

講義ではこの写真を使って、三陸まで来てくれた 5 人を紹介し、最終講義の最初の話題を始めました。5 人が来てくれたことが、北里大学水産学部の学生、大学院生に与えたインパクトは強烈なものがあったと思います。

サッカーの話題は「フォーメーション」で、私がサッカーを始めた中学生の 2 バックスの時代から、高校生時代の WM 時代、そしてクラマーさんが来て導入された 4-2-4 システム、岡田ジャパンが対タイ戦で使った 4 バックス（もしくは 2 トップ）システムと話を進めました。

最初の 2 バックスの説明は、かつてのサッカーの背番号のつけ方の由来を、若い人に説明するために必要でした。

ところで、このようなフォーメーションの変遷の中で、日本サッカーは強くなったのでしょうか。むしろ逆に弱くなっていったのではないのでしょうか。確かに今の日本代表はサッカーがとても上手です。しかし点が入らない。それにはフォーメーションがむしろ足を引っ張っているように思われます。

日本人は第 2 次大戦後「几帳面」に働き、日本

経済の復興を成し遂げ、世界有数の産業社会を作ってきました。この「几帳面」とは、日本の社会システムの中で自らの立ち場（ポジション）を守り、システムに貢献することだと思います。

日本人の「几帳面」さがアダ

そのように「几帳面」が絶対的に正しいと教育されてきたサッカー・プレイヤーを含めた日本の若者に「フォーメーション」を与えたときに、どのように反応するでしょうか。フォーメーションのポジションを「几帳面」にこなそうとして当たり前だと思います。

しかし、サッカーのフォーメーションは決して「几帳面」にこなすものではなく、意外性に富んだ展開を誘導するためのシステムです。すなわち盤石の守備陣に穴を空けるべく意外なパスとドリブルを行うためにあるのです。ここには練習のとき以外「几帳面」さが入り込む余地はありません。「几帳面」なサッカーは守備陣にとってとても守りやすいのです。

トルシエさんが言っていた「日本に来て驚いた、信号が赤で車が走っていないときでも日本人は渡らず信号が変わるのを待っている、これではサッカーは勝てない」という言葉も同じことを言っているものと思います。決して日本人の遵法精神を笑ったものではありません。ヨーロッパや南米のような世界の強豪サッカーと戦う日本サッカーを作るためには、一度フォーメーションを止めてみることも必要かも知れません。

生物学など自然科学の研究においても同じことが言えると思うのです。

これが最終講義のサッカー部分の内容です。講義終了後6人で撮ったのが写真2です。

この原稿を書きたいきさつを申し上げます。最終講義に先立つこと3日、2月26日に四谷のドイツ料理屋でホットワインを飲んでいたときに、「東京大学サッカー史」編纂に携わっている武田が「原稿が集まるか心配だ、誰か書いてくれないか」と言い出しました。



写真2 中央が渡辺翼

藤井がサッカー部の部室まで行って持って来た昭和37～41年頃の「闘魂」のコピーを見せてくれました。それを読んだ日本語にうるさい廣瀬英雄が「渡辺が良いことを言っている」と言い、その鶴の一声で私が書くハメになったわけです。そのとき同席していたのは、上記以外では、安藤、河島、中岡智信、室賀清邦で計8人でした。

敬称略で失礼しました。

東大の4年間で得たもの

昭和40年卒業 石田金次郎

入学したときの技術レベル

昭和36年入学後、4月の中ごろに御殿下に行って練習を見てこれはついて行けるかなと思いながらサッカー部に入った。先輩はたくましく見えた。

当時は、1軍、2軍と分かれて練習しており、当然の如く2軍に仕分けされ、球拾いの時間が長かった。ボールを蹴れるのは右足だけで、しかも正確さに欠けていた。からっきしだめな右足プレイヤーであった。

当時、岡野さんがときどき来られて、竹腰方式に代えてクラマーの方式の練習法を取り入れていた。ヨーロッパのクラブでは教授法がそれぞれのクラブであるらしい。この方式での右足・左足交互にインステップやサイドキックやボレーキックやヘディングを習得した。

1年生の冬には、梅村先輩の指導の下に農学部

で、太田直幹君と小生の2人が特訓合宿を受けた。このときに、エド・マシューズのドリブルとフェイントを教えてもらい、不器用ながら習得し、以後得意技の一つとなり大いなる武器となった。

2年生になって、一部から落ちてきた農大との試合に左ウイングでリーグ戦初出場し、ハットトリックした。足は左足、右足、右足でこのころは左足も少々自信の持てるようになっていた。

以降、数多くの試合に出て、サッカーが楽しいものになっていた。練習の後に、焼鳥屋「白糸」で歓談したり、また、同期の面々で新井家、樋口家、畔柳家にもお世話になったことを覚えている。

実業団での経験

就職したのは関西の会社で住友金属である。かつては種田先輩や吉富先輩がおられ、都市対抗などの常連になっていたそうであるが、当時は低迷しており、我々の年には関学から宇野君が入社・入団してきていた。

正確なプレーの出来る左足、インステップ・アウトサイド、カーブなど多種多様でかつ正確なプレーが出来るようになり、ますますサッカーに興味がわいてきていたので、実業団の団活動に参加した。

昭和40年の岐阜国体の大阪選抜を選ぶセレクションがあり、その試合で左隅にシュートを決め選ばれた。岐阜の国体は、常に1点差で勝ちを得て優勝した。

しかし、このチームはクラマーの教えとはほど遠いものだった。短期決戦では集中力の勝負であり、その点ではすごい集中力を発揮したからだと思っている。岡野さんがメキシコで勝った要因を振り返って、「人間の集中力は2週間が限度」とのお話を受けたことがあるが、その周期にチームがうまく乗れたということであると思っている。以後福井・長崎国体に参加して、初戦敗退、3位の成績であった。

貴重な経験

貴重な経験をした。昭和40年の夏に京都紫光クラブと決勝戦を交えたが、0-1で敗れ、大阪

でやけ酒を飲んで列車に乗った。夜9時過ぎの中央線「ちくま」である。車中ボックス席の人のすすめで、朝5時ごろ木曽福島で降りた。

駅は高台にあり、木曽川まで降りて、川辺で川の流れを見ていた。牛乳配達のおばあさんが声をかけてきて、関所跡等案内してくれると言うので後に付いていった。いろいろ案内してもらっているうちに家に寄って行きなさいとのことで、おばあさんの家に寄った。

中央線の線路が目の前に見えるあばらやの2階である。ビールを勧められて飲んだらそのまま寝入ってしまった。目覚めたら、小学生の娘が寝覚ノ床を案内するからといって連れて行ってくれた。帰ってきたら、山菜料理が出来ているから食べていってくださいと言われ、たくさんの山菜料理が用意してあった。今晚は泊まっていくようにと言われ、泊まることにした。お風呂が用意してありますからと言われ風呂に入った。後にも先にも経験のない星空が見えるドラム缶のお風呂であった。翌日、帰るときには、お土産まで用意してくれた。

どこの馬の骨とも分からない自分にこれだけ親切にしてくれるその気持ちに打たれた。

おばあちゃんは赤貧の生活である。牛乳配達、駅の前の売店の店員で、子供は3人いて、長男は中学校を卒業して東京に就職していた。子供たちは、無償で1階に住む家族の子供に勉強を教えていた。これだけ貧しくても心は豊かに生活出来るのを見て目が開かれる思いであった。「貧すれば鈍する」というものとは「全く逆な世界」を見たのは、貴重な経験であった。

岐阜国体の優勝のときにも、その帰途報告のために寄ったが、その後何度もその家を訪れ、おばあちゃんに感謝したしだいである。

初の外人スカウト

昭和59年、住友金属が日本リーグ2部から1部に昇格し、チーム力強化のために外人を補強したいという話が持ち上がり、ロンドンにいた新井俊一君に連絡を取り、彼がまとめていた在ロンド

ンの日本人サッカーチームの名誉顧問のレスリー・テラー（英国サッカーのアマの代表チーム、ミドルセックスワンダラーズの顧問）に相談・面接していただき、英会話教師でサッカーの出来るH・デイビッド・ウェイトなる選手を採用した。岡野さんにはレスリー・テラーなる人物の評価をお伺いして、会社採用の根拠とした。

日本サッカー協会から、彼はコンタクト（契約）プレーヤーでプロであるから、日本では登録不可と言われたが、東芝ロンドンにいた京大卒の伊藤君の「コンタクト・プレーヤーはクラブから交通費が出るだけの選手である」と助太刀の助言を頂いて協会にご理解をいただき、当時、協会の事務局の平木隆三さんだったと思うが、アマとして認めていただいた。彼は、背が2m超で、ガリバーとして新聞を賑わした。彼の保証人は日本ロレックスのマクドナルド社長で、鹿島まで来て頂いたこともあった。

杉並少年サッカーチームのお世話

昭和58年ごろ、杉並シーダーズなる少年サッカーチームの指導を要請され、営業課長として忙しいなか、4年間、毎日曜日に少年サッカーの監督・指導というボランティア活動をした。

このときに役に立ったのは、東大サッカー部で教えていただいた練習方法である。右足しか蹴れない子供たちであったが、最後は両足自由に蹴れるようになり、試合も「出ると負け」から「連戦連勝」に変わった。東京都の少年サッカー大会で優勝して、子供たちや父兄に大変感謝されたことを覚えている。

このとき、子供を集団で見て「子供」というものを考えたこと、また、躰を厳しく言ったが家庭の躰が大切であると思った。そして、親御さんの消防士や看護婦さんなどと付き合い、企業社会ならぬ一般地域社会と触れ合えたのは、ありがたい経験であった。

Jリーグ・ウオッチャー

Jリーグ発足と同時に、NHKがJリーグ・ウ

オッチャーという仕組みを導入し、ウオッチャーになった。試合を見てJリーグに関する意見をレポートするのである。前期の試合を見て、選手のラフプレーや隠れたファウル、審判の判定など目に余るものがあり、試合だけでなく審判についてもよく見る必要があると提案した。後期から審判についても評価項目が設けられてレポートすることになったのを覚えている。

まとめ

東大サッカー部時代、岡野さんが日本の体育行政、仕組みについて、学校体育や企業体育でなく、ヨーロッパのようなクラブを主体とする社会体育の必要性を力説されていた。実業団に身を置き、企業の業績によって選手・チーム力の向上度合いが変わったり、チームが統廃合されたりするのを見、また、小さな地域のサッカーチームを指導して、健全な教育のためには躰や勉強とスポーツの両立できるような社会体育の整備が必要であるというのを実感することが出来た。これまでの多くの人の支援をいただいたことに感謝したい。

まだ、たくさんの思い出があるが、これらは全て東大サッカー部で、クラーマー式のプログラムで左足の足技やヘディング等の正確なプレーができるような指導を受けて、自信を持てるようになったことがベースであると思う。東大サッカー部の4年間は、大変有意義であったと、いまさらのように思う。

12歳から70歳半ばまで

昭和31年卒業 山野一郎

子どものころ、小さなボールで

私の家の隣は小学校である。4年前にこの小学校の校庭に芝を植える工事が始まり、今では冬でも青々と芝が生えている。横浜で他に数校芝生化したが生育状況はあまり良くないとのことである。この学校の生徒数が少なく、あまり踏みつけ

られていないから芝の元気が良いのかもしれない。私は暇なので草むしりを手伝ってやろうかと思っている。この芝生のグラウンドで子供達がサッカーをやったり寝ころがったりしているのを見ると私のほうから芝生に有難うといいたくなるほどだ。

私がサッカーと出会ったのは12歳のとき、旧制葦崎中学に入ったことによる。サッカーが盛んな学校で授業中にじゃんけんをして二手に分かれ、休み時間になると冬でも裸足でグラウンドにとび出し、スポンジボールやテニスボールでサッカーをやった。サッカー部に入らなくても十分にサッカーができた。子供のときに小さいボールでサッカーをやった方がボールに対する感覚が良くなるのではなからうか。テニスボールは小さ過ぎるとしても、この倍位の大きさで持ち歩きやすく、扱いやすいボールがないのだろうか。裸足でサッカーをやったのは、終戦後で靴などなく皆下駄を履いて学校へ通っていたし、下駄でサッカーをやるのは危ないし、走れないからである。軍靴が出廻っていたので、後にはこれを靴屋で改造してもらってサッカー靴としたこともある。

リーグ優勝校の立教に勝つ

家が甲府に引っ越して甲府一高に入りサッカー部に入った。1年のとき第4回国民体育大会が東京で行われたが、県代表になり私は補欠として参加した。このころの夏合宿は米と毛布を持参し、寝るときは教室で椅子を並べてその上に横になった。2年になったとき、ソ連に抑留されていた父が帰って来て勉強しろということでサッカー部をやめてしまった。

東大では1年のときはサッカー部に入り損なってしまう、南アルプス等の夏山登山に行ったりしていた。2年になってから入部した。最初のころは素人みたいなものだったが、3年になったころに、やっとともにボールが蹴れるようになった。

今では大学サッカーの結果は一般紙にはあまり出ないが、50年前は試合結果とともにメンバーまで掲載された。楠田と本郷の下宿にいたが、下

宿の小母さんはG Kの楠田が一番上に名前が出て私はウイングで一番下なので、楠田の方がよほど偉いと思っていたらしい。

サッカーの夏合宿を山中湖で行なって、涼しい中で思い切り動けたということは、東大サッカーの技術の進歩には良かったと思う。合宿の終わりの山中湖一周マラソンは車の少ない時代で、湖を眺めながら気持ち良く走ることができた。苦しい中にも忘れられない思い出である。

公式戦はよく頑張ったが負けが多かった。一つだけ昭和30年の正月の全国大学大会、1月4日の準々決勝で相手のリーグ戦優勝チームの立教に1-0で勝った試合を鮮明に覚えている。浅見から立教ゴール前にフィードされたボールが、私の3メートル先にいた小松にとんできた。私は当然小松がヘディングすると思ったが彼はしなかった。後ろにいた私は慌てて左から来たボールを右腕の付け根に当てた。ボールは方向を変えてコロコロとゴールへ転がり込んだ。そのころの新聞には、リーグ戦優勝の立教を破ったということで大きく取り上げられた。

卒業後就職して大分県の佐伯市に赴任したとき、すぐにサッカー部を創った。私の他にサッカーの経験者が2人いた。野球が盛んだったのでグラウンドでサッカーをやったら野球部長から怒られた。仕方なく荒地を開いて狭い場所でサッカーをやった。

大分は竹腰大先輩の出身地である。県選抜チームで大阪の実業団の大会に行ったとき、竹腰さんが来られて大分の人達と懐かしそうに話をされていたことがあった。

大分県に5年いて静岡県富士市に転勤になった。ここでもサッカー部を創った。若い人が多くすぐサッカーに慣れて上手になってくれた。その後東京に移り家は横浜に変わった。

現在70歳半ばとなったが、サッカーの方はまだ続いている。サッカーOBインターハイ(SOI)のグループで紅白試合をやり、ときには対外試合もある。サッカーと出会った12歳のとき、

まさかこんな年齢になるまでサッカーが出来るとは夢にも思わなかった。野球ではピッチャーとキャッチャーの負荷が大き過ぎて高齢者野球は成り立たないのだと思う。

私はサッカーをやっている小学生に会うたびに「サッカーはどんなに年を取っても出来るんだよ」と教えてやりたいと思っている。

御殿下クラブとLBでプレー

昭和44年卒業 北川 薫

サッカーが水に合う

50年も前のことになります。あれは中学1年生の秋ごろのことと思います。中学に入り、小学校でピッチャーだった私は悩むことなく野球部に入ったのですが、部風になじめずに2ヶ月ほどで退部し、バレーボール部に入りました。それもまたなじめず夏休み前には退部したのですが、次兄から運動部に入るように強く言われました。そんな折、体育の先生からサッカー部に誘われたのでした。水が合ったのでしょうか、それからはサッカーがもっともお気に入りのスポーツとなりました。

入部間もないころ、先生から言われたことは「左足でも蹴れるように」でした。寒い冬、寒風の吹きぬける校舎の壁をめがけてキックの練習を続けたことを思い出します。私は左利きの練習をして、左手でも箸を使えるようにもなりました。左右均等に使えるようにとの指示は私にとって人生でも大きなキーワードとなったようで、私の人生観である「多様性」を育んだ柱となっているようです。もっともこれは綺麗ごとで、本当のところは一点に打ち込めない、物事にのめり込めない散漫な性格を引き出したのかもしれませんが。

名古屋で中学のベストイレブンに

中学では2年生と3年生のときに名古屋市のベストイレブン（あるいは選抜チーム）になり、3年生では名古屋市の大会で優勝をしました。当時

は中学では県大会も全国大会もない時代でしたから、それなりに最高の勲章をもらったことになります。

そうした私でしたから高校の入学試験の発表を見に行きましたら、サッカー部の顧問の先生が待ち受けていて、入学する前にサッカー部の練習に参加することになった次第です。

高校時代は、あのクラマーさんが日本にサッカーの指導に来られたころで、それまでは「百姓一揆」サッカーをしてきた私にとって天地がひっくり返るほどの指導の転換がありました。しかし、私にはその技術は身につけませんでした。昭和30年代後半という時代はサッカーが大きく飛躍する第一段階であったでしょう。余談ながら、そのころ、野球のナゴヤ球場でサッカーの国際大会がありましたが、その審判をなさっていたのが浅見俊雄先生であることを知ったのは大学生になってのことでした。

東大では3年生からのサッカー部生活でしたが、9月に右膝の大怪我で入院しましたので現役時代はこれで終了です。その後は大学院生、助手という生活の中で後輩たちの練習や、浅見先生主催の御殿下少年サッカークラブのお手伝いをさせてもらいました。また、大人の御殿下クラブとLBではプレーを続けました。

サッカーの体力科学研究

今から30年ほど前に故郷にある中京大学体育学部で奉職することになりました。サッカー部とは、残念ながら深いかわりを持てませんでした。というのは、サッカーの専任教員がいますし、コーチがいます。口を挟むわけにはいきません。それでも入学試験ではサッカーの技術採点をやらせてもらいました。私は結局スキー競技部（本学は男女ともインカレ1部の強豪校です）の部長になりました。サッカー部は一段と強くなり、2000年にはインカレで優勝しましたし、今でも全国レベルの上位で活躍しています。2007年は惜しくも準決勝で敗れました。なお、この10年ほどは元名古屋グランパスエイトのJリーガーの沢入氏が

コーチ、監督を務めています。

私は大学では体力科学の中でも運動・スポーツ生理学を専攻しています。大学院生の中にはサッカーの研究に取り組む者も少なくありません。サッカーやフットサルの指導者になった者もいますが、研究者になり防衛大学校を経て、現在、大東文化大学の准教授をしている者もいます。彼の博士論文は「サッカーのコンディショニングに関する研究」で、名古屋グランパスエイトの協力も得て、当時ではまだ十分に普及していない乳酸の測定を中心にした研究をまとめました。このように、サッカーは他の競技スポーツと比較して研究が進んでいるスポーツの一つです。日本のサッカーが世界水準でやられているのは、こうした膨大な科学的成果に支えられているからだ、と確信しています。

本学のサッカー部とは役職上での関係を持つてはいませんが、いろいろな意味でサッカー界とは関係が続いています。しかし、私個人としては観戦よりも自分がプレーする方が好きで、今でも学生と一緒に、また、LBのメンバーとしてゲームをしています。もちろん、専門が専門ですから事前の体力づくりを怠ることはありません。加齢を感じることなく、活力ある生活を送る上でサッカーは大きな拠り所となっています。

最後に最近の学生の変化の一端を述べることにします。私の研究室では、他の研究室と年に2回ソフトボールの試合をしています。そこで感ずることです。現在の若者は実にソフトボールが下手なのです。投げ方が下手、フライの目測がきかない、バットにボールが当たらない。話を聞いてみると、子供のときからの遊びはサッカーで、野球やソフトボールはほとんどしなかった、とのこと。私の子供のころは遊びといえば野球でした。中学からマイナースポーツであったサッカーをした私にとってはこうした変化は嬉しい気持ちにもなります。しかし、体力科学者としての私にとっては、それはそれで青年たちの運動能力が心配の種ではあります。本家の体育系の学生がこうした状況ですから、一般学生の運動能力を考えると日本人の

将来を憂う気持ちにもなるのです。

(筆者は中京大学学長)

岡山でも夢を追いつづけ

昭和 45 年卒業 新倉正和

中学・高校では県大会上位に

サッカーとは長い付き合いになり、折りに触れて私の人生を彩ってくれた。横須賀の私立中学校に入り、かなりおとなしい部類であった中1の秋、サッカー部に仮入部したのが、そもそもの始まりであった。神奈川県では常に上位にいたサッカー部であったので、多くの友人からは驚きの目でみられたものであった。中学、高校では、当時 50～60 校程度しかサッカーをやっていなかったもので、県大会でも上位に進めたし、高校では関東大会にも出場することができた。1 回戦で浦和市立高校に 1-9 で大敗したのは一生忘れない思い出。大学では、東京と青春？のきらびやかさに目がくらみ、真面目な部員ではなかったが、それを今でも後悔しているとともに、武田主将ほか皆さんに申し訳なかったと自責の念に駆られるので、多くの字数を割くのを控えたい。

少年チームのコーチを

その後、しばらくサッカーからは離れていたが、子供が生まれ小学校に入ろうかというときに、少年サッカーのコーチを始めることになって、またどっぷりサッカー漬けの生活が始まった。チームで数個のボールしかなく、それも、いびつであったり、雨に濡れると神風特攻隊の気持ちでヘディングをしていた自分の少年時代と違い、子供が全員ひとつずつ持ってリフティングを 100 回でも平気でこなすのを見て、時代の移ろいを感じながら、6 年間子供たちを指導した。横浜だけで 120 チーム程度ある少年サッカーの大会で優勝したとの報告を、単身赴任先のボストンで息子から聞いたのも懐かしい思い出である。その息子が、その

後、東大サッカー部に親子2代でお世話になったのも感慨深いものがあった。父親と違って息子は真面目な部員で、副主将も務めたようだ。

ファジアーノ岡山を応援

現在、岡山で単身生活を送っているが、岡山の地でクラブチームを立ち上げJリーグを目指している若い東大OBがいる。ファジアーノ岡山の運営会社の社長を務められている木村正明氏で、東大サッカー部員ではなかったらしいが、息子とは旧知のなかで、岡山に来てから何回かお会いした。ゴールドマン・サックス証券の役員の地位をなげうって、今サッカークラブの運営に情熱を傾けてスポンサー探しに奔走している。陰ながら彼の夢、Jリーグのファジアーノ岡山誕生という夢を応援している。

もう一つ、岡山で熱いのが女子バレーボールである。岡山シーガルズという、女子バレーのトップリーグでは唯一企業チームでない、クラブチームである。現在の仕事（岡山理科大学および付属中学校）と縁があって、同チームの河本監督とも親しくさせていただいているが、外国人選手を使わない、コンビ・バレーに対する哲学と情熱には感心している。付属中学校に女子バレーチームを作り、シーガルズ・ファミリーに直々に指導してもらっており、発足1年目、中学1年生だけのチームで岡山県2位の成績を残すに至った。今、岡山中でサッカーだけでなく、女子バレーにもはまっている。

70歳までは続けたい

昭和47年卒業 金丸 仁

GKのセービングにあこがれる

私がサッカーを始めたのは中学3年のときだったと思う。実は中学にサッカー部があったのかよく覚えていない。サッカー部はあったのかもしれないが、試合に出た覚えがないので、部員ではな

かったのかもしれない。しかし、若くして亡くなった、当時の親友と二人で日が暮れるまでボールを蹴っていたことはよく覚えている。

そのころ、すなわち昭和30年代は、サッカーのテレビ中継は年に1～2回ほどしかなかった。そのわずかなテレビ中継で、当時の全日本のゴールキーパーだった保坂司選手のセービングを見て、あんなことができたらすごいなと思った。鉄棒や、跳び箱など、空中で浮いている姿勢をとることが好きだったため、ゴールキーパーのセービングにあこがれたのだった。当時はキーパーというのは誰もあまりやりたくないポジションで、遊びでサッカーをやるときは「お前はキーパーでもやっている」という言葉に象徴される時代だったのである。しかしセービングで空中に浮くときは気持ちいいが、硬い地面に落ちるときは痛いのが困ったことだった。幸い、私の家の前に大工さんの作業場があり、かんなの削りくずがたくさん落ちていた。それを拾ってきて、近くの空き地に敷いて、その上に落ちるようにセービングの練習をしたものである。

高校時代、国体都予選決勝で敗れる

高校は東京教育大付属高校（現筑波大付属高校）に入学した。体操部があれば入ろうと思っていたが、幸か不幸か体操部が存在しなかったためサッカー部に入部した。走るのが嫌いだったこともあって、もちろんゴールキーパーを志望した。私が入部したときは3年生のキーパーが一人いるだけで、次がいなかった。キーパーを志願する変わり者は貴重な新人として迎えられた。また3年生は伝統的に夏が来る前にやめてしまうので、私は1年生からすぐにレギュラーになってしまったのである。

当然実力が伴っていなかった。チームのバックスに助けられて何とかキーパーを務めていたが、やはり悲劇が起こった。当時われわれの高校は東京都のベスト4に入っていたが優勝はなかなかできなかった。しかし私が1年生のとき、国体の東京都予選で準決勝まで勝ち進んだ。準決勝の相手

はいつも勝てない城北高校だったが、結果は引き分けて、抽選の結果われわれが決勝に進むことになった。当時はまだPK戦という制度はなく、コインの裏表で勝敗が決められていたのである。われわれは城北に勝ったのだからこれで優勝だ、全国大会出場だと大喜びし、決勝の早稲田学院戦に臨むことになった。前半1点を先制されたものの、1年生のセンターフォワード上妻が2点を入れ、前半を折り返した。大学でも一緒にプレーすることになった上妻は、3年間高校で同じクラスだった。後半になるとまた1点返され同点となったが、こちらもさらに1点を入れて、3対2のまま残り時間5分となった。しかしこの5分間に2点を立て続けに取られ、結局敗れてしまったのである。私は決勝点となった相手の4点目のボールがゴールに転がり込むのをただ見ていたこと、バックの小西さんが必死にクリアしようとゴール前でスライディングをしたことをよく覚えている。なぜボールに飛びつかなかったのか、すべてが自分の責任だと思い、3日間ほど放心状態になっていたことは今でも忘れられない。高校時代のもっとも大きな悲しみのひとつだった。

足を靴に合わせる

高校に入ってから新しいスパイクシューズを買った。足に合った靴を選ぶのは今では常識であるが、私の先輩たちは、足を靴に合わせるのだと後輩たちに教え込んでいた。当時のサッカー選手のほとんどが高校の近くにある安田という店にスパイクを買いに来ていた。

今の靴と違って、昔「ボッチ」といった靴底のスパイクは、皮を丸く切ったものを何枚か重ねて、靴底に釘を打ち付けて止めるというものだった。はいているうちに少しずつ革が減ってきて、同時に止めてある釘が靴の中に顔を出してくる。靴には数革という一枚の革の板を入れてはくのだが、これがないと足の裏に釘が当たってしまうのだった。

当時の靴は3千円程度だったがそれでも高校生には高いものだった。その後、1万円もするアディ

ダスのシューズが発売されると、この高価な靴がわれわれの垂涎の的となったが、私がこの靴を高校時代に手にすることはできなかった。

浅見監督の理論的トレーニング

当時の技術であるが、今の高校生のようにボール・コントロールがうまい選手は数えるほどしかおらず、バックなどはとにかく外へ蹴りだすことが大切で、ボールを持つと必ず怒られたものだった。バックスが味方を探してパスをつなげるなどという技が生まれようもなかったのである。それから見ると今の高校生の技術はまさに隔世の感がある。

私が東大のサッカー部に入ったのは昭和43年、教養学部2年のときだった。1年生のときには1年間高校の監督をしていた記憶がある。高校の練習は科学的なものとはいえず、いわゆる、スポ根というものだった。夏の合宿で汗が吹き出るのが渴いても、練習中には一切水を飲んではならなかった。今では良くないとされているうさぎ跳びなどは練習の定番であった。指導の勉強などしてないものがやっていたのだから高校生もかわいそうだった。

それに引きかえ、東大では、浅見監督が体育理論に基づいたトレーニングを行っており、高校のときのそれとは当然内容が異なっていた。私にはずいぶん新鮮に感じられた。

紛争中も練習を続ける

私が教養学部の2年生のとき、医学部の問題に端を発する東大紛争が起こり、全学ストライキのため、有名な安田講堂の攻防戦まで授業は1年間なかったが、サッカー部の練習は続けられていた。私は医学部に進学したが、その後、上妻（通称ゴリ）、杉浦（通称アヘ）と計3人の医学部生が同時に在籍することとなった。医学部生が3人いたのはこのときだけだと思う。しかもその後医学部の学生の入部は皆無である。

私の在籍した当時の東大サッカー部は、関東大学リーグの2部に所属しており、当時の大学の中心

では強いほうだった。昭和44年には秋のリーグ戦で優勝し、1部との入れ替え戦に臨むこととなった。上妻、黒沢、俵、の加入が優勝の原動力になったと思う。入れ替え戦では中央大学と対戦した。しかし前半途中で、相手バックスが、こちらのエースの上妻に汚いタックルを仕掛け、上妻が負傷退場してからは一方的な展開となり、結局大敗を喫してしまった。その後東大が関東の1部にあがるチャンスは訪れなかった。

医学部の鉄門サッカー部で優勝

私はといえば、ゴールキーパーとして時々試合に出してもらっていたが、3年生のときにフィールドプレイヤーに転向した。ゴールキーパーとしてやっていけなかったわけではないが、165cmと身長が低いために、ゴール前の高いボールに弱く、同僚の小原君にキーパーを任せることにしたのである。それまでドリブルなどの練習をあまりしていなかったのも、全員の練習が終わった後、ボールを立てて、スキーのようにそのボールの間をドリブルで縫ってゆく練習を繰り返し、みんなに追いつこうとした。

当然すぐにレギュラーにはなれなかったが、5年生のときなんとかレギュラーとなった。医学部は6年間あるため、他の学部学生より長くやれるのである。秋のリーグ戦の各大学メンバー表の中で、5年生と書いてあるのは私1人だった。全学で練習しながら、私は医学部の鉄門サッカー部にも所属しており、医学部の大切な試合には前述したほかの二人とともに出場していた。

私は昭和47年3月で全学のサッカー部は退き、その後医学部のサッカー部の主将を務めたが、授業が1年間なかった影響で、学年が変則的になっており、4月から医学部では5年生だった。この年、春のリーグ戦ではほぼ全敗をしたのだが、夏の東医体で念願の初優勝を果たした。東医体優勝がチームの目標であったため、それに照準を合わせた練習をやってきたつもりだった。この年から、引き分けのときにPK戦を行って決着をつけるという制度ができたが、われわれは練習の終わ

りに、必ずPKを1本だけ蹴るという練習を続けていた。これが見事功を奏し、常勝千葉大医学部との決勝戦を、PK戦の末勝利したのである。

合宿所に住みつく

今では撤去されてしまったが、農学部の地震研究所の横にサッカー部の合宿所があった。農学部のグラウンドなどを管理する管理人の一家が住んでいるおんぼろの家で、奥に20畳？（記憶は確かではない）ほどの広い部屋と10畳程度の部屋があって、毎週日曜日に全部で7試合行われる秋のリーグ戦の期間中、前日の土曜日に部員全員がそこに泊まって次の日の作戦などを練るのである。しかし、それ以外は部屋は空いており、私は医学部の学生になったときに、ここに布団などを持ち込んで住み始めた。家が横浜にあり、本郷まで1時間半もかかるため、ここは便利だったのである。しかも家賃も電気代なども無料だった。私が住んでいたのを見て、その後数人がここに同居するようになった。その共同生活はなかなか楽しい思い出である。

藤枝の病院で監督兼選手

大学を卒業して10年経って私は、サッカー王国静岡にある藤枝の市立病院に外科医として就職した。われわれの高校時代、憧れの的であった藤枝東高校がある藤枝である。しかし私が赴任したときは清水が静岡県のサッカーを席卷しており、清水東高校、清水商業などが県の1、2位を競っていた。

私の家のすぐ近くには芝生のすばらしい藤枝市民グラウンドがあり、高校サッカーの県予選の試合をやっていたが、静岡県で勝つことは全国を制覇するより難しいといわれるほど試合のレベルはとても高かった。われわれが大学でやっていたサッカーよりずっとうまいと感じたものである。家のすぐ近くですばらしい試合が見られることには感激したものである。

藤枝市立病院にもサッカー部があり、私よりうまい選手がたくさんいるが、私は長年チームの監

督兼選手をやって今日に至っている。

監督はあまりうまくないほうがよさそうである。毎月1回中外製薬という製薬会社の工場のグラウンドでサッカーの試合をやっているが、このグラウンドの芝生は国立競技場よりも質が良いと思われる。藤枝には現在、ほかにも前述した藤枝市民グラウンドのほかに、藤枝総合運動公園に2つのすばらしい芝生のグラウンドがあり、サッカーをする環境には恵まれている。また市役所にも一時JFLに所属したほどの強いチームがあり、全国自治体サッカー大会では、常に優勝候補筆頭である。私の病院は市立病院なので、そのうまいチームのOBが何人か病院チームでプレーしている。そのため病院のチームのレベルはかなり高い。

また、市議会のチームもあり、レベルはとても低い、全員が試合に参加しているほどである。

LB 50の藤枝遠征

このようにサッカーでは恵まれた環境にある藤枝にいることは幸せであるが、その幸せの少しでも味わってもらおうと思って、LB 50の藤枝遠征を2002年に企画し、それが毎年の恒例行事化している。当初、LB 50は病院チームと対戦したが、病院チームの年が若いこともあって、歯が立たず、その後、年が同じ程度の藤枝フットボールクラブとの交流試合となった。試合となればお互い勝ちたいので一生懸命となるが、藤枝のチームは楽にボールをつないでくる一方、われわれは苦しいパスしか出せない。東京と静岡のサッカーの歴史と質の違いがそのまま出ているように感じるのである。

しかし「そんなの関係ねー」とばかり、試合後の両チームでの宴会は年ごとに盛り上がりを見せている。昨年も大阪府知事選に惜敗した熊谷さんが、この席で気をはいておられた。サッカーを通じて新しい友人ができることはすばらしいことである。

ワールドカップを見るのもよいが、どんなに下手でも自分でやる楽しさには勝てないのだ。60歳まではサッカーを続けようと思っていたが、そ

の60歳を迎えた今、それを70歳に延長しようと思っている。

シニアサッカーで全国3連覇

昭和51年卒業 植村祐幸

51歳で全国大会初制覇

「ピッピーッ」主審のホイッスルがグラウンドとスタンドに長く響き渡った。

2004年8月29日午後2時、宮城県石巻市を舞台に3日間にわたって熱戦が繰り広げられてきた「第3回全国シニアサッカー大会(50歳以上)」で、我が「セレクション・トキオ・サッカークラブ」が、1対0で北海道代表の室蘭シニアクラブを破り初優勝した瞬間だ。

「やったぞー。優勝だ。日本一だぁ」我がチームのメンバーは、誰彼となく握手しては抱きついて祝福を交わしている。チームは初めての全国制覇の喜びと感激に包まれた。

小生は、ようやく目標に到達した喜びと充実感に浸りながら、むしろ緊張が解けてほっとした安堵感を感じていた。この大会の優勝を目標に新しくチームを立ち上げたのがちょうど1年前。このチームでよくここまできたものだと思う。寄せ集めのチームは、よくいえば個性派揃い、50歳を超えてサッカーしているのは世間では「変人」の部類かもしれない。ともかく一つのチームにまとめていくには、大変な苦労が必要だった。チーム立ち上げから今まで、いろいろな問題シーンが浮かんでくるが、ようやく全国優勝の結果で報われた思いだ。

51歳になった小生のサッカーキャリアは40年近くになるが、全国制覇は初めての経験だった。中学2年から始まったサッカー部キャリアは、高校・大学・社会人と続いたものの、全国大会レベルは縁のない世界だった。中学は東京のベスト32止まり、高校ではようやく東京のベスト16、大学はご存知の通り関東2部、社会人では東京都

社会人リーグ1部。これでは全国とは縁がなかったのも当たり前。

そんな自分が50歳を過ぎて、全国制覇のシニアチームの一員に名前を連ねたのが不思議に思えてくる。LB同期の池森君からの勧めもあり、記録のつもりでシニアの世界に足を踏み入れてからを振り返ってみることにした。

四十雀東京クラブ

小生がシニアサッカーと出会ったのは、40歳の時だった。30代後半は東京への転勤も重なり、参加できるチームが見つからず、めっきりサッカーの機会が減って、30代中心の某商社サッカーチームに混ぜてもらい、月一ゴルファーならぬ月一プレーヤーで楽しんでいた（当時30代後半になると20代の若者と一緒にプレーするには体力的に無理があり、プレーできる場が限られていた）。

そんな中、ある日の試合で相手チームに50歳手前と思いき年齢なのに、体の切れがやけによいプレーヤーが目についた。「大したものだなあ」と感心していたら、試合後に「植村さん」と声をかけられた。かつて東京社会人リーグで対戦したことのある学芸大OBの先輩だった。昔話に花を咲かせるうち、「実は40歳以上のサッカーの世界がある。とても盛んで多数の先輩方も楽しんでいる。君もよかったら一緒にやってみないか」とのお誘いを頂いた。サッカーの場が欲しかった小生はありがたいお話と早速参加してみることにした。こうして小生はシニアサッカーの世界に足を踏み入れたのだった。

入って驚いたのは、ほぼ毎週日曜日に試合があり、しかも40代から70代まで40～50人位のメンバーが常時集まってゲームをしていることだ。60代の会社リタイア年齢では、平日の試合も組まれているらしい。それぞれが自分の年齢と体力に応じて、楽しみながらも結構真剣勝負のサッカーをしているのがわかった。

そのクラブが「四十雀クラブ東京」であった。わが国のシニアサッカーの草分け的存在で、

1952年4月創立の我が国で最古の歴史と伝統を誇るシニアチームである（因みに1952年は小生の生まれた年）。

入会の最低条件は「40歳以上の品格卑しからぬサッカーマンであって、クラブ員の推薦を受けた者」とのことであったが、小生は無事（ようやく？）幹事会の承認を経て入会させてもらった。

会員数は200名を超える大所帯のクラブにもかかわらず、当時インターネットの環境が整っていない中で、試合のアレンジやグラウンドの手配、会員への連絡等、非常にしっかりとした組織運営が行われており、クラブの歴史と伝統を大いに感じさせられた。

さまざまな年代が入り混じり、毎週のように活発に対外試合をこなしている。40代は白、50代黄色、60代赤色、70代銀色とパンツの色で年代を区別し、年代別に試合を楽しんでいる。傘寿を迎える会員には、クラブからまばゆいばかりの金色パンツが長寿健康のお祝いを兼ねて贈呈される。さすがに80歳ではプレーは無理だが、70代の先輩たちは元気一杯にボールを追いかけている。

「サッカーのような激しいスポーツができるのは若い間だけ。40過ぎたら何か趣味を探さないといけない」などと考えていた小生は、そんな先輩諸兄の姿に自らの考えの甘さを気づかされ、一生楽しんでいこうとする姿に勇気づけられて、健康で体の許す限りずっとサッカーを続けていきたいと思ったものだ。また、50代、60代そして70代の先輩諸兄の真剣なプレーに、つい不甲斐ないプレーを年齢の所為にしている自分が恥ずかしくなったものだ。

1年弱の活動の後、転勤（三重県へ単身赴任）のため、4年ほどは顔を忘れられない程度に帰省時に参加するだけであったが、45歳になって東京転勤とともに四十雀クラブでのサッカーを本格的に再開した。毎週のように一緒にボールを蹴り、元気に楽しくボールを追いかけて、ときには熱くなり、試合の帰りにワイワイとサッカー談義できる仲間がいる幸せを大いに感じ、このような環境を

与えてくれた四十雀東京クラブには感謝で一杯だった。

マスターズへの挑戦

これまで、シニアのサッカーは全国規模のチャンピオンシップを争う大会は開催されておらず、東日本では「古河マスターズ」が最大の大会であった。1999年春、日本サッカー協会が翌2000年(平成12年)から40歳以上(0-40)を対象にしたマスターズ大会を開催すると発表した。生涯スポーツを標榜する日本サッカー協会がようやくシニアの全国大会開催に足を踏み出したのだ。本番前年の1999年秋に、本大会の試行を目的としたプレ全国大会が宮城県で開催されることに決まり、次いで関東から代表2チームが出場すること、関東ブロック予選大会が8月に開催されることが決定した。東京シニア連盟は関東ブロック予選に東京選抜チームを編成して参加することを決定し、幸い小生も選抜チーム選考に最後まで残ることができ一員に加えられた。

夏の暑い盛り、茨城県波崎町での関東ブロック予選に意気込んで臨んだ東京選抜チームであったが、千葉選抜チームとの代表決定戦で0-0のスコアからPK戦で敗れ、プレ全国大会への出場権をのがしてしまった。小生の1回目の全国大会挑戦は実現目前で夢と消えた。

予選終了後、小生含め選抜チームに入った4人が四十雀クラブ東京に戻り、翌年のマスターズ大会目指しての準備が始まった。全国の覇権を争う大会は、やはり大きな目標であり張り合いにもなる。毎週の試合や遠征にも熱が入っていく。ミーティングやメールで活発な意見交換が続く。試合帰りの行きつけの蕎麦屋での非公式ミーティングは、遠い昔の青春を思い起こさせる熱いひとときだった。目標に向かってチーム一丸となって挑戦し、一人一人が少しでもよいプレーを目指して努力していた。いい歳のオジサン達が熱く語り、氣勢をあげている姿は側から見れば異様であり滑稽だったかもしれないが、メンバーは真剣そのものだった。

翌2000年3月、第1回マスターズの予選が始まった。万全の準備をした我々は、予選リーグを順調に勝ち上がり、2次予選、準決勝を危なげなく勝ち進み、東京代表を決める決勝戦に駒を進める。

決勝の相手は、高麗(こうりょう)クラブ。東京朝鮮高校のOBを中心に在日北朝鮮・韓国籍のメンバーで構成するチームだ。小生が高校生のころ、東京朝鮮高校は公式戦に出場が許されなかったが、幻の日本一と称された無敵の強豪校だった。全国レベルの公式戦に出場することは、彼らにとって高校生のころからの無念を晴らすことを意味する。

読売ランドサッカー場での決勝戦は、技術・戦術に全国大会に懸ける気魄の差も加わり、一進一退の好ゲームを演じたものの、終わってみれば1対4の大敗であった。こうして全国大会への2回目の挑戦も結果を出せずに終わった。高麗クラブとは翌2001年の決勝でも再戦し、0対1の惜敗でまたもや涙をのんだ。そして2002年、2003年も決勝まで勝ち進んだが、いずれも高麗クラブの高い壁を越えられず、結局4年連続準優勝で、いつのまにか「シルバーコレクター」というあまり有難くないニックネームを頂戴したのだった。

50シニアへの挑戦① 東京シニア

すでに50歳になっていた小生は、2003年マスターズ東京予選決勝戦の試合後、50代の東京シニア選抜チームから誘いを受けた。第2回全国シニア大会への出場を一緒に目指さないかというのだ。高麗クラブが越えられない壁となって4年連続全国大会への道を閉ざされていた小生は、「50代なら全国大会への道が開けるかもしれない」との期待感からこの誘いに乗り、マスターズからシニアへ軸足を移すことにした。

数回の練習会を経て迎えた6月の関東予選大会は千葉市天台競技場で開催された。1回戦(対群馬代表)、代表決定戦(対埼玉代表)にMFとして出場し、代表決定戦では会心のゴールを決めて東京シニアの全国大会初出場に一役買ったのだ。こ

のときの東京シニアのメンバーには全国大会経験者は皆無で、全員が全国初出場に新鮮な喜びを感じ、心躍らせたのだった。

9月初旬で未だ真夏のような暑さの中、淡路島で開催された第2回全国シニア大会は、各地域予選を勝ち抜いた12チームが3チームずつ4つのブロックに分かれてリーグ戦を行い、各ブロック1位が準決勝に勝ち上がるシステムで実施された。初日と2日目に予選リーグが行われ、3日目に準決勝と決勝だ。東京シニアは、予選リーグで北海道代表（釧路シニア）、九州代表（鹿児島シニア）を退け順調に準決勝に勝ち上がったが、関西代表の滋賀県チームと押し気味の接戦の末0-1で敗れ3位となった。

初めての全国大会で上々の結果と考えるのが妥当かもしれないが、勝てる内容だっただけに無念と悔しさの残る試合だった。

午後から我々が戦うはずだった決勝戦を観戦した。開催地の兵庫県選抜チームの力は図抜けていて、スコアは1-0だったものの、終始危なげない横綱相撲で滋賀県を退け、当たり前のように優勝を飾った。我々東京シニアが勝ちあがったとしても到底勝ち目がないと思うほど、兵庫県選抜は次元の違うサッカーをしていた。やはり全国レベルでは凄いチームがあるものだと認識を新たにする一方、「来年も全国大会に来て、決勝の舞台に立ち、兵庫県選抜のようなチームを負かして優勝したい」そんな思いがふつふつと湧いてきた。

「3位に浮かれてなんかいられないぞ、これからこのチームを超えるチームを作っていくぞ」決勝戦観戦直後から気持ちは翌年に向けて切り替わったのだった。

50 シニアへの挑戦② 新チーム立ち上げ

帰京後、早速全国大会での『思い』を共有したチームメイト数名で反省会をし、「全国大会の決勝戦で勝てるチームを作ろう」「どうせ作るなら3連覇できるチームにしよう」と、不遜とも思える目標を掲げることにした。

まず東京シニアの戦力を冷静に評価した結果、

現状で本当に戦えるメンバーは約3分の1で、新たなチーム作りのためには、大半をそれなりの技術・体力を持ったメンバーで揃えることが必要との結論となった。東京シニアで共に戦った大方のメンバーには申し訳なかったが、これまでの延長線上では全国制覇を目指すには中途半端なチーム作りしか出来ないと考えたメンバーは、小生を含め7名で東京シニアを抜けて、新たなチームを立ち上げることを決断した。

7名がめいめい新メンバーをスカウトしてきた結果、元全日本代表のO氏、H氏、M氏、日本リーグ経験者のK氏、等々有名選手に、無名だが走力・技術がしっかりしたメンバーが揃い、2003年10月末に20名強の新チームを立ち上げるに至った。

新チーム名はスペイン語で「セレクション・トキオ・サッカークラブ」と命名した。このときLB同期の池森君に声をかけ、一緒に全国を目指してもらうこととなった。

新チームのメンバーは、50歳過ぎまでサッカーをしているだけに全員がサッカー好きではあるものの、よく言えば個性が強い（つまり我が強い唯我独尊タイプ）メンバーも多く、まとめていくのがなかなか大変だった。しかし、「とにかく全国制覇」で目標を共有化した新チームは船出をしたのだった。

明けて2004年2月東京予選の開始とともに、いよいよ全国制覇を目指した戦いが始まった。

予選リーグから無失点を通して決勝に勝ち上がり、3月末の西が丘サッカー場での大田区シニアとの決勝戦に進んだ我々は、3-0で快勝して東京予選を無失点で通過した。そして4月草津温泉サッカー場（J2ザスパ草津の本拠地）で行われた関東予選では、栃木県代表、群馬県代表を相手にやはり無失点で完勝し、全国大会の関東代表となった。こうして、ついにチーム立ち上げ時の目標である「全国制覇」のスタートラインに立つことができた。

第3回全国大会は本文冒頭のとおり、8月27日～29日の3日間、宮城県石巻市を舞台に開催された。予選リーグでは鹿児島シニアを2-0、

弘前シニアを3-1で下して準決勝に進み、京都府選抜チームとの一戦に臨んだ。相手にも元全日本や日本リーグ経験者などが入っており、チーム力は互角で一進一退の好ゲームであったが、1-0の辛勝で初の決勝進出を果たした。

決勝は既にかいたとおり1-0の辛勝で待望の初優勝を飾ったのであるが、客観的にみれば、東京予選から全国優勝までの12試合をわずかに失点1で通した完璧な初優勝だった。チーム立ち上げから関わった全国挑戦の第1回目を歓喜の優勝で終わることが出来たこと、LB同期の池森君と学生時代には味わったことのない優勝の味を分け合うことができたことが、小生としては本当に嬉しかった。

翌年、早慶OB連中が新チームを立ち上げるようになって脱退し、翌々年も数人のメンバーが入れ替わった。そういう中で2005年、静岡県藤枝市の第4回大会、2006年の岡山県美作市の第5回大会にも東京予選・関東予選を勝ち抜いて出場して連続優勝し、とうとう壮大な目標と思っていた「全国大会3連覇」を実現したのだった。

今、これから

2年先に始まった40代のマスターズ大会では2連覇したチームすら皆無で、チーム力の維持が難しい50代のシニアでは3連覇するチームは当分現れないと思う。そういう意味で50歳からの全国制覇挑戦は3連覇という『シニアの金字塔』をうち立てたのではないと思う。

一区切りついた感もあるが、しばらくは50代の全国シニアに引き続き挑戦していきたい。やはり、楽しみながらも緊張感ある試合は、いくつになっても刺激的で挑戦に値するものだと感じている。60歳になったら60代の全国チャンピオンを目指していこう。おかげさまでシニアのサッカー仲間もたくさん増えた。無理せずけがせず、素晴らしい仲間達といつまでも真剣試合を楽しんでいきたいものだ。

“SOI 前期”にお手伝い

昭和35年卒業 福田泰二

旧制高校OBのインターハイ

「SOI」はサッカーOBインターハイの略称であり、本来のインターハイは大正11年度から昭和23年度まで戦時中の中断を挟んで23回にわたって催された旧制高校のサッカー日本一を決める大会であったことなどは周知のことでしょう。学制改革で旧制高校が終わりを告げ、インターハイがなくなってから4半世紀あまりを経てSOIが誕生したのですが、それには前史がありました。

たとえば四高OB(極星会)と六高OB(六蹴会)が毎年のように対抗戦を続けていたほか、五高(龍蹴会)、二高(蜂章クラブ)、北大予科などがそれぞれに活動していたようです。私がグラウンドやコンパ会場の設営と審判とで少しお手伝いをしたゲームには、1974年(昭和49年)秋の静岡(葵会)、東高(MTR)、武蔵(YKT)による巴戦もありました。

それらの個別の活力をまとめて全国的な催しにしたいと、サッカーをこよなく愛する先輩たちが考えたのは当然でもありましょう。1974年12月に、五高の小林さん(昭和14年東大卒業)の呼びかけで9校17人による相談が行われ、議事がどんどん進行したのは呼びかけ人の予想外だったようです。

学校別の対抗試合を3月に開催、1日だけで全試合を終了、参加資格は部のOBに限らないが、旧制高校在籍経験者、交代は自由、大会の1ヵ月ほど前に前夜祭と称する合同懇親会を催す、などの骨子が決まり、さらに参加可能と思われる学校を誘って、年明けに実行委員会を開いて詳細を協議することになりました。

第2回となった1月の実行委員会には11校、人数は若すぎて出場資格のない私も含めれば22名が集まり、サッカーOBインターハイという名

称はそこで決定したのです。

無資格の私がなぜ同席できたのかというと、二つの幸運に恵まれたのです。一つは、学制改革のときに、ほとんどの高校が新制大学またはその一部になったのに対して、私の出身校の武蔵は旧制7年制高校のあとを継ぐ中高一貫校なので旧制の先輩たちと同じ同窓会、同じOB会のメンバーであること、もう一つは、2級ながら審判員の資格をもっていたことです。

仲間をかき集めれば、武蔵が出る試合以外は審判員を手配することができると考え、そのことが武蔵の先輩を通じて12月の会議で披露されて、以後は実行委員会や幹事会の末席を汚すことになりました。

東西対抗や海外遠征も

記念すべき第1回大会は3月16日に開かれ、参加校は第2回実行委員会からさらに増えて15となりました。天気にも恵まれ大きなけがもなく、日程を終えての帰路で、ここまでの過程を思い返していました。

私より少なくとも6年は年上で、会社などでは一切の雑用をとくに卒業なさったに違いない先輩方が、あらゆる雑用をいとわずに一致協力なさっていたのです。五高の高橋さんと静岡の小宮さんは、いつも小林さんの両腕でしたし、東高の瀬藤さん、松本（女鳥羽クラブ）の外岡さん、等々とても書ききれないほど多くの方がSOIの基礎固めをなさったのです。個性の強い人たちがよくまとまったのは、サッカーという競技のもつ一種の魔力のなせる業であったかも知れません。

当初は5年も続くかと危ぶまれたのが、東京の春季大会に加えて京都で秋季大会を開いたり、東西対抗や3地域対抗、たびたびの海外遠征も行うなど、驚くばかりのエネルギーを見せていただくうちに、5周年、10周年と節目のたびに盛大な祝賀会が開かれました。そして1989年4月、15周年のときには実行委員会から私にまで「感謝状」をくださって感激しました。大会のたびに笛を吹いたり、審判員を手配してきたことが報われたの

です。そのとき壇上で握手をしてくださった小林さんがその夏に逝去され、秋に私が追悼試合の笛を吹くことになるとは、全く予想もしませんでした。何年も前からご病氣と闘っていらっしゃることを存じ上げてはいましたが……。

SOI前期の終了

そのほかにも折角お近づきになれた諸先輩がぼつりぼつりと他界され、あるいは引退され、第3回には29に達した参加校数も少しずつ減ったり、単独ではメンバーが足りずに連合軍を組んだりしているうちに、第20回（1994年）には連合6チームを含めて21チームだけの大会となってしまいました。後輩が補給されず永遠に続くはずのない団体が第20回のはどうするかを考える「After 20 委員会」で北大出の内田さんを中心に協議された結果、94年9月に結論が出て、その年の秋季大会をもって“SOI前期”を終了することになりました。具体的には、春秋の大会は従来どおり続けるが、連合チームを主体として単独校の参加も認める、ということでした。従来のSOIの『心』を継承すると書かれたのは、それが少々あやしくなっていたからと私には思えます。“前期”の間はほぼ受け継がれ、ときに発展もしてきた草創期の精神が“後期”にはどれだけ継承されるかと、失礼ながら疑問を感じたものでした。

一方、富山の小野津さんの献身や多くの方の努力で、かねてから合同練習会が年に何回も開催されており、これには参加資格の制約もないので旧制高校在籍経験のない人も交じっていましたが、近年は交じっているどころではなく、逆の比率になっているようです。

逝った人は帰らず、過ぎた時は戻らないのは当然とはいえ、残念なことです。私にとって“SOI前期”は、旧制高校に仮入学を許されたような夢の一瞬でした。

私とサッカー部

合宿で部員に合唱を指導

昭和 31 年卒業 楠田喜宏

岡野さんの示唆で

1953 年（昭和 28 年）、岡野俊一郎さんが全日本学生選抜のメンバーとして、西ドイツ・ドルトムントで行われた国際大学スポーツ週間（のちのユニバーシアード）に参加された。帰国されてからの土産話の中で「試合後の交歓会で、外国のチームは合唱をやってくれるのに、日本チームは炭坑節しか歌えなくて大恥をかいだ。これからのサッカー・チームは簡単なコーラスの一つくらい歌えないといけない」とお話しされた。「東大サッカー部も、合宿で息抜きにコーラスをやってみたらどうだろう。楠田は楽譜が読めるみたいだからコーラスの指導をしてくれ」という羽目になってしまった。

当時は歌声運動の全盛期で、教養学部のある駒場キャンパスでは昼休みに、民青（民主青年同盟）の連中が簡単な 2 部合唱程度の青空歌声コーラスを指導していた。私は高校のころ、コーラスをほんの少しかじったことがある程度のシロートであるが、合唱は大好きなのでこれに参加して結構楽しんでいたのである。

そこでもらっていた歌声の楽譜の中から「静かな湖畔の森のかげから」「クロボの赤ん坊」などの輪唱、「われらに自由を」「しゃれこうべと大砲」の同声 2 部合唱などあまり思想性のないものを選んで、おぼつかない合唱指導を試みた。まったくのシロート同士のわれわれだったが、意外と評判は良かったようである。当時の合宿の思い出

を語るとき、コーラスの思い出が語られることがある。

日本代表も合唱を練習

私は社会人となった後、職場合唱団、一般合唱団のメンバーとなって男声コーラスに熱中することになる。全日本合唱コンクールで全国 4 位に入賞した職場の合唱団の練習指揮を担当したり、男声合唱団 Around Singers の団長として畑中良輔先生、（故）北村協一先生の指揮の下、2 度のカーネギーホール公演を行うまでのめりこんでいくのだが、このルーツはサッカー部の合宿に端緒があるように思う。

「これからのサッカー・チームは簡単なコーラスの一つくらい歌えないといけない」というのは、合唱人として我が意を得たりの感がする。岡野さんの話によると、その後、日本代表チームでも合唱の練習をするようになったことがあるそうだ。

最近はどうなのだろう。サッカーの応援歌には Anderlecht の We are the champions や Manchester United の You never walk alone などの名歌がある。サッカーのサポーターとしても、だれもが歌える合唱の簡単なバージョンがあったらよいのだかと、いつも思うのだが……。

「閑話御免」

昭和 36 年卒業 松村 保

（囃子）さあさ、そこのお若けえの、こん学園所へ入りなば、男を磨き身を立てる、それにゃ一番蹴鞠組、仲間衆にもめぐまれる〜

～ ～ ～

(昔の若衆) おやご隠居さん久しぶり、つられて杵とりよろばい出、足腰大事にしてくんさい。

(隠居) おや梅さんに一修どん、なんのチョイトの武者ぶるい、ついでに話も聞かそうかい。

(二人) 年寄り孝行も今のうち、思い出話の二つ三つ、ご苦労きいてあげましょう。

(隠居) おう、そこよ。時は昭和の丁度中、関八州の学塾の、高みで競った十の組、残念そこから外れたが、なんとしてでも戻り入りやらねばならぬの一念で、馬場の泥砂駆け回る。それにかかって先輩衆、ムチ持ちさながら気合いれ～鬼の阿佐美にこわい軍鶏、羊羹とても甘くねえ、“脛ケッポジレ”と水戸ざむれえの大埜兄イ～いろいろ教えてくんすったが、どうにもおいらの筋悪で、あと一步のところで足踏みよ。かさねてそれにくち惜しい、獅子奮迅の組頭、五十嵐兄いの逝った様。おめえ、もちっと頑張れと、あの一言が腹に沁む。

(梅) そのあとわしら組に入り、須賀の親分さきにたち、景気づけなどしっかりと。

(隠居) そうなあんたら格別に、大親分には世話になり、ご馳走、遊びも人一倍、しっかり恩返しなどしてるかえ。

(一修) そりゃもう仲間うち揃い、芝生歩きの球ころがし、しっかり楽しくお供して。ご隠居さんも時々は、顔出し忘れちゃいませんか。

(隠居) あいよありがとその事さ、五十嵐兄いと相対の、京組頭の若井さん、何かのご縁で仲間入り。京へは定め技比べ、暑いばかりのそのあとで、天竜寺さんのご縁側、蟬の声きき長昼寝、これ一番の思い出よ。

(二人) わしらもあちこち競い合い、沢山あったそのなかで、何か残るはべつのこと。

(隠居) そうさな、若手同士で三田組と、競って激しく頭打ち、何も覚えず事終えて、仲間一言云うことにゃ“おめえの一番よい出来よ”。中央組との勝負では相手の素早い走り止め、ここぞとばかりケッポジル。“次は退場”言われても、仕掛ける方は怪我しねえ。

(一修) 仲間内でも稽古場で、やられたやつは

おりますぜ。よくまあ今まで闇の夜、討たれずずんで来やしたね。

(隠居) うんにゃ、稽古は血を流し、他流試合は軽く汗、てな言うことがあったげな。それでもお互い辛いのは、富士の麓の夏鍛錬、よくも倒れず何刻も、水を飲まずに泥まみれ。

(梅) あそこは夏の遊び場で、娘っ子の往き来が目の前に。汗で汚れの稽古着じゃ、どうにもならねえ男伊達。

(隠居) あまりの汚さ目により、そんな学問所の若衆なら、洗濯やってあげましょう、聞いたが後の祭りでな、握りつぶした奴は誰。

(梅) 今じゃ人気の野球組、娘っ子の世話役おりますぜ。

(隠居) ありゃいけねえ腑抜けども、世話されてれば気が散って稽古に身がへえるかい。

ましてや何か行きがかり、嫁にでもして弱いとこ、しっかり握られ万歳よ。

(隠居) 夏鍛錬をカッコよく、締めたい思いは皆同じ。大池周る早駆けも、せめて賑わう旭宿、そろいの半被足並あわせ、掛け声エッホッと響かせば、モテただろうに今さらと。

(二人) しかしそれでも蹴鞠衆、気がいい男の集まりで、はしこい女にゃ無警戒。先々世間の風の中、でえじょぶですかと言う奴も。

(隠居) いやさ、そんならおない時、汗泥まみれた仲間衆、しっかりいいとこ、聞かせよう。

○山本の修兄イ～匠に優れ蹴鞠好き、高じて再度の学問所。以前競った十組で、鍛えた技の切れのよさ、その背をわしら追いかける。綺麗な奥方手作りの、菓子を美味しく頂戴し、無骨な手つきで野郎ども、赤ん坊あやしも稽古の間。～(このあと四人は兄弟分)～

○野澤の量一郎～細身ながらの頑張り組頭役ピッタリよ。工場じゃ何でも人間様の、代役こなすカラクリ仕掛、その発明で世間中、名前を知られた偉様よ。

○高場の眞平～元気印の一番。ゴンとか云うのを聞くけれど、これこそ元祖ゴン様よ。新型そろばんを操って、紙すき仲間の知恵の役。音曲達

者で衆あつめ、近所後輩南蛮の、辛掛汁飯ふるまうて。惜しいことにこのめえの、丁亥の古希までの、寿命となって天国へ。冥福祈ってくんなさい。

○本林の徹～涼しい顔して頭切れ、足腰粘りは人三倍。地力・博識相まって、約束仕切りの弁じ事、日本一の役つとめ。

○足立の格一郎～何と言っても人格者、面倒みるのでみな頼る。あん芝浦の学問所、この仁、居なくちゃ始まらねえ。教育、経営すべて背負い、身をすりへらす誠実さ。弟子が慕うは大道理。

(二人) 聞くほになるほどコックリと。で、そういうご隠居は。

(隠居) なに、言うほどのこともなく、蹴鞠のなかでも山車走り、そのまま幕府の工事方、橋架けるにゃ水神様、洞を掘るにゃ山ノ神、下げるが頭の使い道。出入り、災害運もよくお役ご免の今日よ、蹴鞠、球打ち楽しんで。

～ ～ ～

(皆の衆) さあさ、そこのお若えの、これだけ聞けば納得の、文武両道蹴鞠組、へえって気張ってやんなせえ。(終)

編集長どの

なに間違えたかこの阿呆は、こげなごたくの並べ書き、読めれば幸いどこぞ隅、置いてやっておくんなさい。(阿呆の代人)



昭和36年卒業組、左より松村、高場、野澤、山本、本林(野澤はもう1年プレー続行)

東大のサッカーで鍛えられた

昭和40年卒業 新井俊一

サッカーのおかげで丈夫に

今年で67歳を迎え、70歳に近づいている。

仕事の巡りあわせで、開発途上国を中心に70カ国近い国を走り回り、結構危ない目にも合いながら、命も失わず、健康面でも致命的な打撃を被らずに今日に至っている。

下手の横好きでサッカーも60歳近くまで続け、イギリスに勤務していたときはサッカー経験者を集めてサッカークラブを立ち上げ、イギリス人のチーム等との親善にも努めてきたりしている。

20年かかりつけのお医者さんはいつもはらはらしながら見守ってくれていたが、60歳に近づいた頃に、転ばぬ先の杖ということでついに過激な運動を控えるようにというドクターストップがかかってしまった。

幼い頃は必ずしも頑健ではなかったのが、かなり無理がきく身体になったのは、ひとえに大学時代にサッカーで鍛えられたおかげであると思っている。

高校時代に妙な弾みでサッカー部をつくる羽目になり、教えてくれる人もいないままに見よう見まねでやっていたながらこのままではだめだと強く感じていた。その結果昭和36年に大学に入ったときは素人と言ってよい状態でありながら、向こう見ずにサッカー部に入部した。

梅村主将が新人特訓

しかし、浪人したあとの練習はただきついで、一向に上達しないまま1年が経ってしまった。1年生の冬に新キャプテンになった梅村さん(昭和38年卒業)が我々下手糞な部員に指導をしてくださることになり、個別に2、3人ずつ集まって農学部にあった合宿所に泊まり込んで練習することになった

梅村さんから、「お前は何を習得したいか目的

を決めて合宿所に入れ」と言われて、私はインステップキックを蹴ることができることを目標にして指導を受けることにした。

最初は、専ら地球ばかり蹴る羽目になり、冬の硬い農学部グラウンドに勝てるはずもなく、腫れ上がった足の爪が10本とも飛んでしまった。当時かかりつけであった医者が軍医上がりの元気な人であり、「なんのこれしき。続けなさい」と言う励ましをうけて練習を続け、何とか強く大きく蹴ることができるようになったときは天にも昇る心地がした。

私達下手糞な1年生に対してこのようなミニ合宿をしてくださった梅村さん達の熱意と労力に対しては感謝しても、し足りない思いがしている。

梅村さんたちの指導は当時クラマー氏がドイツから持ち込んだ合理的なものであり、早速母校にも習得した技術と練習方法を持ち込んで後輩の指導につとめたことはいうまでもないことである。

検見川でスパルタ合宿

その翌年の練習は「ともかく走れ」という方針で連日の走りこみが続き、駒場のキャンパスに行くよりは毎日家と御殿下グラウンドを往復する毎日で、家にいるときは飯を食って寝るばかりでちっとも勉強せず、親の大顰蹙ひんしゆくを買った。

検見川で行われた夏合宿は、確か9日間で、昼のもっとも暑い時間から練習を始めて夕方までというスパルタ式のものであった。無我夢中でついていったが、練習の途中の水と氷の補給の時間が待ち遠しい毎日であった。不思議なものでもう限界ではないかと思っけていても身体は何とかついていけるものであることをこのとき知った。

ともかく、現役時代の練習はいつも苦しかったというのが実感であった。しかし、我々の年代のキャプテンであった石光氏がこんな話をしていた。

石光氏たちが検見川で合宿をしていて、必死になってボールを追いかけていたところに、当時の自民党の実力者であった川島正次郎氏が視察に訪れた。彼は練習を見て「みんな楽しそうだね」と

言ったそうである。

練習している当人たちにとっては思いがけない言葉であったようであったが、思い起こせば私にとっても厳しかった練習の日々が最も楽しい時代であったことを今更ながら思いおこしている。

伊豆横断徒歩レースに挑戦

昭和42年卒業 小柳 理

3人1組のサッカー部代表

昭和39年当時、サッカー部の年間活動スケジュールは、前半を7月はじめの京大戦で終わり、夏休みに入るものだった。忘れもしない2年生の夏には、鳥原さん、嶋田さん、私にはもう一つのおまけがついていた。運動会主催の伊豆半島横断徒歩レースなるものがあり、サッカー部からの参加を命じられたのだ。

3人で1チームを組んで一隊となり、伊豆半島西側の戸田寮から東側の宇佐美寮まで、各運動部から足に自信があるメンバーで組んだチームが参加して半島横断の速さを競うのである。距離はマラソンと同じの42.195キロということだった。そして、我がサッカー部は、このレースが始まった梅村先輩の学年以来、優勝を続けているということだった。

7月5日の京大戦（0-0引き分け）、続く6～9日の七帝戦（東大優勝）の翌日に、関西でゆっくりする仲間たちと別れて帰京した。

翌11日の朝、東京を発ち夕方に戸田寮に集合した。鳥原さんの発案で沼津からは連絡船で戸田港に行くことにした。沼津のデパートで昼食用のコッペパンとおかずのコロッケ、ウインナソーセージなどを買い込み、船の甲板上で潮風にふかれながらムシャムシャ食べた。

犬に吼えられて疾走

レース当日は朝まだ薄暗いうちに起床して食事を済ませ、午前4時に戸田寮前の砂浜をスタート

した。参加チーム数の記憶は確かでないが20チームぐらいはいたようだ。服装は短パン、運動靴、ゼッケンを付けたポロシャツ、衣類やレモンなどを入れた荷物を背負い、大会事務局から支給された麦わら帽をかぶるというものだった。「徒歩レースとはいえ優勝を狙うならば歩いてはいけないよ」という先輩の助言に従い、スタートからランニングである。3人が先頭をきってスタスタと村の道路を走って行くと、いきなり家かげから腰の高さほどもある犬が飛び出してほえながら追いかけてくる。仰天し、一気にスピードが上がった。これが功を奏したか、先頭をキープした。

その後のレース前半の途中経過は目をみはるものだった。スタートして3kmで達磨山山道に入る時点で2位以下を大きく引き離し独走態勢、戸田峠（海拔800m）を越え、雲海上の尾根道を走り中間点（25km）の修善寺保健所に到着（2時間31分5秒）。中間点では過去最高記録を約20分更新。ここで20分の強制休憩。トマト、りんご、牛乳、茶、塩の支給があり、6時51分に再スタートした。この時にはすでに強い夏の陽射しが照りつけていた。

熱射病で断念しかかったが…

休憩後はまた登りで、亀石峠を越えて宇佐美に向かって下りになる。ところが峠の登りで平地では抜群のパワーを発揮する嶋田さんの調子がよろしくない。熱射病による脱水症状なのだろうか、峠を越えたあたりで、とうとうこれ以上走り続けるのは無理だろうという状態にまでなってしまった。先頭を走っていたがレースはもうやめよう、ということにして、道路脇の乾いている草地に這い上がり休むことにした。3人ともグッタリと仰向けに寝転がり青空を眺めていた。15分ぐらいそうしていたように思う。峠のそよ風が若さのなすせいか、水も飲まずに横になっていたけなの嶋田さんがシャキッとしてきた。後続のチームはまだ目の前を通り過ぎていない。そこでまたレースに戻ろうということになった。

かんかん照りの熱で軟らかい感じのアスファル

ト道路を走って下って行くと、前方から来たトラックが止まり、運ちゃんが身を乗り出して「どこまでいくの?」、「戸田から宇佐美まで! そりゃあ大変だね。これまで誰ともすれ違わなかったからトップだよ。これ、あげるよ」とサイダーをくれた。残りの道のりをただひたすら走り切り、何とか宇佐美寮のゴールにたどり着いた。タイムは休憩を含み5時間42分だった。

サッカー部連続優勝を守る

到着後は、記念写真の後ただちに、優勝者ご到着という感じで医師と看護婦さんたちが控えている畳部屋に案内されて健康チェックを受けた。幸いにも3人とも体調に異常はないということだった。ただ、鳥原さんと嶋田さんの足には、土踏まらずから指の付け根まで、大きなマメの水ぶくれが出来ていた。さっそく、応急手当をしてもらった。

若い看護婦さんのヒザの上に足を乗せて、しっかり抑えてもらい丁寧な処置を受けていた。鳥原さんによると、戸田から達磨山越えの山道が石ころ道だったためとのことだった。自分の足はといえば、せいぜい普段より赤くなった程度で、小指の先ほどのマメも出来ていなかった。私は縁側で庭を眺めながら、もっと普通の足ならば良かったのと思っていた。

賞品は、金メダルと副賞のビール1ダースだった。さっそく、宇佐美寮下の海岸で冷えたビールをラッパ飲みした。この日は寮に宿泊し、翌日に京大戦、七帝戦、徒歩レースで疲労がたまった体を引きずって東京に帰った。

こんなふうにして、とにかくその年までのサッカー部連続優勝の流れを切らずにすんだという思い出です。なお、この文を書くに当たり鳥原さん、嶋田さんから思い出をメールで頂き、特に鳥原さんからは日付、レースの詳細な記録を教えてください、メリハリのあるものになったと感謝しております。

ゴールキーパーの楽しさ

昭和44年卒業 永峰富一

キーパーをはじめて命じられて嫌だなと思いましたが、サッカー部に入ったのだからやってみようと思えました。

面白くなったのは、全体が見渡せることが分かったときからでした。声を出してバックと繋がる楽しさはこの位置しかありません。しかし、なにせ素人から始めたので練習しかない。家に帰って蒲団を敷いてセービングの練習をしたので家の者はどたんばたんとはびっくりしていました。シュートをはじいた時の快感は最高ですから、多くの人がキーパーを目指して下さい。

広島の名キーパーであった坂井さんには足を使って動くことをずいぶん教わりました。まず第一歩を横に動けということです。後は勘と偶然しかありません。前にでろともいわれましたが難しいことでした。ハイボールに対処する練習をもっとバスケットのようなことを入れてやっておけばいいと思います。

最後のリーグ戦で農業大学に敗れ優勝を逃した一戦の最初の失点も、右手で弾いたのですが、あとのフォローが遅れ、ボールはゴールにプッシュされ、あの結果になりました。キーパーがバック全員と連携を指示しておけば助かったかなと今思い出しますが、全て後悔先にたたず。今の監督藪内君との思い出シーンです。全員が優勝を目前にして浮き足立っていた一戦だったのでしょう。

下賀茂寮の思い出

昭和44年卒業 鍋島 厚

夏休み中の寮委員

サッカー部は東大運動会に所属しているわけですが、夏休み中(検見川の夏合宿の前の時期であっ

たと思います)に運動会の運営する山中湖、戸田、宇佐美、下賀茂の寮に寮委員として手伝いに行くのが恒例になっていました。

当初は、山中湖の寮に手伝いに行っていたのですが、確か3年のときに伊豆の下賀茂に新しく寮が出来るということで、この年から下賀茂に行くようになりました。サッカー部の同期の杉山健一君が、運動会との連絡などの仕事をしていたところ、いつのまにか運動会専属のような形になっていましたので、おそらく彼から誘われたのではないかと思います。

山中湖でも下賀茂でもそうでしたが、だいたい夜になると寮委員を中心にビールで宴会というパターンでした。一番驚いたのは、山中湖で近くの千葉大医学部の寮に行ったときです。どうも、毎年合同のコンパをやっていたようですが、よくいう一気飲みでしょうか、そのときの皆の飲みっぷりにはびっくりしました。翌日、誰かが脱水状態になって、相手が医学部なので都合がよく、点滴だか何かの処置をして貰った記憶があります。

下賀茂では、開寮当初に、弓ヶ浜で水死者が出るといふ悲しい出来事がありました。大学に入学し、これからという時期に亡くなってしまうということは、ご家族の悲しみを思うと今でも辛い記憶です。

40年の記念式典

下賀茂寮は、その後も皆に愛される寮として40年を迎え、昨年10月に山上会議所にて40周年記念式典が開かれました。私も久しぶりに皆さんの顔を見たいと参加しましたが、初代管理人の漆田さんのお嬢さんが、お子さんを連れて来られていました。40年振りに会ったわけですが、当時の小学生のころの面影が残っていて、往時のことを懐かしく思い出しました。

その会話の中で、「鍋島さんに命を助けられました」といわれて、何のことかなと思ったのですが、夜中に急にお腹が痛くなってどうしようもなく、私が車で救急病院まで連れて行ったら、急性盲腸炎で直ぐ手術を受けたということです。自分の

頭のなかでは記憶が薄れていて、そんなこともあったかなという感じでしたが、いずれにせよ漆田さんのお嬢さんや杉山健一君をはじめ懐かしい顔ぶれと楽しい時間を過ごしました。

サッカー部員としての学生生活の思い出です。

山中湖寮の甘酸っぱい思い出

昭和 45 年卒業 山田知良

大学1年の夏のことだと思っていたのだが、初めての自動車免許証取得の時期を調べてみると、昭和42年7月とあるので2年の夏だったのだろう。サッカー部からの寮委員として任命されて夏休みの10日か2週間ほどを山中湖寮で過ごした思い出がある。

まだ免許取立てのときで、本格的な運転などしたことがなかったが、先輩が当時発売されて間もなかったカローラに乗って山中湖寮にきた。乗っていいということで運転させてもらったとき、方向転換のため寮の庭でバックで左に回ったところ、右バンパーを立てているドラム缶に軽くぶつけてしまった。これで初めてバックで回るときは外輪差があるということを、身をもって知ることとなった。

朝のラジオ体操の指導で宿泊者皆の前で演技をしたこと、馬場で初めて乗馬させてもらい並足で走ったこと、湖に出て2人乗りの小さいディンギーというヨットに乗って湖上をセーリングしたことなど、いろいろと楽しい思い出があったが、特に忘れ得ない思い出としては混血の美少女にめぐり会ったことだろう。

彼女は竜岡門そばにあった看護学校の生徒で寮に来ていたのであった。どのようにして彼女と話せるようになったのかはほとんど覚えていないが、寮の食事を作るおばさんが手助けしてくれたような気がする。秋になり、東京に戻ってから何回か彼女とデートしたが、秋の深まりとともにその付き合いは悲しい終わりを迎えたのであった。

このような青春の甘酸っぱい思い出を持てたのも、サッカー部に入ったおかげと思っている。

リーグ優勝は大きな勲章

昭和 46 年卒業 鹿島文行

日比谷、東大、開銀あわせて15年ほどサッカーに打ち込み、その後も、折に触れサッカー仲間との飲み会があり、Jリーグ、日本代表チームの試合観戦なども楽しんでできましたので、サッカーは自分の人生から切り離せないものでした。昭和23年子年生まれ、今年は還暦となる節目の年、振り返ってみますと、サッカーを通じた経験と、人との繋がりが大きな支えになってきたと思っています。このことはこれからも大事にしていきたいと思っています。

東大サッカー部での思い出の中で、一番大きなことは、やはり昭和44年のリーグ戦での優勝、1部との入れ替え戦出場になります。中大との入れ替え戦は大敗でしたが、リーグ戦優勝は大きな目標だったので、それが達成できたことは、自分にとって大きな勲章になっております。優勝できた要因はいろいろあげられますが、先輩方の応援と浅見監督の指導力が大きかったと思います。

本郷の合宿所で開かれていた新人歓迎会のやかん酒、検見川合宿で当時の全日本代表チームの胸を借りたこと、4年生の7月に京大戦から九大での7大学戦まで西日本を遠征したこと、卒業後6年ほどたった頃、京大戦が行われた京大農学部グラウンドに女房を連れて行き同期に冷やかされたこと、……いろいろな思い出があります。

最近はメタボ体型になって、とてもプレーはできませんし、サッカー選手だったとは周りから信じてもらえない状態になっておりますが、頭の中には昔の感覚が残っており、テレビでサッカーを観ていると、つい自分がプレーしているように力が入り、身体が動いてしまいます。

現役の活躍ぶりをメールで流していただいて、

有難いと思っております。

OBとして、毎年の寄付だけは続けて参ります。
現役の皆さん、上を目指して頑張ってください。

サッカーのある人生

昭和46年卒業 渡辺 宏

今は、つくばの仮住まいで、多くの写真やメロは千葉の方に残してきたので、危うい記憶に頼ったことしか言えませんが、思い出すことを列記しておきます。

- 昭和41年、入学と同時にサッカー部入部。暁星時代の高校のサッカーとの違いにカルチャーショックを受けた。新入生歓迎コンパで飲まれ、確か、友定さんと一緒だったと思うが浜田山の家へ帰る途中の井の頭線で、座っている人へめがけてはいたことを覚えている。ご迷惑をかけました。
- 入部したとたん、4年の島田さんと坂井さんが、坂井さんの留学のことで言い争っていたのを覚えている。ところが、自分自身が坂井さんと同じサンケイスカラシップの試験に受かってしまい、4年ではなかったので余り問題なく留学した。
- もう一人、渡辺がいて彰だったので、区別するために彼がA、僕がHということになり、電車の中でもHと呼ばれて迷惑した。Aちゃんとは、ときにはドライブなんかも行ったが、おとなしそうな顔をしている割に短気で、暴走族とけんかしそうになったりしたが、ついに、東大とけんかして東大もやめてしまった。
- 1年フランスに留学して体重が8kgくらい増えたが、検見川の夏合宿から戻り、2～3週間で元の体重に戻ったのを覚えている。フランスでの単位は認められず、2年で留学し、また2年に戻った。帰ったころ、俵、黒沢、上妻らが入ってなかなか試合に出られなくなった。僕

のフランス留学中にフランスで Revolution de mai があり、僕の帰国とほぼ同じ時期にストライキがはじまった。

- 僕が3年の時、どういう拍子か留年した八林さん、同期入部の武田、小柳、それに俵、黒沢、上妻等メンバーがそろって関東2部優勝、1部の中央と入れ替え戦を代々木のグラウンドでやったが、上妻が怪我をして大敗した。
- 次の年は、前年のメンバーが多く残り、清木がキャプテンになり、シーズン前半の成績も悪くなかったので行けると思っていた。リーグ戦初戦の相手は成城。相手チームのキーパーに高校で一緒にやっていた弟がいた。雨の中で、僕も一回シュートを打ったがゴール右に外れた。終了少し前にゴール前の、間接フリーキックだったと思うが、決められ、初戦を失った。
- それから、黒沢がいなくなったりし、僕も何か調子が出ず、浅見さんに、何回かスタメンを外された。自分でもリーグ戦になってから何かおかしいと感じていた。しかし、どの試合か忘れたが、体調が良いときに、受けたパスをノートラップで逆サイドの、多分桜井だったと思うが、一発でつないだことをよく覚えている。結局真ん中くらいの成績に甘んじた。
- 卒業後も大学院に行っていたこともあり、現役の試合によく行った。M2で結婚したのだが、貧乏なこともあり新婚旅行は横浜。その帰りに、上妻がキャプテンだったと思うが、今度は下の入れ替え戦が駒沢であり直行した。何とか残留したが、中央戦とは違って気持ちのこもった良い試合だった。
- その後も、東大LBの試合には、よく、参加させてもらった。戸井、手島、内田、大塚、宮崎ら、後輩と一緒にプレーし、楽しませてもらった。特に思い出すのは、戸井君が企画した、シンガポール遠征。こてんぱんにやられたが、成城のキーパーだった弟がシンガポールにおり楽しい時間だった。その後、暁星が強くなってから、暁星の方に行く機会もふえ、今はOB会であるアストラ倶楽部の幹事長になってしまった

のであるが、樋口さんのおかげで、LB 50、60にも参加させてもらっている。

- また、戸茱さんのやっていた少年サッカースクールや、自分自身吉祥寺にいたこともあって、西本先生や平林がやっていた武蔵野サッカースクールの手伝いもした。
- 昨年、後腹膜腫瘍で3回目の入院をしたが、その退院が還暦の誕生日と重なり、現在勤務している環境研の女性陣から赤いちゃんちゃんこならぬユニフォームをもらった。

妥協しない強い意志を

昭和 47 年卒業 黒澤秀樹

こんな練習つまらない……

2007 年晩秋、筑波大が関東リーグ 1 部に残ったとき「奇跡的逆転残留」と表現した筑波大OBが、「一度落ちるとなかなか上がれない、半世紀前に強かった東京大学、……」「強い意志……頑として目標に向かって妥協しないことだ」と語っていた。

そのとき、40 年前の私の 4 年間が蘇ってきた。それにしても何度妥協して頭を下げたことか。

入部して間もなく「この練習つまらない、どういう意味があるんですか」と尋ねたら、「そんなこと言うならサッカー部やめろ」という言葉が 4 年生の答だった。

昭和 43 年度秋のリーグ戦後半、優勝候補日体大に勝ったが、この試合中相手 GK と衝突した私は口の中を切っており、夕食のカツカレーが傷に沁みた。しかし、次節、農大に 2-7 で破れ、優勝を逸した。守備の弱いチームでは勝ち続けられない、日本代表チームに国際レベルの GK がいればと、いつも思う。

2 年生の春、関東 1・2 部合同の新人戦では泥濘の敵地で慶応大に 1-2 で負け、3 位に終わった。秋のリーグ戦では 2 部優勝したものの、1 部との入れ替え戦で中央大に大敗した。

退部したが頭を下げて復帰

3 年生の夏合宿のころ「心の中の風船が破裂した」といって退部した。しかし、サッカーが好きだった。秋のリーグ戦が始まり、緒戦に負け第 2 戦も引分けて優勝が遠のいたチームに頭を下げて復帰した。御殿下で試合が始まり 1 分もたたないとき、ハーフライン付近から打った私の左足ドリブル・シュートがゴールネットの左上を揺らした。試合後誰かが、「GK がゴールポスト横にいた奴と話し込んでいたんだ」と言っていた。4 年生の秋、最終戦が終り、小山先輩が話しかけてきて慰めてくれた。

浅見監督、戸茱コーチ、先輩、同期、後輩などのおかげ、高校以来、県大会クラス以上での私の優勝経験は 10 回くらい。運の強い、ありがたいサッカー人生に感謝している。

後輩諸君、優勝って実にいいものだよ。人生に彩が加わる。目標に向かって強い意志を持ち妥協しない日々を歩んで欲しい。

大学リーグへの憧れ

昭和 51 年卒業 南谷尚志

学園紛争で志望を変更

そもそも私の東大受験はひょんなことからだった。

昭和 46 年、なぜか前年より競争率が跳ね上がった京大教育学部に 3 点差で入れず、大阪外大に入学したものの、大学リーグで本格的にボールを蹴りたいという思いは募るばかり。講義にも身が入らず、とうとう京大再受験を目指すことにした。当時、今はなき西宮球技場での京大サッカー部(関西大学リーグ 1 部だった)の試合を見に行っては、自分がプレーする姿をダブらせていた。

ところが、その冬、京大は学生運動が激化して無期限ストライキに突入し、昭和 44 年の東大に続いての入試中止が噂された。迷った末、東大に出願することに決め、大急ぎで受験参考書「傾向

と対策」を買い直した。本当にばたばたの受験勉強だったが、幸い、無事合格した私は、本郷御殿下グラウンドの地下にあったサッカー部の部室を訪ね入部した。「東大サッカー部」で、ただ本格的にボールを蹴りたい一心だった。

「東大ア式蹴球部」と言うのだ、と先輩から教えられ、同期入部の連中からも栄光の歴史を聞かされた私は、正直、とんでもない部に入ったものだとして少々後悔したことを覚えている。1年目、遠征しての京大定期戦とその後の七帝戦での京大戦（先輩の負傷もあり出場した）は複雑な思いを抱いてのものとなった。

東大ア式蹴球部員の自覚

高校からサッカーを始めた私にとって技術・体力の向上が第一であり、日本のサッカー史などほとんど関心の外でしかなかった。ましてや東大の果たしてきた日本サッカー史上の功績など知るはずもなかった。当時の東大は、伝統校の衰退、新興大学チームの躍進など戦国時代のように上下めまぐるしく入れ替わる関東大学リーグにあって2部中位を確保という状況だった。

それでも日々の練習・試合を積み重ねるうち、「東大ア式蹴球部」の一員としての自覚は確固としたものへと変化していったように思う。高校選手権常連校出身選手を揃えた大学と対等に戦う面白さもあった。単なる「サッカー少年」から「サッカー選手」への変化だったのかもしれない。

大学の4年間、特に最終学年のリーグ戦で関東2部6位となったものの1勝もできず終わったことで不完全燃焼の思いから、後輩の手助けを続け、無謀にも監督を務めた年もあった。

その後、ニューヨーク勤務の間も「東大サッカー部」は私の生活の中で大きな比重を占め、先輩・後輩集まってボールを蹴ったりしたこともあった。結局、27年に渡る銀行生活の間、何かにつけて「東大サッカー部」はずっとついて回ったように思う。

娘も東大の女子マネに

家庭的には三人の娘に恵まれたが、幸い「サッカー」が唯一の共通語として娘達とのコミュニケーションに役立っており、特に上の娘は平成10～13年の東大現役チームマネージャー（かなり厳しかったらしい？）まで務めてくれた。彼女は日本サッカー協会を経て、今やFリーグ・浦安バルドラールの総務担当としてチームを切り回す存在となっている。

近時、シニアサッカーが盛んになり、一昔前なら年寄りの冷や水と揶揄され心配されたものが堂々と市民権を得て全国大会まで開催されるようになった。これも「団塊の世代」のお蔭なのかもしれないが「東大サッカー部」出身者の活躍はあちこちで見聞きする。誇らしく思う一方、お互い、いつまでも健康でサッカーが楽しめるよう願っている。

なぜ、2部優勝、1部復帰、と言わないのか（昭和50年度小話集）

昭和51年卒業 池森俊文

東大ア式蹴球部は、昭和31年に関東大学リーグ1部から2部に降格して以降、1部復帰が悲願となった。しかし、現役・OBの熱い思いにもかかわらず、その後半は2部を死守することが精一杯の状況であった。

「なぜ、2部優勝、1部復帰、と言わないのか」

現役が提示した低くて現実的な目標設定に対して、状況は理解しつつも、このように言わざるを得なかった諸先輩の心の叫びが伝わってくるような一言である。また、現役にとっては、これはときとして胸の奥から聞こえる自省を促す自らの声でもあった。このままで良いのか、と。

昭和50年度は、そのような時代の最中であった。(注)

本稿は、同期の集まりで出た話を中心に、そのような時代の様子を小話としてまとめたものである。

(注) 昭和52年、東大ア式蹴球部は、21年間守り続けた関東大学リーグ2部から、東京都リーグ1部に降格した。

【泥蹴編】

現実的な目標に批判

辞意を表明されていた浅見先生に懇願して、もう1年やっていただくことになった。

毎年納会で新主将は新年度の目標を述べるのが恒例になっていた。新4年生の事前の打ち合わせに従って池森は、「少なくとも前年以上の成績（6位）をあげる」と述べた。

O Bからクレームがついた。「なぜ、2部優勝、1部復帰、と言わないのか」と。浅見監督が「彼らは状況を冷静に判断して、現実的な目標を掲げた」と弁明してくださったが納得されず、言い直すこととなった。「前年の成績を下限とし、全力で上位を目指す。できれば優勝し、1部復帰を望みたい」と。

東大ア式蹴球部の伝統と、O B諸氏の熱い思いを感じた瞬間であった。

【宮武談】我われの代は、1年生でいきなり明治学院と下の入れ替え戦を経験した。大方の試合は記憶の彼方に消えてしまったが、あの明治学院との試合だけは今も鮮明に覚えている。恐怖感のある試合だった。それがトラウマになったわけではないが、それ以降のリーグ戦では、あの恐怖を避けることが暗黙の目標となった。

上位校に対抗する秘策

大学までのサッカー経験などで劣る東大サッカー部が、上位校に対抗するための秘策として考え至ったのが、「つまらないサッカーをする」ということであった。華麗に展開し、よいサッカーを組み立てようとする上位校に対して、1対1のハードマークで分断し、大きくクリアーしてインプレーの時間を短くする。その内に相手は苛立ち、我われと同じようなサッカーに陥ってしまう、というものであった。ベンチからも「池までクリアー」「病院まで飛ばせ」という声が上がった。選手は忠実に、中盤で奪ったボールまでもクリアーした。この術中に填ったのが、リーグ戦の順天堂大、国士舘大、練習試合の全日本B、早稲田

大学などであった。

大宮サッカー場の死闘

この秘策を、意識してか無意識にか、同じように実施していたのが、選手のサッカー経験では東大と同様の境遇にあった一橋大であった。当時の東大と一橋大と立教大は、同じように成績が振るわず、不名誉にも関東大学リーグ2部で「3きょう（東京、一橋、立教）リーグ」と呼ばれていた。その一橋大と、大宮サッカー場でリーグ戦の第4戦目を戦った。事前の予想どおり、そこでは見苦しい光景が展開された。ボールは意図もなく大きく行き来し、接触プレーの後にはそのまま蹠^{うずくま}選手が続出した。この試合で一橋大学のG Kとセンターバックは負傷退場し、その後の出場が不可能になってしまった。

浅見監督は、「これは、もはやサッカーではない」と溜め息をつかれた。

まだ、勝っているぞ

昭和50年はプロ野球セリーグで広島カープが初優勝した年だった。センターバックの影本やミッドフィールダーの吉野は、広島出身で熱烈なカープファンだった。リーグ戦の4戦目、10月5日（日）の予定の対明治大戦は、台風のため延期となり10月15日（水）明大八幡山グラウンドでの試合となった。同じ時間帯に後楽園では、セリーグの初優勝を掛けて広島対巨人の試合が行なわれていた。マネージャーの谷本はベンチから「まだ、広島が勝っているぞ」と叫んで、武田コーチに怒られた。

【谷本談】ベンチからみて右サイドで、東大のオフサイドと思えるシーンがあって、東大ベンチからは一斉に「オフサイド、ケア」という声が上がった。主審はつられて？ オフサイドの笛を吹いたが、実は逆サイドに明治大のボックスが残っていた。主審はそれに気づいて、大声で「ジャッジ！ ドロップボール！」と叫んで試合を再開した。

あの宮武が

リーグ戦は、負けないけれど勝てない試合が続く、下位を低迷して最終戦まで下の入れ替え戦の可能性があった。ところが、競り合っていた一橋大が前の試合で負け、その時点で関東リーグ2部からの陥落はなくなった。それで気が緩んだか、それまで負けても1点差のゲームを続けていたのに、最終戦の青学に1-5の大敗を喫してしまった。関東リーグ2部を死守することの重圧が如何に大きかったことか。終了した開放感からか、そこまでクールに振る舞い、バックからの不正確なクリアボールを文句一つ言わず追いかけて続けた副主将の宮武が、なり振り構わず号泣した。

【宮武談】重圧からの開放もあったが、開放感で青学に惨敗してしまった自分たちの不甲斐なさと同時に、卒業後にはもうこのような緊張感のある試合はできない、といった思いが交錯したのだと思う。

みなみ
陽を出してやりたかった

4年生で初めて公式戦のメンバーになった選手が何人かいる。メンバーでも控えの選手はベンチでゲーム展開を見守りながら自分の出番を待つ。待ち続けても出られないことが多い。そのような選手の一人が陽だった。陽は本来MFやFWのプレイヤーだったが、正GKの負傷欠場により、請われて駒不足のゴールキーパーに転向していた。

浅見監督は試合後に何度か「今日は陽を出してやりたかった」と漏らされていた。リーグ戦の最終戦、浅見監督が叫んだ。「陽、行くぞ」。マネージャーの谷本が聞いた。「ゴールキーパーですか」「いや、中盤だ」。谷本は、陽のために背番号18のGK用ユニフォームも用意しておいたのだが、陽は普通のフィールドプレイヤー用の18番を着けて、晴れがましくリーグ戦デビューを果たした。

浅見監督の意を受けた谷本が出場を告げると、「わしか?」と照れたように、しかし自信たっぷりに言って出て行った。陽は、この日のことを日記に「人生最良の日」と記した。

模範演技にも容赦はない

春の検見川合宿で、当時福島大学に在職されていた松本コーチの指導を受けることができた。浅見監督の口利きであった。その中の基礎トレーニングの一つに、投げられたボールを腕立て伏せの姿勢からジャンプヘッドで返す動作を繰り返す、というものがあった。田中は松本コーチから指名されて模範演技をすることになった。模範演技だから数本で終わると、たかをくくっていた田中であつたが、いつまで経っても終わらない。そのうちに白目を剥いて半失神状態になってしまった。曰く、「この練習の目的は、この状態になってどのくらい頑張れるか、である」。

よくやった、よくやった

春の検見川合宿で、同じ時期に合宿していた全日本Bチームと練習試合をすることになった。明らかに実力の違う全日本Bに押し込まれながら、最後のところで体を張ってシュートをはじき返すという展開が最初から最後まで続いた。ボロボロになりながら、前後半が終了し、結果、0-3の負けであつたが何となく達成感があつた。

試合終了と同時に、今年から浅見監督を補佐して熱血指導をさせていただいていた昭和45年卒業の武田コーチから声が掛かった。「よくやった、よくやった」。心もち目が潤んでいた。

東大の準備に感謝する

当時の御殿下グラウンドは土のグラウンドで、長雨が降るとぬかるんだ。大きな試合の前には、練習とともにグラウンド整備が重要な準備事項であつた。50年の京大戦の前にも雨が続き、毎日毎日グラウンド整備を繰り返した。当日、懇親会の挨拶で、池森は京大に対して「もっと良いグラウンドでやってもらいたかった」と詫びた。京大主将の永井は「昨日の段階で、今日は試合ができるかどうか心配したが、思いのほか良い状態のグラウンドに驚いた。東大の準備に感謝する」と答えてくれた。

何も障害物はなかったよ

毎年夏の山中湖合宿の最終日には、恒例の山中湖一周競争を行っていた。池森がスタートに向けて準備していると、しばらく顔が見えなかった兵頭コーチが息を切らしてやってきた。「何も障害物はなかったよ」その日の実施に備えて、早朝に起床して事前試走を行い、安全確認をしてくれたのだった。池森は深く頭をさげた。

マージャンと勉強は基本的に同じ姿勢をとる

リーグ戦が近づき、遠藤コーチから「試合に向けて体調を整えるように」との指示が出た。

「リーグ戦が終わるまでは、夜遅くまでマージャンをするようなことがないように」と。植村が言った。「それなら、リーグ戦が終わるまでは、夜遅くまで勉強することも止めよう。マージャンと勉強は基本的に同じ姿勢をとる」。

サッカーはアグレッシブな姿勢が大切

50年当時、大先輩の竹腰重丸さんがご健在であった。諸先輩にならい、我われも親しみを込めて竹腰さんのことを「ノコさん」と呼んでいた。納会などに出席されるほか、不意に御殿下グラウンドの練習を見に来られることもあった。山の上にノコさんを見かけると、練習に一区切りつけて全員で挨拶に行った。ノコさんから「サッカーはアグレッシブな姿勢が大切。アグレッシブな姿勢は動作に表れる」と教えていただいた。

サッカー部では、しばらくの間「アグレッシブ」という言葉が流行った。

無念の小野田、不死鳥の南谷

秋のリーグ戦を目指して準備をしていた夏の終わりごろ、小野田は練習試合として実施した古河電工戦で、鎖骨骨折の大怪我をしてしまった。小野田は4年生4人で組んでいたバックスの要かなめの一人だったが、この怪我によってこの年のリーグ戦は出場不可能となってしまった。さぞ、無念であったであろう。小野田のリーグ戦への思いは強く、

1年留年して翌年のリーグ戦にけることとなった。

万全の準備で秋のリーグ戦に臨んだ左サイドバックの南谷は、初戦の国士舘大戦で、頬骨陥没骨折の負傷をしてしまった。残り試合の出場が絶望視されたが、1試合を欠場しただけで3戦目から復帰した。皆はその野獣のような回復力に驚愕したが、完治していたわけではなく、現在のような専用のプロテクターもない中で、副主将としての責任感からの勇気ある復帰であった。

助っ人柴やん

1年先輩の柴田さんは、4年次終了後、勉学に励んでおられたが、小野田の負傷欠場もあり、リーグ戦目指して復帰していただくことになった。当り負けしない体格と、体格に似合わない柔らかいボールタッチと、判断力の高さで、我われにとって強力な助っ人となった。

ダイビングヘッド

宮武のダイビングヘッドによる得点が目立った。御殿下での対立教大戦、京都大学との定期戦、天皇杯予選の日本製鋼戦、惜しくもクリアされたが春季対抗戦の対日体大戦、などである。2部とは言え、当時の大学サッカーの頂点近くに位置する関東リーグのチーム同士の試合では、双方のプレッシャーも強く、ゴール前ではなかなか余裕のあるプレーはできなかった。

【宮武談】4年になって練習もしていないのにダイビングヘッドで得点を決めた。京大戦も含めて3、4点はダイビングヘッドで決めたと思う。よく、練習で出来ないことは試合でもできない、と言われていたが、練習もしなかったダイビングヘッドを何本も決めて、俺は天才か？と思った。しかし練習ではできた普通のトラップやパスが、試合ではなかなかできなかった。

東大サッカー部のレベルは高い

53年卒業の井田は新入生のころ、東大サッカー部の試合を見学に行った。関東リーグ1部のチー

ムを相手に、局面ではむしろ相手を上回るプレーをする選手が目についた。チームとしても対等に渡り合っていた。このようなレベルの高いサッカー部でやっていけるかどうか不安になった、と最近になって語った。井田が目の前で見たプレーの主は植村であった。

【用具／設備編】

ユニフォーム

50年度の東大のユニフォームは、正が青・青・青で、胸に白で「東大」と縦書きし、白の背番号であった。副は白・白・白で、同様に胸に黒で「東大」と縦書きし、黒の背番号であったが、泥沼状態の御殿下グラウンドなどで何試合も使ったため、泥色が染み込んで、昔は白であったと偽らせるような異様な色になっていた。特に白パンツは人によって洗濯状態も異なり、色のトーンが明らかに違っていた。今だとユニフォームとは認めてもらえないかも知れない。

バカにつける薬はない

当時の御殿下グラウンドは土のグラウンドで、所どころに小石が転がっていた。従って、選手には激しい練習による擦り傷などが絶えなかった。そのようなときにお世話になったのが、木箱の救急箱であった。その蓋の裏側には、「バカにつける薬はない」と大書してあった。

50年卒の吉澤先輩あたりの仕業ではなかっただろうか。

部室・シャワー室、そしてトイレ

当時の部室は御殿下グラウンドの地下にあり、病院側の道路面と同じぐらいの位置にあった窓から、微かに外の光が入ってきたが、明かりをつけても薄暗かった。階段を下りたところのシャワー室で、温水のシャワーが使えた。下宿者などはこのシャワーで風呂を済まそうとしたため時間がかかった。冬場は寒さに震えながら列を作って順番を待った。

トイレはシャワー室の奥のドアの向こうにあって判りにくかった。「トイレは地下にある」と聞いた受験生が、場所がわからずシャワー室で用を足していた、という噂もあった。間違えられても仕方がないような場所であった。シャワー室の横には、トレーニング器具が置いてあった。昼休みに一人でトレーニングをして力が尽きると、いくら呼んでも助けは来なかった。

合宿所

農学部構内の東大地震研のさらに奥のほうに、サッカー部の合宿所があった。東大の野球場の隣であった。杉浦はこの合宿所に住んでいた。果物が好物で3度の食事として果物を食していると言われていた。おかっぱ頭に緋のチャンチャンコ姿で存在感があった。

合宿所は、同期の打ち合わせや新人歓迎コンパなどにも使われた。コンパの際には、この合宿所は修羅場と化し、しばらく異臭が立ち込めた。

ペンドルボール

東京オリンピック準備にドイツから招かれたクラマー・コーチも活用したペンドルボールが、東大にもあった。御殿下グラウンドの七徳堂側の端あたりである。高い柱の頂上から吊り下げられたロープ付きのボールで、ゴールキーパーのパンチングや、フィールドプレイヤーのジャンプヘッド、ボレーキック練習などを一人でやるのに使った。

不屈き者が力いっぱい蹴ったりしてよく壊れた。

キャプテンマーク

1974年(昭和49年)の西ドイツ・ワールドカップで優勝した西ドイツチームのキャプテン、ベッケンバウアーが巻いていたことで広まったキャプテンマークであるが、新しい動きに敏感なマネージャーの谷本は、ストッキング止めを転用して池森の腕に巻いた。多分、東大チームで使われた初めてのキャプテンマークではないだろうか。

しかし、これが試合中に何度も外れた。あまり

に鬱陶^{うっとう}しいので、池森は途中からこれを巻くの
を止めた。

スパイク

アディダス、プーマは1万円を超える高級品であった。選手のほとんどが数千円の国産のスパイクを履いていた。ヤスダは以前からあったが、その外に、タチカラ、ミツナガ、オニツカタイガー、ヤンガー、ウシトラ、モンブランなどの国産メーカーがあった。

アディダスやプーマのラインを真似たデザインが多かったように記憶している。当時はまだ、おおらかな時代であった。舶来物は足幅が細く作ってあり合わなかった。国産物は革が硬かった。いずれも新調すると、しばらく靴擦れに悩まされた。このころ、軟らかいカンガルー革のスパイクが登場したが、御殿下グラウンドで使うとすぐにだめになった。

大足コンテスト

センターバックの影本とミッドフィールダーの田中は、足が大きいことで1、2位を争った。影本のスパイクは「シロナガスクジラ」、田中のスパイクは「マッコウクジラ」と呼ばれていた。影本は東京ではなかなか足に合うスパイクが見つからず、出身地の広島から取り寄せて使っていた。

スコアブック

それまでも時どきはスコアブックを付けていたが、50年度はマネージャーの谷本、茅野そして女性マネージャーの西山さん、塩屋園さんの努力もあり、全試合の記録がスコアブックとして残った。記録者の欄には植村や田中の名前も見られた。

当時のスコアブックは、東京教育大学教授多和健雄著とあり、成美堂の出版で、ハードカバーの豪華な「本」であった。メンバー提出用紙が、付録として巻末の数ページに印刷してあり、それを切り取って使った。その裏面には成美堂の広告が印刷してあった。

サッカー教本

1973年に、浅見監督が翻訳された、アラン・ウエイド著「イングランド・サッカー教程」が、ベースボールマガジン社から出版された。同じころ、同じくアラン・ウエイド著の本が、岡野俊一郎さんの翻訳で「コーチのいない君のためのサッカー・ベスト・コーチ」というタイトルで、これもベースボールマガジン社から出版された。

当然のことながら東大サッカー部でも話題となったが、49年卒の佐々木さんは、殊勝にも両方とも買って読んでいた。池森は困らせようと、「1冊買うとしたら、どちらの方がお勧めですか」と聞いた。佐々木さんは、ちょっと考えて「甲乙付け難し」と答えた。

【解説】このころ手に入ったサッカー本で、東大サッカー部関係のものとしては、上記の2冊のほかに、スポーツシリーズ「サッカー」（竹腰重丸著：旺文社）、スポーツ入門双書「サッカー」（竹腰重丸、浅見俊雄、田中純二著：ベースボールマガジン社）、「チャナディのサッカー」（A. チャナディ著、竹腰重丸監修、村岡博人、窪田登訳：ベースボールマガジン社）、「サッカーのすすめ」（岡野俊一郎著：講談社）、「サッカー教室」（岡野俊一郎著：鶴書房）、「サッカー世界のプレー／ワールドカップのスター達」（牛木素吉郎構成、岸本健写真：講談社）、「スポーツ教室「サッカー」」（岡野俊一郎著：旺文社）、「図説サッカー事典」（新田純興ほか著：講談社）、「サッカー戦術とチームワーク」（C. ヒューズ著、岡野俊一郎訳：ベースボールマガジン社）などがあった。

サッカーマガジンと 三菱ダイヤモンドサッカー

1966年創刊のサッカーマガジンは、当時の重要なサッカーの情報源であった。欧米のサッカーが写真とともに紹介された。75年の6月からは、それまでの月刊が月2回の発行となったが、続けて買うだけの経済的な余裕はなかった。

もう一つの重要なサッカーの情報源が、1968

年放送開始の三菱ダイヤモンドサッカーであった。東京12チャンネル金子アナウンサーの進行と岡野俊一郎さんの解説は冷静で示唆に富み、個々のプレーや戦術のみならず、マナーや観客の反応までもコメントがあった。サッカーが奥深く知的なスポーツである、という印象を与えてくれた。

金太郎とチビ蹴

サッカー部に入部したとき「チビ蹴をやろう」と言われて、何のことか判らなかった。ミニゲームのことであった。小さなスペースにコーンを2つずつ立ててゴールにした。

東大では、ずいぶん前からミニゲームをこのように呼んでいるようであった。そう言えば、コーンはなぜか「金太郎」と呼ばれていた。こちらはずいぶん前からそうだったかどうかは判らない。4、5人以上の仲間が集まると「金太郎」を立てて「チビ蹴」をやった。いったん始めると、時間を忘れて夢中でやった。筋肉痛が残った。

【番外編】

中根さんの写真集

中根雅子さんは赤門付近に居住し、よく御殿下グラウンドに練習や試合を見に来られた。

検見川合宿などでは泊り込みで支援いただいた。写真が趣味で、京大戦やリーグ戦などの写真を多数残されたが、アルバイトをしながらそれらをまとめて自費出版の写真集にして、同期の一人ひとりに記念として頂戴した。皆で資金支援を申し出たが、頑^{かた}なに拒否された。おそらく昭和50年度は写真集のある唯一の年代ではないだろうか。

リーグ戦パンフレット

それまでも関東大学リーグ戦のパンフレットはあったが、50年から初めて顔写真入りとなった。自分たちの写真もさることながら、相手チームの選手の顔と名前が初めて一致したりして、大変に重宝した。東大で、同期のみならず先輩や後輩に

もあだ名をつけて喜んでいた田中や陽や小野田などは、今度は他チームの特徴ある選手たちにあだ名を付けては、それをパンフレットに書き込んで楽しんでいた。回遊少年、海軍中將、はみだし、などのメモが、田中の字で今も私のパンフレットに残っている。

東大ダックス

東大ダックスは東大職員のチームで、東京都社会人リーグに早期に参加した歴史あるチームである。当時は毎日、御殿下グラウンドで、昼休み時間を利用して2チームに分かれてゲームをしていた。御園や池森は、東大サッカー部の練習のない日などに、仲間に入れてもらい一緒にボールを蹴った。その縁で卒業後も親交があり、年1回、毎年11月に同世代で定期戦を戦い続けて、もう30年以上になる。

夏の佐渡旅行

サッカー部の夏休みは、長い合宿や練習の合間の束の間であったが、そのような期間を利用して、群れる女子高生のようなと言われるほど仲の良かった同期は、夏の佐渡に旅行した。参加者は池森、植村、小野田、谷本、堀井、陽、宮武。行程は以下のようなものであった。

7月18日（金）

上野→新潟→小野田家→両津港→みさき荘泊

19日（土）

（佐渡）いかつり船 佐渡全島定期・観光バスフリー乗車券～大佐渡スカイライン、相川、佐渡金山

22日（火）

両津港→新潟→小野田家泊

23日（水）

新潟→長岡→（帰宅者）上野

→（継続者）富山→陽家泊

24日（木）

富山→金沢→成巽閣→金沢→名古屋→東京

修学旅行

学部の修学旅行はなかったが、サッカー部は修学旅行を敢行した。企画・立案は田中が行った。行程は以下のとおりであった。

この旅行中の17日夜、同期会「泥蹴会」が結成された。16日に宿泊することになっていた本庄家別宅に到着してドアを開けてみると、何やら異様な光景が目に見え込んできた。箆^{たんす}が空いて衣服が散乱して……。

泥棒が入っていたのだった。警察の取調べを受けたり本庄家に連絡したり慌ただしい夜となった。泥蹴会命名の由来の一つとなった。

11月14日（金）

11時59分東京発「銀河52号」に集合（池森、植村、影本、田中、谷本、茅野、堀井、南谷、宮武、陽）

15日（土）

大津→北小松→南谷別荘昼食→近江今津→京都→京都女子大学園祭→南谷別荘泊

（小野田が合流）

16日（日）

北小松→近江今津→竹生島→大阪、京都→奈良→本庄家泊

17日（月）

奈良見物→大阪→川福にて泥蹴会結成→奈良→本庄家泊

（杉浦が合流）

（小野田が帰宅）

18日（火）

奈良→京都→高雄山→京都→（公式日程終了）→東京
→南紀白浜へ
→大阪→南谷家泊 ※

19日（水）

※大阪→広島→池森家泊

20日（木）

広島→東京

【谷本談】泥棒の入った形跡を見つけたのは、本庄から鍵を預かった谷本と池森ほかが宴会を早めに切り上げて、先乗り組として本庄家別宅に到着したときであった。地元警察に110番すると、

元県警本部長私邸ということで、警察官数人があわてて駆けつける騒ぎとなった。その渦中、2次会組が夜道を声高に歌うわ笑うわで、完璧に泥酔しての、にぎやかな到着となり、彼らを静めるのがまた、ひと苦勞であった。

泥蹴会

リーグ戦終了後に実施した修学旅行で、50年度の同期会「泥蹴会」が結成された。大阪のうどんすき「川福」において、11月17日の夜のことであった。

泥蹴会とは、雨の御殿下グラウンドで泥に塗れて球を蹴ったとか、同期の飲み会ではとことん泥酔したとか、修学旅行で泥棒に入られた場面に遭遇したとか、さまざまな要素を総合しての命名であったと記憶している。

結成の翌日、「泥蹴会」と書いた皿の焼物を作成して、泥蹴会の宝物として大事に保管するはずであったが、早々に紛失してしまった。

泥蹴会は、年に1回、原則的として11月23日に会合して、適当な相手と交歓試合を行いながら、互いの近況を確認し合うこととした。その約束はしっかりと守られて、卒業以来30年余り、今も途切れずに続いている。交歓試合の相手は途中から、グラウンドを共有していた職員チームの東大ダックスと、関東大学リーグ2部において共に戦った宿敵一橋大学OBとなり、ここ10年ぐらいは三つ巴の定期戦を展開している。

ただ一つ

♪唯一つ、旗影高し。今輝ける、深空の光。

天寵を負える子ら、友よ、友、ここなる丘に、東大の旗立てり。

伝統の旗、東大の光。讃え、讃えん。讃え、讃えん。

応援歌「ただ一つ」は、卒業後も何度も歌った。同期の結婚式では、必ずといってよいほど歌った。「学生、注目!」。リード役はいつも小野田であった。めでたい席での斉唱であったが、それまで感極まる場面で歌ったことが多かったためか、条件

反射的にこみ上げて来るものを感じて、いつも薄涙を浮かべての斉唱となった。カラオケで歌うときには、直立不動の姿勢で歌った。(カラオケで歌うな！)

学生の本分

当時のサッカー部には、法学部、経済学などの文科系が多かった。工学部などの理科系は実験が多く、練習との両立がなかなか難しかったためである。その中で特に経済学部は楽勝と言われていたが、(優秀)かつ要領のよい学生であった宮武は、4年次をサッカーだけに集中すべく、経済学部において3年生のうちに卒業に必要な単位を全て取ってしまった。浅見監督はその要領の良さを「お前は受験ではなく、籤引きで東大に入った」と言って褒め讃えた。

就職戦線異常なし

50年の就職協定では、9月1日が会社訪問の解禁日であった。それに対して、この年の東大サッカー部は、検見川で異例の長期合宿を敢行、8月31日が合宿最終日となった。そのため、就職希望の4年生は合宿明けの9月1日に慌しく会社訪問に出かけることとなった。

リーグ戦も9月半ばには始まる。時間がない。副主将の宮武は9月1日に訪問した某商社を、日を置かずして再度訪問して直談判した。「リーグ戦が迫っている。最後のリーグ戦に集中したい。就職活動をしている余裕がない。直ぐに決めてもらえないか」。

後で判ったことだが、この会社の人事担当者は同社ラグビー部の世話役で、体育会系にはことの外に理解があった。「判った。もう来なくて良い。リーグ戦に集中しろ」。そう言って、合格の印を押してくれた。

東大にもサッカー部があるの？

池森は就職して間もないころ、上司に連れられて行った飲み屋で紹介された。「こいつは、東大サッカー部で主将をやっていた」。カウンター越

しに若い女性が反応した。「まあ、東大にもサッカー部があるの、弱そう！」。

池森は、「何を言うか、わが東大ア式蹴球部は……」と、数分にわたって詳しく解説し、場の雰囲気白けさせてしまった。

大運動会

紳士淑女の来場で、馬車人力車列をなし、見物席は美しく着飾った婦人令嬢で埋められ、未来の学士に目星を付ける婿選びの会場ともなった、と記録にある帝大運動会の流れを汲む「大運動会」が、毎年御殿下グラウンドで行なわれた。このころには見物する人も少なかった。

サッカー部の練習は休みとなり、部のコンパのためにビール券を求めて何人かの部員が参加させられた。その中で、多田はこの大運動会のスターであった。陸上競技部の部員もエントリーする100 m競争で毎年優勝を続けた。颯爽と走り抜ける姿は美しかった。

上野公園の花見

御殿下グラウンドからは、病院を抜け、池之端門を抜けると、不忍池や上野公園はすぐである。桜のころ、翌日練習が休みとなる日に、大人数で上野公園に花見に行ったことがあった。桜の木を折って怒られたり、陽が靴をなくしたりで大騒ぎであった。

【茅野談】ある日の練習終了後、誰が言い出したか、51年卒組を中心に約20名ほどで上野公園に花見にでかけた。折からの花見日和に加えて桜も満開で、上野公園は花見客で混み合っており、一寸の余地もないほどであった。何とか、とあるサラリーマンの団の隣に席を確保して花見が始まった。貧乏学生のこと酒もつまみも大したことはなかったが、それなりに座は盛り上がっていた。そのうちに、さらに酔いも回ってきて、一人が桜の木に登って揺すったところ、音をたてて折れかけて、巡回の警官に注意されるなど、だんだんと過激な方向に突入していった。

やがて、隣り合わせたサラリーマンの団と合

同の花見会の様相を呈していき、年上殺しの陽や田中を中心に取り入って、相手の持参した酒は勝手に飲むは、歌は歌うわの大騒ぎとなっていた。

そのうちにお隣さんは帰ることとなり、荷物になるからと酒と食べ物を寄付してくれた。残った我われは、ますます盛り上がっていき、当時、宴会の席では必ず歌っていた春歌を、次から次へと止まらずに歌い続けた。

夜も更けて周りの喧騒も静かになり、我われもそろそろ帰ろうということになったところで問題が発生した。陽の靴がないのである。シートをひっくり返したり、あちこち探したが出てこない。皆は相当に醗酵していて、探している最中にも誰かが歌い出すと、皆で手をたたいて呼応する始末であった。

陽は陽で完全に出来上がっており、「俺の靴はいい」と何度も言っていたが、皆はほとんど聞いていない。そのうちに、しばらく見えなかった小野田と宮武が「おい、靴だ」と言って差し出した。陽はその靴を履いて合宿所まで帰ることができた。

駒場寮

2001年8月の強制執行によって、その歴史に幕を閉じた駒場寮であるが、1、2年次の南谷の住居であった。6人で住む部屋の名前をボヘミアンと称していた。

寮食堂のメニューはA定食90円、B定食120円の2種類があった。A定食ばかり食べていると体を壊すといわれていたが、駒場付近に下宿していた池森は、これを3ヵ月も続けて貧血になった。南谷は貧血になった池森を誘って近くの中華料理屋で、鉄鍋で作った野菜炒めを食べさせた。血液中にヘモグロビンが生成されていくのがよく判った。有難かった。

本郷にある御殿下グラウンドでの練習からの帰り、電車賃を節約するため、よく渋谷から駒場東大前まで2人して歩いた。

引越し請負

2年次から3年次になるとき、講義の中心が駒場から本郷に移る。そのため、下宿を駒場近辺から本郷近辺に変える者が多かった。面倒見のよい堀井は、レンタカーの軽トラックを借りてきて、同期の引越しを手伝ってくれた。東京の事情の判らない地方出身の学生たちにとって、涙が出るほど有り難かった。

本郷ボンバーズ

御園は3年まででサッカー部を退部して学問に打ち込んだ。しかしサッカーへの思いは断ちがたく、有志を集めて本郷ボンバーズというサッカーチームを組織し、東大総長杯のサッカー大会に出場して見事優勝した。

上野「山下」のバイト

昭和34年から41年の東大サッカー部の監督であった須賀さんは、上野で「山下」という高級天ぷらの料亭をやられていたが、我われサッカー部員のためにアルバイトをさせてくださった。テーブル席の注文取りと皿洗いの仕事があった。南谷や茅野、池森などがお世話になった。仕事が終わると、ごはんを腹いっぱい食べさせてもらった。有難かった。

皿洗い係りは、ときどきお座敷の前まで料理を運んだ。入り口で「お富さん」と声を掛けるのだが、なかなか恥ずかしくて大きな声が出せなかった。

本郷三丁目「不二家」

サッカーの厳しい練習で体が消耗すると、無性に甘いものが食べたいことがある。

田中、小野田、陽、植村、堀井などは、地下鉄本郷三丁目の駅の近くにあった不二家の常連であった。好物はホットケーキであった。2枚重ねのホットケーキに3種類のシロップが付いてきた。それをホットケーキにたっぷり掛けて食べた。田中は残ったシロップを水に溶いて飲んだり

した。小野田はときどき、昆布茶を頼んで存在感を示した。

正門前の「弥生」

日曜日の朝は、アルバイトの御殿下クラブで小学生と「狐狩り」などをやった後、午後からの練習に備えて昼飯を食べた。

谷本や茅野が好んで行ったのが、正門を出て信号を渡ってちょっとのところにあった「弥生」であった。東大サッカー部ファンのおばさんと、無口で大柄なご主人の2人だけで切り回しており、メニューはカツ重と、ゲソ天だけがのった独特の鍋焼きうどんしかなかった。もともとは甘味処であったが、甘辛い味付けのカツ重が美味しかった。

このほか、同期でよく出かけた飲食店には、以下のような店があった。

寿司屋「若竹」

ご主人が亡くなってからは、おばちゃんが握っていた。

肉豆腐「南州屋」

肉豆腐が意外に酒に合った。

よせ鍋「大松」

知的な雰囲気のある親父さんがやっていた。出てくるのが遅かったが量は多く美味しかった。

やきとり「白糸」

この店の横を通るたびに、陽は舌鼓を鳴らして皆を誘った。

学生会館ビヤガーデン

翌日が休みとなる練習後には、小走りに駆け込んだ。

大ジョッキ8杯も飲むと、一口飲むごとに尿意を催した。

とんかつ「永井」

薄くて大きなとんかつであった。

江古田「和田屋」

御園、陽のホームグラウンド。駅を降りた途端に2人の大声が聞こえてくるような気がした。

検見川「チャチャ」

柴田さん行き付けの店。

おしまい

追悼

追悼 五十嵐洋文くん

(昭和32年度主将)

昭和33年卒業

木村 翫、小林昭夫、西野 宏、浜口幸久

昭和32年度のシーズンも終わり、卒業の日も近づいた33年1月25日、我々4年生部員のために3年生以下の部員による送別会が持たれた。当日は午後2時から御殿下グラウンドで送別の紅白試合が行われ、5時から農学部グラウンド横の合宿所で送別コンパが催された。コンパでは東大ア式蹴球部の来たるべきシーズンでの活躍を期待しつつ、スキヤキ鍋を囲んで時を過ごした。しかし、そのとき参加した部員の誰一人として、旬日を置かずして主将五十嵐の身の上に悲劇が起ころうとは夢にも思わなかった。

1月30日夕刻、練習の帰途、赤門の前で五十嵐が交通事故にあったという知らせを聞いた部員たちは、ある者は東大病院に駆けつけ、ある者は御殿下グラウンドに集まって、彼の回復を祈った。

しかし、皆の願いは空しい結果となった。

「東大サッカー史」編集のために昭和32年度の記録をまとめるべく、同期が集まったおり、異口同音に五十嵐主将の思い出をまとめて置こうということになった。木村、小林両君による回想に、当時の東京大学新聞の記事を添えてまとめとするしだいである。

「サッカー史」が完成したら、皆で五十嵐の墓前に供え、往時を偲ぼうと考えている。

「神風タクシー」の犠牲に

卒業に必要なギリギリの単位しか取ってこなかった私は、最後の試験を間近に控えて、めったにないことだったが、部の集まりを終えたあと大学の図書館に直行して机に向かっていた。誰かは忘れたが、突然呼びにきた人に五十嵐君の変事を告げられて付属病院に駆けつけた。回復を信じ交替でさすり続ける彼の足は、鍛えられて鋼のように固かったが、時間とともに少しずつ冷えていった。

1年前、戸田の大学寮で行われた運動部合同の合宿中に撮った破顔一笑のさわやかな彼の写真



昭和33年2月5日付、東京大学新聞から

前列左から2人目が五十嵐主将

が、遺影として各新聞の記事に添えられることになった。これがきっかけで、当時世間を騒がせていたタクシーの暴走に歯止めをかける風潮が生まれたのが、彼の遺した思わざる功德としてあきらめるしかなかった。

同期の部員のうち、彼と佐藤芳夫と私の3人が1年生の夏の京大戦に帯同させてもらった。戦いのあと、白砂青松で名高い須磨の浦まで足を延ばし、うら若き女性にはとても見せられない海水着なしの姿で海に入ったすぐそばを、早くも環境汚染の走りとなる汚物がプカプカと流れていたのが強く印象に残っている。

あるとき、休講となった彼が、学校のすぐそばにあった私の下宿に突然やって来て、今の女房と鉢合わせ。色だけの茶をすすりながらしばし談笑。そんな縁もあったので、ご迷惑かと思ったが、われわれの結婚式に彼のご両親の出席をお願いした。その後、父君よりずっと年賀状をいただいたのがうれしく思い出される。(小林昭夫)

率先垂範のリーダー

昭和32年、1部復帰を合言葉にして新シーズンが始まり、新しい布陣として主将の五十嵐と私が中盤のハーフバックでプレーすることになった。五十嵐から左右のどちらをやりたいか、得意な方をやれ、残りを俺が引き受けると言われ、左足の不得意な私が右のポジションをやることでリーグ戦にのぞんだ。

1年目からレギュラーとして試合に出場していた彼は経験の少ない私を気遣い、指示したり励ましたり試合中いつも私をリードしてくれたので、連携を取りながら攻守の要である中盤の役割を果たすことが出来たと考えている。

彼は感情的になって大声をあげたりすることはなく、常にチームメートに気を配る心優しい主将であった。一方、練習でも試合においても常に先頭に立ってがんばる率先垂範型のリーダーでもあった。

長年プレーを続けてきたこともあって足首に慢性的なねんざがあり、試合前には念入りにテーピ

ングをしていたにもかかわらず、痛みを感じる素振りは少しも見せなかった。

また、残念ながら1部復帰が果たせず主将としてさぞかし悔しかったと思うが、彼から一言も弁解とか愚痴を聞いたことはない。人柄でチームを見事に統率した度量の大きい好漢であった。

卒業をひかえ卒論の実験を終えて帰宅してから彼の事故を電話で伝えられたとき、頑強な身体の持ち主なので、よもや命を落とすとは思ってもみなかった。しかし、翌日訃報を知って茫然としてしまい、ご家族の前で号泣してよく話すことが出来なかったことを記憶している。

彼の墓は府中市の多磨霊園にある。近くを通る時いつも彼のことを思い出す。また、その墓石には一緒にプレーしたチームメートたちの名前が刻まれている。五十嵐主将は我々の心の中で生きている。(木村 菊)

追悼 ^{みなみ}ヘコさん、陽 雅文くん
(昭和51年卒業)

昭和51年卒業 田中 靖

一番先に天に召される

ヘコさんとは誰か。まずそれから始める必要がある。

筆者はLB会の昭和51年卒13人の1人で、ヘコさんはその14人目であった。本名は陽雅文(ミナミ・マサフミ)、今は鬼籍に入って30年になるが、彼を知る者の間では、文字通り太陽のような存在であった。ヘコさんとはその彼の愛称である。1年生の検見川合宿で、いささか肛門の筋肉が緩かったために、ヘコキムシと命名されたのがその起源である。その後、「ヘコキムシ⇒ヘコキ⇒ヘコさん」と変化した。彼のバンカラで純情な男ぶりを「西郷どん」になぞらえ、西郷のユニフォーム＝「兵児帯(へこおび)」から命名されたとする異説もあるが、ヘコキムシの命名者である筆者はそれを真説とはしない。

ヘコさんの悲劇は、同期の中で一番元気であり、

将来の逸材と自他共に認めていた人間が、一番先に天に召されたということにある。遂には彼の命を奪うことになる胸の癌は、4年生の5月に撮ったレントゲン写真にはかけらもなかった。秋のリーグ戦を終えて、同期で出かけた「修学旅行」から帰京した翌日に、その残酷な正体を現したのだ。彼自身の驚異的な生命力と、回復への皆の願いで、宣告された余命6ヵ月が3年まで（5倍！）延びたが、力闘の末、彼は遂に逝った。

こう書いても多くの読者には依然として「ヘコさん」はなじみが薄いであろう。独断と偏見になるが、彼が東大サッカー部90年史に登場しても違和感がないと筆者が考える点がいくつかある。今回は、そういう観点から、こよなく彼を愛した友人のひとりとして彼の思い出をつづってみたい。

小学校4年からサッカーをはじめ

まず特筆したいのは、彼の華麗なサッカー歴である。筆者もその一人である昭和28年生まれは、後に「花のニッパチ」と呼ばれた世代であり、好物＝「巨人、大鵬、玉子焼き」と信じていた少年



ボールを蹴る陽



在りし日の陽 雅文

時代を共有する世代である。

彼はそんな時代に、小学校4年生からサッカーを始めた。当時、サッカー王国といわれた埼玉、静岡、広島ならいざ知らず、冬にはどんより曇った雪の日が多いサッカー後進国（富山の人、すみません）富山において、なぜか彼はサッカーを志す。

ちなみに筆者は小4のとき、市内の少年野球チームに入団した。当時、筆者（を含め多くの少年）は、サッカーのサの字も知らなかった。野球以外に手ごろな、換言すると比較的道具の値段が安く、仲間も集めやすいスポーツはなかった。元気のよい男の子の多くは野球をしていた。

なぜ、彼が小4からサッカーを始めたか、彼自身に聞いたことはない。でもこれは、当時の常識から見ると快挙だったと思う。

今は、Jリーグ全盛の世の中となり、全日本もワールドカップの常連となった。子供たちのなりたいもののひとつとして、職業としてのサッカーは確実に市民権を得た。サッカーエリート教育の開始年齢もどんどん若年化している。今では幼稚園からボールを蹴る子供たちがいるが、ヘコさんはその大いなる「はしり」である。確か、あのロナウジーニョもジダンもそうだったと記憶するが、10歳前後からストリートサッカーに興じ、サッカーの虫になる。ヘコさんが彼らと違うのは、日本ではまだそういう感覚がなかったころに、自然な形でサッカーとの出会いを経験したことである。おそらく、筆者たちの世代までのサッカー部員にそのような歴史を持つ方はいないと思う。

力が結果につながらなかった

次に挙げたいのは、彼の潜在力が必ずしも「結果」につながらなかった皮肉なめぐり合わせである。この点は、筆者も含め、非凡なサッカーマンでは必ずしもなかった読者諸兄に、共感を持ってもらえるのではないだろうか。ある意味で、時代に先駆けた存在だったからといえるかもしれない。

ヘコさんは、富山大学付属中学に進むと、勇躍サッカー部の門を叩く。同じころ筆者もサッカー部に入部する。親から薦められた剣道と、親しい

友人がたまたま入部したために念頭にあったサッカー部のどちらにするか悩んだ挙句「ええ、ままよ」とサッカー部に入部を決めていた筆者とは大違いである。

ヘコさんは、とんとん拍子にクラブ内で頭角を現すが、2年生のときに鎖骨骨折のため1年シーズンを棒にふる。それでも、ギプスをはめてまでも練習に明け暮れたというから、サッカー小僧の面目躍如である。3年生の時には生徒会長、サッカー部キャプテンを兼ね、学校内での実力も相当なものだった。

ところが、大事な一戦はいつも引き分けとなった。当時の習慣で引き分けの場合、最後はコイントスとなるのだが、キャプテンの彼は1度も抽選に勝ったことがなかった。じゃんけんでは勝つが、その後のコイントスで負けるのである。チームメートをして、「陽はサッカーの練習は要らないから、抽選の練習をして欲しかった」と言わしめた、との逸話が残っている。

彼の遺稿集で、ある友人が「悲運の名将」と彼を呼んだ。類まれな運動神経を持ち、誰からも憧れと尊敬の念を持って見られた男だが、皮肉な運命にもあそばされた面があった。

高校時代のヘコさんは、富山中部高校のサッカー部主将として、同校躍進の原動力となり、富山随一のセンターバックの評判を取った。顧問の先生によると、その当時の中部高校は十分県代表の実力があったが、ライバルが圧倒的だったため、県レベルで優勝することができなかったという。ここでは、必ずしも彼の悲運が災いしたわけではなさそうである。

4年間の結末を飾る20分

大学入学後、1年生の夏までは、後日の彼自身の述懐によると「日和って」サッカー同好会に属した。同好会では飽き足らなかったのか、運動会サッカー部に入部するや否や、独特のひたむきさで存在感を徐々に発揮していく。冒頭に記した「ヘコキムシ」人生の始まりである。

同じ部で生活し始めて、筆者が感じたのは、体

が固い割には、プレーが意外とやわらかくかつ、足の振りが鋭いこと、中肉中背で「いかり肩」を特徴とする大人の体格をすでに有していた。筆者が入部当時、多田君という同期生と二人で「スケルトン兄弟」の異名を取ったほど痩せて非力だったのとは大きな違いであった。

それだけ傑出した素材だったが、なぜかポジションを争うところまで行かなかった。その後フォワードの一員として、筆者と同じ二軍の釜の飯を長く食った。ヘコさんの十八番の型は右45度くらいから相手ゴールに接近し、不器用だがやや強引なフェイントで相手を引き離し、立ち腰のまま鋭い右足シュートを決めるパターンだった。

いよいよ4年生のシーズンを迎えたとき、シーズン入り直前に、彼は急遽GKへのコンバートを命じられる。当時のチームにGKの人材が薄かったためである。さすがに彼をして「ムムム……、勝手なこといいやがって。しかし受けることにしたよ」と日記に書かしめた一大転機だった。ところが一定の練習をすると、彼は見事にGK役をこなすのである。これには、皆が舌を巻いた。ヘコさんは器用なのである。何回か試合にGKとして起用された。

ところが、肝心のリーグ戦では一向に彼の出番は訪れなかった。東大の二部残留が決まってから迎えた最終戦、ここでヘコさんは最初で最後のリーグ戦デビューを、GKでなくFWとして果たす。浅見監督の決断だった。日記には「4年間の結末を飾る20分、しかも温情で。くやしさ、うれしさの入り混じった気持ちだ。今この瞬間を文章で表すのは難しい。ただ涙が止まらなかったとだけ言っておく」。まさにそうだったのであろう。そこで、東大サッカー部現役としてのヘコさんの歴史は終わる。

思うに、ヘコさんは、アスリートとして万能型選手だったと思う。174cm、62kg、大型でも小型でもない、また一芸型でもない。BKもFWも、はたまたGKすらこなしてしまう。今にいうオールラウンド・プレイヤーであり、ユーティリティ・プレイヤーである。

当時は、4-2-4全盛のころで、オランダのトータルサッカーがお目見えしたばかりのころである。早く世の中に現れすぎたタイプの選手だったかもしれない。今は、「戦術的交替」を可能にする万能型プレイヤーや、攻撃のできるGK、スーパースターのGK等が話題になる時代である。ヘコさんは、今だったら、プレイヤーとしても別の価値観で扱われたらと思う。また、元気だったら、後進の精神面での指導に偉大な力を発揮した男だったと思う。

遺稿集その他を含め、ヘコさんの内面を語るとは他に譲って、今回はサッカーマンとしてのヘコさんの知られざる一面に光を当ててみたかった。

ヘコさんは時代を先取りしつつ、平凡なサッカーマンとしての人生を極めてまじめにひたむきに演じて見せてくれた気がする。故人の名誉のためにも言うが、これはほめ言葉である。筆者のような超人にとって仰ぎ見る存在だった。

最後に、ヘコさんが壮絶な人生を駆け抜けた軌跡を素描してこの短い文章を終わりたい。筆者の筆力不足で90年史に相応しい話になっていないければご寛恕願います。合掌。

[陽 雅文（みなみ・まさふみ）年譜]

昭和28年 4月10日 富山市に生まれる。

昭和35年 富山大学付属小学校入学。高学年頃から熱心にサッカーをする。

昭和41年 同付属中学校入学。サッカー部主将、生徒会長を努める。

昭和44年 富山県立富山中部高校入学。サッカー部主将を務める。

昭和47年 東京大学理科一類入学。サッカー部入部

昭和50年 11月21日 発病（悪性胸腺腫）

昭和52年 同大学院資源工学科進学

昭和53年 12月4日 逝く

追悼 中西義和さん

（平成10年度コーチ）

平成12年卒業 下田修平

よく、お酒を飲んだ

私のような三下が中西さんについて語るのは大変恐縮ですが、最も中西さんと親しかったから書いてみると上の代の方にいわれ、筆を握ることにしました。

何がどう親しかったかというと、まあよくお酒を飲んだ、と。特に合宿初日の夜は決まってこそそと食堂に行ったり、階段の陰に隠れたりしながら、主にウィスキーを飲んだものです。2日目は私も中西さんも2日酔い状態で、アセトアルデヒド分解のため練習前から水を大量に飲むのですが、「なんで汗かいていないうちからそんなに水飲むのですか？ 中西さんと下田さんだけ」と女子マネージャーから訝しがられたものです。

さすがに2日目の夜はお互い自重するのですが、3日目からは「まあ、今日は抑えめにな」といいつつ、しっかり飲むのでした。基本的には、飲んだ次の日の朝食時、中西さんはぐったりしているので、たいていの人は「あ、昨日の晩は飲んだな」とすぐに分かるのですが、逆に私は朝からやたら気持ちがたかぶって饒舌に喋るので、たいていの人は「あ、昨日の酒が残ってるな」と気づいてくれます。ちなみに、常に我々2人だけというわけでもなく、たまには私の一つ下の足立君も合流することがありました。

もちろん、合宿以外の場では、サッカー部の皆とともに試合の打ち上げに行くこともありましたし、あるいはア式蹴球部のコーチを辞められたあとも、主に大谷さんの代の人たちとプライベートで飲みに行くこともありました。昨年の夏、有楽町の某カフェで集まり、その後有志一同で銀座ライオン本店で飲んだのが、最後の宴でした。

理想の指導者はヴェンゲル

普段はあまりサッカーについて話すことはない

のですが、酔っぱらうと私も調子に乗って、中西さんの理想とするサッカーについての話などを、伺ったこともあります。しかし泥酔しているので、何を話したのか、翌日には両者ともに綺麗さっぱり忘れていたりします。

その中で私が覚えているのは、「理想の指導者はアーセン・ヴェンゲル」ということです。曰く、「試合の際のたたずまいが、凛としている」と。なるほど、たしかに中西さんもヴェンゲルのような雰囲気を持っていた方でした。ヴェンゲルと中西さんのサッカー理論の共通点だとか、そういった難しいことは私には全くわかりません。ただやはり、中西さんはスマートな方だな、と常々感じていました。

例えばお酒をどんなに飲んでも、愚痴をいわない、自慢話を語らない、怒らない、他人にからまない。もちろん、飲酒時以外もスマートですし、さらにいえば学生からの質問、疑問に対して明確に答えてくれる、そしてそのような疑問を素直に投げかけられる雰囲気を持っていました。

具体的には、「なんで自分が試合で使ってもらえなかったのか」、「あの時点でそのような指示があったのは、どういう意図か」といった疑問を、学生が中西さんに対して直接問うているシーンをよく見たものです。そしてそれに丁寧に答える中西さんの姿も、はっきりと覚えています。あと一つ覚えているのは、「プロサッカーでは、いわゆるシャンパン・サッカーが理想」ということで、ヴェンゲルにせよシャンパンにせよ、元来フランスサッカーへの憧れが強かったといえましょう。しかし、大学サッカーにおいてシャンパン・サッカーを展開するのはさすがに無理でして、当然そのような要求を我々に課したことはありませんでした。

中西さんがどのようなサッカーを東大でやろうとしていたのか、当時の主将であった大谷さんに訊いたところ、「シンプルにつなぎ、ボールも選手もよく動くサッカー」とのことです。これを聞いて、「ああ、それこそまさに、ヴェンゲル率いるアーセナルのサッカーだな」と実感しました。

都大学リーグ2部へ昇格

今でいうところのメッシやカモラネージや、あるいはカッサーノやロナウジーニョのような技巧派ドリブラー（ファンタジスタ）に頼ることなく、全体がリズムよくパスをつなぎ、よどみなく選手が動いて行くチームです。そのサッカーを、中西さんの視点からどの程度実現できていたのか、私には全く分かりませんが、結果として東京都3部を無敗で優勝し、2部へと昇格したのです。

また、中西さんは学生の自主性を最大限に尊重していて、基本的方針と公式戦メンバー選出以外は、全て幹部学年の4年生に任せていました。たとえば練習メニューは、ほとんどこの幹部学年の人たちの提案と、それを尊重した上での中西さんの助言で構成されていました。

かように人格者であった中西さんの交友関係は当然幅広いものでした。かつて日本リーグでプレーしていたころ、あのラモス瑠偉がけがしたさいにお見舞いに行ったそうです。そしてラモスが復帰後に中西さんと会ったとき、中西さんに対し「また来るよ、って言ってたのに、来なかったじゃねえか!」と怒ったそうです。お見舞いの帰りぎわ、日本人なら誰でも、「じゃあ、また来るから」と社交辞令を述べるものです。中西さんもこのように言って去ったところ、これをブラジル系のラモスは額面通りに記憶し、また来る日を待っていたのだと。外国人に対して日本式社交辞令、および婉曲的否定法を用いて話すと、あとあと面倒なことになるのだという訓示を、このとき、いただいたような気がしました。

中西さんが亡くなられたのは私が上海に赴任した後だったのですが、それからしばらくして1週間ほど帰国する機会があったので、お墓参りに行きました。しかし午後7時半ごろお寺に参ったら、すでに閉門しておりました。ちょっと考えれば当然理解できる結末で、なんというヌケ作、と自分を責めつつも、「中西さん、必ずやまた来ます」と誓いました。これは、社交辞令じゃありません。本当に行きますから。

追悼 手塚耕治くん (平成元年度主務) 同期を結びつける永遠の絆

平成2年卒業 住谷安史

同期との初の出会い

入学直後の昭和61年春、「駒場キャンパスのグラウンドで新入生を集めて試合をするので遊びに来ないか」―高校時代のサッカー部の尊敬する先輩であり、大学でも当時の主将だった鈴木修二さんに誘っていただき、足を運んだ。なんとなく気恥ずかしくて、シャツなどは持ち合わせず、単に見学するだけと決め込んで、その場に向かった。浪人明けのたるんだ体では、10分間ですらボールを追いかける自信がなかったのが本音だったかもしれない。その新入生歓迎試合で4年間の苦楽を共にする同期のメンバーに初めて出会った。

太陽のような存在

真っ黒に日焼けした愛嬌のある顔、コミカルな仕草、卒業してからはビヤ樽のような体型、いつも誰にも隔てなく気を配る優しさ、そんなことから先輩、後輩を問わず、誰からも愛されるキャラクター。グラウンドの上では、体力トレーニングのときなど、私も含めいつもビリ争いを演じていたにもかかわらず、「カラ元気！カラ元気！」とみんなを鼓舞して笑わせていた。主務という裏方仕事も、嫌な顔一つ見せず、みんなを引っ張ってまとめていった。

グラウンド以外でも、飲み会、カラオケ、麻雀、いつも周囲を笑いの渦に引き込み、心を温めてくれるバイタリティーは天性のものだった。同期の結婚式では、いつも手塚君の“フレー！フレー！”という声が会場に響きわたり、“Eins! Zwei! Drei!”というかけ声を合図に、同期一同による応援歌「ただ一つ」斉唱の先頭に立った。いつもみんなの心の中心にいた太陽のような存在が手塚君だった。

苦境での救世主

手塚君のプレースタイルについても触れておきたい。今や“ノールック・パス”も当たり前になったが、手塚君は当時から“ノールック・パス”を面白おかしくコメディータッチで演出していた。その身のこなしは、今思い出しても、思わず吹き出してしまいそうな愉快さである。

そんな手塚君が救世主になったプレーとして思い出すのが、大学3年（昭和63年）の秋である。東京都1部のリーグ戦は苦戦の連続だった。思ったような戦いができないまま全日程を終え、東京都2部リーグの東洋大との入れ替え戦という正念場に立たされた。

しかも、初戦引き分けで仕切り直しとなった入れ替え戦再試合は、前半に1点を先制される苦しい展開。後半の残り時間も刻々と少なくなり、しだいに焦りも募っていた。

そんな状況を救ったのが、ツートップのフォワードの一翼を担っていた手塚君のプレーだった。中盤からのスルーパスを受けて抜け出した手塚君は、相手ゴールキーパーを見透かしたように落ち着き払い、絶妙のタイミングを見計らって、右足インサイドキックでゴール隅に決めた。苦境の底から我々を救い出し、歓喜を爆発させた瞬間が忘れられない。まさに神様、仏様、手塚様だった。

別れと永遠の絆

あまりにも突然だった。平成17年冬、手塚耕治君は天に召された。同期の萩原君から送られた悲報が、安藤君から職場にいた私へのメールに刻まれていた。目を疑った。信じられなかった。

手塚君とのお別れの会には、卒業以来の多数の同期が集まった。同期だけではなく、先輩、後輩、友人、その他関係者が多く参列し、悲しみに打ちひしがれながら、手塚君を見送った。手塚君のことだから、卒業以来、離ればなれになってしまっていた我が同期の絆をまた結びつけてくれたのかもしれないとさえ思った。

手塚君とのお別れの会の後、程なくして、毎年、夏合宿で汗を流した山中寮のサッカーグラウンドを訪れてみたくなった。現役当時以来の山中寮とサッカーグラウンドである。

グラウンドは一面に雪が覆い、静かで、サッカーゴールもグラウンドの端の方に片づけられていた。手塚君が緑の芝生の上で、明るく走り回っている姿が目に見え、今にも手塚君の笑い声が聞こえてくるように思われた。一人たたずみ、手塚君を想った。

私はなかなか出席できずに恐縮しているのだが、

我が同期は毎年、年末に大学近くで集まり、当時の手塚君を偲びながら、旧交を温めている。今年に入ってから、手塚君が眠る故郷、桐生のお墓に、同期や後輩と一緒に花を供えにも行った。

もう20年以上前のことになってしまった昭和61年春の新入生歓迎試合に手塚君が来ていたのかどうか、今では本人に聞く術はない。しかし手塚君のことだから、きっと来ていたのではないかという気がする。そのときから、そしてこれからも手塚君は僕ら同期を結びつけてくれる永遠の絆なのだと思う。

現 役

1 部昇格のシナリオ描いて

法学部 4 年 大沢拓巳

蹴りはじめてから 18 年近く

幼稚園時代に半ば強制のごとく始めたサッカーだが、もう 18 年近く続けていることになる。思い起こせば、それこそ走馬灯のように無数の場面が頭に浮かぶ。合宿の食事を残すと怒る少年団のコーチ、10 時間以上もバスに揺られて遠征に向かった京都や大阪、県大会で優勝したときの記念写真。部員も少なく、顧問も初心者で、練習に苦勞した中学校のサッカー部。日常生活にも厳しい高校の監督、100 人を超える部員、初めて行った海外での試合、引退の瞬間。

ここまで振り返って気づいた。自分のサッカー史を時系列順に書き起こしても、あまり意味ないと。そこで、これまでサッカーを続けてきて感じたことを少し書きたいと思う。

敗北の意味するものを考える

サッカーをやっている以上、負けることは少ない。チームとしてのそればかりでなく、練習、試合の中での 1 対 1 や、チーム内でのポジション争いなど、多くの場面で敗北に直面する。それゆえ敗北をどう消化するか、あるいは敗北にどういう意味を持たせるかは、サッカーを続けていくうえでとても重要な問題だと思う。

敗北には 2 つの見方があるように思う。1 つは、敗北から学ぶという「失敗は成功のもと」的側面である。日常の練習で課題を見つけ、試合に向け

てその課題を一つひとつ克服していくには、ミス（＝敗北）に目を向けることは必要不可欠だと思う。だからこそ、負けた試合でもビデオを見るし、ミスをサッカーノートに書き残したりする。また、こうした技術の面以外にも「あのとき負けたから今日の試合に勝てた」とか、「一度決定機を外していたので、2 度目は…」といった思いは誰しも経験があるものだろう。

他方で、『敗北から学ぶものはない、負けたら無駄』という考え方があることも否定できない。元日本代表監督のオシム氏も、あるインタビューでそのように答えたことがあるという。また、メンタルトレーニングの世界では、負け試合のあとの反省よりも、勝ち試合のあとの反省の方が有効だという見解がある。敗北から学ぶことがいかに難しいかを示しているだろう。やはり負けたときには、「負けたという現実」の方に意識が集中しがちである。特に大事な公式戦などでは、この傾向はより強いように思われる。

思えば、私が所属していた少年団のスローガンは、「負けて泣くな、勝って泣け」だった。「勝って泣け」は、目標とそれを達成する喜びを示す言葉だ。敗北から学び成長することは、明確な目標を念頭に置いているからこそ可能なことなのかもしれない。久々にこのスローガンを目にしたとき、ふとそのように思った。

イメージを通じて自己表現

サッカーに限った話ではないが、明確なイメージを描けるかどうかは、プレーの成否に大きく関わることだと考えている。

高校時代、練習の初めに目を閉じてイメージを

する時間が設けられていた。そこでは、自分自身の基礎的なプレーをイメージして、ミスの修正を試みることもあった。しかしそれ以上に、プロの試合やゴール集などで見たプレーをイメージすることが多かった。もちろん、容易に実行できるプレーばかりではない。それでも、試合で似たような状況が起こったときに、そのプレーが頭をよぎるかどうかで、選択するプレーが変わってくることは間違いないだろう。だから、同じゴール集を、覚えるくらいに何度でも見ることもある。試験の前に暗記すれば、『1603年→江戸幕府成立』がすぐ導き出せる（これは極端な例だが）のと同様に、試合中に多くのプレーを頭に描ける気がするからだ。

大学に入って試合に出るようになり、特にフリーキックなんかで、ほんの少しはイメージを形に出来ているかと思う。こうしたイメージを通じた自己表現も、サッカーの醍醐味の一つだ。

生活文化としてのサッカー

高校時代、イングランドに行く機会があった。街の公園が芝生で、なおかつゴールが付いていること、ほとんどの人がひいきのチームを持っていることなど、さすがサッカーの母国という印象を受け、そのような光景は数多くあった。サッカーが生活に根付いているのだ。

翻って、日本のサッカー文化について考えてみた。協会などのシステム面については、世界的に見ても整っている部類に入るのはないだろう。特に、プロ予備軍でなくても、高校や大学に真剣勝負の場（種々の大会）が提供されているのは素晴らしいことだと思う。最近では、カテゴリごとのシステムに加えて、Jヴィレッジなどでエリート教育も行われ始めている。エリートの育成と、生涯サッカーを楽しめるような環境の拡大を両立していくことが、今後は必要になってくると思う。

その一方で、見る側の視点からは、サッカーが生活の一部になっているとはいえない面もある。先のクラブ・ワールドカップに浦和レッズが出場

した際、メディアはこぞって“日本代表”浦和レッズを盛り上げていた。それが日本人の気質なのかもしれないが、少し奇妙なことだ。イタリアでは、インテルのファンがACミランを応援することはないだろう。私も含めて多くの日本人にはまだ、“愛すべき我が街のクラブ”はないのだと思う。これはクラブが強いか弱いかに関わるものではなく、クラブを街の象徴と意識付けられるかどうかの問題である。実際、マンチェスター市民の半分以上はシティのファンだという話もある（真偽のほどは定かでないが）。

Jリーグが出来てまだ16年。日本のサッカー文化はまだ産声を上げたばかりだ。生涯スポーツ、地域スポーツとしてますますサッカーが発展していく必要がある。サッカーを続けてきた人間として、少しでもそれに貢献していきたいと思っている。

多くの人に会い多くの体験

18年もサッカーを続けることができたのは、サッカーが、さまざまな人と出会う機会を与えてくれ、多くの貴重な体験をさせてくれたからにほかならない。サッカーを通じて自分自身の成長を実感することができ、それが自分の生きる力になってきたと思う。

また、重要なエッセーにこのようなまとまりのない駄文しか書けないことは申し訳ないし、締め切りギリギリまで書き始めなかったことを少し後悔している。

最後になるが、創部90年という記念すべき年に、東大ア式蹴球部のプレーヤーでいられることを、それも最高学年、副将として過ごせることをうれしく思う。これを書いている時点で結果は分からないが、秋に1部昇格という最高のシナリオを演じられることを期待しつつ、このエッセーを締めくくりたい。

なぜサッカーを続けるのか

農学部4年 小藺健太

高校ではラグロス部に

もう、梅雨入りとのうわさで持ちきりですね。このエッセーの提出日は、何を隠そう妹の誕生日だったりして、プレゼントに何をかうかで頭がいっぱい、なかなか筆が進みません。本来このような文章は、引退してからゆっくり現役生活を振り返りつつ書くものなのかもしれませんが、せっかくの機会なので、残された現役生活もほぼ5カ月とだいぶ短くなってしまった今、僕が日々考えていること感じていることを書いてみようと思います。

早いもので僕が部に入ってもう3年が経ちました。当然のことですが、入部する前と比べていろんなことができるようになったし、おざなりな言い方ですが、人間的にも成長できたと思います。まだ足りないこと、やり残していることは山ほどありますし、これからそれらを全力でやりきることが残された数カ月における僕の、まあ目標であったり、夢であったりするわけですが。

しかしながら、最近、ふと『なんで自分は今サッカーをやっているんだろう』などと考えることが多くなってきました。

僕の高校までのサッカー人生は決して人に誇れるようなものではなかったと思います。小学生の時はずっと GK だったのですが、中学入学と同時に憧れのフィールドプレーヤーになりました。グラウンドがなかなか使えないので、練習の半分くらいが近くの公園でのミニゲームでした。走り込みもありましたが、いつもショートカットしていました。そして高校入学とともに、まさかのラグロス部入部、さらには1年後にまさかの退部。その後は暇だったので、地元でフットサルチームを作ったり、ゴルフの打ちっぱなしに行ったりしていました。

東大に入ったらサッカーを

このような僕であります、やはり高校でサッカーをしなかったことに対する後悔やら未練やらを抱えて、高校生活の残り半分を過ごしていました。

そして浪人時代、地元検見川のグラウンドで必死になってボールを追いかける青年たちを見て(今思えばサッカー部じゃなかった方がいいのですが…ユニホーム赤かったし)、「ああ、そうだ。東大入ったらサッカー部に入ろう」などと思ったのでした。

さて、だいぶ省略してますが、これが部に入るまでの僕です。実際に部に入ってから、多くの想像を超える発見にめぐり合いました。そんななかでも一番の発見は、僕はやっぱりサッカーが好きだったということです。肉体的に、精神的に、どんなに辛くてもやっぱりサッカーをやっていたい。「はい。僕はサッカーが好きです。やっぱり」なんて言うておりますが、上記の内容では、前述した疑問の答えにはなっていないことは、みなさんにもわかると思います。なんのために僕はこの場所でサッカーを続けているんだろうか、果たしてそれにどんな意味があるんだろうか。

プロになるというわけでもないのに、僕がうまくなったところで誰かが幸せになるわけでもなし。それなのに、なんで僕は親をはじめとする多くの人に迷惑をかけてまで、サッカーをしているのでしょうか。研究者として生きていきたいなどと夢見つつ、ほかの学生が勉強にいそしむなか、なんであえてサッカーに打ち込むのでしょうか。サッカーが好きだから、というのは必要条件にはなり得ても、十分条件にはなりません。しかし、それ以外にはっきりした答えをひねり出そうとしても何も思い浮かびません。

そこでようやく、僕は「どんな意味があるのか」という問い自体が無意味なものではないかと考えていたのです。「意味」というものは事後的に出来事やある行為に付加するものであって、それを今どんなに考えたところで、それは空論の域を出

ない。だからこそ、この瞬間を有意義なものにするために僕はやり残されたことをやらなければいけないんだと思います。そんなことを稲毛までの道すがら、黄色い電車で揺られながら考えています。

「気遣い」の大切さ

まあ、そんなわけで、僕は今もこの場所でサッカーをしているわけなんですけど、近ごろよく感じることに「気遣い」の大切さというものがあります。どんな行為においても「気を遣う」ということは出来ると思うんです。サッカーをしているときでも一つのパスをとっても、相手がどういうタイプでこのパスを受けた次にどんなプレーをしたがっているか、とか。狙った通りにパスが出せなくても、そういうことを考えていくことが大事なんだと思います。日常生活でも、あとで使う人にだとか、隣に立っている人にとか、見ている人にとか。

個人に対してでもそうですが、チームに対してでもです。よくいう「盛り上げる」ということもその一つだと思いますが、チームが今どんな状態で、どうすることが必要であるのか、よく考えることが大事なんだと。

プレーで引っ張るとかいうのも、そういうことなんじゃないかと。練習中でも試合中でも、全力で取り組む選手、抜くことを知らない人のプレーを見ると「オレも…」と触発されることが幾度となくあります。そんな正の連鎖の中心、あるいは発端にいられるような存在になりたい、近づきたいなどと思っています。

研究室に入って、今までと違い、チームとして研究活動を行っていくことがどんなものなのか、体感し始めているこのごろ、研究室の中でもそういうことができる人間になれたらと感じているわけです。

いろいろ書いてきましたが、こんな僕の駄文を読んで、後輩たちの中からは日本が直面している食糧問題、環境問題を真剣に受け止め、東京大学農学部に進学し、未来の日本の農林水産業を背

負って立つような人材が出てくるようなことがあれば幸せです。

失敗を経て部生活を続ける

工学部4年 齋藤 信

高校では部活でも勉強でも成果

僕は小学3年のときにサッカーを始めました。きっかけは仙台から盛岡へ引っ越したとき、近くに住んでいた親戚に勧められたからだと記憶しています。それが小、中、高と続き、高校卒業後に一時サッカーの厳しさに耐えられず、フラフラしていた時期があったのですが、結局大学でもこうしてサッカーをやっています。このエッセーでは、大学入学後にフラフラしてから途中入部を決断するまでの道のりについて書こうと思います。

始まりは高校時代。このころはとっても充実していましたが、部活と勉強のどちらも頑張りがなかったので、毎日が忙し過ぎて辛かったです。しかしその結果、部活でも勉強でも自分の満足のいく成果を挙げられました。この高校時代の部活期を切り抜けたときに身につけた信条が「サッカーやりすぎると死んじゃうけど、勉強はやりすぎても死なないんじゃない!?」ということです。要は、死ぬほど努力するってことができれば、人間できないことなんてほとんどない、ということで、どうしようもない余裕ぶっこき無敵人間になっていました。

ボート部に入ったがすぐ退部

そして部活引退後の受験勉強期、勉強のやりすぎで本当に死んでしまうことはなく大学に合格して、さらに気を良くしたために、あの無敵理論のもと、大学では全神経を自分の人生の目標探しと勉強に向けようと意気込んでいました。ただ、一点集中するとはいっても友だちがいなくて寂しいので、高校で死にそうになったサッカーよりもずっとラクそうな響きのボート部に入っていました。

た。ボート部新人歓迎コンパでのタダ焼肉に誘惑されたことは否めません。

今、僕がサッカー部に所属していることから分かるように、この試みは失敗でした。どうしてだめだったのか。これが大学生活で得た、重要な教訓であると思います。

まず、ボート部を辞めたのは、ボート部の現実
は東大留年率 No.1 を争うくらいの超ストイック・マッスル大好き集団だったことや、艇庫と呼ばれる合宿所に寝泊まりして、毎日が合宿のような生活を義務付けられていることなどが理由です。

失敗の根源は、自分がその目標の向こうに本気で憧れるような風景がイメージできていなかったこと、「死ぬ気で」努力する決意ができていなかったことだと思っています。「死ぬ気で」というのはどうも程度がはっきりしない表現なのですが、自分のすべてを賭ける価値があると認めることを指しています。

自分が高校生だったころと大学へ入学したころの、自分の「死ぬ気で」の基準をくらべると、若かりし高校生のころの方がギリギリのラインまで踏み込めていたと思います。当時はすべてを注ぎ込む覚悟がありました。大学入学のころは、覚悟がなかったからこそ拘束を恐れてボートを辞めたわけです。実際、大学入学後は自分で何を考えるでもなく、ただただ周りの雰囲気に流されて生活していたように思います。

成功のイメージを持て

大学合格までの順風満帆からは一転、何をやってもダメ状態に陥った僕は、しだいにギャンブルの魅力に取り付かれていきました(笑)。

張り合いがなく時間の有り余る毎日は正直苦痛でした。苦悩の日々だったはずなのだけど、何も考えず何となく過ごして時間を浪費していたといった方が正確かも知れません。同じ高校でギャンブル仲間のあの人と「サッカーしたいよな?」とかいいながら、朝、大学へ行く途中にパチンコ店へ吸い込まれ、バイトに行ってもそのまま夜、のような感じの生活でした。

こんな生活の中、たまに高校の先輩や後輩なんかと OB 戦でサッカーやフットサルをするのは格別の楽しみで、あるとき、サッカーサークルに入ろうと計画しました。そこへ友人から誘われ、また同じ高校だった中野さんも人工芝で本気サッカーしたそうにしていたりしたので、サッカー部に体験入部することにしました。

正直、ボート部に入っただけで辞めた経歴があるので、今度もまた辞めるのではないかと少なからず思っていました。しかも、体験入部したときはちょうど秋季リーグ戦の前で、練習があまりにもきつ過ぎたり、一部の部員に暴言を吐かれたりして心が折れそうになったのですが、自分の体のあまりの衰えようと、部員に体力的にも技術的にも圧倒的に負けていたこととに腹立たしく思いながらも、いつのまにか続いていた。このときは、何としてでもこのときの自分の生活環境を変えてやるぞ、という強い気持ちを持っていました。

何かを成し遂げたいければ、自分のすべてを捧げる覚悟が必要です。そして、その覚悟をするために、その先にある成功のイメージを持たなくてはなりません。これは今までに挙げたような、生き方のようなことにだけ当てはまるのではなく、例えば、日々のサッカーの練習で、きょうの失点は DF と MF の間で簡単にワンツーを通してフリーにさせた、理想的にはこういうふうを守るべきだったから次はこうしよう、などいろいろな場面に生きる考え方だと思います。

エッセーに書くことにより実践への決意とするとともに、よろしければみなさんにも考えてみてもらいたいメッセージです。

『翼』

工学部 4 年 鈴木亮平

多くの人に支えられて

けが人入りしてから 3 ヶ月がたちますが、けが人という立場に立ってみていろいろなことが見え

てきました。最近強く感じるのが、選手はたくさんの方の支えのもとでプレーできているのだということです。

練習には鈴木さん、OBコーチの方々がいる。トレーナーの方々も一人一人ひとりをみている。転がっていったボールを走って取りにいき、ボトルの水を替えてくれるマネージャーがいる。などなど。多くの人たちに支えられているわけです。

ただ、その人たちは試合には出られません。ピッチに立つのは僕たち選手です。もちろん選手全員が試合に出られるわけではありませんが、試合に出る選手は出られない選手を含めて、多くの人の思いと共にピッチに立つわけです。試合に出られない選手も、多くの人の思いと共に練習をするわけです。そう考えると、一つ一つの練習、一つ一つのプレーを無駄にはできません。もちろん、サッカーがうまくなりたい、強くなりたい、それが理由でサッカーをやっているわけですが、サッカーをやる以上、いろいろな人の思いを背負っているのです。自分のため、そういった人たちのためにも、勝利を掴み取らなくてははいけない。そんなことを考えて僕は今、日々励んでいます。

飛ぶしかない

現在、けが人でチームになんら貢献していませんが、そんな使えない僕に力を貸してくれているトレーナーの方々、心配し励ましてくれる仲間がいるわけです。そういう人の思いを僕は背負っているわけです。それは他の選手にも言えることで、選手はいろいろな人の思いを背負ってプレーするわけですが、それは選手にプレッシャーをかけ、のしかかってくる重荷なのでしょうか。いいえ。その思いが選手に力を与えるのだと思います。それがあから前に進める、高く飛べる。翼なのだと思います。僕の背中には翼が生えています。だったら飛ぶしかありません。ときにはつらいこともありますが、羽ばたき続けるしかありません。

上の文章は2年生のときに書いたものですが、

4年になった今でも日々感じることです。怪我が多かった僕が現在サッカーを楽しめているのも、多くの人の助けがあったからだと思います。また、何も言わずに僕にサッカーを続けさせてくれている両親には特に感謝しています。プレーヤーである以上、この与えられた翼を使って、プレーで感謝を表現できればと思います。

サッカーと私

工学部4年 高橋信行

小学生でのめりこむ

私が小学2年生のときJリーグが開幕し、若い人たちにとってスポーツといえばサッカーという風潮ができかけたころ、私もその風潮にのみ込まれてサッカーを始めた。当時私の通っていた学校の地域にはサッカーと野球のスポーツ少年団があったが、特に迷うことなくサッカーを選んだ気がする。幼稚園に通っていたころから水泳を習っていたせいも、小さいころからスポーツが好きだったかなぜサッカーを始めたかは自分でもよくわからない。きっと友達の影響ではじめたのだろう。親の影響も全くなかった。

しかし、何となく始めたサッカーであったが小学校の学年が上がるにつれどんだのめり込んでいった。週に1回の少年団だけではものたりず、放課後は大勢集めてグラウンドでサッカーをしたし、ひよんなことから地域のクラブチームで練習させてもらったりもした。

ドリブルに興味

当時の自分はドリブルにしか興味がなかったといっても過言ではないだろう。ゴールを決めることよりドリブルが醍醐味であった。サッカーにおいて自分の力を一番示することができるのはドリブルだと考えていたのだろう。現在もこの幼少期に作られた概念は若干残っている気がするが、一番大事なのはゴールを決めることであり、ディフェ

ンスにおいてもパスにおいてもサッカーの力を見せられるものであると、いつの間にか考えるようになっていた。

コーチからもらったドリブルのビデオにはフェイントの紹介やマラドーナ、パジジョ、ペレなどのドリブルが収録され100回くらいみだし、フェイントはすべて練習した。試合ではそれを使おうとするあまり「高橋にボールを渡したらパスは返ってこないと思え」とコーチがみんなの前でいって笑われた記憶がある。文集などを見ると将来の夢に「サッカー選手」と書いているが、少年なら誰もが一度は見る夢である。現在の少年たちはどんな夢をいっているのだろうか。

当時の自分を振り返ると誰よりもサッカーが好きな自信があったが、サッカーが好きであることとサッカーがうまいことはまた別問題であった。周りにトレセンや有力なクラブチームに合格している人たちを羨望の眼差しで見ることができず、少年団のチームとして県大会やトーナメントで勝ち上がることはなかった。それでも三浦知良の本をよんで自分と重なる部分は多いと大いに希望を抱いていた。このころサッカー以外には、やったハイパーヨーヨー、ミニ四駆、ポケモンなどには、たいてい手を出し、水泳と書道をやりながらのんびりと生きていた。

中学では部活に

中学に上がると部活動という形でサッカーを続けることにした。地元のクラブチームから誘われていたが、「学校でやればいいじゃん」と浅はかに考えていたため断った。しかし、いま振り返ると浅はかではあったが、いろんな意味で正しかったと思う。

周囲の友達の中には東海地方ではかなり有名なクラブチームに合格して入った友だちもいた。合格を蹴って中学の部活に入った友だちもいた。

まず中学の部活動に入って衝撃的だったのが徹底的な上下関係。先輩は全員怖くみえた。実際、そうである先輩もそうでない先輩もいたが。

ある日グラウンド整備をばれないようにさぼっ

たら、そうである先輩に呼び出されて「バレタか、これは終わったな」と思っていたら、意外にも「サッカーがんばるとるな。先輩の言うことは聞け！」みたいな感じでことが終わり、涙が出そうになった。

自分のサッカー観に関してはまだドリブルが50%以上を占めていたし、実際自分の周りでトレセンや有力なクラブチームに受かっている人たちはドリブルがうまい人たちばかりであった。監督もパス禁止で練習試合をさせたりして個人技を重視する人だったので、私のドリブル熱は収まることはなかった。

しかし、このころ、トップ下から3-5-2というフォーメーションのサイドハーフに移ったため守備をせざるを得なくなり体力的な問題からパスが増えてきたように思う。

中学のときのチームはなかなか強く3年のときに県大会まで進んだ。公立中学ということもあり係活動や地域活動にも非常に活発な学校だったため、委員会に参加したり地域の人たちと町を清掃したりすることにも精を出していた。また釣りをサッカー部の友だちと一緒にやっていた。土日の練習は朝9時からだったので早朝の3時4時から池や川に行って、練習に間に合うように帰っていた。いま振り返ると非常に懐かしい気持ちになる。

高校でもサッカー部に入るが、中学の部活動の引退を機に自分のなかでサッカーに対して一区切りついた気がする。これ以降の私とサッカーについても書こうと思ったが、書き記すには余白が足りない。またいつかの機会に振り返ることにしよう。

サッカーへの姿勢

経済学部4年 高松 敏

練習量最多を目標に

僕は高校時代に不完全燃焼でサッカーを終えてしまいました。それがくやしくて、大学でサッカー

をもう一度やり、できることは全てやって、自分がどれだけサッカーがうまくなれるのかを試したいと思っていました。受験を終え、本校に入り、何の迷いもなく「ア式」に入りました。

僕は高校時代にサッカーにかかる時間が少なかったことを後悔していたので、1年生のときは、とにかくたくさん練習して、なるべくサッカーに時間を使おうと思っていました。だから、部員の中で一番練習量を多くすることを目標にしました。特に、夏休み以降は一番早くグラウンドに行き自主練習をし、全体練習を終えても、遅くまで残って自主練習するということを続けました。このようにして、本当にほとんどの時間サッカーをしていました。そのような努力の結果もあり、1年生の最初はかなりサッカーが下手だった自分が、1年生の終わりには驚くほど成長し、満足して1年を終えました。

2年生になっても、僕のサッカーに対する姿勢は1年生のときと変わりませんでした。とにかく、たくさん練習しようと思い、それを実践していました。しかし、試合ではミスが多く、FWなのにまったく点数が取れませんでした。練習してもなかなかうまくなならない中で、やり方を変えなければならぬと感じました。そのときの僕は確かに多くの時間練習していましたが、何も考えずに練習をしていたり、集中が切れているのにだらだら練習することがありました。だから、毎回の練習で目標を持ち、その目標を達成するためにはどうすればいいのかを考えながら練習をすることにしました。その結果がすぐに現れたわけではありませんが、シーズンの最後のほうになると、伸び悩んでいた自分がまた徐々に成長できるようになりました。

国公立大会で得点

いろいろ試行錯誤し2年間を終え、大学3年生になりました。僕は、一度も1軍に上がれず、大会にも出ることはできませんでした。そんな中、3年生の春に東京都国公立大会にレギュラーで出場するチャンスを獲得することができました。そして、

その大会でチームは3位になり、僕も得点を取るという形でチームに貢献できました。

この国公立大会は、僕の中でとてもいい思い出になりました。この大会を通して、苦しい時期が続いても、努力は報われるということを実感できました。そして、試合を見ているチームメートに応援され、それが自分を後押ししてくれたことを感じ、試合している人も応援している人も気持ちを一つにして戦うことがチームにとって一番良いと思いました。それまでの僕は、ただ自分がサッカーをうまくなることだけしか考えていなかったのですが、この大会を終え、「2年間でア式のさまざまな人にお世話になったし、その分まで今後は応援を含めいろいろな形でア式に貢献していこう」と考えるようになりました。

大会の後、自分は一時期、1軍にあがることができました。そして、得点を取ることもできました。秋季リーグに出ることができなかったのは残念でしたが、チームを盛り上げるという意味では少しは貢献できたと思っています。

3年生の1年間は、大学3年間の中で最も技術的に成長しましたし、自分がア式の部員であり、なんらかの形でア式に貢献したいという気持ちが強くなった1年でした。

ア式を中心にして僕は大学生活を過ごしてきました。いろいろな思い出があり、たくさんの先輩、後輩と出会いました。ア式が僕の大学生活を充実させてくれたと感謝しています。その恩返しと、自分自身のために、どんな形であってもチームの勝利に貢献し、1部昇格を達成して最後の年を終えたいと思っています。

部を理解し好きになって

工学部4年 千布勇氣

真面目さは格段に上

僕の生家がある所は信号、コンビニがひとつもない。いわゆるド田舎。そんな田舎の幼稚園だが、

サッカーゴールはあった。気づいたら自然にボールを蹴っていて、小3から本格的な部活にも入った。それから自然の流れで高校までずっとサッカー部にも入り続けた。サッカー部の仲間は小中高とそれぞれよい仲間たちばかりで、好きなことをやりつつ楽しい日々を過ごしてきた。もちろん悔やしかったこと、苦しかったことなど様々あるが、これらも含めてすべてがかけがえのない思い出だ。

そうこうしているうちに10代も後半になり、東大に入学するが、浪人時代は生まれて初めてサッカーを取り上げられたせいか、サッカーが恋しかった。大学に入ると授業の心配、休みの少なさ、練習のつらさ、現役部員の真面目さなどまったく知らずに、これまた自然に入部を決めた。

入部直後、部の現実と直面し、サッカー部らしさ、大学らしさを強く感じた。まず何より部のストイックさだ。部員の真面目さはこれまでのどの部活よりも格段に上。みなが真剣そのもの。練習中はもちろん、私生活にいたるまでそうだと思う。やはりみなそれなりの苦勞と犠牲を覚悟して入部してきているからなのだろう。

そして大学サッカーの大きな特徴は学生が主体であるところだ。まさに部員主体の団体で、高校までの大人が敷いてくれたレールの上を走ればいいのとまったく違う。あらゆることを学生が動かしている。活動場所、練習、大会、費用、備品、外部との関わりなどとにかくすべてだ。部員がしっかり自分の仕事をしないとサッカーができないのだ。

主将としての方針

月日は流れて最高学年になり、サッカー部というものを理解して好きになり、主将に立候補した。部を変え、強くするために。これまではほぼ毎日同じ練習で、毎回言われることが同じだった。たしかにトラップ、パス、バランスなどといった根本的なことは何よりも大事なことである。それは疑う余地がない。しかし本当にそれらのことを多くの部員が、毎日試行錯誤しながら必死になって

改善しようとしているようには見えなかったし、つらい練習をやりきることで手いっぱいだった様子にも見えた。また高校時代の経験で、下手は下手なりに、ある程度の相手になら勝つための術があると知っていた。うまくやれば東京2部のチームぐらいには勝てるのだ。

だから僕は、

▽ある一定期間ごと、練習ごとに重視することをしぼる

▽テーマ設定、細かい指導、練習の多様化によりヒント、刺激を与える

▽組織的に動くように全体で統一的に狙いをもたせる

などのことをしようと思った。

全部が全部思うように進んでいるわけではないし、これまでの習慣というかやり方というか、そういうものをすぐ変えるのはやはり難しいことだと感じている。そんな中でも確実にみんなの動きや発言などに、これまでなかった変化がみられているのはうれしいことで、若干手応えもつかんでいる。

こういうことができたのもわがサッカー部だからこそだと思う。他の大学ではこうはいかない。みなが真面目に要求に応じてくれるし、新しい練習にも真面目に取り組んでくれる。さらには部員やOBなどから要求、不満、提案を多数いただいている。だからいろいろ試せるし、軌道修正もしやすい。こんな部員に恵まれて幸せだし、ほんとうに感謝している。

春季の後は秋季に向けてもっとも大事な日々が待っている。全体としてやりたいことをしっかりやって、有意義な鍛錬を積んでいけば、結果はついてくるものだと信じた。今シーズンやってきたこと、やっていくことが正解か不正解かはわからないが、日々の練習は充実しているし、雰囲気も僕の思い描く理想に近いと感じている。最後に秋季の試合に勝って、楽しく終わればこれ以上のことはない。

悔いなくやろう

工学部4年 中川 隆

中学の部活ではじめる

ウケねらいの面白い文章などは、自分には到底書けそうもないので、とりあえず、自分がどのように今までサッカーとかかわってきたかを振り返りつつ書き始めてみることにしようと思う。

僕がサッカーを始めたのは中学1年のとき、学校の部活としてである。小学校のときまでサッカーは、他の野球やバスケットなどのスポーツと同様、友だちと一緒に休み時間に遊ぶ程度のものであったのだが、中学では迷わずサッカー部に入部したのを覚えている。おそらく一番面白いと感じていたからだと思う。特にサッカーが強い学校ではなかったのも、大会で上の方まで勝ち上がって次を勝てば…、などという特筆すべきエピソードなどないのだが、毎日夢中でボールを蹴っていた気がする。(中略) こうして高校2年のときに、受験のためサッカー部を辞めたのだが、このときは、大学でまでサッカーをやるとは思ってもいなかった。

真剣に練習に取り組む

実際、大学に入学した当初はサッカー部には全く興味がなかったのだが、1年半ほどの受験勉強でなまった自分の体と、もはやどうしようもなくなっていたサッカーの技術に嫌気がさし、また打ち込むべきことの何もない手持ち無沙汰感にさいなまれ、そして中学のころから一緒にサッカー部で技術にはとても定評のあるF君の入部もあって(すいません、林さんの入部は特に関係ないです)入部を決意した。

部に入って今までで一番強く感じたことは、ひとりひとりがとても真剣に練習に取り組んでいること。と同時に今まで自分がサッカーに対して不真面目に取り組んできたことをとても後悔している。別に不真面目にやろうと思ってやってきたわ

けではないが、今のこの状況と比べれば、不真面目と言って差し支えないと思う。まさに後悔先に立たずである。

後になってどうこう言っても仕方ないのでもうやめにするが、引退後にこんなことは言いたくないので、おそらくあと半年をきってしまった自身のサッカー人生における目標は、悔いなくやりきるということである。

引退してこの部誌を読み返すときに「本当によくやったな」と、自分で納得することができるよう、最後まで全力を出しきろうと思う。

わがチームは恵まれている

法学部4年 中島悠司

6年間のブランクと受験

この部に入って4年目、ついに最後の年になってしまった。入学して間もないころ、高校時代にやり残したことに憧れて部活をやろうと思い、小学生のころに熱中していたサッカーに再び戻ってきた。

6年間のブランクと受験は、入部当初の自分を本当に苦しめた。練習についていくこと自体で精いっぱいそのときは何かテーマ、課題を持って練習に取り組むことはできなかったような気が今となってはする。一日一日の練習に全力で「挑む」ことしかできなかった。でもそのときはそれでよかったのではないかと、今ではそう思う。「全力を出し切る」それは簡単なようで難しいこと。1年目に身をもって知ることができた。

2年目、春合宿でけがをしてから数ヵ月実践を離れてしまい、そして復帰した後もなんだか調子が上がらず、辛い年ではあった。サッカーをしていても「前はこんなはずではなかった」「どうしてこんな簡単なことができないんだろう」と思い、自分のプレーに疑心を持ち、自信をなくしていた時期もあった。自分を変えるのは自分しかいない、とは分かっている、それが出来ずにずるずると

時間を過ごしていた。でも、新人戦前に少しずつ調子が戻ってきた。やっぱり新人戦という大会がなにか契機となり、目標となり、変わることが出来たのかもしれない。そう、目標を持つことは大切である。しかもそれは大きく、高いものでなくていい、むしろ僅かでも小さくても、自分の第1歩を踏み出すアシストとなるようなものであればいい。そんなことを学ぶことができた。

学連の幹事として

新人戦を終えて半ばをすぎた。3年にもなると、いままで追隨していればよかったことでも自らが実行しなくてはいけなかったり、知らなくてもすんだことを新しく知る機会がたくさん増えた。自分の場合は都学連の学生幹事で3年目では都学連の経理部の長としてほかのチームや団体と接することが多くなった。そんな中で、自分のチームの評判や他のチームの実情に触れた。「東大はうまくないけど、頑張るから戦いにくい」「人工芝のグラウンドが羨ましい」「うちは大学にグラウンドがないから一般施設を借りて練習している」「部員が足りないので大会を棄権します」などなど。

今までは東大サッカー部を内部から見るが多かったけれど、外の視点で捉えることができた。それは、つまり今まで当然のものとして思っていたことを再確認するきっかけでもあった。今までなんとも思わないことでも素晴らしいと再認識したり、疑念、不信を感じることもあった。でも、なんだかんだと心に抱くことはあるけど、やっぱりうちのチームは恵まれていたのだという考えにたどり着いた。グラウンド、コーチ、スタッフなど環境面はもちろん、チームメートにも恵まれた中で再びサッカーができたのは、神様をあまり信じていない自分であっても感謝しなくてはいけないのかもしれない。3年目、自分を取り巻く環境を見詰め直すことができたのでは。

そして、4年目の最終学年、いまエッセーを書いている自分はあと5ヵ月で引退する。そのときなにを思い、さらに5年後、10年後に大学での

思い出として何を思い出すかは知らないけれど、そのころの自分に感謝だけはしているようでありたい。それを実現することを未来の自分と約束したい。そういう意味でここにエッセーとして残しておく。

あっという間の2年間

教育学部4年 中野 誠

大学入学が、ついこの前のような感覚がしてならない。しかし、今では最高学年の4年生であり、あと10ヵ月で卒業を迎える。部卒業まで6ヵ月。岩手県久慈市、人口4万人、過疎の町出身のGK中野誠が部生活を振り返ってみようと思う。

入部と退部

思えば、私は東京大学ア式蹴球部には2度の入部を経験している。1度目は1年の春で、2度目が2年の夏である。しかも、1度目の入部は1ヵ月も所属せずに去ることとなった。主な理由としては父親の失業であり、自分の力ではどうすることもできないものだった。やめたくてやめたわけではなく、しばらくは小さいころからのサッカーを裏切ってしまったような罪悪感を感じ、軽い自己嫌悪に陥っていたと思う。だが、サークルなら入らない方がいい、いつか部活に戻りたい…と思う意志は、2度目の入部に至るまで薄れることなく抱いていた。

再び入部

大学生活も2年目を迎えた春。新人歓迎コンパや何やらで学内の雰囲気は普段とは違う装いをしている。自分は何をしていたかという、オリ合宿にも行かず、日々お金を稼ぐことに夢中だった。夢中になりすぎた私は十分過ぎる額を貯め込んでいた。そんなときに、駒場のスポ身でサッカー部の方々と一緒になる。とくに同じ学年のMによく勧誘され、駒場の3学期が終わるころには自

分の中で決心はついてた。

自分の持つ1日24時間、それは誰もが持つ24時間。自分の時間はただ単に大学の単位やバイトの給料と交換していくだけのものか？ 自分の時間は周囲の人よりも充実感あるものにしたいと思わないのか？ と考えた末、2年の夏から御殿下まで通う日々が始まる。

バイトもやめず、時間的に非常にハードであった。しかし時間は本人の使いようだと思えば、忙しさもまた充実感であろう。こうして、非常に長いブランク(浪人しているせいでもある)があったが、人生最後ともいえるサッカーが始まった。

余談ではあるが、このときTとSも入部して平均身長をアップさせた。彼らが部内でアップさせたのが平均身長だけではないことを祈る。

プレーヤーとして

あっという間の2年間だった。2年前は、あと2年半かぁと考えることがあったが、今は日々の練習、練習時間をとってももったいなく思ってしまう。こうするべき、こうしたほうがいいのかと思うものの、理想を現実にさせることがなんと難しいことか。日々、ふがいなさを感じてしまう。しかし、ふがいなさを感じることができれば、次の瞬間にそこを改善できるように行動すればいいだけだ。それは、練習の心構えかもしれないし、筋力的なものかもしれないし、メンタルかもしれない。何が得意で何が不得意とかではなく、がむしゃらにのばせるところはすべてのばしたい。

残す6ヵ月について

「結果を残す」この一言に尽きる。なにも意識しなくても、結果は出てしまうが、そうではない。端的に言えば、去年以上の結果である。現在(2008年5月末)、春季リーグの最中であり、今週末に対戦する立教大学は予選リーグ突破をかけた重要な一戦である。この試合には勝たなければならない。そして、秋季リーグでは私が「東大ア式一部上場」と言っているように、必ず東京都1部リーグに行きたいと思っている。

プレーヤーの皆さん、マネージャーの皆さん、そして指導陣の方々、チーム内の競争意識の徹底とサポート、厳しい指導をよろしくお願いいたします。

「仲間」

理学部4年 那須雄介

なぜ入部したか

90年という部の伝統に圧倒され、小生のような者が後世まで残る(であろう)エッセイを書くということに対し、いささか畏怖の念を禁じえないといった心境である。

さて、今回は僕がなぜサッカーを大学に来てまでやっているかということに関してお話ししようと思う。

始まりは3年前の4月。同じ高校出身で中学のころから仲の良かった水澤君と、よく授業が終わってはサッカーサークルや「ア式」の練習に参加していた。2人とも迷っていた。せっかく浪人してまで大学、それも東京大学に入学して、サッカーに没頭していて果たしていいのだろうか。勉強は？ 中学高校と6年もの長きにわたって(いや、現在進行形かもしれない)男子校の中で抑圧された女の子との出会いは？ FFは？ ドラクエは？ ウイイレは？…

さまざまな葛藤が両人の頭で巻き起こった。夜も眠れない日々が続いた。というのは嘘だが、このままでは埒が明かない…。そこでこの問題を解決するべく駒場の食堂(2F)で会合が開かれることになった。以下はそのときのやり取りの一部である。

那須「やはり我々は拘束時間が短く自由度の高いサークルに入るべきでは？」

水澤「うむ。確かにそれも一理ある。だがよく考えてみたまえ、那須君。あんなに素晴らしい人工芝グラウンドがほぼt=∞の間使え、スタッフ、

シャワー付き部室という素晴ら（以下略）」
那須「よし、ア式に入ろう！」

こうしてア式に入ることを決意した2人には、5月から新しい仲間との厳しい練習が始まった。ある程度予想はしていたものの、ここまで練習が厳しいものだとは思わなかった。5月の間はほとんどボールに触らせてもらえず、ひたすらグラウンドの周りを走っていた。腐りかけて三四郎池にやかんのふたを落としそうになったこともあった。ストレスで鬱になりかけたこともあった。激しい頭痛に襲われたこともあった。

いろいろな仲間たち

そんな僕の心を繋ぎ止めてくれたのが仲間たちだった。埼玉のヤンキーと皆に恐れられたO君（俗称：親分）や運動量とあごに関しては他の追随を許さないT君（彼女と抗争中2008年5月現在）、いつも眠そうだがその視線はいつもマネージャーに注がれているN君（学連に行く日はワックスを欠かしません）、皆から猫と呼ばれる、魚と女に目のないK君（よく臭います）、岐阜の神童と呼ばれなかったT君（最近授業が同じ女の子に対してストーカー行為に及んでいるとの目撃情報多数）、サッカーより3度の飯よりマネージャーが大好きなN君（出待ちはちょっとね）、おそらくプロ並みのスピードと筋肉をもつ水澤君（付き合い始めて10年だがその生態は未だかなり謎）、一見抜けてそうに見えて実際抜けているNさん（Tの存在は大きいです）、静かだが仕事ができる頼れるマネージャーKさん（キレたら怖い…のか?）、佐賀の頼れるおじさんCさん（彼の佐賀弁はかなりレア）、会話が下ネタになると断然目が輝くテクニシャンM君（真面目そうに見えて結構…）、基本ハイテンションなF君（うざがられることしばしば）、これまた always ハイなS君（ラーメン次郎の常連）、かなりオトナなN君（酒の入った彼はもはやセクハラおやじ以外のなにものでもない）、のっぴN君（でかい）、すまし顔のS君（イチャイチャしやがってこの野郎）…。彼ら/彼女らに

は本当に助けられた。もちろん先輩後輩にもお世話になった。彼らの温かい励ましがなければ、現在僕はここにいなかったかもしれない。

大学でサッカーをやる理由

今回のエッセイの主題は「僕が大学でサッカーをやる理由」であった。前置きはこれくらいでいいだろう。本題に入る。

正直な話、入部したのは自らの積極性からではなく、友人（水澤君）の強い勧誘があったから、という消極的理由からである。これは否定できない事実である。しかし入部した理由がなんであれ、部活を4年間やめずに続けていかなければならない理由が僕には存在する。

ボールと友達になりたいから。

プレーはもちろん、その他雑務でも部に貢献したいから。

そして何より大切な仲間と一緒にいたいから。

これが結論だ。あと5か月やり抜きたい。

部生活を通じて人間的に成長

工学部4年 西 健吾

創部90周年ということで、改めてこの部の伝統をひしひしと感じています。

環境と雰囲気にはひかれて入部

自分が入部するきっかけになりましたのは、まず環境面の良さがありました。人工芝のグラウンドにシャワー完備の部室、素晴らしいコーチやトレーナーさんに恵まれていて、「サッカーをするならここしかない」と思えるほどでした。

そして何よりきっかけとなりましたのは、部員の雰囲気の良さです。入部前にさまざまなサッカーサークルに出かけてみたものの、いまいち空気になじみ切れずにいた自分にとって、真面目に

サッカーに取り組む部員の雰囲気はなじみやすいものでした。

こうして入部し、サッカー自体だけでなく、さまざまな人との触れ合いを通じて、貴重な経験をさせていただきました。これだけ全力で練習をしているので、身体的、精神的に負担の大きいことが多かったのですが、なかなかプラスにとらえなかったこともありましたが、そのときそのときで精いっぱい頑張ったつもりです。

卒業後は現役の支援を

こうして今強く感じているのは「自分という人間と付き合うのは難しいな」ということです。ときにはいいものが出せたり、ときには出せなかったり。頭ではわかっていても、心も体も思うように行ってくれないことがしばしばあって、そのたびにどうすれば上手くいくのか試行錯誤を繰り返してきて、だいぶ上手くなったものの、いつでもできるわけではありません。これはきっと一生ついてまわる問題なんだろうと思っています。

さまざまな体験を通じて、入部したばかりのころと比べて、人に感謝することだったり、常に努力する姿勢だったり、仲間を励ます姿勢だったりを学ぶことができ、少しは人間的に成長することができたんじゃないかと思っています。これもこの部をここまで存続させ、このような充実した環境を整えてくださったOBの皆様方のおかげと思い、感謝しています。今後この部を離れても、ここで得た経験を活かし、そして現役の支援をしていきたいと思います。

主務として思うこと

文学部4年 船本洋平

「楽しさ」だけでは物足りない

東京大学ア式蹴球部は創部90周年を迎えました。ア式蹴球部というコミュニティを通して数多くの人々がサッカーというスポーツに情熱をかけ

充実した時間をすごしてきたことを考えると、創部90周年の偉大さを感じざるを得ませんし、節目である今年現役に対する期待も大変大きいものと感じ、部員一同気合が入っています。もちろん私も今年こそ試合に出てチームに貢献したいと思っています。

しかし、大学入学当初は今のようなサッカー中心のライフスタイルは想像していませんでした。

そもそも私が「ア式」の一員となったのは、5月中旬と他の仲間と比べ多少遅いものでした。東大に入学して間もないころは、毎週のようにコンパに出掛け、サッカーサークルではミニゲームに精を出し、五月祭で出店するチョコバナナの味付けの研究を行っていました。当時求めていたものが「楽しさ」であり、大学生活とはそういうものだと思っていました。

しかし、何か物足りなさを感じるようになりました。中学高校の部活にあった試合に出る喜び、相手チームに勝つという目標を努力して達成したときの喜び、受験時に感じた猛勉強の末に高得点を取るという喜び等は皆無でした。逆にその目標に至るまでに感じる焦りや不安といった感情もありませんでした。ただ今が楽しいという感情に浸るだけの自分に嫌気がさし、多少遅れをとったものの中学高校の同級生の中川と共にア式の門をたたこうと決意し、当時ア式の部員であった同じクラスの友人にお願いして御殿下グラウンドまで連れて行ってもらい入部しました。入部してからは、周りのレベルの高さに圧倒され今後の不安が生じたものの、うまくなって試合に出てやるという想いのもとにがむしゃらに頑張ってきました。

周りの人たちに支えられて

しかし、3年間、何も部に貢献することができなく、何らかの形で部に貢献したいと思い主務に立候補しました。主務を務めている中でうれしく感じる場合があります。それは東京大学運動会ア式蹴球部という1つの集団に関わるすべての人が、さまざまな形で我々の勝利を考え何か行動を起こそうと考えているということです。練習を見

てくれるコーチやトレーナー、今年から応援や新入生勧誘活動に力を入れようといってくれた後輩、プレイヤーがいいコンディションで練習できるようサポートしてくれるマネージャーやアシスタント・トレーナー、大切な休日にグラウンドまで足を運びアドバイスをくれる諸先輩方など。

また優先的にグラウンドを使わしてくれるとともに必要なものは購入してくれる学生課体育チームなども我々のことを考えてくれています。まだまだ私自身の目の届かないところで部に対して貢献してくれている人もいることでしょう。私のような未熟者が主務を務めることができているのも、そういった周囲の人たちの力によるところが大きいと思います。そういった部のことを考えて行動してくれている人たちには大変感謝しています。

90 周年に際しての決意

工学部 4 年 水澤仁雅

歴史を組織として継承しなければ

ア式が創部 90 年になることを改めて考えると、本当にすごいことだと思う。同時に、この節目の年に選手として部にかかわってられることは本当に幸せなことだと思う。どんな組織であれ 90 年存続することは大変なことだし、こと日本のサッカーチームのなかでこれほどの歴史を持つチームは数えるほどもないのだから、なおさらだ。

現在は、かつて日本サッカーの黎明を支えたころや関東リーグで何連覇もしたころとは部を取り巻く状況が異なっている。しかし、この歴史は組織として継承していかなければならないし、継承しさらに発展させていくには、そのときどきのチームが常に組織としてしっかりしていなければならない。当然現在のチームもそうだ。でなければ斜陽の状態が続いた後に、やがては頹廃してしまうであろう。

現在は、現役という立ち場から、今のチームが

部の発展にわずかでも貢献できるよう一部員として努力しなければならないと強く感じている。1、2 年のころは、チームやその歴史のことを今ほど強く考えていなかった。しかし 4 年になり、また記念の年を迎え、もっとこの組織の一員として自覚をもって残された選手としての時間をすごさなければいけないと思うようになった。チームのことを考え自覚をもって過ごすといっても、短時間で何ができるわけではないが、本稿を書いている時点であと 5 ヶ月、毅然とした決意をもって一つ一つの練習や試合、日常生活に臨みたい。

今述べたように、選手としてできる一番のことは、練習でも何でも高い意識をもって過ごすということだ。今までの自分の意識の持ち方を振り返りながら、このエッセイという場を借りて、自戒のために今後の決意を固めたい。

「動機」を持ち続ける

入学後にア式に入ろうと思った動機はいろいろあるが、一番は高校時代の未練だ。出身の私立城北は、かつては全国大会にもよく出場し、最近も比較的サッカーが盛んな高校だった。自分の代も一応選手権の都代表を大目標にやっていた。チームとしては総体以外の 3 大会で都の 8 強まで進出したが、結局、強豪高校には勝てず悔しい思いをした。個人としても後輩の後塵を拝したり、選手権前に大けがをしたりと、思うようにならないことの多さや自分の不甲斐なさにフラストレーションが溜まるが多かった。もちろん、それはそれで今に生きている部分もあるし、良い思い出もある。ただ、引退したときには、とくに個人として「もっとやれた」という後悔が大きかった。

大学に入ったとき、もうサッカーはやめようとも思ったが、高校時代のことが拭いきれず、入部した。大学では後悔だけはしないよう人事を尽くし、4 年間でサッカー選手として自分が到達する最高のレベルを目指そうと思った。試合に出るとか試合に勝つといった「目標」や、キックを強化しようといった「目標」は当然常にあるが、大学でサッカーを続ける継続的かつ根本的な「動機」

として、その「自分が到達しうる最高レベル」を目指すことを常に意識するようになってきた。

皆それぞれ自分なりの、サッカーをしている動機があるだろう。モチベーションが下がったり、ふと何でサッカーなんてやっているんだろうと思うときも、この動機があるから頑張れる。東大生なのに、サッカーに全体練習外の多くの時間を割いたり、お金を使ったりするのもこの動機があるからだ。上手くなりたいのは誰でも一緒だが、自分の場合、そのことを常に能動的に意識するようにしないと、見失ってしまいやすい。そして後で後悔してしまう。だから自分に対してこういった動機付けをするようになってきた。

しかし、本当に人事を尽くしたと言えるほど、やれることをやってきたかと振り返ると、妥協したなという部分が多々思い当たる。幸い、先輩後輩同期の中に目標やライバルになる選手にも恵まれ、大きくモチベーションが下がることはなかったが、もっと自分に厳しく全てに取り組まないと、とても自分が目指すレベルにはほど遠いと思う。

強い大学の練習に参加したり、そういう大学の選手の話聞いて、自分のサッカーに対する意識がいかに低いか思い知らされた。彼らはプロという明確な目的があるから当然意識も高いが、自分も先に述べた明確な動機がある以上、意識で彼らに負けてはいけない。そこで負けたら、差は広がる一方だ。「ア式」の熱心なチームメートを見ても、意識で負けているなと焦ることが多い。

90年目の今季も新しい1年生が入ってきて競争も激しくなってきた。初心ではないが、自分が1年生のころに、高校時代の轍を踏まぬよう人事を尽くそうと決めたことを今一度思い出し、常に忘れないようにあと5ヵ月頑張りたい。天命がどうなるか、あるいは引退のときに、どれほど上達できたと感じることができるかわからないが、少なくともこの5ヵ月はやりきったと胸を張っているくらい、やりきりたい。

恵まれた環境に幸せを感じ

工学部4年 南 哲

部に入って驚いたのは、まず規律の厳しさです。遅刻して帰らされた人を実際に見たときは驚きました。そういう自分も帰られ、上野公園を10周走った記憶があります。次に感じたのは練習の厳しさです。基礎練習、ボール回しがこんなにきつい練習だとは思いませんでした。中学、高校の部活は練習が週3回しかなく、いまの週5回の練習に慣れるまでに時間がかかりました。

また鈴木コーチの下でボールを止める、蹴ることの重要性、つまり基礎技術の重要性を実感しました。そして練習に取り組む姿勢、ただ練習をこなすのではなく、自分に何が足りないのかを考えて、自分が上手になるために能動的に取り組むことの重要性を感じました。確かに自分の弱さを客観視することはつらいことですが、その弱さから逃げ出そうとする自分と戦うことで、日々が充実していくのではないかと信じます。

このチームにはつらい練習でも声を掛け合って乗り越えていこうとする雰囲気があるし、部員一人ひとりに役割があり部活を円滑に進めるために尽力しています。

また一番好きなのは、皆がサッカーに真面目に取り組んでいることです。このような恵まれた環境の中でサッカーが出来ることに幸福を感じ、支えてくれている両親、友人、部員、コーチの方々に感謝の念を抱きつつ、あと5ヵ月、一生懸命頑張りたいと思っています。

最後に部の先輩の思いを引用させて頂き、筆を置きたいと思います。

＜常に強い人間にはなれなくても、弱い自分に負けてしまうときがあっても、それでも自分自身を値踏みしないで、可能性を信じて何度でも挑戦していく、それが僕の考える幸せな生き方です。あしたのために、一日一日のきょうを大切に生きていきたいと思っています。＞

私の誇り

上智大4年（マネージャー） 本本宏美
想像以上にやりがい

部活動のマネージャーのイメージを聞かれたら何を想像するだろうか？

やかんを持って走り回っている女の子。一生懸命練習着を洗濯している女の子。

しかし高井昌吏さんの『女子マネージャーの誕生とメディア？スポーツ文化におけるジェンダー形成』によると、戦前から1950年代まではマネージャー業も男子の仕事で、女子がマネージャーをするようになったのは1960年代だそうである。そして世間に女子マネージャーの存在を一気に広めたのは、あだち充さんの『タッチ』のようなスポーツ漫画だった。きっと、このようなメディアを通じて、マネージャーは女子の仕事だというイメージが広まったのだろう。

思い返してみれば、私もマネージャーとして入部する前は、このようなテレビや漫画で見たような仕事をイメージしていた部分も多少あった。また、家族にとってもマネージャーは雑用係というイメージが強く、私が大学生活の多くの部分を部活に費やしているということもあり、「学校の勉強は？」「学生のうちにもっといろいろなことを経験したら？」「そんなにがんばらなくてもいいのでは？」など何度母親に言われたことだろう。このように必ずしも温かく応援してくれてたわけではない。しかし、それでも私がマネージャーを続けていくことができたのは、マネージャーという仕事は想像以上にやりがいあり、得るものがたくさんあったからである。

よりよい環境を作る

マネージャーになったばかりのころは、分からないことが多すぎて仕事を覚えることだけで精一杯。無我夢中だった最初の1年はあっという間に過ぎていった。マネージャーの仕事は「縁の下の

力持ち」とでもいおうか、決して派手ではない。3年間を経験してきた今の私でさえマネージャーの仕事を魅力的に感じられるように説明できるかどうかわからない。選手の水分補給や試合の記録などといった作業を表す言葉を並べることくらいしかできない。しかし、うまく言葉で表すことができない部分がマネージャーの醍醐味なのではないかと私は思う。

私が入部した時に比べてマネージャーの仕事もずいぶん変化してきている。そして、私自身もいろいろ経験することによってマネージャーとして変化してきたと思う。始めはその仕事をするだけで精一杯だったが、今では他のマネージャーはどのような行動をとっているか、グラウンドのどこで何が行われているのかなど周りの状況も把握し、より良い環境をプレーヤーとマネージャーともに提供することができるかを考えて行動するよう心掛けている。

マネージャーとは何だろうか。私の中でこの質問に完璧な答えを見つけることはないだろう。

もちろんより良い環境をつくることだが、この一言に入りきらないことがたくさんあるのである。マネージャーの仕事は漠然としていて、その中でいかに自分のやりがいを見つけることができるのかが重要なのである。ただ一ついえることは、私はこの3年間マネージャーをしてきたことを誇りに思っており、掛け替えのない経験である。

ア式蹴球部からの贈り物

お茶の水女子大4年（マネージャー） 野呂順子
浦和だからサッカーに興味

私が、初めて御殿下グラウンドに足を踏み入れた運命の日は、2005年4月14日でした。スタジアム以外で、一面、緑に覆われた人工芝のグラウンドを目にしたのは初めてで「大学というところには、こんなに立派なグラウンドがあるんだ」とびっくりしたことを鮮明に覚えています。中学校

3年間は、バドミントン部で毎日練習に励み、駅伝にも参加し、高校では空手に精を出していました。人をサポートしたり、スポーツ観戦をするよりも、自分で運動する方が好きだった私が、マネージャーをやっているという事実を、今でもときどき不思議に感じます。

私がサッカーに興味を持つようになった理由は、地元が浦和だからです。小さいころからサッカーに興味を持たざるを得ない環境に置かれてきました。浦和レッズが試合に勝った翌日は、小学校の前の家には、必ず赤い大きな旗が風に翻っていました。さいたまテレビを見ると、いつもレッズ選手のインタビューが放送されていました。また試合当日は、地元の駅にユニフォームに身をつつんだレッズサポーターが溢れていて、サポーターの様子を見れば、その日の結果が一目瞭然でした。

いつしか、我が家もレッズ病にかかり、中学生の時は国立や駒場スタジアムに家族そろって応援に行っていました。いつ見ても感動するのは、埼玉スタジアムで、ゲートからスタジアム内に入った瞬間目にする、あの一面真っ赤にそまったレッズサポーターの光景です。最近のレッズサポーターの暴挙に斜めの視線を送りながらも、レッズを愛して止まない私ですが、大学に入ってから、レッズよりもさらに上に行く、自分にとってかけがえのないサッカーチームに出会いました。

マネージャーの仕事

自分のポジションである『マネージャー』は、地味な仕事が多いです。選手の飲料を用意することが主な仕事ですが、ただボトルに水を入れて置いておくだけでなく、飲みやすいボトルの位置を考えたり、試合の際は、環境要因を考慮しながら水温を微調整したり、空のボトルが放置されないことがないよう、常に目を光らせ、日々やかんを片手に水分補給に奔走しています。他にも、備品を管理したり、周りへの目配りを欠かさず、環境整備に気を配っています。

親しい友達には、「マネージャーなんかよくやっ

てるよね。人のためによくそこまでできるよね」と言われます。でも、「人のため」にやっているわけではありません。あくまでも、東大ア式蹴球部という組織が好きで、そこに属しているさまざまな人たち（現役の選手、監督、コーチ、スタッフ、OB、OGの先輩方）の「人」としての魅力に引き付けられて、「自分もこの組織の一員として、できることを果たしていきたい。」という強い思いを胸に、4年間マネージャーを続けてきたのです。

「ア式」に出会わなければ、のほほんとした大学で4年間過ごし、今ごろ、立派な「お茶」漬けが完成しているところでした。

体育会の部活に入ったことで、組織の上下関係や、社会的なルールを身につけることができました。また、臨機応変な対応や、機転の利いた行動を心がけるようになり、人間として大きく成長できた気がします。何よりも、自分の出身大学のような狭い世界にいただけでは味わうことのできなかった、経験を数多くさせてもらい、様々な人との繋がりを築くことができました。

学生幹事も務める

その一つとして、東京都大学サッカー連盟の学生幹事をやらせてもらっている経験は、大変貴重なものです。都学連に入ろうと思ったきっかけは、1年生当時、尊敬していた先輩が、選手として練習に励みながら、学連の経理部長と主務を同時にこなし、組織の運営面で大きな負担を抱えていたためです。大会に必要な書類作成など、小さなことでも何か力になりたいという一心で、都学連に入りました。初めは、経理部で領収書を書くなど、主に上級生のサポートに回っていましたが、3、4年になって、審判部に移り、責任ある仕事を任されるようになりました。3年のときは、大会中の警告、退場者を管理し、通告書類を作成したりしていました。最高学年になった今では、都協会に主審派遣の依頼をしたり、大会の会場を確保、調整し、大会のくじ引きを作成し、対戦カードを決め、さらには大会当日会場で起こるさまざまな

不測の事態に対処し、審判、アセッサー、会場責任者から寄せられるクレームにも対応しています。

大会中は、学連全所属チームで起こるさまざまな問題に対処しなければならないため、至らないところだけで、自チームには迷惑をかけてしまっていることが多々あると思います。それでも文句一つ言わず、暖かい目で見守ってくれている現役の選手や、スタッフの心の広さにいつも助けられています。

私の4年間の大学生活は、ア式蹴球部と共にあります。ここまで人間として成長できたのも、全てア式との出会いがあったからです。東大サッカー部が、いつまでも誰にとっても魅力的な居場所であり続けることを、心から願っています。

欧州選手権の予想

文科Ⅱ類3年 熱海修平

EURO 2008 予想

東大ア式蹴球部創部90周年の部誌ということで何かを書くということですが、自分のことを書いてもたいしたことは書けないだろうと思うので、高校の卒業文集と似た手を使って、間近に迫ったEURO 2008の勝手な予想を載せさせていただこうと思います。独断と偏見に基づくもので、気に食わなくても、予想が外れていても、こいつバカだな、ぐらいに思ってやってください。それでは始めます。

グループAはスイス、チェコ、ポルトガル、トルコ。ポルトガルはマニシェ、トルコはバシウトウルクやハリル・アルティントップといったコンディションが良ければスタメンでの起用も有り得る選手を外しているが、これは他に選出しても十分な実力を持つ選手がいるからだと思われる。一方で、負傷のロシツキー、代表を引退したネドベドを召集できなかったチェコは苦しい戦いを強いられると思われる。C・ロナウドが波に乗ってい

ることと、開催国であるスイスはこのポルトガルと当たるのがグループの最終戦であることから、1位ポルトガル、2位スイスになると見られる。

グループBはオーストリア、クロアチア、ドイツ、ポーランド。ドイツは名脇役のシュナイダーを、クロアチアはリーグ戦で大怪我を負ったダルシルバを欠いて本大会に臨む。とはいえ、たとえシュナイダーを欠いても実力派が揃っているドイツは、GKに凡ミスが出なければ問題なく予選を通過すると見られる。実力的には、最終戦でイングランドに引導を渡したクロアチアが、オーストリアとポーランドを上回ると思われるが、ポーランドはポルトガルを押さえて予選で首位通過を果たしており、開催国であるオーストリアのモチベーションも相当高いと見られるので、難しいところである。安直に1位ドイツ、2位クロアチアとしておく。なお、余談だがポーランドのGKは日本でお馴染みのセルティック所属のボルツ、マンU所属のクシュチャク、アーセナル所属のファビアンスキとかなり豪華である。

グループCはイタリア、オランダ、フランス、ルーマニア。いわゆる死のグループというやつである。イタリアは、有力選手としてはインザーギ、イアクインタ、オッドあたりが外れている。代表を引退したトッティももちろん召集されていない。オランダはランザート、ブラルーズ、フランスはメクセス、フラミニ、ベン・アルファといったところが外れている。ルーマニアは順当な選考だったようである。はっきりいってどこが突破しても意外な結果だとは言えないと思う。ということで、ここでは少し^{ぼくち}博打を打って1位オランダ、2位フランスとしておく。イタリアはグループ最終戦のフランス戦に負けて…という感じで。

最後のグループDはギリシャ、スウェーデン、スペイン、ロシア。特筆すべきニュースはラーションの代表復帰だろう。また、ラウールの落選も今季の活躍からすれば意外と言える。前回覇者のギリシャは、今回は厳しいと見られる。前回ほどにはノーマークで臨むことはできないからだ。若い選手が多めなのと、初戦で当たるのが名将ヒディ

ンク率いるロシアだという点では不安はあるものの、スペインの力は他より一枚上手だろう。ということで、1位スペイン、2位ロシアにしておきます。

当たりませんね

以上の予想で行くと、準々決勝はポルトガル―クロアチア、ドイツ―スイス、オランダ―ロシア、スペイン―フランスになります。うん、外れそう。気を取り直して続けます。

まず1試合目のポルトガル―クロアチア。普通に予想すればC・ロナウド、カレスマの両翼がクロアチアのサイドを切り裂いて…と行くのが正統派の予想だし、かなりそう思っている。しかし、あえて、トッテナムへの移籍が決まった若き司令塔ルカ・モドリッチの活躍と堅固な守備でクロアチアがポルトガルを下し、C・ロナウドの欧州2冠を阻むと予想します。

2試合目のドイツ―スイス。ホームの大声援を受けて猛攻を仕掛けるスイス。必死で守るドイツ。レーマンのミスで1点を失うも、バラック、クロゼを軸とする攻撃陣が1点を返す。その後は互いに危ない場面を凌ぎ、延長戦を戦っても1-1でPK戦へ。W杯ドイツ大会ではPK戦で敗れ去ったスイスだが、ホームの後押しもありドイツのフリンクスが外してベスト4へ。

3試合目はオランダ―ロシア。ロシアのヒディンクの策が見事に当たって後半途中まで0-1でロシアがリードするも、ファン・ベルシ、バベルを次々に投入する超攻撃策に出たファン・バステンの采配が当たり、オランダが2-1で逆転勝ちを収める。

4試合目はスペイン―フランス。準々決勝一番の好カードである。しかし、残念ながら組み合わせからの期待とは裏腹につまらないゲームとなってしまう。スペインの若い選手たちはフランスの老獪さの前に持ち味を出すことなく、アネルカの1発に沈んでしまった。

ということで、準決勝はクロアチア―スイス、オランダ―フランスの予想です。これ絶対当たり

ませんね。当たったら誰か何かください。

まず1試合目のクロアチア―スイス。互いに大舞台でここまで勝ち上がることに慣れていない両者の対戦は、しかし、面白いものとなった。前半は点の取り合い。クロアチアのオリッチが先制点を奪えば、スイスのフライが同点ゴールを決める。追いついた勢いそのままにバルネッタがミドルシュートを決めて突き放すと、セットプレーからキャプテンのニコ・コバチが同点ゴールを決めるという展開。後半は、クロアチアはGKのプレティコサを、スイスはセンデロスを中心に攻守を見せ、そのまま延長戦へ。延長では互いに決定機を作るも決められず、決着はPK戦にもつれ込むかに見えた。大仕事をやってのけたのが延長から投入されたハカン・ヤキンだった。このゴールで、スイスは決勝進出を決め、バーゼルのザンクト・ヤコブ・パルクはお祭り騒ぎとなった。

もう一試合のオランダ―フランスも激しい試合となった。キックオフから20分までに怪我のために両チームとも交代のカードを切らざるを得ず、フランスはアンリを下げてベンゼマを、オランダはロッベンを下げてファン・ペルシを投入することとなった。とはいえ、展開は一貫していて、中盤付近での潰し合いが試合の大部分を占めていた。予選リーグでは引き分けに終わったこのカードは、この試合では90分の間に勝者が決まった。連戦の疲れが見えるフランス守備陣をファン・デル・ファールト、ファン・ニステルローイ、ファン・ペルシーの三人で切り裂き、ファン・デル・ファールトが決勝ゴールを奪い、オランダが決勝へ駒を進めた。

決勝はスイス―オランダ。開催国で決勝まで駒を進めたスイスの冒険は、ここで終わりを告げた。前半はやはりセンデロスを中心に0-0で折り返すも、後半にオランダがファン・ニステルローイを外してカイトを投入すると、2点を奪い、優勝を決めた。オランダはEURO 2度目の優勝を果たすと共に、ファン・バステンは選手としても監督としても優勝を経験することとなった。

というむちゃくちゃな予想でしたが、いかがで

しょうか？　ここまで読んでいただいた方には、申し訳なく思うとともに、深く感謝いたします。お疲れ様でした。

(編集者注) 実際には決勝でスペインが1対0でドイツを破って優勝した。

自伝

文科I類3年 岩田宗一郎

少年時代

今年は東京大学ア式蹴球部創立90周年ということもあり、部誌を編纂することになった。自分も一部員として、その活動に少しでも貢献すべく小エッセイを書きたいと思う。テーマについてであるが、特定のものを与えられたわけではなく、個人に任せられているため、多様に考えられる。ただ自分の場合は、書くべき内容ははっきりしている。それは、この部の中で自分が持つ特殊性のゆえである。特殊性—それは、大学からサッカーを始めたということである。東京大学という、一般的にスポーツを専門としていては入学できないと考えられる大学にあっても、初心者でサッカー部に入部するというのは珍しいケースである。そこで、その珍しいケースに当てはまる自分の、記憶を辿りつつ、入部までの自分とサッカーというスポーツとの関係性について簡潔に書きたいと思う。

まず、小学生までのころを思い返す。プロアスリートのほとんどが、競技を小学生のころより始めることから分かるように、活発で、時間があり、将来への夢が溢れる小学生は、何かしら好きなスポーツができ、そしてそのスポーツをすることが多いものだ。自分も、類に漏れず、好きなスポーツがあり、それに取り組んでいた。しかし、そのスポーツはサッカーではなく野球であった。そのころは、サッカーには全く興味がなく、むしろ、ちょうどJリーグが開幕してサッカー人気盛り上がりてきたころだったこともあり、野球人気を下げる可能性のある、野球と対立するものだ、としか思っていなかった。

中学受験が終わり、中高一貫の私立中学に入学が決定した時には、入学後野球部に入ることをすでに心の中で決めていた。しかし、いざ入学してみると、その中高一貫校には野球部というものが存在していなかった(もし野球部が存在していたら、自分がこのエッセイを書く機会は絶対になかった)。失望のあまり、なんの部活にも入らないまま、中学時代を過ごした。ただ、自分のサッカー人生にとって大きな出来事が、中学3年生の時にあった。2002年日韓ワールドカップである。それまでで、サッカーという存在が自分の生活に最も接近した瞬間だった。このときは、多分にナショナリズム的発想からではあったが、サッカー日本代表を応援した。また同時に、試合を見ることで、オフサイドなどのルールを覚えていった。しかし、日韓ワールドカップは、自分に、サッカーというスポーツに対する興味を抱かせはしたが、実際に自分がサッカーをしようとはまでは思わなかった。

サッカーの楽しさを知る

初めてサッカーを主体的にプレーし、そしてサッカーをすることの楽しさや喜びを感じたのは、高校に入学する直前の春だったように思う。ある日、枚方市内の淀川の河川敷に、野球をするために同級生で集まったのだった。その中にサッカー部員が数人おり、また偶然その一人がサッカーボールを持って来ていたこともあり、野球の合間にサッカーをすることとなった。そこで初めて、ボールを蹴ることの面白さやドリブルで相手を抜く楽しさを覚えたのだった。

高校入学後、それまでドッジボールやバスケットが中心だった昼休みの遊びが、サッカーへと変わっていった。その昼休みの遊びや体育の授業を通して、自分のサッカーに対する気持ちは高まっていった。また、サッカーの技術本を読むことやサッカー部員に教わることで、更にそれらを自分の中で考えて組み入れることで、上達していった。上達することで、好きになり、好きになることで更に上達するという好循環だった。

このような高校生活が続き、高校3年生になった頃にはすでに、大学に入学後はサッカー部に入学することを決意していた。もちろん初心者でサッカー部に入ることに對する不安は自分の中で少なからずあったが、ナルシストであるということもあってか、自信の方が大きかった。

大学入学が決定してからは、自分の頭の中はサッカーの事で占められた。初めて自分のスパイクを手にしたときの喜びは今でも忘れ得ない。ただ、高校時代から抱いていた不安は、相変わらず心の中でくすぶり続けていた。いや、むしろ増大していたのかもしれない。あれ程サッカー部に入学することを決意し、求めていたにもかかわらず、その不安に揺さぶられ、迷ったのだった。しかし最後は入学を決めた。それはなぜか？ 答えは1つしかあり得ない。

俺はサッカーが好きであり、サッカーをしたいからだ。

自分が望む道を進むということ

文学部3年 後藤遷也

俺は果たしてサッカーが好きなのか

私は小学校に上がる前から大学3年生の今に至るまで、自分に一番身近なスポーツとしてサッカーと付き合いってきました。付き合いきた、という事実はいささかのブレようもなく一貫して変わらないことですが、付き合い方という点において、高校までと大学からの間に明確な線引きがなされることを現在の私ははっきりと認識しています。その間の時期に私の中で起こったささいな、しかし決定的な変化についてこれから少々書かせていただきたいと思います。

先ほど書きましたように、私はこれまでの20年ばかりの人生を、常にサッカープレイヤーとして、ほとんど毎日のようにその時々仲間たちとボールを追ひ駆け回してきました。そうになったきっかけといえば、二人の兄もやっていたからと

いうだけの理由で母が小学校に上がる前の私を地域の少年団の練習場に連れてきた、そんなことでした。それから私はなんで自分がサッカーをやっているのか、なんでコーチにこっぴどく怒られてもまた練習に行くのか、そもそも自分はサッカーが好きなのか、そんなもろもろの疑問を自分に問いかけることなく、サッカーと自分の関係について何らかの定義を漠然としたものですら抱くことなく、ただ無我夢中で練習していました。負けて勝って、勝って負けて。抜いて抜かれて、抜かれて抜いて。そんな繰り返しの中に様々な理屈を埋没させてしまえる点こそ、サッカーという世界のスポーツの一番の魔力なのかもしれませんが、とにかく僕は高校の部活を引退するまで、幸か不幸か、小中高とチームの中では常にレギュラーポジションを与えられていたこともあって、サッカープレイヤーとしての確たる自意識をほとんど構築することなく過ごしてきたのです。

ところが引退後の大学受験期、サッカーをする外部的な理由を失って初めて、私はサッカーとの関わり方について自問せざるを得なくなりました。この時期の煩悶はすなわち次の問いによって置き換えられます―「俺は果たしてサッカーが好きなのか」。目の前に広がっているのは田舎での親元の暮らしとは比較にならないくらいに自由に輝いて見える東京での大学生活です。高校までと違ってもはや少数派でしかない体育会系への所属が要請される要因はまず見当たりません。それより今までとは全く異なった生き方へと転じていくことこそ大学生活の本旨ではないのか―ぎりぎりでしたが晴れて東大への現役合格を果たした頃には、私の中ではだいたいこのような結論が出来上がっていました。そして結局「ア式」には入らず、当初の自分が望んだとおりの道を実現しようと東京で文字通り一人、半ばわくわくしながら歩き始めたのです。

サッカーへの回帰

最初のうちは、思い描いていた即物的な自由を思うさま楽しむことが出来ました。厳しいトレ

ニングも、あれやこれやとうるさい指導者も、強敵のプレッシャーもない生活は確かに気ままで気楽で、言い換えればどこまでも怠惰で、私は新しい出会いの数々と都会の魅力に夢中になり、これこそが望んだ道なのだと考えました。しかしそんな生活も半年が過ぎると、だんだんと心境に変化が訪れ始めました。気がつくと、高校時代の試合のDVDを引っ張り出してきては観ていたり、体育の授業で一緒になったア式部員から聞く部内の様子がどうにも気になったり、実家の両親と電話で話すといつのまにか話題がア式のことになっていたりし始めました。つまり、ここにきてようやく私は気がついたのです。確かに最初の出会いは受動的なものだったかもしれません。ただ、長い時間をともに過ごすうちに、それと意識することのないうちに、私にとってサッカーは、いついかなるときも真剣に向き合わなければならない友になっていたのだと。大げさでなく私とサッカーを結んでいるのは愛そのものだったのだと。大学に入る前の私はそれを当たり前と思い、むしろいとわしく感じ、しまいには見失ってしまっていたのです。以上のことを悟った私は、半年間分の後悔に苛まれつつ、ア式の知り合いに連絡を取りました。そこから一通りの紆余曲折がありつつ、ア式部員の端くれとしての今現在に至るのです。

このように大学に入って初めてサッカープレーヤーとしての自我に目覚めることができた私ですが、ア式での生活は今までのサッカー人生の中で最も辛く厳しい時間となっています。単純にトレーニングの強度が高いことはもちろん、一人暮らしの中で自己管理を怠らず、心身ともに常に良いコンディションを保つことの難しさ、また今まで属したサッカーコミュニティとは一段も二段もレベルの違うア式という集団の中で実力を発揮し、競争を勝ち抜いていくことのシビアさ、全てが未経験のことで、もちろんうまくいかないことのほうが多いです。しかしこれが、私が明確な自我を持って選んだ道なのです。それがわかっているから、たと思えば通りにいかないことばかりでも、私は今幸せです。

調子がいい日はボールもいい

経済学部3年 高木駿平

サッカーにおける三位一体

精神論のほうはほかのみなさんが大いに語ってくれると思うので、ぼくは極めて技術的な話を、自己満足的に書きたいとおもいます。

今年のテーマは三位一体です。つまりデカルト的な心身二元論的な流れを汲む近代西洋哲学との離別であり、そしてキリスト教の三位一体論とは全く関係のないものであります。

ひとことでいえば、心技体はひとつであるという考え方です。

そもそも東京大学自体が、日本の開国以降の急速な近代化もとい西洋化を主導することを目的に設立した帝国大学の流れを汲むものであり、我々東大生が、儒教的価値観や仏教的哲学などなど古の教えよりも、安易に西洋的方法論を信ずるのも当然といえますし（むしろ我々はそのような教育を受けてきた）、サッカーにおいても、体力練習で体を鍛え、ボールを使って技を高め、メンタルトレーニングによって心もゆるがぬものにより、全体のパフォーマンスを向上させる。といった足し算的、形而上的な考え方をするのも致し方ないことでしょう。それはでもなにか違うのではないかと、そんなことを最近考え出したわけです。

まず、なぜそのような考えに至ったのか。実感としてほんとと身体の調子がいいなと思っていたある日（つまり体が最高の日）、特にというか全く近日中にその練習をしていないのにほぼパーフェクトの精度でロングが蹴れるというときがありました。そんなときは肩甲骨の回し具合でボールの質が調整できる不思議な感じがあります。（技も最高）さらにそんなときは何本でもけり続けていたいと感じ、蹴るのが全く苦にならないのです。（心も最高）

最高！ もし負けなければ

つまり、おお体調今日いい感じだ、というのをすこしずつ自分にとって当たり前にしてくことで、常に“体”を最高にできるようにしておけば、あとはどうとでもなるのではないかという仮説です。結論からいえばこれはかなりうまくいきました。最近では怪我のせいもあり少しこのメカニズムが悪循環ぎみのようです。おそらく高原直泰（日本代表、浦和レッズ）の現在の状況もいずれかの不振が三位一体的にスパイラルをおこしているせいなのではないでしょうか。

具体的には入念なストレッチ、筋トレ、体幹を継続的にやりました。筋トレはやりこんだ後しばらくお休みしたときがいい状態になる気がします。あまり追い込みすぎるのは知らず知らず心を痛めるので反対です。

そういう意味で一番、心技体が良好だったのは国公立です。多少のあがりはありませんでしたが、オンザボールのときはなんでもできそうといった感じで、特にワンタッチパスなどボールのフィーリングが最高でした。なにか無心に近いものがありました。とっても楽しかった気がします、もし負けなければ。

ただやはりコンディション如何ですべての技術の質は上がるにしても、持っていない技は出てこないのです。そこは増やさないといけないようです。いくら調子がよくてもいきなりシザーズはではこないようです。

それぞれ実感はすこしずつ違うにしても、理想的な体の状態がいままでで何試合かありましたのでコンスタントになれるようにしたいと思います。最後のほうは非常にいいかげんになりましたがこれで終わりにいたします。

僕とKとフランス

工学部3年 深田啓介

フランスW杯で目覚める

僕のサッカー人生最大の危機は小学3年生のときでした。僕のクラスにKという男の子が転校してきました。しかもKは僕の近所に引っ越してきました。僕はすぐKと仲良くなりました。Kはクラスに一人はいるような、家にゲームをたくさん持っていて、毎日のように友達を家に呼ぶ子でした。家が近いということもあり、僕もKの家に入り浸っていました。そのうちKの家で遊ぶのが何よりの楽しみになっていきました。その頃僕は等々力FCというサッカークラブに入っていたのですが、週2しかない練習をサボってまでKの家に行くようになってしまいました。

僕は覚えていないのですが、親の話によるとその頃僕は「サッカーやめたい」とまで口にしていました。まさに危機!! ここでサッカーをやめていたら、おそらく中学では卓球部に入り、高校では陸上部に入り、大学ではボーダーに入っていたかもしれません。

この危機を救ったのがあのフランス・ワールドカップ（WC）です。僕が見た初めてにして一番熱いWCでした。日韓もドイツも見ましたが、僕の中ではWCといえばフランスです。もちろん小5の男の子が深夜まで起きていられるわけもなく、日本戦以外は主にハイライトでしか見ていませんでした。しかしあのわくわく感、興奮はそれまでにないものでした。

まず日本。アルゼンチン、クロアチアとの戦いは、どちらが勝ってもおかしくないような試合展開にハラハラドキドキでした。日本のサッカーもここまでやれるというのを見せてくれたと思います。ジャマイカ戦でゴールを決めた中山が、ボールを持って帰りながらもカメラ視線でにやけていたのも印象的です。

アルゼンチンのベロン、オルテガ、C・ロペス、

バティが繰り出す攻撃は破壊力抜群！ しかしそれに立ちはだかったオランダ！ 後ろからのロングボールをベルカンプがワントラップでDFをかわし、決めた決勝ゴールは、オルテガの頭突き退場以上に衝撃的なものでした。衝撃的すぎてコメントのしようがありません。

それからブラジルのロナウド！ 初めて見たときこいつは何なんだ！？ と思いました。とにかく速い！ 歩いていたかと思うと、次の瞬間トップスピードになっている。僕が思うにこの頃がロナウドの最盛期だったのではないのでしょうか。

感動のフランス・チーム

そしてフランス。クロアチア戦で2ゴールをあげたテュラムのゴール・パフォーマンスは世界のサッカー少年の間で大流行したことは間違いないですが、やはりジダン。神。うますぎる。そして王者ブラジル相手に3-0で完勝して優勝。この大会はフランスのためにあったという他にありません。

とここまでフランスWCについて長々と書いてきましたが、要はこの感動が僕のサッカーに対する情熱を呼び覚ましたということです。その後は等々力FCの練習に欠かさず参加するだけでなく、毎日のように等々力七丁目公園でボールを蹴っていました。あの頃は本当にサッカーが楽しくてしょうがなかった。しかしその楽しさと引き替えに以前ほど頻繁にKの家に行かなくなった、僕とKとの間に取り返しのつかない溝が出来ていってしまったのでした(嘘)。

そうこうして、今も元気にサッカーを出来ているわけですが、あの頃のように純粋にサッカーを楽しめているかと聞かれれば、すぐにYESとは答えられません。

いろいろなプレッシャーの中でサッカーをしているので、それはしかたのないことです。思うようにプレーできなかったり、時には辛いこともあります。そうしてめげそうになった時こそ純粋にサッカーを楽しんでいたあの頃を思い出します。やっぱり自分はサッカーが好きなんだと再認識

し、また頑張ろうという気持ちになります。何だかんだ言っても何でサッカーをしているのかといえば、サッカーが好きだからです。そして、あのわくわく感、興奮をもっと肌で感じたいからです。この初心を忘れずにこれからもサッカーを続けていきたいと思います。

サンキュー、フランス!!

心技体の心

工学部3年 藤安雄治

紅白戦で勝ったBチーム

僕が「A式」に入ってもう2年以上が経ちました。まだ1年以上の現役生活が残っているものの、小中高と約10年続いてきた僕のサッカー人生の中で、大学での最後の期間は一番密度が濃く、成長を実感できるものであることは間違いないと思います。僕がここ最近実感しているのは、自分の成長に最も大きく関与しているのは、スポーツの3本の柱である心技体のうち心の成長であるということです。

第一位：心、第二位：技、第三位：体

第一位：技、第二位：体、第三位：心

ここに2つの順位を書きましたが、これはオリンピック後に日本オリンピック委員会心理班が出場選手に対して行った調査の結果です。前者が「心技体でオリンピックで大切な順番は？」という問いで、後者が「毎日の練習で実施している順番は？」という問いに対する回答結果です。

精神力を鍛える、いわゆるメンタル・トレーニングを行うことによって、日々の練習の質を高め、技術や身体能力を高めていくことももちろん重要ですが、試合にどのような気持ちで臨むか、試合における精神状態のコントロールはそれ以上に大切であるような気がします。

一番最初に思い浮かんだ事例としては、2006年ドイツW杯の初戦、対オーストラリア戦での、1点リードして迎えた試合終了間際、1失点から

崩れるように立て続けに3失点した最悪の結末です。もちろん気候や環境といういろいろな条件はありますが、そこも大きくひっくるめて、まさに90分間集中力を持続することができなかったことが敗因であると言えると思います。また、僕たち東大ア式の近況からも幾つもの例を挙げられます。今週行なった2回の紅白戦ではBがAに1勝1分という結果でした。紅白戦でBがAに勝つというのはうちのチームに限ったことではなく、日本代表などでもよくあることだそうです。ところが対外試合になると常にBよりAの方が戦績がよく、むしろ練習試合や準公式戦でのBチームの勝率は非常に低く、Bが他チームに勝った試合は1つか2つくらいしか思い出せません。紅白戦のあと、敗因を細々と分析するいろいろな声が聞こえましたが、僕の個人的な分析では、AはBを侮り、BはAに一泡吹かせてやろうという心理が根底に働いていて、それがすべての根源なのではないかと思っています。逆に対外試合では自分達がトップメンバーであるという無意識な自信が心を支配しているか否かが試合結果に色濃く反映されている気がします。

6点ビハインドのリラックス

そして今日5月25日は関東2部から東京1部に降格してきた帝京大学に6-2の惨敗を喫しました。試合後、コーチの鈴木さんも言っていましたが、開始2分で立て続けにスローインから同じ形で2失点してしまった時点で、東大のDF陣が浮き足立っているのは一目瞭然でした。そこにはもちろん無視することのできない実力差というものがあることは間違いないと思うのですが、格上格下という意識と、試合開始直後に先制を許し試合の主導権を握らせてしまったという事実が、帝京、東大各チームに与えた精神的な効果が点差の開きに拍車をかけていた気がします。僕は今日の試合でこの春季リーグで初めて後半残り10分くらいから出場の機会を与えられたのですが、前線に長いフィードを送り、声を張り上げて堂々と戦えた自分のプレーは我ながらよかったと思っています。

ます。そこから2点を返し、どうにか4点差までビハインドを縮めることに成功したわけですが、僕がスタメンとして出場していたらもっといい結果になっていたとは毛頭思っていない。僕がのびのびとプレーできたのは、語弊があるかもしれませんが、6点ビハインドで自分の失点に対する責任感が薄れ、リラックスして試合に臨めたからだと思っています。

もちろん、その10分強の出場時間の中でミスがなかった訳ではありません。敵の左サイドからのクロスボールをキャッチミスしてしまい、失点してもおかしくない局面を作っていました。しかし、試合の流れが自分達に傾いているときは不思議とルーズボールも拾えるもので、幸いDFがクリアしてくれました。このようにゲームを支配することがどれほど重要で、またどれほど気持ちいいかということは経験によってしか得られない感覚でしょう。瞬発力、集中力、判断力などとともにGKに求められる能力の一つとして経験値はよく挙げられます。そういう意味では早く出場機会を勝ち取り、キャリアを築いていくことは選手としての進化を進めるための王道であるといっても過言ではないと思っています。

試合で表現する

更に精神面でのスポーツにおける重要な要素を細分化すれば、集中力・イメージ・自信など枚挙に暇がありませんが、僕はその中でも心理的な良い準備を強調したいと思います。

試合の1ヵ月前、1週間前、3日前、そして前日までという様々なスパンでの過ごし方全てが当日の心身のコンディションにつながってくると思います。僕たちの立場上、サッカー以外の用事や、もしくは誘惑はたくさんありますが、その用事を選択し、誘惑に打ち勝ち、チームに、サッカーにどれだけ貢献できるかという事は非常に大きな問題であるように感じます。

以前、日経新聞のサッカー選手へのインタビューコラムの中で、三浦カズが「ドライブを楽しむことも、カラオケへ行って歌うことも含め、

24 時間全てがサッカーのためだ」と語っていました。僕たちは学生である以上、24 時間全てをサッカーに捧げる事は不可能に近いかもしれませんが。ですが勉強・アルバイト・人間関係などに費やすあらゆる時間をサッカーに捧げるベクトルを意識して過ごせば、その達成度が自身のプレーやチームの結果に結びつく可能性は大いにあると思っています。

高校生のころ、スキヤモンの発育曲線というものを見て、フィジカル至上主義に陥りました。もちろん「心技体」は比べる対象としてはあまり適切ではないのかもしれませんが、三者は密接に関係していて、結局練習によって技術や身体能力を磨き、確かな実力が自信につながるというシンプルな構図にもたどり着き得ると思います。そこは程度の問題であり、やはり練習によって得たものを出来る限り試合で表現するという事はかなり重要なファクターであるということを最後にもう一度主張させてください。それは高校のときクソ真面目にサッカーしていた僕にはもちろん、あまりに真面目すぎる東大のチームにも言えることなのではないかと思います。そういう意味では、ゲームを楽しむ心を刺激してくれる最近の応援は個人的にはいいことだと思っています。

そんなことを考えながら、僕は 21 歳になりました。

闘魂

農学部 3 年 南田遼太

運動会を言い訳に

小学校、中学校、高校、そして大学へと進級するにつれて、私は段々と飼いならされていったような気がする。昔の自分はもっと負けず嫌いだった。いつでも一番になりたかった。しかし小学校の途中で、全校生徒数が 50 人にも満たない学校から一学年おおよそ 150 人もいるような学校に転校して、運動じゃまるっきり敵わないヤツがう

じゃうじゃいることを知った。筑波大付属駒場中学校に入ってみると勉強でもまるっきり敵わないヤツばかりだった。大学に入ってから自分は自分がボヤボヤしている間に同年代あるいは後輩たちが面白そうなプロジェクトを立ち上げ、社会に半分足を踏み入れている。それでも何となく諦めに近いような、まあいいや、がたった一つの感想だった。部活で週に 5 回は潰れてしまうし、残りの日をアルバイトやデートやらに充てるとどこにも時間はないように感じた。運動会でやっているというのが最大で唯一の言い訳だった。三年になって就職の二文字が目前にちらつき始めると俄然、そんな自分に対して苛立つようになった。進学した専修での予習量が多いこと、身体の調子がいいまいち上がってこないことがその苛立ちに拍車をかけた。

あたかも過去の話で、断固たる決心で乗り越えた、かのように、書いてきたが、私はまさしく今このような状態にある。今日はオフの金曜日で若干気持ちにも余裕がある。『闘魂』用エッセイを書くというちょうどいい機会もある。ということで、少し気持ちの整理をしてみようと思う。

気高く、勝利への飢えを

何より取り戻すべきは勝利への飢えだ。現状に満足してはいけない。常に向上心を持ち続ける、相手には全力で立ち向かう。緩みきった私はなかなか最初は苦労すると思う。ただこれからは負けず嫌いになるぞ、なんて決心して勝利への飢えを手に入れることができれば誰も悩んだりしない。競争は確実に何かを消耗させる。決して楽ではない。では何故消耗するのか、何故楽ではないのか。競争を好まない日本人的な心理が働く(あるいは特にうちの学年に関しては特に)からかもしれないし、ただ純粹に人より努力しなければならないからかもしれない。さらにはちょっとやそっとの努力じゃ決して追いつけない、あるいは決して追いつくことなどできない相手が増えてきて、負けることに慣れてしまったのかもしれない。何にせよ悔しいという気持ちに栓をするのはもうやめよ

うと思う。

そこで大切なのは、気高く飢えることだ。この「気高く飢える」という言葉は「ジョジョの奇妙な冒険」という漫画で使われていて、私はなるほどと思って胸にとどめていた。文脈としてはジョニィ・ジョースターなる登場人物がDIOを打ち負かすために気高く飢えなければならないッ！のような(詳しく述べると非常に長くなるので割愛)シーンである。DIOはどんな手段を使ってでも勝利を手に入れようとするハングリーさを持ち合わせており、主人公たちはなかなか彼に勝ちきることができない。下流からのし上がってきたDIO、勝利のためならたとえ汚い手であっても厭わないDIOに対して、恵まれた環境で育った＝受け継いだ者である主人公は決して勝つことができない。しかし、そのような相手ありきの飢えにも勝てるのが気高い飢えだというのだ。

おそらく相手を^{おとし}貶めて勝つのではなく、自分のベストを追及して、その結果相手にも勝つということである。競争相手という少し変だが、自分こそが最大の競争相手であるのだ。そうすることで無限のモチベーションが生まれ、また他人のことなど気にならなくなってくる。そうすれば先述の競争に関する苦悩も消える。あるのは自分の世界だけだ。何より必要なのは自分の行動に納得すること。妥協と納得は違う。そして自分が納得しているのか妥協しているのかは、簡単に分かる。少なくとも私は最近妥協ばかりだ。

あえて運動会のア式蹴球部を選んだのだから、それにも納得したいし、納得してメンバーとして選ばれたい。納得できるプレーをしたい。このエッセイは決して「納得」できるような出来ではないかもしれないが、書いているうちにメラメラと漆黒の闘志が沸いてきた。闘魂。

「ア式」の本気度と緊張感

法学部3年 村上達哉

サッカーを続ける本気と緊張

私がア式蹴球部に入部したのは、2006年の春でした。それからもう2年が経過し、気づいてみれば3年という上級生になっています。毎年、新歓シーズンになって新入生を見ると、自分が「ア式」に入部した時の事を思い出します。

受験生のとき、大学生になっても今まで続けてきたサッカーをやりたいという気持ちはあったものの、私大志望のためにもしかしたら無理かもしれないと思っていました。しかし、偶然が重なり国立大への入学が許された瞬間、その喜びとともに、大学のサッカー部に入れるんだと思った自分がいたことを今でも覚えています。合格決定後すぐにア式蹴球部の練習を見学し、新入生として春休みから練習に参加させてもらいました。鈴木コーチをはじめとする充実したスタッフ陣、人工芝や照明完備のグラウンド、クラブハウスなど最高の環境のもとに2年間汗を流してきましたが、今の時点でア式蹴球部に入ってよかったなと心から思える自分は幸せだと思います。今回のこのエッセイを書くにあたって、自分がア式に関して思っていることを思うままに書きたいと思います。

大学のサッカー部という、一番サッカーに集中して取り組める環境の中にいて、自分がサッカーをすることについて深く考えるようになりました。サッカー部は大学に来てまでサッカーを続けたいという人間の集まりだから、やっぱり皆の本気度や緊張感が違います。大学の看板を背負って戦うことの責任、勝ったときの喜び、キックオフ直前の一瞬の静寂、どうしても上手くいかないときの悔しさなど、適当にサッカーをやっている奴には絶対に分からないことがここにはあると思います。この点において、週5回の練習で他の大学生と時間の使い方が異なり、犠牲といえる部分は多少あるのかもしれないけど、それを上回る何か

を得ているのだと実感しています。「本気で上手になりたい、負けたのが悔しい。」その時すぐには上手く気持ちを切り替えられないだろうけど、後になって落ち着いて考えてみると、自分の悩みはすべて、「自分はサッカーが好きだ」という一点に起因していることに気がつきます。ここまで悔しいと思えるのもサッカーが好きだからなんだとか、本気である証拠なのかもしれないな。そう考えると妙に安心するというか、納得した気分になります。

得点の喜び

この2年間、いくつかの大会を経験してきました。メンバー外でピッチの外から先輩たちの勝利を願っていた試合もあれば、スタメンとして出場させてもらった試合もありました。でもどんな試合でも得点したとき、勝利したときの喜びはあるものです。その中でいまだに忘れられないのが、味方の起死回生のゴールによって、DFの自分は得点したわけではないのに、後ろで見ていてしびれたというか、鳥肌が立ったようになったことです。毎日の練習は辛いときも、気分が乗らないときもたまにはあるけれど、あの一瞬の喜びによってそんなものは吹き飛んでしまう。今でも大事な試合の前のイメージは公式戦の得点における一瞬の喜びです。グラウンド全体が爆発しそうな一瞬のあの感じです。

また、大学でサッカーをやっていて良かったと思える理由の一つに、先輩後輩や仲間の存在があります。高校生のように日々の生活が一緒にない大学生の間に、ほぼ1週間まったく同じスケジュールで生活する仲間とのつながりにはかなり重要なものを感じます。辛い練習を乗り切るのも、勝利の喜びを感じるのも4年間を共に過ごす仲間と一緒にです。その存在は私にとってはもはやなくてはならないものになっています。きっと4年の秋、引退の日には涙し、その後の将来別々の道に進んだとしても、仲間でありつづけるのであらうと思います。

ア式蹴球部での生活も、もう半分を過ぎました。

この2年間が充実したものであったことは上述した通りですが、この先、上級生としての責任も果たしつつ、引退の際には何も悔いが残ることのないように真剣にサッカーと向き合っていきたいです。

これはいつか自分が読む原稿

法学部3年 望月進司

日本に来て大学生生活が始まった

今回この「テーマは指定なし、ただ字数は2000以内」という若干不思議な課題を前にして、正直どんなことを書けば良いのか、分からずにいます。でも、「この文章はどんな人に、どんな時に読まれるのかな」と少し想像をめぐらしてみた結果、「ああ多分、自分だ」という答えが一番しっくり来ました。だから、何と言うか、タイムカプセルみたいな役割を果たしてくれるような文章になってくれれば良いと思います。

入学して間もない頃、僕は米国から東京に出てきたて、日本にだって来てから1年足らずでした。アーケディア・ハイスクールを卒業した後、飛行機に乗る前の夜中の3時か4時まで荷造りをしなかった僕は、年季の入ったスーツケースとアディダスのスポーツバッグとくたびれたリュックに、入るだけ荷物を詰めて（服とCDと文房具くらいのものだけ）、日本に来ました。

当時大学生だった兄が住んでいた京都の家から、大阪の予備校に通いながら日本での暮らし方みたいなもの、とりあえず電車の乗り方とかから学びだしました。

よくよく考えてみるとその時まで僕は、父と母以外とはまともに日本語を話しておらず、中3の時にあさひ学園という週1の日本語学校を卒業してしまっ以来まともに日本語を書いたことがなかったという、そんな塩梅でした。それでもスタート地点から比較的必死に8ヵ月ほど勉強した結果、長い間目標にしていた東京大学に合格するこ

とが出来て、もう一度僕はスーツケースとスポーツバッグとリュックに物を詰め、上京しました。そして井の頭線の富士見が丘という駅の近くの、がらんとした6畳のアパートの部屋に寝袋を敷いて、そうやって僕の「大学生活」みたいなやつが始まりました。

仲間たち

散々迷ったものの、5月1日の正式入部日に僕は「ア式」の一員になりました。高校では水球・サッカー・水泳を兼部していたのもあって、本当いろいろな部とかサークルを見学したけれど、結局の決め手は簡単なもので、基礎練と対面パスとクロス練がすごく楽しかったからでした。

見たことないもの、新しいものしかないような生活の中で、ボールをインサイドでトラップして、インサイドで蹴り返した時の懐かしさみたいなやつには、すごく懐かしいというか心安らぐものがありました。それともう1つの理由は、新歓試合（新入生歓迎試合）でボランチを組んだ深田とか、体験練習で会った時にはもうア式に決めているって言っていた髪の色い村上和吉田とかパーマヘアの遼太とか、駒場の11号館で「どうしようか」なんて相談した高木とか、ラグビー部の部室で一緒にタダ飯食べながら「どこ入るの?」「俺? サッカー部」なんて話した藤安とか、「おう、サッカー部入るで」とか言っていた角刈りの柔道男こと岩田とか、まあ何かよく分からないけどいつか駒場で話したときにア式に入るって言っていた熱海とかが、友達になれそうな気がしたからでした。秋の終わり頃に後藤が来た時も友達になれそうな気がしました。

先輩やみんな

入部してからは強い渦みたいに日々はア式で一杯になりました。お葬式で寿司食べてゴリさんに怒られたことや、アップ用の靴を忘れたアキさんにグロさんが怒るのを見たりなんかして「怖ええ」と思ったり、いきなり現れた福田さんにメチャクチャ走らせてお腹下すくらいキツかったこと

や、初1年会の後皆でブリクラに突っ込んだり、岩田がデザート全品2つずつくらい頼んで4年生を困らせたことや、諏訪さんが諏訪チルドレンとして可愛がってくれたこととか、京都でサンタクロースみたいな袋を背負って夜にコインランドリーを探したり、検見川の洗濯室で他団体と揉めそうになったところを水澤さんに助けてもらったこととか、駒場の吉田家に入り浸ったこと、追いコン（卒業生追い出しコンパ）のために衣装とか小道具集めるのに奔走して泊まりで練習して、当日は他の皆のネタに大笑いしたこと、冬のオフ中に走り過ぎて怪我をして、ずっと山下さんと平井さんと二瓶さんの下でリハビリを続けて、3度目の復帰テストで初めて合格した時に皆に拍手されたりおめでとうって言ってもらった時、ジョグしながらダウンするふりして少し涙目になったことや、夏に一時休部させて欲しいと話したらタカさんが許してくれたこと、帰って来た時も何もなかったかのように皆が受け入れてくれたこと、出場も出来ず、負けてしまった新人戦の後、1人ゴール裏で座っているところを碓さんが肩を叩いてくれたこと、ただ毎日、同じように部室に行って、サッカーをして、部室に戻って、皆と話したり笑ったりしたこと…。

来年の秋季が終わる時、その冬の追いコンで追い出される時、社会人になってからふと、懐しくなったとき、きっとこの4年間を思い出さだろうと思います。その時、この文章がその手助けになればと思います。これだけ青臭い文章なんて、俺以外書かないだろうと思うので（苦笑）。

私のサッカー人生

工学部3年 吉田航太郎

小学校1年から始まった

私が大学に入学して、つまりア式蹴球部に入部してもう2年が経つ。今回エッセイを書くにあたって、自分のサッカー人生について振り返って

みようと思う。

私がサッカーを始めたのは小学校1年のときだった。それより前にもボールを蹴って遊ぶくらいのはしていたが、ちゃんとサッカークラブに入ってサッカーを始めたのが小学校1年のことだった。始めた理由はサッカーが好きだったからというわけではない。ただ3歳年上の兄が小学校のサッカークラブに入っていて、自分もなんとなく兄と一緒に練習に行くようになっていた。なんとなく始めたサッカーをやめることなく続けたのは、サッカーに魅力を感じていたのだろう。当時、練習は週に1、2回しかなかったのだが、それでいて小学校の卒業アルバムに将来の夢はサッカー選手になることだと書いていたのは、今考えると恥ずかしいかぎりである。もっと練習していれば今もう少しはまともだったかもしれないと後悔したくもなる。小学校のころのサッカーで覚えているのは、正直自分の所属しているチームが弱くて、隣の全国大会に出るような強豪チームにボッコボコにされたことくらいである。

小学校で6年間サッカーをやっていた私は中高一貫の中学、高校で当然のようにサッカー部に入った。私が本格的にサッカーをやり始めたのはこの頃だと言える。とは言っても私が入学したのは勉強に対してかなりスパルタの全寮制の学校だったので、1日の練習時間は1時間強くらいしかなかった。心身ともに一番成長が期待できるこの時期に練習時間を確保することができなかったのは、現在にかなり大きな影響を与えていると思う。事実、練習時間が少ない分ボールを触る練習しかできず、フィジカルトレーニングなどを行ったことがなかったため、大学3年になった今でも体力は周りと比べて足りないと思う。だが当時、顧問の先生には「自分たちで考えてプレーしろ」と言われていたので、練習時間の短さを克服すべく、色々を考えて部員同士で話し合った覚えがある。このことは「ア式」に入った今でも活きているのではないかと思う。しかし、やはりこの時期にもっと練習できていればと後悔するばかりだ。

悔いのない大学サッカー生活に

大学に進学した私は、正直なところ部活でサッカーをやろうとはあまり考えていなかった。高校2年の修学旅行で東京大学を見学した際に本郷に人工芝のグラウンドを見ており、そこでサッカーがやればいいくらいにしか思っていなかった。はじめ私はクラスの友達と一緒にサークルの新歓試合（新入生歓迎試合）に行き、そこで久しぶりにサッカーをした。そのとき思ったのは、やっぱりサッカーは楽しいということ。しかし、自分の中でなにかがしっくりこなかった。そこでサッカーはどこかでぬく、ここは自分の場所ではないと思った。そうして、私はア式蹴球部に入部した。正直他の大学生に比べて自由に使える時間は少ないかもしれないが、私はそれ以上の魅力が今ア式蹴球部で過ごす時間にはあると感じている。実際おもいっきりサッカーができるのはあと2年しかない。うちより技術的に上であるようなチームとも戦って勝ち、1部に昇格できるようになるために、これまで以上に高い意識を持って過ごさなければならない。こんなに恵まれた環境でサッカーができることに感謝しつつ、自分の大学サッカーを将来後悔しなくていいように残り2年間走りきりたいと思う。

私にとってのア式蹴球部

日本女子大3年（マネージャー） 小林由佳
マネージャーはチームプレー

私が初めてサッカー部という集団に属したのは高校1年の時なので、今年で6年目になる。小学生だったら集大成の年となるであろうが、私の6年目はどうも、そうはいかないようだ。マネージャーになりたての頃は、低学年の児童が「先生、先生！」と言うように、私も「先輩、これって…」と、まるで質問の豪雨を浴びせていたかのように思う。それから様々なことを、自分なりに学んだ

り経験したりしてきた。もちろん今もその最中である。サッカー部に入ったからこそ、かわることの出来た方々も数えきれないくらい大勢だ。少しオーバーに表現すれば、このようなことのひとつひとつが私を構成し、まだまだ未熟であるが成長させている。これら構成要素の中で特に大きなものが、2つある。

一つは、何といても仲間の存在である。とかく親元を離れた大学生活ではその存在は大きい。部活中にも、それ以外の時にもたくさんのことを話す。他愛もない話をしたり、そうかと思えば真剣に部活の事を話し合ったり。一人の人であっても幾つもの面があるので、面白い。こうしていろいろな意見に接することができるのは、人としての幅を広げる絶好のチャンスだ。もちろん、時には厳しいことを言われることもある。けれどそのように言われることは、あるいはその方が私を成長させるのかもしれない。

このようにして、私は日々<マネージャーはチームプレー>というのを痛感する。もともと違う大学の人たちなので、出会いは単なる偶然のものかもしれない。それでも気持は一つだろうと思っている。昨年から分業し、徐々に仕事も増えているが、みんなで協力し合い、一つひとつ、ことをよりよい方向へ向かせようとしている。同じ気持ちを持って同じ方向をともに目指せるというのは、結束感と充実感を与える。ここで得た絆は本当に、大切にしたい。

サッカーを楽しむ

もう一つは、ある年の高校サッカー選手権大会の開会式で川淵キャプテンがおっしゃったことに起因する。―それは“大いに楽しむ”ということだ。

「サッカーを楽しんでください」

シンプルな言葉だったことも手伝ってか、胸に刺さるようだった。これは、夢にまで見た晴れの舞台でただ勝つことだけに躍起になるのではなく、自分がサッカーを続けてきた根本に立ち返ってほしいというメッセージだったと記憶してい

る。深読みしすぎかもしれないが、これは選手だけでなくスタッフにも、もっと言えば日々の生活にも言えることではないだろうか。心から“楽しむ”ことによってその価値が格段に上がると思う。

私が初めて「ア式」を見学した日、まじめにサッカーに打ち込む姿とそれでいて楽しそうにしている部員の方々の、そんな雰囲気の良さを感じた。『私もこんな風にまたサッカーを楽しみたい。』そう思って入った。今までいろいろなことがあったが、どれも私に影響を与えている。その刺激が私の“楽しみ”に繋がっていると思う。

さて、この二つのことは非常に関連性を持っている。簡潔に言えば、周囲の助けがあってこそ楽しめる、ということだ。私は不器用なので、きっと一人では転んでばかりで進めずにいると思う。そこで先輩に導かれ、後輩に救われ、同じ学年の人にはいつも助けられている。皆と出会えたこと、時間やそれ以上のものを共有できていることが、私にとってかけがえのない財産だ。

これから先も、きっといろいろなことに直面するだろう。ア式にはそれらの事から多くを吸収して、充実した時間を過ごせる環境があると思う。時にはよいことばかりではなく立ち止まってしまうこともあるかもしれない。しかし、そこで投げたしまわず、人間としての幅を広げていきたい。それには、少し遅れをとるかもしれないが、焦らず自分のペースを見失わずに進んでいけたらと思う。その途中で周囲の人と喜びを分かち合ったり、多かれ少なかれ私も手助け出来たら、さらに良いと思う。周りと刺激し合って、ここで過ごす4年間を実り多いものにしたい。

最後になりましたが、日ごろ多岐にわたりア式蹴球部を支えてくださる関係者の皆様に、心より感謝申し上げます。これからも精一杯精進してまいりますのでよろしくお願いいたします。

私がここ(ア式)にいる理由

日本女子大3年(マネージャー) 櫻井優里
女子校の茶道部から学連幹事に

私は6年前に開催された2002年日韓ワールドカップを見てサッカーが好きになりました。当時、私は中学3年生でした。女子校だったせいかワールドカップは異様な盛り上がりでした。ですが、ワールドカップが終わると周りのみんなのサッカー熱は冷めていってしまい、夏休みに入る頃にはサッカーが好きというのはクラスで私1人くらいでした。いわゆるにわかファンが多かったんですね。私のサッカー熱はみんなとは逆に、上がっていく一方でありA代表戦はもちろんU-23代表戦、U-19代表戦、Jリーグ、チームの練習まで見に行っていました。それと同時に、大学に入ったらサッカーに関わることをしたいと思うようになりました。

大学に入り新入生歓迎会のとき東大ア式蹴球部のマネージャーに誘われました。中学高校と茶道部だった私が大学に入り、いきなり運動部なんてなぁ…と思い最初は迷いました。しかし、実際に部活に行き練習風景を見た時、入部を決めました。入部当初は部活に関してわからないことだらけで空回りばかりでした。先輩に何度も怒られました。おまけに人見知りの性格のせいで自分から話しかけるなんてことは出来ませんでした。今までとは全く違う環境に慣れるには時間がかかりましたが、入部して数ヵ月経つと次第に部活に慣れていきました。すると自然に心にも余裕が出てきました。コミュニケーションもとれるようになり部活に来ることが楽しくなりました。そしてたくさんのことを学びました。組織に属するということ、人間関係、目標を持つことの大切さ、ひとつになるということの難しさ。「ア式」は私にたくさんのことを教えてくれました。この頃、私の思いにも変化がありました。それはひとつの目標に向かっていくみんなの役に立ちたいという思いで

す。もっと、もっとみんなの役に立ちたい。ア式に貢献したい。この思いが日に日に強くなっていきました。そこで見つけたのが東京都大学サッカー連盟の学生幹事(学連)の仕事でした。偶然にも同期のマネージャーで学生幹事をやりたいという子がいなかったのが私が学連に入りました。これで少しは役に立つことができたのかと思いながら今でも部活と共に頑張っています。

ア式を私の必然にする

そして、なぜ、私がサッカーを好きになったのかは、ア式に入ってわかりました。ア式に入るまでは漠然とサッカーは面白い選手がカッコいいから好きとしか感じていませんでした。しかし、それは違いました。私は頑張って、必死になって目標に向かっていく姿に憧れてサッカーが好きになったのだと気づきました。

あの時ワールドカップが開催されていなければ、私はサッカーに対して何の興味もなく人生を過ごしていったでしょう。きっと、あの時にWBC(ワールド・ベースボール・クラシック)が行われていたなら私は野球が好きになっていたでしょうし、バスケットボールが流行っていたならバスケットボールが好きになっていたでしょう。偶然、テレビでワールドカップを見て、偶然に私はサッカーが好きになり、偶然ア式に勧誘してもらい、偶然学連に入り、偶然に素晴らしい仲間たちに会いました。しかし、偶然とは必然的に起こる運命だと私は思っています。カッコいい風に言えば、私が今みんなと出会い、ア式にいることは必然的だったのかなぁと思います。あの時、サッカーが好きになっていなかったら私は今ごろどうしていたでしょう。あの時、私はサッカーに出会えて本当良かったと心から思います。

私がア式にいる理由そのものをひとつに断言することはまだ出来ないです。しかし、ここ(ア式)にいてみんなと一緒に協力し、共に喜びを分かち合い、時には、悲しみも分かち合う仲間がいることは最も幸せなことだと思います。私にとってそれは『最高』であり『最幸』でもあります。引退

するまでの間に『最高』な仲間たちと『最幸』な時間を過ごし、私がここ(ア式)にいる理由を見つけていきたいです。

部活

日本女子大3年(マネージャー) にげめ 迹目佑子
+αを求めてマネージャーに

私は大学で建築を学んでいて、だからということもあるのかもしれませんが、その学科の友人の中で部活をしている子はごくわずかです。しかし私はサッカー部のマネージャーをしています。建築雑誌を読み、建物巡りをして、一眼レフカメラで写真を撮り、美術館に足を運び、憧れの建築家の作品について討論し、与えられた課題をこなしていくだけで学生生活が終わるのは嫌でした。+αを通じて何かを得ることができたらと思って入ったのが「ア式」でした。中学時代から憧れていたサッカー部のマネージャーです。

ア式の人は、藪内監督をはじめとして素敵な人が多く、みんなのことをもっと知りたいと思いました。ですが、まず初めに気付いたのは自然にできて当然の行動ができない自分でした。

先輩マネージャーやしっかり者の後輩マネージャーの行動を見てみると、なるほどと思わせられるさりげない気配りが随所に見られます。それは相手の立場で考えれば当然気付けることや、一歩先を予測することで備えられることでもあります。自分中心に考えていては気付かないことです。ライバル心に満ち溢れた学科の友達の前ではつい忘れがちなことでもあります。私にとって部活を通じて出会った人や経験はとても価値ある大切な宝物です。

部活をしていてマイナスになることはないといえは嘘になってしまいます。特に、設計課題の提出が差し迫る中の部活には、私はいったい何をしているのだろうと思わせられることもありました。+αをこなすには、それだけ気合と根性が必

要ですが、ア式にはそれを平気で持ち合わせている人が集まっています。

色鮮やかな思い出

未だに、水を満杯に入れたボトル12本が入ったカゴを持って移動しなければならないときは重くて地味に辛いです。けれど、もっともっと辛そうな選手にボトルを渡したときにありがたいの一言をもらえると、心のもやもやは晴れて、虹までもが現れたりします。

私自身も部活中は普段よりありがとうと言う機会が増えるので、そのようなことからひとりではなくチームで動いているということを実感します。

考え方や感じ方は十人十色で、これだけ強い意志を持った人が集まっていれば、それぞれがチームについて真剣に考える程ぶつかることも多くなります。人それぞれ得意分野があり、ア式としても、スタッフとしても、マネージャーとしてもチームなので、お互いに助け合ってこれからもいい環境を築いていけたらと思います。

私は、時には一人で黙々とグラウンドを走り続け、楽しそうにリフティングをし、1対1の真剣勝負をする時もあれば、実は優しく面白い人が集まった、オンとオフの切り替えが上手なア式の雰囲気が好きです。特に先輩マネは、チームのことはもちろん、後輩マネのことも大切に考えてくれています。その先輩のパワフルさは、大きな責任感から生まれるものだという事も知りました。そのことを言葉ではなく行動で教えてくれ、プライベートな相談にも乗ってくれる先輩も大好きです。

時には背を向けたくなることもあります。好きなことをして過ごせている学生生活での色鮮やかな思い出は、人生の壁に出会ったときの大きなバネになってくれると信じています。

持ち続けていたいこと

文学部3年（AT） 半田奈緒子

ATを立ち上げる

部誌を編集するという節目の年に、東大ア式蹴球部に偶然にも在籍している。何を書こうかと悩むところであるが、せっかくこの先にも残るものに自分のエッセイが載せられるならば、「ア式」にいて私が感じてきたこと、今の想いをそのままに綴ろうと思う。おそろくとりとめないものになるだろうし、他の人が読んで面白いものになると思えない。けれども、いつか何年後かに自分で読み返したときに、今の率直な気持ちが生き生きと伝わるようであってほしい。

私は2年生のはじめから、ア式に入部した。それまでの部活を辞めようかと考えていたときに、たまたま出会ったのがア式だった。当初はマネージャーとして入部したのだが、紆余曲折を経て、アシスタント・トレーナー（通称AT）というものを起ちあげた。この瞬間から私の一番の頼れる仲間、大切な後輩で、大好きな友達となっているのが、一学年下の小蒲彩子ちゃん、丸井由貴ちゃんである。身体的基本的なこと、ケガのこと、トレーニングのこと、何もかも全くわかってないゼロの状態から、トレーナーさんに付いて一緒に学び、わからないところは質問し合って、1年間過ごしてきた。後輩でありながらも、同期である二人が、私にとってなくてはならない存在であることに間違いない。

さて、AT発動時の私の最初の目標は、引退するまでの間に、ATという制度をア式の中に定着させて、後輩に残していくことだった。少し緩すぎる目標設定だったのだろうか、実際にはATという仕事は部に根ざしてきているようだ。私の現在の目指すところは、リハビリ選手のATから部のATになること、である。今では、毎日の練習前や練習試合のアップ、ダウンを任せられ、リハビリ以外の選手からも相談をされることがあって、

確実に進んできてはいる。しかし、何かを新しく変えながらいつも前へと歩んでいきたい、という気持ちは常に持ち続けていきたい。

誕生日のサプライズ

ところで、新しいことと言えば、部のホームページの一新や、新歓活動などもあって、今年の春はなかなか忙しかった。忙しくて大変で、それなりに辛い時期を過ごしたことは否めないが、それでも本気で取り組んでくることができたのには訳がある。ここで話の筋を戻すことになるが、その訳はもちろん仲間の存在だ。前述したのは、同じATの2人のことだけだったが、マネージャーの皆のことも忘れてはならない。このように書いていて、今、ある時のことを思い出した。私の誕生日を皆で祝ってくれたときのことで、サプライズだった。感激するくらいに嬉しくて、何があってもア式で、この皆と一緒に頑張っていこう、とあの時に感じたのを覚えている。その気持ちをここで書くことによって再確認としたい。

それから、仲間と言えば、選手たちのこと。新歓活動をしていたときに、新入生に部の雰囲気、仲間の良さを伝える中で、「俺が結婚することになったら式にこいつらは全員呼ぶことになる」というようなことを誰かが言っていた気がする。私も納得できたし、それくらいのことが言える関係がア式では築けている証拠なのだろう。同じ大学であるけれど、ただの大学の友達とは違う、私にとって特別な人たちだから、きちんと向き合っていたい、と思わずにはいられない。言いつ言われつ、の関係でいたいから、私はできるだけ遠慮しないようにしている。ATとしての仕事柄で遠慮していても仕方ないということ、それからよりよい方向へと部の状態を変えること、それから個人の性格、という三つの理由からなのだが、それが正しいのかは私にもわからない。もっと謙虚であるべきなのかもしれないが、今はまだこうしたいと思う。……と偉そうに宣言できるようになるために、まずは確実な自覚を持つこと。自分でも足りないと思われるときもあれば、放りだし

ているときもいまだにあって、情けなくなること
 もしばしばあるからだ。

いろいろと書いてきたが、今の自分にとって東大ア式蹴球部が生活の一部となっていることに対して、満足している。普通の大学生からすれば、それで物足りなくないのか、など疑問にあがるところなのかもしれない。だが、誰かのケガで、その理由やメニューを考えるのに、途方に暮れたり挫折しそうになったりもするけれど、それでも御殿下に行きたい、という思いを持っている。実は、初めてア式の練習を見学に来たときの感想は、サッカーしているのを見ているだけなんて何がいんだか、というものであった。それまでの私は自分が運動をしない側に立ったこともなく、まして運動している人をそばで見ている人間になったこともなかった。ここまでの心境の変化をもたらしたのは、やはりア式という生活の中で出会ってきたすべての人だろう。ついこの前、入部したばかりの新入生が辞めることになったとき、部室で彼女と最後の話をしてからグラウンドに向かった。部室では平気だったはずが、グラウンドに来て皆を見ていたら、一人欠けたことが意識されて、涙がこぼれてしまい困った。グラウンドは私がア式の皆といたい場所である。それは、きっと後1年半も変わらないのだろう。

マネージャーと付き合うのは ありかなしか

文科Ⅲ類2年 江連 豪

結論はノー！である

結論はノー！である。これが今現在、部員の多くが持っている回答（であると思う）である。でもホントにそれでいいのか？ 男子校育ちの僕は今でも思い出す。共学の学校と試合するとき女子マネージャーといちゃいちゃしている相手校の選手を横目にみながら男どもに水の入ったコップを渡されるみじめさ。そして憧れた。マネージャーとの恋。またとないチャンスを得ている今、みす

みすこのチャンスを逃していいのだろうか？ 試合の時は、いつでも最愛の人に一番近くで応援してもらえる。練習中なんか少しでも痛もうものなら誰よりも早く氷を持って彼女が駆けつけてくれる。いいじゃないか。二十歳にもなって青春という言葉を使うのにはいささか抵抗はあるがまさに青春そのもの！ そして練習後。ツライ練習にヘトヘトになっている他の部員をよそにグラウンドから部室までは当然2人乗りである。自転車をこぐ下半身は練習で疲れているはずなのに坂道だったなんのその。なぜかって？ そんなことはいちいち説明するまでもなく後ろに彼女が乗っているから。さらには帰り道。他の部員への気まずさと恥じらいから別々に部室を出る2人。しかし毎日、駅で偶然出くわしてしまうのだ。ああなんと甘酸っぱい。まだまだ妄想は続く。舞台は秋季リーグ最終節、昇格のかかった大一番。勝てば昇格という試合は同点のままロスタイムを迎える。そして感動的な決勝ゴール！ ガッツポーズとともに僕は人差し指を空に向かって立てる。もちろん、その指の先には東大病院の屋上からビデオを撮っている彼女の姿が！そして心の中でこうつぶやく。「お前のために点取ったぜ」。最高じゃないですか。これぞスクールライフですよ。オフの日は2人でディズニーランドですよ。

ボールと恋人に

がしかし！ほんとにそんないいことばかりなのだろうか？ もう少しよく考えてみよう。まず、同学年のほかの選手たちが「マリエちゃん(仮名)」とマネージャーのことを呼んでいるのに自分もマリエちゃんと呼ぶのは変だし、かといってマリエとみんなの前で呼ぶのは気恥ずかしいがために結果的に『あの人』と呼ぶことくらいは我慢しないといけない。そもそも自分が付き合っている場合はいいこともいっぱいあるだろうが、逆の立場だったのだろうか？ 1月のオフには選手もマネージャーも関係なくみんなで楽しい学年旅行。旅行の夜といえばやはりトランプ。みんなで大富豪に興じていると、どこからともなく「あれ、人

数減ってない？」の声。気がついたら選手とマネージャーが1人ずついなくなっているじゃないですか。も、もしかして隣の部屋で2人きりなのか？ そんな状況耐えられますか？ 僕は耐えられない。その瞬間、チームも何もあったものじゃないですよ。みんなで勝利を目指そうなんて言っている場合じゃありません。完全に1人勝ちです。

しかし、なんだかんだ言ってもお互い好きになってしまったらそれはしょうがないのでまあそれはそれでいいじゃないんですか？ 僕にはわかりません。価値観は人それぞれなので。もし付き合うことになったならその時は、それぞれの部員が節度をもって大学生としてふさわしい交際をすればよいのではないかと。

一応、最後に個人的見解を述べたいと思います。僕はマネージャーの方々と付き合いたいとは思いません。上記のような妄想をつらつらとしてまいりましたが、僕にはまったくマネージャー萌え的な感情が湧きません。というかそんな感情が湧いていたらチームを支えるためにいつも頑張って仕事をこなしてくれているマネージャーの方々に失礼ですね。あとはやっぱりサッカーとプライベートはきっちりとメリハリをつけたい。練習の日にはグラウンドで彼女にあったり、オフの日もマネージャーとスイパラに行ったり、飲み会の日にマネージャーと二人でオールしちゃったりっていうどっちがどっちなんだか分からなくなってしまうような生活はしたくないです。要するに僕は残りの3年弱、サッカーと真摯に向き合っていきたいということです。最終的にボールと恋人になれれば素敵だと思います。

麻布サッカー部と ア式の主観的違い

理科Ⅱ類2年 大内三千生

辞めることは敗北

最近あまりサッカーが楽しく感じられない。もちろんこの文章を書いている時期が春季の頃であ

り、秋季リーグの時期ではないからなのかもしれない。ただ僕が確信を持って言えることは少なくとも麻布学園サッカー部でサッカーをしている頃に比べるとつまらないということだ。このように感じているのは恐らく僕だけではないのではないだろうか。つまり僕自身のみの問題ではなくア式蹴球部にこそなにか足りないものがあるのではなかろうかということである。そのことについて考えてみたいと思う。まず自分自身のサッカーとの関わりかた、そしてその環境を考えることにする。

僕がサッカーを始めたのは小学校2年生の時です。そのきっかけはグラウンドでサッカーをして遊んでいるときに友達と一緒にクラブチームでやらないかと誘われたことだった。実際僕は割と運動もできたほうだったのでなにかしようとは思っていた。しかし特にサッカーが好きで始めたわけでも続けていたわけでもまったくなかった。小学校では土日が潰れて友達と遊ぶことも出来ないし、わざわざ準備して行くのはおっくうでどちらかというと親に止めたいといいたくないから止めずに続けているという状態だった。結局僕がサッカーを止めたのは中学校受験を迎えた時だった。

僕は麻布学園に入学した。僕のなかでは絶対に運動系の部活に参加することは決まっていた。そして自分の最も得意なスポーツはやはりサッカーだったので、サッカー部に入部することを決意した。もちろんウマが合う友達がいるであろうという予想もあったからでもある。案の定サッカー部にはいい友達が出来た。しかし、サッカーはやはりあまり楽しくなかった。というのも正直あまり上手くない僕は試合中ボールをもらうのも恐かったし、練習も僕にはきつかった。僕が最もサッカーを止めるか迷ったのは中学3年生ぐらいの時。新しいコーチが来て、僕はBでずっとサッカーをやらされ、ないがしろにされていた。その時は何度止めようと思ったことか。僕をサッカー部に繋ぎとめたのは完全に意地とプライドだった。僕の途中でサッカーを止めることは敗北を意味していた。

チームの熱い絆よう一度

そうしてなんとか高校に上がりサッカーをつづけた。高校でコーチが代わったとはいえ、中学時代の影響もあり高校1年生の間はほとんどやる気がなかった。他の部員はかなり減って15人程度になってしまっていた。しかし逆に人数が減ったことで部員同士の絆は強くなっていったと思う。その絆のおかげで僕はもうサッカー部を止めようとは思わなくなった。麻布サッカー部は高2の秋で普通引退だがもの足りない人は高3の春までサッカーを続ける。僕が高2の春の時、二人の先輩が残った。僕は那些人達が好きだった。いい人でとてもサッカーに一生懸命で居残り僕と1対1の練習をしてくれた。その頃からサッカーを自分からやりたいと思うようになった。努力むなしく、春はスタメンをとることが出来なかった。それが悔しくて悔しくてしょうがなかった。だから夏は絶対にスタメンをとる、そして夏にスタメンを取れたらこれからずっとサッカーを続けよう、そう決心した。それからは本当に走り込み、努力をし、自分に甘えることは絶対にしなかった。

そして夏、秋とそして春までスタメンをはることができた。一生懸命やったおかげかどうかかわからないけど心から試合で勝ち進みたい、このチームで、そう思い始めた。チームメイトも妥協を許さないし、やる気に満ち溢れていた。そんな麻布の連中とサッカーをやれたことは恐らく人生で一番意味があり、楽しみだったと思う。

大学でもサッカーを続けることは受かった時から決めていた。きつい練習も麻布での練習のおかげで特別にきついとは思わない。でも何かもの足りない。というよりもこのチームで勝ちたいと思うことが出来ない。この原因の一つにはまだ「ア式」に1年しか在籍しておらず思い入れがないということもあるだろう。しかし最も根本的な原因はやはりチームメイト同士の信頼や団結力が形成されておらず、その意味でまだまだチームとして未完成であるといえるからだと思う。チームに大事なのは一人一人が、自分がチームの要素である

ことを自覚し、自発的に勝利へと向かいその手段としてチームメイトと団結することだと思う。

今のア式は個人個人が努力しているとは思う。しかしお互いがお互いを認め、高めあっていくという意識が足りないと思う。ただ上手いだけの人間など僕は必要ないと思う。勝つためにどうすればいいのか、それをみんなで考えて行くことの出来る人間が必要なんだと思う。今、ア式にもやる気のある人も、やる気のない人もいるけど、全員が勝利への執念を持ったとき、必然的に僕等はチームとしてまとまりをもち、目標へと近づけるのだと思う。

私とサッカー

理科Ⅱ類2年 久木田紳吾

熊本県トレセンチームでジュビロカップ出場

私がサッカーを始めたのは小学3年生の頃だった。友達が熊本YMCAというチームに入ったので、じゃあ僕も、という感じだったと思う。この頃は水泳などの習い事もいくつかやっていてサッカーもその習い事の一部であり、父が小学校でバドミントン部の顧問をやっていた関係でバドミントンもしていた。小学校の休み時間や放課後にはキックベースや鬼ごっこなどで盛り上がり、とにかくこの時期は友達といろんなスポーツや遊びをするのが好きだった。また、運動も勉強も得意だったので、この頃に自然と文武両道が目標になっていた。

そして小4、小5と進むにつれサッカーにとっても魅力を感じるようになり、バドミントンは小4で止めた。なんでサッカーに魅力を感じるようになったかは自分でもよく分からない。実際YMCAではほとんどの人が幼稚園からサッカーをやっていて、小3から始めた自分は下手だったので、小5の途中までレギュラーでもなかった。だけどサッカーはどんどん好きになっていったし、だからこそ早くレギュラーを取りたい、と思っ

て頑張った。だからその頃はひたすらリフティングとかキック練をしていた覚えがある。レギュラーになってからはキーパー以外の全てのポジションを経験した。しかし、レギュラーといっても私以外の10人はみんな私より上手く、私の取り柄と言えは走ることだけだった。最終的に6年の最後にアビスパ福岡を下して九州大会で優勝した時には右ハーフだったが、私はやはり勝利に貢献できてはいなかったように思う。

中学校時代は、本当にサッカー一色だった。小学校の時のチームメートは何人か他のチームに行ったが、私は中学の時も熊本YMCAでサッカーを続け、小学校の頃のふがいなさをバネにして真面目に努力した。すると1年の10月には1個上の代の試合にも途中出場できるまでになった。その頃は自分自身の成長は実感してなかったが、今考えるとかなりこの時期に成長したように思う。事はトントン拍子に進み、この頃熊本県トレセンの練習に参加し始めた。そして間もなくトレセンのコーチから四国遠征の18人に選出されたとの電話をもらった時は自分の努力が認められた気がして本当に嬉しかったのを覚えている。

しかしそんな嬉しい時も束の間、2年の夏にジュビロカップという大会に県トレセンとして参加したのだが、FC東京や清水エスパルスのジュニアユースと戦い、まだまだ自分は未熟だと感じた。しかもその時のジュビロカップで、特別に1個下の代から選出されていた選手にレギュラーを奪われてとてもふがいない思いをした。彼は小学校の頃からずっと日本代表に選ばれてるような選手だったし、試合を見ても彼の方が自分より上手いと思ったので納得できたが、やはり悔しかった。中学時代はこのような遠征や合宿、試合の記憶がほとんどで、サッカー以外のことはそんなに記憶が無い。文武両道は小学校からのモットーだったので授業は聞いていたが、それで良い成績が取れていたので自習はほとんどしていなかったように思う。

原弘明コーチに教えてもらった素直な心

中学時代でもう一つ忘れられないのが、原弘明

さんというコーチとの出会いだ。原さんは国見高校の前総監督である小嶺忠敏さんの教え子で、サッカーだけでなくサッカーを通して私たちを人間的にも成長させることを重視していた方だった。挨拶の徹底やボランティアへの参加、また練習試合などでは率先してグラウンド作りやゴミ拾いをするなど、その頃は少し面倒だなと思っていたが、今考えればそういうことを中学時代に経験しておいて良かったと思う。原さんの下で、感謝の気持ちを持つことや、素直であることの重要性など多くのことを学べて人間的にも成長できたと思う。中学生という人間形成において重要な時期に原さんに出会えて本当に良かった。

中学校時代の最後の大会も夏で終わり、ここで進路選択の問題が出てきた。YMCAの仲間やトレセンの仲間は、大抵、強豪高である大津高校かルーテル学院に進学すると言っていたが、私は大津高校か、進学校である熊本高校に進むかで迷っていた。勉強をとるか、サッカーをとるか。とりあえずサッカーの練習にも行きながら勉強もやることにしたが、年が明けて2月初旬くらいまでサッカーと勉強の両方をやっていた。結局、サッカーをしに大津高校へ行っても怪我をしったりサッカーが伸びなかったら無駄になるけど、熊本高校に行ったら勉強はある程度大丈夫だし自分次第で思いっきりサッカーもできると思い熊本高校に進学することにした。その冬に、熊本高校が新人戦で県ベスト4に入ったという朗報を聞いた。また小学校、中学校と同じYMCAでプレーし、トレセンでも一緒だった友達が熊本高校と一緒に入学する予定だったので、それもとてとプラスの判断材料になった。結局、彼も私も入試に合格し、二人でサッカー部を強くしよう、と言ってサッカー部に入部した。

高校時代は小学校や中学校と違って指導者の指示が少なかったので自由にサッカーができた。当然小学、中学時代の指導者の教えが土台になっているのだが、小学校、中学校より指導者の目を気にすることが無くなったからか、伸び伸びとやれてまた一段とこの時期に成長したと思う。同学年

のサッカー部の仲間も面白くてサッカーに熱い人間だったので本当に良かった。結局高校総体、新人戦と全てベスト8までは進出するもののその先の壁を超えることはできず、優勝した大津高校を見て大津高校に行っていれば全国にも行けたのと思うこともあったが、最高の仲間と高校サッカーを満喫したので熊本高校に進学して本当に良かったと思う。また、僕らの代がメインになる年の国体から、年齢がU-15になり僕たちの代は国体に出られなくなった。国体のメンバーに選ばれたかどうかは分からないが、目標としてきたものではあったのでとても残念だった。

熊本高校から東大を受験

次に勉強面について。高校に入学して最初のテストでは、学年の半分以下の成績だったしこの頃は東大なんて夢のまた夢だったので熊大か九大に行ければいいやと思っていた。しかし時間が経つにつれて成績はどんどん上がっていき、2年の夏には東大も少しは視野に入れ始めた。熊本高校の教師陣を信頼していたので、塾には行かず高校のやり方に従って勉強していたのだが、そのやり方が自分に合っていたらしくサッカーを引退してからは東大を受験しようと思い始めた。高校受験の時もサッカーと離れたのは1ヶ月もなかったもので、初めて長期間サッカーと離れて勉強をしたのだが、これはとても辛かった。この辛さをあと1年続けるなんて不可能だと思ったので、絶対現役で受かってやると思って頑張った。そして晴れて東大に入学した。

ア式蹴球部に入部してからはまず体力や体の動きを取り戻すことが最優先だった。受験中も少しは運動していたのでその点はすぐ克服できたが、大学サッカーはやっぱりフィジカルの面で高校とは違うので、無理をして5月に肉離れを起こしてしまった。運良くそんなに怪我は長引かず、復帰してから間もなくしてレギュラーとして試合に出してもらえるようになったが、90分間良いパフォーマンスを維持できるようになるまでには少々時間がかかった。私はボランチとして起用さ

れることが多く、トップ下にその時のキャプテンである伊藤貴寛さんがいたので攻撃に3割、守備に7割くらいの比重でプレーしていた。

秋季リーグが始まって大体ボランチとして出場し、とにかく守備を頑張ろうという気持ちでプレーしていた。第5節までで、秋季リーグの試合毎に相手監督から2票、自チームの監督から1票優秀選手に与えられる票がチーム内で1位だったので、最終的に秋季リーグの優秀選手賞をもらいたい、とモチベーションも高まっていたので調子も良かった。しかし、第5節の創価大学戦で相手選手からタックルを右足首に受け、結構ひどい捻挫をしてしまった。良い調子を崩したくなかったので次の週の第6節に間に合うように努力したが、結局第6、第7節と欠場してしまった。続く第8節も出場はしたものの、怪我の影響もあってか思うようにプレーできずチームも敗退。最終戦の一橋戦こそ勝ったものの結局目標だった1部昇格は果たせなかった。その冬に行われた新人戦は左の踵かかとの骨打撲により出場できず、1シーズン目を終えることになった。

2シーズン目の目標 10 ゴールを達成

1月のオフが明けて2シーズン目。2シーズン目になってまた目標を段階的にいろいろ立てたが、その一つに対外試合で10ゴールというものがある。去年の4年生は新人戦で優勝した代で、人数も個々のレベルも他の代に比べ上だったので明らかに今シーズンは戦力がダウンした。だから私はまず昨シーズンのディフェンス力を維持したまま、攻撃でもボランチの位置から貢献しなければいけないと思い、対外試合で10ゴールという目標を立てた。目標達成のために、私は突破力とシュート精度にはある程度自信があるので、高い位置で相手からボールを奪って相手が手薄な時はとにかく仕掛けることにした。これまでに自分の理想とする形で2、3点は取れたし、何より5月に行われた早稲田Bとの試合で2ゴールを決め、目標だった10ゴールはもう達成した。これに慢心することなくこれからももっと理想に近づける

ように努力していこうと思う。

また、先日東京ヴェルディのトップチームの練習に参加させてもらった。小学校、中学校とYMCAで一緒にサッカーをしていた友達が去年ヴェルディに入団していたので、割とすぐ溶け込めた。まず練習を通して一番感じたことは、プレースピードが東大の練習とは段違いに違うということだ。普通に5対5のパス回しをするにしてもボールも人も速くて展開も速いので体力的にきつかった。でもこんな環境でサッカーをやれること自体が嬉しかったし、またある程度その中で自分のプレーがやれたことは自信になった。練習後、高木琢也コーチに「今回の練習のシチュエーションでのオフENSEは良かったけど、ディフェンスはもっとアグレッシブにいかないとけない。あとパス技術も改善しなければいけない。」と言われた。自分の中でも同じような反省をしていたので、見ていてくれたんだと思って嬉しく感じたと同時に、もっとレベルアップしてやろうと前にも増して強く思うようになった。このモチベーションを維持して、これからも強い向上心を持って頑張っていきたい。

自分とサッカーとの関わりについて

理科Ⅱ類2年 佐藤裕人

高校1年の春

今回部誌を作るということで自分も一部員としてその作成に微力ながら携わる運びとなったわけですが、せっかくこのようにサッカーについて冷静に考えてみる機会を与えられたのだから、今までの自分とサッカーとの付き合いを振り返ってみようと思います。とはいっても、とても他人の見本となるようなものではないので気恥かしさが拭いきれない面もあるし、自分の稚拙な文章では冗長になってしまうこと請け合いなので、自分にとって大きな転機と認識している三つのことを書いてみようと思います。

自分がクラブなどに自分の意思で所属してサッカーを始めたのは中学入学後でした。それまでは放課後遊びなどで球蹴りに興じることはありましたが、スポーツとして始めようと思ったのがこの時です。なぜ入部を決めたのかは記憶が定かではないのですが、友達に誘われたなどの些細なことだった気がします。自分の出身中学は中高一貫校であり、中学3年生時に大会で敗退すると、すぐに高校の部活に入って練習するしきりとなっていました。中学時代はダラダラと練習をしているような状況で、お世辞にも、うまくなって試合で勝とうという雰囲気があるとは言い難かったように思われます。

しかしこの時期というものは何もしなくても身体が成長する時期なので、それに甘んじているようでした。だから、高校の部活に入って、部員の意識の高さに驚きました。今思うと当たり前のことばかりですが、「練習はさぼれない」「先輩に仕事をさせてはいけない」などの、いわゆる「体育会的」な考え方は、この当時からだで覚えていたものがほとんどです。しかしなにより衝撃だったのが、練習の質、量の違いでした。とても体力的にも技術的にもついていけず、先輩から叱咤されることは日常茶飯事でした。しかし毎日ボールを追いかけてまわすうちに、なんとか1年ほどで練習にはついていけるようになりました。

この1年は初めてサッカーのために多かれ少なかれ努力をしたという意味で、重要な1年だったと思います。また、シャトルランを練習後にしているときにある部員がきつさを嘆いていた時、当時の先輩が言った「きつくなかったらトレーニングにならないだろ」という言葉は、今でもきつい時に思い出す言葉の一つです。

高校1年夏

次なる転機は高校1年の夏でした。当時は3年生が引退した後、新チームが発足した直後で、自分も先発で出場する機会を与えてもらえていたが、まだまだ3年生が引退した穴を埋めていると言えるレベルではありませんでした。

当時の監督は、同じくこのチーム状況は厳しいと思ったようで、就任2年目でいろいろと慣れてきたこともあり、惜しみなく部員たちをしごき始めました。練習試合で負けたらダッシュをさせるのなどは序の口で、日常生活でなにか不適切なことが発覚してもダッシュが待っていました。こういう場合、「連帯責任」という言葉がしょっちゅう聞かされました。自分も、シュート練習で詰めに怠ったために、部員全員を走らせてしまったことがあります。この連帯責任によって、こういった罰走は、体力トレーニングよりもはるかに精神的に厳しいものとなりました。他人のミスによって走らせられる、または自分のミスによって他人が走らせられる辛さに加え、いつ終わるかわからない恐怖と闘う毎日が続いていたのでした。

自分のサッカー人生の中で、唯一サッカーをやめようと思ったのはこの時だったというのは、今だから言えることです。しかし、この厳しい夏を過ぎると、確かに自分の中に変化を感じました。体力的に明らかに走れるようになっていたのは勿論、あれだけ走ったのだから走り負けるわけがないという自信が沸々とわいていました。この時期は、根拠に基づいた自信というものを初めて獲得した時であり、その後の自分の自信過剰な一面を形成する基盤となっている気がします。

けが

三つ目の転機は、現在進行形なのですが、大学入学後から今までです。現役の方はご存知かと思いますが、ア式蹴球部に入部後自分はほとんどけがによってサッカーをしておらず、長いリハビリ生活を過ごしています。前述のとおり現在進行形なので、客観的に考察を加えてみることは難しいし、一刻も早く復帰したいのは言うまでもありません。しかし、この時期を経て、サッカーやサッカー部に対する考え方や貢献の仕方は、自分が今まで思っていた以外にも数多存在することを実感するようになりました。具体的に挙げるほど考えはまとまっていませんが、なんとなく実感している次第です。というよりも、へたに言語化するこ

とによって自分がそれに縛られてしまうことに怯えている、といったほうがいいかもしれません。

今まで長々とまとまりのない文章を書いてきましたが、今一番強く思うことは、やはり復帰してサッカーでチームに貢献したい、ということです。プレイヤーとして入部した以上、これを本分として忘れてはいけないと思います。後になって、「あのけがの時期があったからこそ今の自分になった」という考察がこの文章に加えられるよう、日々努力していきたいと思います。

「ア式」の東京制覇

文科Ⅱ類2年 白井英介

都学連幹事として経理担当

東大サッカー部ってのは結構歴史があるところらしく、今年で90周年を迎えるらしい。めでてーまじめでてー。めでたいついでにエッセイを書けと仰せつかった。2000字。長いよね普通に。なんかこんな感じでいいのか心配になってきた。真面目に書こー。

エッセイ。エッセイって何？ってことで辞書引いてみた。エッセイ【essay】自由な形式で意見・感想などを述べた散文。自由な形式ってことは冒頭の何行かは間違ってたってことにしよう。タイプミスなんかはこの際目を瞑ろう。とにかく何でも書いていいってことなので私が日ごろ思っていることについて時間の許す限り（原稿提出時間ギリギリまで）書いていきます。エッセイばんざい。検閲もあるらしいけど引っかけたらまァドンマイ。日の目を見ることのなさそうな文章を書くのは気が引けますが、検閲担当の方少々お付き合ってください。ちなみに今まだ400字。先は長い。

さて、私は現在東京都大学サッカー連盟において学生幹事という形で経理の仕事を担当しております。そのため練習に出席できないことも時々、もとい、しばしばありますが、まァ俺ペーパーだし、

と思いながら日々仕事をこなしているわけです。

そもそも私は都学連というものに全く興味がなく、自ら運営に携わろうなどという殊勝な人間ではありませんでした。そのためにはじめは幹事会に出席することにさえ苦痛を感じていました。ところが最近では、毎週の幹事会に休まず参加することはもちろん、東京選抜を組織する技術委員会に入れていただいたり、自分の担当する経理において新しい試みを始めるなど、いうなればやる気マンマンです。いい響き。

なぜ私がこのようなマンマン野郎に変貌するに至ったのか、私のことを少しでも知っている方であれば疑問に思うでしょう。実際私自身ちょっとやりすぎなんじゃないかと思うこともあるぐらいですから。キーワードはこれ、「東京一のチーム」です。具体的には、東京都サッカートーナメント、春季対抗戦、秋季リーグ戦、新人戦の4冠を達成することだと私は思っています。もちろん実力だけでなく、健全な運営や地元と密着したチーム作りなど、「東京一」という枠を広くとらえた考え方もあるでしょう。しかし、我々現役部員が考えなければならないことはただ一つ、旗影高し、じゃなくて、サッカーで東京を制覇すること、これ以外にないはずです。だとすれば、我々が考えるべきは、「如何にしてア式を強くするか」この一点に集約されることになります。「強い」チーム、というのはなかなか難しくはありますが、ここではよりシンプルに、たくさん「勝利」するチームが「強い」と考えることにしましょう。要は全てのア式構成員が、試合で「勝つ」ために何をすべきか、何をしなければいけないかを考えて行動することが不可欠である、ということです。

仕事はできているか

プレイヤーは自分が巧くなること、強くなることが間違いなくチームのレベルアップに直結しています。だから東京制覇のために、とにかく練習すればいいわけです。トレーニングして、ケアして、体を休める。己の為に精進するこれら全ての行動が東京制覇を見据えた行動である、と言うこ

とができるわけです。しかし、長期的な怪我をして私が思ったことは、己を高める以外の勝利への貢献の仕方がある、ということです。もちろん己の早期治癒のためリハビリすることも東京制覇を見据えた行動です。しかし、例えば私であれば都学連において先輩の仕事を請け負うこと、応援をしてチームを盛り上げること、また応援を通じて「まあ公式戦は出れないよね」みたいに感じてしまっている仲間と気持ちを高め合うこと、新歓活動の規模を拡大して新入生を多くチームに引き入れること、これら全てがア式の東京制覇に直結していると考えれば全く苦にはならない、そう思うことができるようになりました。もちろん、他にも自らの仕事をこなすことがア式の東京制覇に直結すると考えるのが難しい集団もいるでしょう。与えられた仕事を取り合ったり、スペシャリティを与えられないと仕事が疎かになってしまうのも仕方ないことなのかもしれません。確かに現在薬缶^{やかん}は2つしかありませんし、検見川の部屋も2つしか取っていませんしね。しかし、本当に「ア式を強くするため」という視点に立っていれば、「仕事は与えられるもの」という思考の枠組みが既に誤っていることに気づくはずです。

与えられたタスクをこなすだけでは勝てないし、時にはその仕事が本当に目的に合致した形で行われていたかどうかを疑う姿勢も必要なのです。だから、「〇〇ちゃんは仕事持っていないからこれ私がやっちゃったら角立つよね」みたいな馴れ合いを見ていると、ア式のこと、本気で考えてるの？とイラッとします。もちろん効率化のために最低限の仕事の分担は必要です。でも、目指すべき目的のために何ができるか常々考えていれば、大学の部活という小さな組織の改善点など、4年間では修正しきらないほど出てくるはずです。それほど、変革とは難しく、しかしやりがいのあることだと私は思います。これは都学連においても同様です。与えられた仕事が少ないから「やりがいがない」と感じている人がいること自体私には信じられません。そんなの結局は「与えられたものをやり切った」とかもっと言えば「私頑張ってる」という自

己満足を求めているに過ぎないのでから。

なんだか角が立つ文章になってしまいました。気づけば2000字をオーバーしてしまっていたので私のエッセイはこれにてお開きにしたいと思います。やっぱめでてー。

自分の目標と 部の目標達成を願う

理科Ⅱ類2年 藤井文生

レギュラーになりたい

東京大学ア式蹴球部2年藤井です。早いもので入部してから1年がたちました。大学に入学した当初はサッカー部に入るつもりはまったくありませんでした。サッカー部どころかサッカー・サークルに入るつもりもありませんでした。あのころは大学では文化的な活動しようと思っていました。とりあえず、将棋部に入り、それから演劇でもやろう、そう思っていました。僕は小学生のころから将棋に興味がありました。浪人時代に羽生善治さんのことをいろいろ知り、ますます将棋に対する関心が強くなりました。また東京大学の将棋部は全国の大学で一番強いと知り、これはもう将棋をするしかない、将棋に対する想いは強くなる一方でした。

しかし、大学に入ってから状況は一変しました。入学してからはとりあえずいろいろなところを見ておこうと思ってこのア式蹴球部にも顔を出しました。そしたら思った以上に久しぶりにするサッカーは面白かったのです。そこで僕の気持はだいぶ揺らぎました。ただ、それでもまだ将棋や演劇に対する気持ちも強く、サッカー部に入らずサークルで楽しくやるだけでいいんじゃないか、そんな風に思っていました。

ところが、入学式の後のクラスの飲み会で、同じクラスに所属するサッカーに熱い男、久木田紳吾にサッカー部に入るかどうか聞かれたときに思わず入ると言ってしまったのです。彼は部員が増えることをとても喜び、僕は何かいまさらやっ

ぱり入らないと言えない感じになり、そのままサッカー部に入ることになりました。

こうして、その場の雰囲気流されてサッカー部に入ることになったのですが、実際に「ア式」でサッカーをしているとやはり面白いです。練習は確かにきついので、ときどき入部したことを後悔したこともありました。特に週に一回あるフィジカルトレーニングをしているときに自分がなぜこんなところで必死に走っているのか疑問をもつこともありました。しかし、どういうわけか、どんなにきつい練習をした後も仲間と一緒に楽しく過ごしてるうちに、また明日も頑張ろうという気持ちが湧いてくるのです。サッカーというスポーツに魔法のような力があるからなのか、サッカーボールに力がかかることで不思議な化学物質が合成されるからなのか、サッカーをしているともっとサッカーをしたい、もっとサッカーがうまくなりたい、そういう風に感じるのです。いまではサッカー部に入って良かったと思っています。

そんな感じで1年が過ぎましたが、前年度は東京大学ア式蹴球部はあまりいい結果を残せていません。春季リーグは予選リーグ敗退、総理大臣杯も敗退、秋季リーグでは目標としていた1部昇格を果たせず、新人戦は初戦敗退。非常に残念な結果となってしまいました。

今年の僕の目標はレギュラーに定着することです。まあその前に腰痛を治すことが先ですが。ただその個人的な目標を達成すること以上にチームが目標を果たすことを切に願っています。すなわち、東京大学ア式蹴球部が東京都リーグ1部に昇格することです。仮に自分が目標を達成することができなくても、チームには勝ってほしいと思っています。そのために、試合中の応援、試合に出る選手のサポート、声だしなどを精一杯やるつもりです。いままでは自分のことしか考えておらず、チームのことを考える余裕はありませんでしたが、今はチームのことを第一に考えています。これはサッカー部で1年やってきて自分もだいぶ成長できたからではないかと思っています。

こうして1年やってきていまなおきついと思う

のは時間と金銭です。やはり部活と勉強の両立は難しいですし、サッカー部では練習以外の活動も多すぎると思います。なんだかんだで時間をとられると相当きついです。また、金銭面でも毎月支払う部費や合宿費、ユニフォーム代など相当な出費になります。年数回のコンパも結構な出費です。新入生がなかなか入らないのもこれらのことがひっかかるせいだと思います。

このままでは終われない

理科Ⅰ類2年 松谷康平

地域のチームから香港のチームへ

「ア式」創部90周年ということでエッセイを書かせていただくことになりましたが、自分自身でも振り返ってみようという思いも兼ねて、短いながらも自分のサッカー歴について書かせていただきます。

自分がサッカーと出会ったのはもう10年以上前、小学校三年生のときでした。

学校にも慣れ、休み時間や昼休みに遊ぶお決まりの友達も増えたころ、一人の友達がある少年サッカーチームに自分を誘ってきました。休み時間や放課後に友達とボールを蹴って遊んでいたこともあって、サッカーへの興味は少なくなかった自分は、その少年サッカーチームに入団し、サッカー人生をスタートさせました。

その1年後、親の転勤という理由で香港へ引っ越すことに。引っ越す前は日本語が通じない外国での生活と通じ合える友達や慣れ親しんだ土地との離別に正直不安と寂しさでいっぱいでした。しかし、そこは日本人観光客がよく訪れる場所であり、そこに住む日本人も多く、日本人学校の存在もあって慣れるのにそう時間はかかりませんでした。

しかし何より大きな要因となったのが、日本人のサッカーチームの存在。既に日常とサッカーが切り離せないものとなっていた自分は迷わず入団し、平日は近所の友達やクラスメイトと、土日は

チームの仲間とボールを蹴る日々が続きました。マンションの香港人の少年とも試合をしたことも多く、今思えばこれが「サッカーは世界の共通語」ということなのでしょう、自分にとっては貴重な経験だったと思います。

中3でレギュラーを奪う

小学校6年生の4月に帰国し、中学受験を乗り越え浅野中学校に入学した自分は、サッカー部に入部するかしないか決めかねていました。というのも、受験勉強で鈍った体をまた動かそうという気にはならなかったから。それでも帰宅部になるよりはとサッカー部に入部しました。

ここで待っていたのは大きな挫折。周囲の選手は高い技術を持っていたり足が速かったりと実力者ばかりで、なかなかチーム内でポジションが与えられず、試合でも出場時間が限られることもありました。

ここであきらめて投げ出してふてくされてしまうか歯をくいしばって練習を重ねるかは当時の自分には大きな岐路でした。ここで前者を選べば二度とサッカーと関わる事がなかったかもしれません。

自分は練習を重ねました。試合に出られるように。活躍できるように。周りに認められるように。中学3年の時にレギュラーポジションを奪い試合前に自分の名前が呼ばれたそのときの感動は今でも忘れられません。

高3の無残な敗戦

ここで中学・高校時代のサッカー部の顧問について少し触れたいと思います。

入部当初はとても怖い存在で個人的に会話することもままならず、学校内でも少し空気の違う先生でした。理由はわかりませんが徐々に角が取れはじめたものの、いまだに試合中・練習中にはよく怒られていたところに、先生に言われた一言があります。

「お前に期待してなかったらお前のことなんか怒らない」

つまりは、怒鳴りながらもそのアドバイスを伝

えようとしているということ。そのことに気が付きはっとした自分は、それ以降どれほど怒鳴られようとそこに込められたアドバイスを必死に受け止め、考え、試行錯誤するようになりました。

多くのことを学びました。プレーの面でもそうですが、一人のサッカー選手、スポーツ選手としてのマナーも厳格で、私生活の面でも勉強になったことは少なくありません。その全てを吸収し身につけたとは言えませんが、「恩師」と呼べる人のうちの一人であることは間違いありません。

その先生のもとサッカーを続け、高校3年の夏の選手権予選を迎えました。浅野高校サッカー部としては最後となるこの大会に、もちろん部員全員で意気込んで臨んだわけですが、結果はここに書くのはばかられるほど残念なものでした。肩に力が入りすぎたのかもしれませんが、普段なら確実に勝てる相手にふがいない戦いをしてしまい、まさしく不完全燃焼となったまま中高6年間のサッカー生活に幕が下りました。

「このままでは終われない、もう一度サッカーがしたい」

大学でもサッカーを続けることを決意した瞬間でした。

1年間の浪人生活を経て東京大学に合格したその日に、本郷のグラウンドへと足を運びました。人工芝とは聞いていたものの改めて自分の目で確かめ、ア式に入部するという決意は一層固くなりました。

ア式に入部してから1年、紆余曲折ありましたが今もこうして、サッカーの楽しさ、奥深さ、醍醐味を感じられるこの上ない環境のなかでサッカーに真正面から向き合う生活を送っている次第です。

19 歳

お茶の水女子大2年（A T） 小蒲彩子
出会った人達みんな好き

2007年4月、大学に入学したばかりの私は、

これから始まる大学生活に期待で胸を膨らませ、将来の夢に向かって日々精進するのだと意気込んでいた。そしてその将来の夢に少しでも近づくために、このア式蹴球部に入部することを決意した。しかし1年が経った今、正直その夢に対する熱意は薄れつつある。高校時代に比べてはるかに自分の世界が広がったことで、新たな分野に興味をもつようになった。そして、もし夢が叶い願い通りの職業につけたとしても、それだけでは食べていけないという現実を知ったからである。とはいっても完全に憧れを失ったわけではなく、幅広い視野で将来を見据えようと思っている最中である。

今秋、自分は20歳の誕生日を迎える。社会ではもう成人とみなされる年齢になるのだ。だが、今の自分を思うととても成人と呼べる気がしない。ほんの些細なことで喜んだり、悩んだり、怒ったり、悲しんだり…。よく言えば感受性が豊かということかもしれないが、その感情を隠せずぐ表に出してしまうところがまだまだ子供だと思う。経済的にも、自分はまだ学生の分際で親のお金で生活・勉強しているし、実家暮らしのため直接生活面で支えられている。

こんな自分だが、大学に入り大人になったと思うこともある。自分が常に周りの人に助けられ、許され、生かされていることに気がつき、感謝するようになったのだ。高校時代はそんな自覚もなく自信過剰で、簡単に人を嫌いになったりもした。こんな自分を変えたのは、大学に入ってから出会った人々、特に「ア式」の人々との出会いである。

入部したころと今とでは自分の将来やりたいことは変わりつつある。しかしア式に入って本当に良かったと心から思っている。なぜなら今の自分は、ア式に入ってこそ自分だと思うからだ。サッカーに対し真剣に前向きに取り組むプレーヤー、それを常に気を配り支えるマネージャー、ほぼ0の状態から手探りで一緒にここまできたA T（アシスタント・トレーナー）の仲間との出会いは、自分が中心となってプレーできれば良いと自己中心的だった高校までの自分を変えた。もちろん上

手くいかずに悲しむことも、辛いこともたくさんある。だがそれ以上に、ケガをした選手がリハビリを経て再びプレーしているのを見たり、失敗して落ち込む自分を誰かが励ましてくれたり、他のマネージャーやATと協力したことが上手くいったりすると、嬉しくて楽しくてしょうがないのだ。ア式にいと、嬉しいことも悲しいことも全てが自分を作っているのだと思うことがよくある。

今の自分の構成要素は、出会った人達全員といってもいいと思う。幼稚園しか一緒になかった子も、街角で親切に道を教えてくれた人も、よく叱ってきたバイト先の元上司も、今の自分の行動に何らかの影響を与えているかもしれない。時間は永遠ではない。そういう人との出会いは、一生に一度しかないかもしれない。ぼやっとしている場合ではない。

今まで出会った人全員に感謝するのはいまひとつピンとこない。しかしその場の出会いで終わらなかった、今関わっている人全員のことが本当に大好きだ。この気持ちを伝えるのは難しいかもしれないが、上手く表していきたい。そして二十歳の誕生日を、平凡の日ではなく何か特別なきっかけの日にできたらいいと思う。

サポートの側に回ってみて

お茶の水女子大2年（マネージャー） 高木美帆
個人技ではないサポート

ア式蹴球部のマネージャーになってから約1年が過ぎようとしています。

初めて御殿下グラウンドを訪れたのは、今年の4月下旬。人工芝が広がるその光景に随分驚いたことを覚えています。

サッカーに携わったのは初めてのことで、聞くこと見ることも全部が新鮮だった上、戸惑うことも多かったように思います。

1年を経た今、少なからず自分自身の成長を感じることが出来ます。

しかし、至らない点もまだまだ多く、現状に甘んずることなく向上心をもって臨みたいと思います。

マネージャーという仕事は、自らが主体になるのではなく、あくまでサポートをする立場です。今までの人生の中で、誰かに助けられことやサポートしてもらった記憶は多々あるのですが、自分自ら誰かをサポートすることはなかったように思います。よって、今までの考え方が通用せず、新しいものの見方に触れることができたのです。

私は今まで、与えられたことを一生懸命やってきました。それは、自分の仕事だったり、練習だったりしますが、とにかくがむしゃらにやるのが当たり前と思っていた節があります。もちろん、一生懸命やればやるだけ報われ、結果がでるものです。たまに、そうはいかないこともあります。

ところが、それは自分が主体のときには当てはまるのですが、そうでないときは当てはまらないことが多いと気付きました。サポートする立場、つまり自分が主体ではないときに、周りに気を配らず目の前にある仕事をただこなしていると、サポートするどころか逆にマイナスの働きをすることがあったのです。これには驚きました。周りのスタッフと協力して、何が必要か、どう動くかを決めていくことが大事だと教わりました。サポートは個人技ではないのです。自分一人が何でもかんでも一生懸命やることが正解ではなく、全体のバランスを見てタイミングをはかることが大切だ、と気付きました。たくさん失敗して大切なことに気づいたので、これを生かしていきたいと思っています。

そして、常に柔軟性をもつこともひとつの課題です。人を対象としているので、変化はつきものです。状況も刻々と変わっていきます。臨機応変が大事だよ、といわれたことがあるのですがまさにその通りだと思います。私個人は、想定外のことが生じると動けなくなることが多いのでもう少し柔軟性をもてたら、と思います。

以上は1年間の部活動を通して学んだことですが、マネージャーの仕事をする時以外でも重要なことだと思います。

そして、人との関わりは入部して得たもののなかでも、とても大きなものです。

スタッフの仲間をはじめとして、助けられたことがこれまで何度もあります。一緒に悩むこともあるし、ときには叱ってくれます。大切にしていきたいです。

この1年を過ごしての感想ですが、大学生活はあっという間に終わるのではないかと思います。何をすべきか何をしたいのかを見極めて、一日一日を大切にしていこうと思います。

成長すること

立教大学短期大学部2年（マネージャー） 藤村美穂
甘えてはいられない

今年の春から「2年生」になったわけだが、いまいち実感がわかにいた。大学生活自体も大きな変化があるわけではないので、余計に「1年生の続き」という感じで毎日を過ごしていたのだが、新入生が入部してきて、私なりに少し「先輩」としての自覚が出てきた気がする。しっかりして、良いお手本にならなければ、と思うと背筋が伸びる。しかし、いざ仕事を教えるとなるとやっぱり戸惑ってしまうし、質問する立場から質問される立場になり、日々悪戦苦闘している。大学で教育学を専攻しているのだが、勉強だけでなく、どんなことも「教える」ということはとても難しい。また、うまく教えられないということは、自分自身が完璧に出来ていないということにも繋がる。1年生を見ていると、私が入部したときを思い出し、時間が流れるのは本当に早い、もっと一瞬一瞬を大切にしないで、とつくづく感じてしまった。いつまでも甘えてはいられない、しっかりしなくては、と思うと同時に、私は周りの環境に本当に恵まれているな、と思う。

私の周りには、時に厳しく、時に優しく色々教えてくださる先輩方や、一緒に「ア式」生活を楽しめる仲間がいる。「先輩」と呼ばれる立場になっ

てからこそなのか、私がどれだけ回りの人に頼り、甘え、そして助けられてきたかがわかる。ア式はもちろんのこと、大学に入ってから特に、私より遥かに多くの経験をしてきている人と関わる機会が多く、沢山の刺激をもらっている。そのような人たちと関わっていくなかで、私自身の未熟さを実感させられてしまうのが少し辛かったりもするが、本当に周りの人たちには感謝の気持ちでいっぱい。一つの組織として成り立たせるためには、もちろん全員での協力と調和が必要なのだが、その中でも個人個人の高い意識がなければ組織というものは成り立たないと思う。ア式生活で、新しいことを学び、日々成長し、全員で同じ方向を目指していけることが本当に嬉しい。

普段の練習のときから、選手たちが良い球を蹴ることができたり、シュートを決めて喜んでる姿を見ると、思わず笑顔になってしまう。自分のことのように嬉しく思うってしまうのだ。先日、ある企業の社長が「他人の喜びを自分の喜びとする」と言っていたのだが、私にとってのア式生活こそがこの言葉に当てはまるのではないかと感じてしまった。選手一人一人にいろいろな想いがあってプレーしていると思うと、軽々しくマネージャーの仕事などできない。おこがましい言い方になってしまうが、少しでも選手たちを支えていけたら、と思う。もちろん私がプレーするわけではないのだが、どんなときも選手と同じ立場に立って、同じように喜びや楽しさ、時には辛さや悔しさを共感していけたらいいな、と改めて感じた。

話は変わるが、かつて、イタリア代表のロベルト・バッジョという選手が「サッカーがきるなら寿命が縮んでもかまわない」と言った。私はこの言葉が大好きだ。この言葉を聞いたとき、選手としては普通なら「勝利」という結果を残せることが一番嬉しく、輝かしいことであるはずなのに、サッカーができるということを素直に喜び、命をかけていることに感動した。勝利を掴むことや試合にでることよりも、サッカーができるという自分の環境や、周りの人に感謝し、命をかけてプレーしているロベルト・バッジョの考え方を尊敬して

しまった。それと同時に、ア式の選手たちもロベルト・バジジョと同じように感じているのだろうな、と思った。自分の命に代えてまでサッカーを大切にできることを尊敬し、また、羨ましくも思った。そして、マネージャーとしてア式に携われることの素晴らしさを改めて実感し、これから先、もっともっと成長できるように努力しようと思った。

日々、前進

学習院女子大2年（AT） 丸井由貴

やる気と不安

私が、サッカーを好きで見るようになったのは高校2年生の時で、とても最近のことです。それまでは運動が苦手で、どちらかというとスポーツはあまり好きではなく、テレビで楽しんで見ることもありませんでした。しかし、高校生の時にテレビで、あるサッカーの試合を見たときから、サッカー・スポーツへの見方が変わりました。それからよくサッカーを見るようになり、スタジアムに行くようになり、段々自分が観戦するという以外でサッカーに関わりたいと思うようになりました。そして、大学生になり大学サッカーを初めて見たときに、私がやりたいものを大学サッカーの中に感じました。

現在、私はア式蹴球部でアシスタント・トレーナー（AT）をしています。ATは私が1年生の時に出来ました。主な仕事内容は、一言で表すと「リハビリの手伝い」です。私は今まで運動は体育の授業でしかやったことがなく、ましてや怪我・リハビリの知識はまったくと言ってよいほどありませんでした。トレーナーの方や先輩方に教えて頂き、だんだんと分かること、出来ることが増えていきました。始めは、教えていただいたことを中心に、覚えたり、自分なりに勉強したりしていました。しかし私の仕事は、それを自分で理解すれば終わりではありません。選手に対して行います。初めの頃は、すぐ実践できるという恵まれた

環境に喜びを感じ、充実感で一杯でした。けれどもそれが去年の夏頃、私には重いプレッシャーに感じてきました。「やりたい・やらなくてはいけない」という気持ちと同時に「何かミスをしてしまったら…」と不安に思うことが多くなってきました。そんな気持ちを打ち消そうと勉強をしました。でも、実践する機会が毎日のようにあり、追いつきません。また、何か聞かれても、自信を持って答えられず、ますます自分に自信を持てなくなっていきました。そんな時、トレーナー・AT・マネージャーで話し合う機会があり、私は失敗が怖くて、何も出来ないと思っていることを言いました。その時に、みなさんが言ってくれた言葉が私に壁を乗り越える力をくれ、前進することが出来ました。

私がア式蹴球部と関わって、まだ1年がたったばかりです。よく好きなことをやるのは大変と言われてきましたが、それは本当かもしれません。でも、この1年間は私にとって1年分以上の経験をさせてくれました。そして、あの時大学サッカーに感じたものを信じて実行に移して、本当によかったと思っています。上記以外にも、みなさんの言葉が私に力をくれたことがたくさんあります。私1人では絶対乗り越えられなかったこと、出来なかったこともみなさんのおかげで乗り越えて来ることができました。頑張らなくてはならない、勉強不足だなと感じることは今でもあります。そして、まだ自信を失うこともあります。でも、教えていただいたこと、勉強したこと、悩んだことを生かしてこれからも、大切な人たちの為に、精一杯学び、サポートしていきたいです。日々、前進。これからも、頑張ります。

継続は力なり

理科I類1年 太田圭亮

努力が報われなかったからこそ

よくいつ頃からサッカーを始めたのか訊ねられ

ることがあります。そんな時いつも僕はなんと答えればよいのか言葉に詰まってしまいます。というのも、地元のサッカーチームに通いだしたのは小学校3年の春であったものの、それ以前からサッカー経験のある父親の影響でボールに触れてはいたので、正確にいつからサッカーを始めたのか自分でも把握できていないからです。

サッカーチームに入ったのは、別にサッカーがしたかったから入ったという訳でもなく、ただ単に友達に誘われたからにすぎませんでした。確かに、多少サッカー経験があったので入りやすかったというのがありますが、あの時野球チームに誘われていたら今頃野球をやっていたかもしれません。

しかし、その後サッカーを続けていくうちにいつの間にか自分の生活の中心にはいつもサッカーがあるようになっていました。中学校に進学したときも迷わずサッカー部に入部し、高3の1学期までずっとサッカー中心の生活をおくっていました。

このように高校までの自分のサッカー人生（サッカー人生といえるほど大層なものではないが）を振り返ってみると、よく同じことを10年近く続けられたなとつくづく思います。サッカーに全てを賭けてきたわけでもなく、決してサッカーをするのに最適な環境が整っていたわけでもなく、高校時代に至っては大した成績も残せませんでした。それなのになぜここまでやってこれたのでしょうか。上達したい、試合に勝ちたいという漠然とした思いがあったからなのはもちろんですが、では何がこのモチベーションを維持させてきたのでしょうか。

逆説的になってしまいますが、今まで自分がやってきたものの中で一番上達するのに苦労したものであったからなのかもしれません。極端に言えば、一番努力が報われなかったものであったからなのかもしれません。これは、スポーツ全般に言えることでしょう。努力の成果がなかなか目に見えてあらわれないことが多々あります。だからこそ逆に、慢心することなく上を目指して努力し続けら

れたのかもしれませんが。これがサッカーのよい所であり、スポーツのよい所であると思います。

続ける中で得られるもの

しかしながら、大学に入って初めて、サッカーを続けていくことに疑問を感じるようになってしまいました。高3でサッカー部を引退するまでは無心になってボールを蹴っていたので、サッカーをやっていく上で理屈なんか求めていなかったし、考えたこともありませんでした。しかし、大学受験で半年以上サッカーから離れていたせいなのか、理屈抜きにがむしゃらにサッカーを続けていくことに何の意義も見出せなくなっていました。

4月の間は、サッカーを続けるのかどうか自分に問いかける毎日でした。やめればきっと後悔するというのはなんとなく分かっていたものの、大学でサッカーを続けて得られものはサッカーを続けていくことで失うものに比べてちっぽけなものに感じられてしょうがなかったのです。

そんなとき僕を救ってくれたのは「継続は力なり」という言葉でした。この言葉は高校の卒業アルバムの中で座右の銘として自分で書いた言葉なのですが、正直なところ、この言葉に思入れがあるわけでもなく、ただ書くことがないから書いたという程度のものにすぎませんでした。しかし、アルバムを見ていてふとこの言葉を目にしたとき、ずっと探して続けていた答えが見つかった時のような衝動に駆られました。

大学でサッカーを続けた先に何があるのかということばかりに目が行き、サッカーを続けていく中で得られものを見逃していた自分に気づかされたのです。

この言葉のおかげで、ア式蹴球部に入ってサッカーを続けようと決心できたのだと思います。

最後になりますが、僕は今日までサッカーに関して、悔いが無いと言えば嘘になりますが、やり残したことは無いと思っています。確かに、サッカーで生活していこうとしている人に比べたら、やってきたサッカーの質も量も到底及ばないだろうし、最大限の努力をしてきたとは言えないかも

しれない。しかしながら、限られた条件のなかでやれることをやりきったと思います。

これから先も同じことを、胸を張って言い続けられるように、全力でサッカーに取り組んでいきたいと思います。

生きている実感

文科Ⅰ類 1年 加賀田俊将

ときには美しく、ときには荒々しく

私は小学生のころからサッカーを始め、中高と続けましたが、高校2年の時にサッカーをやめてしまい、もう二度とサッカー部に入ることはないと思っていましたが、刺激のない毎日が嫌になり大学でサッカー部に入ることにしました。若くて力強くいられる今のうちに思い切り運動しておかなければ後悔が残ると思い、敢えてサークルではなく運動部に入りました。練習は高校のときよりは楽でしたが、大学になると高校のときより自主性、積極性が要求されるため、よく考えてプレーすることがまず必要でした。そのなかで強い身体だけでなく強い精神、素早い判断力がある程度は身についたと思います。ときには上品で美しく、ときには強く荒々しいプレーができることが私の目標であり、目標があることによって、自分が生きていると実感できる。私はそんな感覚を求めてサッカー部に入部したのかもしれませんが。とにかくサッカー部に入ったからには今ある1日1日を精いっぱい生きたいと思います。

自分にとってサッカーとは

文科Ⅱ類 1年 久保雅史

後悔ばかりのサッカー人生

私は兄の影響を受けてサッカーを幼稚園の頃から始めた。それ以来ずっとサッカーをしてきた。

サッカー情報は毎日欠かさずチェックしているし、サッカー雑誌も毎回買っている。それほど私にとってサッカーは大きいものなのだ。サッカーなしの自分は考えられない。そう言いきることができるほど、サッカーが好きだ。ずっとサッカーに携わってきたから、後悔したこともほとんどがサッカーについてだ。今までで一番の後悔は何か……選べないほどたくさんある。今までの練習態度、中学のときの関東大会、高校のときの大会すべて、インハイで引退してしまったこと。ここですべてを挙げきくことはできない。後悔ばかりの自分のサッカー人生、そんな思い出にしないためにもこの東大ア式蹴球部では自分のすべてを出し切りたいと思う。生涯最後の本気のサッカー。悔いのないように頑張りたい。

と、このエッセイを始めてみたが、これからは今までの自分のサッカー人生を振り返りたいと思う。そうすることによって、自分がどれほどサッカー中心の生活を送ってきたかわかり、決意新たにまたサッカーを続けることができる気がするからだ。

勝ちたい気持ち

先述したように、サッカーに初めて触れたのは幼稚園生のときだ。小学生になると、兄が入っていたスポーツ少年団に入り、大会に出て、勝負に負ける悔しさを知った。渋谷区ではトップレベル、しかし一歩外に出ると、弱小チームに成り下がる。私のチームはそんなチームだった。あのころは、ミスしたチームメイトにただ何も考えずに怒鳴り散らしていた。敗れた責任もチームメイトのせいにしがちだったかもしれない。本当に自分勝手だったと思う。自分にうぬぼれていた面もあったかもしれない。渋谷区の子どもの少なさを考えれば、同じチームの同じ学年に8人も集まったのは幸運だった。その幸運に気づかずに、私は大事な仲間を傷つけていたかもしれないと考えると、本当に申し訳なく思う。しかし私の勝ちたいという気持ちは嘘ではなかった。たとえミニゲームでも勝ちたい。それは今でも変わらない。性格も多分

に影響しているかもしれないが、小学生時代から勝負の世界に身を置き、勝つことの楽しさと負けることの悔しさを知っていなければ、これほど負けず嫌いな人間にはなっていなかったと思う。勝敗にこだわる姿勢は、スポーツをやっている人間にとっては必要不可欠なものだ。それを得ることができたのも、チーム・仲間・コーチのおかげである。ここで感謝の意を示したい。

下手だから気持ちがすべてだった

私は、中学受験をして麻布に入った。最初に述べておくと、ここでも私は仲間に恵まれたといえる。中学の都大会で優勝したのだ。ご存知のように麻布は進学校であり、サッカー名門校ではない。都大会にいくだけで成功といえた。その麻布が優勝したのだから快挙というしかない。私たちのチームには、決して巧い選手がいたわけではない。しかし粘り強さがあった。たとえばほとんどの時間攻め込まれていても、1点もやらないというチームとしての我慢強さがあったのだ。あのときの麻布というチームの優勝こそチームで勝ち取った優勝という名にふさわしい優勝はないだろうと思う。中学時代結果を残したのだから、高校時代も期待したのはいうまでもない。しかし、私たちの代は一度も都大会に行くことなく引退した。中学時代にみせた勝負強さはなくなっていた。

歯車が狂い始めたのは、間違いなく関東大会1回戦での敗戦だろう。内容は悪くなかった。むしろそれまで一番良いサッカーをしていた。だが負けた。関東大会で良い内容で負けたことによって、負け癖が付いてしまったのかもしれない。敗戦後、みんなの気持ちが切れたのが目に見えてわかった。高校生になり他にやるが増えたというのも、チームの結束に影響したように私は思う。みんな勉強・文化祭・運動会を比較的優先するようになった。しかし結局は、メンバー全員の勝負への執着心が薄れたから勝てなかったのだ、という結論に行き着く。精神論を嫌う人もいるけれど、下手な私たちにとっては気持ちがすべてだった。チームスポーツであるサッカーにおいては、一人

でも気持ちの入っていないメンバーがいたら、勝利を得ることはできないのだ。と、気づくのがみんな遅かったのかもしれない。

このように自分のサッカー人生を振り返ってみると、良い思い出も悪い思い出も、今の自分にとってはかけがえのないものだと感じる。これからの東大ア式蹴球部でのサッカー人生もきっと大切なものになるはずだ。大切な思い出にするために、本気でそして楽しくサッカーをしていきたい。最後まで勝負をあきらめない人間になりたい。チームとして勝利の喜びを感じたい。これらを達成できたとき、東大ア式蹴球部に入って良かったと最後に思える気がする。

僕とサッカー

文科I類1年 鈴木康平

お前らサッカー楽しいのか？

僕がサッカーを始めたのは中学の頃だった。その当時は特別サッカーが好きということもなく、はじめたきっかけも友達に誘われたからサッカー部に入ったという程度のものだった。そんなことから部活に入っても、朝起きるのがつらいとか、練習がきついとか、先輩や先生が怖いとか、そんなネガティブなことばかり考えていた。そんな僕に希望を与えてくれたのが黒須先生だった。黒須先生は僕が中2のときやってきた新しいサッカー部の顧問だった。先生は練習初日に僕たちを集めてこう言った。

「お前らサッカー楽しいのか？」

その一言は僕にとって衝撃だった。『そういえば、楽しいって気持ち、どっかに置いて来ちゃったなあ…』それ以来僕のサッカーに対する姿勢は変わった。黒須先生のおかげでだんだんサッカーが楽しくなっていた。練習はきついけど毎日練習をするのが待ち遠しくなってきた。そうして最後の大会を控えた3年の夏、悲劇は起きた。すねの骨を折り、全治4か月。大会は1か月後だった。

僕は絶望した。『せっかくサッカー楽しくなってきたのになあ…』そんなとき僕を励ましてくれたのもやはり黒須先生だった。

「中学でのサッカーは終わったけどな、お前のサッカー人生はまだ続くんだぞ。俺は大会で勝つよりもお前がサッカー楽しいと思ってくれてこれからはサッカーを続けてくれることの方がうれしいんだ」

こんなにうれしい言葉はなかった。僕はこれからはサッカーを続けていくことを決意した。そして今、僕は東大ア式蹴球部の一員としてサッカーをしている。新たなステージでも、サッカーが楽しい、という思いを大切にしていきたい。

サッカーをすること

理科Ⅰ類Ⅰ年 道喜開視

僕のなかにあるサッカーが成長する

「サッカーとは社会の縮図だ」

これは、高校のサッカー部の監督から、高校を卒業した後に言われた言葉です。この言葉を直接聞いたのはそのときが初めてでしたが、監督は僕たちにこれを一番教えたかったそうで、間接的にはいつもこのことを発信し続けていたそうです。

高校のときはただ必死に勝つこと、強くなること、うまくなることだけを目指して夢中になって頑張っていただけでしたので、このように、一歩下がってというか、視野を広くしてサッカーについて考えさせられるこの言葉は、僕にとって非常に大きなものになりました。

そんな今の僕が、この機会にサッカーについて真剣に考えてみたところ、サッカーというスポーツはやはり社会の縮図なのだと改めて感じました。僕がサッカーに出会ったのはおそらく幼稚園のころであり、それから今までおよそ15年間ずっとサッカーをしてきました。人生の4分の3はサッカーですが、僕がサッカーによって成長したというよりは、僕のなかにあるサッカー自体が成

長して、それに連なって僕も成長してきたように思います。

つまり、サッカーに深く関わっていくにつれて、その深み、複雑さはますます増していき、そうして生まれてくる困難を乗り越えていくことで、サッカーの能力と同時に社会で生きていく能力を身につけていくということです。

まず、小さいころ、サッカーとはボールを蹴るものだ、つまり、対象を見てそれに向かって自分の足、そして体全体を動かすことを学びます。そして、ゴール、つまり、目標を持つことを学び、敵がいること、味方がいること、ルールを守ることが学びます。目標を達成するためにはどうすればよいのかを考え、対象を目標まで到達させればよいと学び、そのためには対象を自分もしくは味方のものにすることが必要です。それには障害をかわす、もしくは乗り越える必要があり、それを成し遂げるためには自分の能力を上げること、味方との連携をうまくとることが必要になります。それには自分を知り、自分を味方に伝え、味方から自分に味方の考えを伝えられ、それを自分で考えて行動に起こせばよいのです。

プレーに生き方が表れる

ここではサッカーのいろんな場面を抽象的に表現してみたのですが、これはまさに社会での人の生き方そのものをよく表していると思います。これほど順序だって学んで来たわけではなく、ただいろんな人の真似をして学んでいくことも多いとは思いますが、真似をすることも社会において成長するには欠かせない能力です。他にも多くの場面、いや、すべての場面でサッカーは社会なのだと確認することができるでしょう。だから何だということなのか、と思うかもしれませんが、ここからわかることがあります。それは、なぜ僕はサッカーをするのか、ということの答えの一部です。

なぜなら、サッカーとは社会だから、その中でサッカーをすることはまさに自分の人生を生きるということになるからだと思います。

元日本代表監督のオシム氏は戦術を考える上

で、選手一人一人の性格をも考慮に入れて構想するそうです。それはオシム氏がサッカーと人生との関係を熟知している確かな証拠になると思います。

自分の人生をどのように生きるか、これはどのようにサッカーをするかで大きく変わってきますし、逆に、サッカーのプレーには自分の人生の生き方がありありと表れています。例えば、僕は試合中にパスをどこに出そうとか、ドリブルで前に進めたほうがいいのかなどを選択する場面で迷うことが結構あります。そういった優柔不断さは明らかに僕の性格を反映しています。逆に、プレー中の視野を広くしようと努力して、実際に広くなっていくと、日常生活でもいろんな人の意見を聞くことができるようになっていきました。

サッカーは失敗の連続で、自分の思い通りになることなんてほとんどありません。これは人生についてもいえることです。しかし、それでも人はそんな人生でも、むしろ、そんな人生だからこそ夢や目標を持って、自分の理想を追いつけようとするものです。僕がサッカーをする理由はここにあるようです。

僕は1年生ですが、ア式蹴球部に入ってからすぐにはがをしてしまい、もうサッカーをやめようかと思ったときもありました。しかし、まだまだ理想を追いつけたいという気持ちがあるので、このけがを克服してまた好きなサッカーができるように頑張りたいです。

私とサッカー

理科Ⅰ類1年 野中尚輝

小淵沢サッカースポーツ少年団

東京大学ア式蹴球部に入学してから2ヵ月しか経ってなく、部について書けることがほとんどないので、これまでの私とサッカーについて書こうと思う。

私がサッカーを始めたのは、小学校3年生のと

きである。「スポ少に入らないと夏休みのサッカーに入れてあげない」と言われたからという理由で、私は小淵沢サッカースポーツ少年団に入った。当時は2年生が試合に出場しなければならないほど、人数が少なく、入ったばかりの私も試合に出ることができた。ほとんど勝てる試合もなかったが、毎週末楽しくサッカーをしていたと思う。

小学校4年生の夏に、私は父の仕事の都合でイギリスに2年間住むことになった。

私は、英語がまったくしゃべれない状態で現地の学校に転校した。最初の何ヵ月かは、周りが何を言っているのかまったくわからず、とてもつまらなかった。しかし、サッカーを通じて徐々に友達もでき、彼らの会話を聞いたりしているうちに、少しずつ英語がわかるようになってきた。もし、サッカーをしていなかったら英語をほとんど学べずにイギリスから帰ってくるようになっていたかもしれない。

韭崎高校に進学

イギリスから帰ってきて私は、再び小淵沢サッカースポーツ少年団に入った。そして中学に入学してからは、ハケ岳フットボールクラブというクラブチームでサッカーを続けた。そしてサッカーが強かった地元の韭崎高校に進学することを決めた。

高校に入学してからは、月曜日以外週6日部活があり、3年の5月に受験勉強のために引退するまでは、部活以外のことはほとんど何もしていなかった。

高校生活を振り返ってみると7割がサッカー、3割が受験勉強というような感じだったと思う。練習がつらく、やめたいと思ったこともあったが、卒業した今では、いい思い出であるし、サッカーでつらい練習をやってきたからこそ、東京大学に合格することができたのだと思う。

こうして振り返ってみると、もしサッカーがなければ今の自分はいないと思う。サッカーを始めたときには、自分がサッカーをこんなに長く続けるとはまったく思っていなかった。東京大学に入

学してから2ヵ月が経ち、受験期に落ちた体力も徐々に戻ってきた。都リーグ1部昇格というチームの目標に少しでも貢献できるよう努力していきたいと思う。

一つの間岐点

文科Ⅱ類1年 蒔田祐貴

ストレスに押し潰されそうだった浪人時代

中学、高校と軟式野球部に所属していた。部といってもスポーツが盛んな学校ではなかったので、練習は週に3回、グラウンドを使って野球ができるのは週に1回だった。とりえず体を動かすことが大好きで、運動していないと自然とイライラしてくるということもあって、昼休みにはキャッチボールをしたり、サッカーをしたりといった生活を送っていた。

サッカーは野球と違ってボールがあればできるし、動き回るスポーツは性にあってるのかなーと思ったり思わなかったり。そして初心者だからこそ、サッカーをやるたびに少しずつだけど確実に上達しているのが実感できて嬉しかったし、なによりもボールを蹴ることの楽しさに夢中になって、いつの間にかサッカーが好きになっていたんだと思う。

高2の夏で部活を引退した後は、野球とともにサッカーをやる時間が増えていって、受験勉強のストレス発散という名目で10分の休み時間も放課後もサッカーボールで遊んでいた気がする。今思えばストレスを感じるほど高3のときは勉強していなかったわけで、当然のごとく第一志望の大学に落ちて浪人を選択した。

浪人の1年間は文転したこともあって勉強に対してすごく危機感があって、ほとんど運動しないでストレスに押し潰されそうになりながら勉強していた。受かったからよかったものの、これで落ちてたらどうなっていたんだろう。考えただけで恐ろしい。

どうせやるなら上手になりたい

さて、実は入学前から「ア式」に入部することはほとんど決まっていた。中学、高校の部活で本気でスポーツができなかったことに悔いがあって、どうせサッカーやるならサークルでやるよりも部活に入って上手くなろうという気持ちもあったからだ。

現役で合格した同級生がア式にいて練習に参加しやすかったし、実際に参加してみると基礎練もしっかりやっていて、初心者でもなんとかやっていけそうという気がした。それに部の雰囲気がとても気に入ったというのも大きかった。先輩やOBは優しい人ばかりで、サッカーに対しては真剣で、ここなら4年間いても楽しいだろう、いい仲間ができるだろう、と思わせてくれた。

実際に入部してみて、そのとき感じたことは間違っていなかったという思いが、日に日に強くなっている。サッカーに関しての当面の目標は、走って、ボールを蹴って、止めることをしっかり身につけること。試合にでたり、レギュラーとったりは、その先に見えてくる。少なくともそう信じて練習をしていきたい。なかなか上達しなかったり、試合にでれなくてガッカリすることもあると思うけど、ボールを蹴るだけで心の底から楽しめるサッカーの魅力。だるい授業も放課後の練習を考えると楽しくなる、ア式の存在を噛み締めていきたい。

サッカーから学んだこと

文科Ⅱ類1年 松本一起

キーパーかフィールドか

自分が本格的にサッカーをするようになったのは小学校5年生の夏頃からで、そこから現在に至るまでは、中学、大学の受験勉強期を除いてほぼ毎日、プレーするにしろサッカーの試合を観るにしろ、サッカーと触れ合ってきたと思う。このだ

いたい8年間において、サッカーを通じて技術面以外で得られたものがあつたと感じたことは、自分の記憶の範囲内では二つあつたと思われる。

一つ目は、自分がサッカーをし始めてからまだ間もない、小学校5年生の冬頃のことである。地元の小学校のサッカー少年団に入る前までは、遊びでサッカーをやる程度だったので、自分はボールの蹴り方やトラップの仕方といった基礎的なことはほとんど身につけていない状況であつた。その少年団では、皆、だいたい小学校3年生くらいからサッカーを始めていたので、皆と自分との技術面の差は明瞭であつた。自分はそのような状況において少し窮屈な思いをしていたため、自らキーパーのポジションを志願したのである。それは、キーパーなら自分の身体能力で技術面の差を少しでも埋められるという甘い考えがあつたからであつた。やり始めた頃は良かった。キーパーというポジションを得て、ある程度練習にも混じることができたし、自分の技術面の遅れを意識せずいられた。

しかし、やはり自分の中ではフィールドでプレーしたいという思いがあつたので、中途半端な気持ちでなつたキーパーというポジションには少し嫌気がさしていた。また、キーパーであっても基礎的な練習は行っていたので、パスやトラップ、リフティングといった基礎技術も、少しずつではあるが身につけてきていたのである。

少年団のコーチも、自分が半ば成り行きでキーパーになつたことを知っていた。それゆえ、フィールドでプレーする機会を与えてくれるようになり、ふだんはキーパーであるが、たまにフィールドでもプレーするという感じで練習するようになった。しかし、そのような状況が長続きするはずもなく、ある日コーチに「キーパーとフィールドのどちらでプレーしたいのかはっきりするようにしろ」と選択を迫られた。どこのサッカークラブでもそうであると思うが、日々の練習のなかで感じたことや気づいたことをサッカーノートに書いて提出するという習慣があつたので、自分はそれに「試合はキーパーでいいから、ふだんの練習ではフィー

ルドでプレーさせてください」と書いて提出した。次の練習のとき、自分はコーチに「そんな中途半端な気持ちでサッカーをするならやめろ」と怒鳴られた。それまで正直言って遊びの延長でサッカーをしていた自分は、そのとき初めてサッカーに対する思いが甘かつたことを痛感した。

今思えば、自分がこのとき学んだことは、何か一つのことに本気で取り組み、その自分でとつた選択に対して責任を負うということであつたのだと思う。ちなみにその後自分はフィールドでプレーした。

試合を意識して練習する

二つ目は、高校時代のことである。自分は中学、高校と一貫の学校に通つたのだが、中学時代は部員の人数が多かつたことや、本格的な指導してくれる監督がいなかつたことなど（自分が部長を務めていたことも大いに関係があつたと思う）のために、チームプレーというよりは個人個人が勝手にプレーをするという感じで試合に臨んでいた。そんななか、自分たちの学年が高校の部活に参加するのとちょうど同じ時期に、本格的にサッカーを指導してくれる方があらわれた。そして、やっと本当のサッカーをできるような環境になつた。練習も、やる内容としては中学時代とあまり変わらなかつたが、試合を想定しながらなど、一つ一つの練習においてどのような意識を持つのが重要であることを知つた。しかし、それ以上に大切なことは、チームメイト同士でコミュニケーションをとることであつたと思う。試合でうまくいかなかつたことなどを部員全員で話し、次の試合ではどういったことを意識してプレーするのかなど、部員全員の意識を統一して、一つ一つステップを踏みながら、個人としてもチームとしても成長していくのを実感することが出来た。

以上、これまでに自分のサッカー人生において得られたことについて述べたが、これらの貴重な経験が自分の人生に大きな影響を与えてきたことをあらためて実感した。そしてこれらの経験を元に、自分はこれからもサッカーを続けていくのだと思う。

得点の快感、 あのかっぱえびせん中毒

文科Ⅰ類1年 三浦良介

フォーワード

新入部員です。今のところ「ア式」にこれといった思い入れがないので、サッカーと自分の人生について書かせてもらいます。

まずはポジションに関して。

今までずっとFWです。自分は裏への飛び出しを得意としているのですが……。誕生日は8月9日です。そう、フィリポ＝インザーギと同じなんです。だから生まれたときから裏へ抜けるFWなんだなって、運命を感じたものです。

FWは点を入れる機会が一番多いポジションで、点を入れないと叩かれる。けど、点を入ると気持ち良い上にほめられる。やめられませんね。やっぱり得点したときのあの快感はかっぱえびせん中毒で、自分はいつも禁断症状寸前というか、そんな感じなんでしょう。そんなわけでFW以外のポジションは未経験です。

次はこれまでのサッカーとの付き合いについて。

サッカーを始めたのは幼稚園の年中。地元のクラブに入りまともにやり始めたのは小5のときです。年中から小5にかけての空白の7年間は、社宅の兄さんに教えてもらったり、友達と遊びで蹴ったりです。今思えばこの間バリバリやっていれば人生違ったのかなって感じです。少なくとも練習週2回の中高一貫校には入ってないです。もちろん東大にも。

中高は栄光学園という鎌倉の山の上の学校に通うことになりました。中学受験をしたわけですが。家からチャリで10分だったことが受験の決め手だったのですが、それ以上に校庭に広がる芝のフィールドに魅了されたということが大きかったです。こんな芝の上でサッカーやってるんだからさぞかし強いんだろうな、と普通の人は思いますよね。でも、入ってみたら練習週2、しかも芝のフィールドは陸上部の投てき種目用で、サッカー

は土のグラウンドでした。完全にミスりました。

ただ、たまたま結構レベルの高い仲間に恵まれて、本気でサッカーに取り組むことはできました。自分たちの休みの日は後輩指導を名目に球を蹴ったり。中学時代は子どもだったということもあるし、実際チーム自体弱くはなかったのも、あまり大きな壁にぶつかったという記憶はありません。しかし、高校に入ってからはいろいろありました。

サッカー選手という夢は遠くても

学年別にチームが組まれていた中学時代と異なり、高校では1-3年全員で一つのチームを構成するようになりました。高1の春、インターハイ予選で相手校の高3バックにボコボコにされ、特にフィジカル面でのレベルの差に愕然としました。これを機に帰宅後ランニングや筋トレを自分に課すことを決めました。とにかく自分のせいで負けるのだけはイヤだったので必死でした。

自主練の成果もあり、ある程度活躍できたし、チームとしてもそれなりの成績を残せたのですが、最後の最後でヘマをしました。いわゆる進学校に通っていたため、高3の春までに部活を引退するのが通例だったのですが、もっと上を目指したいし目指せるという意識から自分を含め10人近くの高3生が夏まで部活を続けることを決意しました。地区予選を勝ち抜いたら受験は1年遅れで良いかなと割り切って練習に打ち込んでいたのですが、結果は予選3回戦で敗退。自分は2回戦で足首を削られてベンチからの観戦でした。中高で公式戦初ベンチが引退試合でした。

それ以降、夏の悔しさを払拭するためにも来年はどこの大学でも良いからサッカー部に入って本気でサッカーに打ち込みたいと思い、体を動かしつつ結構勉強もしました。で、今「ア式」の意味もわからず東大蹴球部に所属しているわけです。

最後に自分の決意について。

幼稚園のころから夢はサッカー選手でした。しかし、ずっと生ぬるい環境でサッカーをやる羽目になってしまい、自分の限界が見えてないなって高校時代思っていました。桐光や桐蔭、日大藤沢

といった強豪校の選手と試合をする機会があったのですが、一緒にプレーしてみてサッカー選手という夢の遠さを痛感すると同時に、生ぬるい環境を言い訳にしている自分にも気づきました。そういう自分が情けなくて、だから大学では言い訳できないくらい本気でサッカーをしようと思っています。桐光や桐蔭、日大藤沢の選手は確かに上手かったけど、太刀打ちできないとは思わなかった。だから、大学4年間、妥協と大きな怪我さえしなければそういう選手と渡り合える選手に自分もなれる、そう信じて一日一日、一蹴り一蹴りを大切にしていけます。

苦楽を共にする仲間と 勝利を味わいたい

理科Ⅰ類1年 宮川啓輝

チームメイトとの関係

小学生になる前からサッカーを始めていたのでサッカーとの付き合いは15年近くになる。今年から東大ア式蹴球部に入部したので少なくともあと4年はこれからもサッカーを続けることになるだろう。

僕がサッカーを始めたきっかけは近くにすんでいた一つ上の友達の誘いだった(と思う)。そこから6年間は中学受験の半年間を除いて何の疑問もなくサッカーをつづけた。

中学に入り僕はまずテニスをやろうとしたのだがそこでも友達の半ば強引な誘いを受けてサッカーを続けることにした。今思えばこの友人の誘いがなければもしかしたらサッカーをやめていた。そして今の友人ともそれほど親しくはなっていなかったかもしれない。なんだかんだで高校三年の春まではそのまま続け、大学でも「アシキ」に入って一ヵ月近くになった。アシキに入ったのも先輩や、一緒に東大に入学した高校からの友人の影響が大きいと思う。

ここまで自分のサッカー人生を長々と(一応かなり短くしたつもり)書き綴ってきたがそこから

得られたことは多分、自分は仲間をつくるためにサッカーをやってきたのだということだと思う。もちろん何がなんでも勝つということも大切だと思うが、全く知らない人達と一緒にサッカーをやって試合で勝ったとしても、苦楽を共にしてきた仲間と味わう勝利には遠く及ばないはずである。実際今でも中学高校時代のチームメイトとは頻繁に連絡を取り合っているし、この先もその関係がくずれることはないだろう(と思う)。団体スポーツのよさというものはやはりその辺にあるのだろう。

これから一応4年間は東大ア式蹴球部でサッカーをしていくことになるだろう、その間にサッカーで優秀な成績を修めることはもちろん、アシキを卒業して10年20年以上経っても仲間で見られるような人達を何人も得られることを期待してサッカーをやって行きたい。

とてもくさい感じになってしまったけど、これが今の僕の本音だ。この文章を10年以上経った後に笑いながら読める、そして共感できるように、アシキでの生活を過ごせたら最高。

人生サッカー

文科Ⅲ類1年 森元規裕

フットサル・サークルで

私がサッカーと出会ったのは幼稚園の頃でした。ただ無我夢中にボールを追いかけていました。試合に勝つことの喜びを覚えてきたのは小学3年生の頃からだったと思います。4年生で初めて市の大会で優勝し我を忘れて喜びました。ちょうどその頃フランス・ワールドカップがありました。実質的に私が初めて見たワールドカップです。イングランド対アルゼンチン戦やベルカンプのゴールなどは今でも鮮明に覚えています。

ところで私は中学受験をし、中高一貫校に進学しました。クラブチームの選択肢もありましたが、部活という社会経験を重視し入部しました。中学

では小学生の時のチームとあまりにレベルがかけ離れていたので物足りなさを覚える毎日でした。スポーツ界には「バッタ理論」なるものが存在します。それはかごの中に入れたバッタはその高さの分だけ飛べるようになる、すなわち選手も自分のいる環境に甘んじてしまうということです。当時の私もそれに当てはまっていたと思います。そんな中、私の技術を向上させてくれたのは小学校の時のチームのOBが主体となったフットサル・サークルでした。高校生や大学生に混じってプレーし多くのものを習得しました。

横河武蔵野ユースで

高校進学時、中学の顧問の先生がクラブユースを薦めてくれました。いくつかのセレクションを受け、私は横河武蔵野ユースに入りました。中学のときは練習が少なく、時間も短かったのが一変して、サッカー漬けの日々になりました。Jのユースや強豪高校との練習試合では自分の実力のなさを痛感しつつも、とても清々しい気持ちになりました。私は試合に出ていませんでしたが、高校1年の冬のJユース杯では現日本代表香川率いるFCみやぎバルセロナを破り、全国大会に出場しました。勝利の瞬間には鳥肌が立ちました。

高校2年の夏休みにはフランス遠征に行きました。それまでBに甘んじていた私ですが、マルセイユ戦に先発出場し、それ以来レギュラーに定着することができました。その後、都のリーグでT2からT1に昇格できました。

高校3年にはキャプテンを任されました。技術・能力共にチームメイトに劣っていましたが、気持ちがあったからだと思えます。

日々苦闘でした。どうしたらチームが良くなるか…非常に難しい問題でした。ときには自分のプレーに集中できず、レギュラー落ちすることもありました。そんな中で夏頃からチームはまとまりを見せ、素晴らしいチームになりました。最後の大会、あと一勝で全国大会というところまで上り詰めましたが、無念にも負けてしまいました。あの悔しさがなかったら、今、自分はサッカーをやっ

ていないかもしれません。そして11月に引退したとき、ふと気づいたのは「受験」という2文字の存在でした。夏頃までは指定校推薦を考えていましたが、監督に猛反対され取り止めました。やれる限り全力を尽くしました。そして東京大学に合格することができました。これもサッカーで培った精神力のおかげだと思っています。

そしてア式蹴球部に入部する次第となりました。再びサッカーをするために、素晴らしい環境を私に与えてくれたのはサッカーの神様だと思っています。大学生活でもサッカーに精進していきたいと思っています。

最後に、高校時代の監督の座右の銘で、私も大切にしている「克己心」。この言葉を胸に生きていきたいと思っています。

東大ア式蹴球部に入部して

白百合女子大1年（マネージャー） 石川 蘭
あこがれのサッカー部マネージャー

今年入部しました、石川蘭です。マネージャーの仕事は全く初めてなので、勉強の毎日を送っています。早く臨機応変に動けるマネージャーになれるように頑張りたいと思います。

まず、私がなぜサッカーに興味を持ったのか、そしてなぜ東大ア式蹴球部なのかということについて書きたいと思います。

今から約6年前の2002年5月、日韓ワールドカップが開催されました。開催国ということもあり、日本中がとても盛り上がっていたのを覚えています。当時中学生だった私は、学校のスクリーンの前で応援していました。世界の舞台で活躍する日本人の選手、そしてその選手を応援するサポーターを見ていて、とてもサッカーに興味を持ちました。これが私のサッカーを好きになった主なきっかけです。

それから少し経ったある日、スタジアムでサッカーを観戦する機会がありました。自分の目の前

で選手がプレーをしていて、そのプレーに合わせて応援しているサポーターが喜怒哀楽するという、テレビとは全く違う迫力に圧倒されました。これをきっかけとして、自宅から近いスタジアムで試合があるときは頻繁に観に行くようになりました。それからサッカーがさらに好きになり、スタジアムに通ううちに細かいルールなども分かるようになりました。

中学、高校とサッカー部のない学校にいた私は、大学生になったら絶対マネージャーをしてサッカーに関わりたいと思っていました。大学に入学して、いろいろと探していましたが、なかなか自分に合うようなサークル・部活は見つからず、ある日インターネットで探していたところ、東大ア式蹴球部を見つけることができました。

そして練習を見学させていただいたり、新歓のイベントに参加させていただいたりしました。そのときに先輩の方々とたくさんお話する機会があったのですが、お仕事の内容をとても丁寧に教えていただいたり、不安なことを質問させていただいたりすることができて、不安もどんどんなくなりました。たくさんの先輩方のお話を聞いて、本当に充実した毎日を過ごせるのではないかと、思って、わくわくしながら入部を決めました。

前向きに今を生きたい

もうすぐ入部して1ヵ月が経ちますが、まだ分からないことが多く、先輩に頼ってばかりの毎日です。でも毎日少しずつですが、やるべきことが分かってきている気がします。あとは練習メニューをしっかりと覚えて、練習ごとのボトルを置く位置や自分のいるべき場所などを早く覚えられるようにしたいです。入部してからも先輩方はみなさん変わらず本当に優しいです。思わず頼ってしまうことが多いです。しかし、だからといって甘えていないで、早く一人前のマネージャーになれるようにがんばっていききたいと思います。これからも先輩の動きを真似して、選手の動きをよく観察し、臨機応変に自分のやるべきことを考えられるように努力していききたいです。4年間で完璧

なマネージャーになれるように真面目にがんばります。

今、日本代表監督をされている岡田武史さんが以前、「すんだことを悔やんでも『今』はできない。先のことを心配しても『今』はできない。これが人間の良さであり弱さであるが、悔やんだり心配せず、明るく積極的、前向きに『今』できることに全力を尽くしてください」と言っていました。この言葉がすごく印象に残っていて、この言葉のおかげで乗り越えられたことや、がんばれたことがいっぱいあります。マネージャーとして成長していくためにも、今できることに全力を尽くしていきたいと思います。

これからもお仕事を間違えたり、ご迷惑をおかけしたりすることがあるかもしれませんが、よろしくお願いします。がんばります。

部活動とは

文科Ⅲ類1年(マネージャー) 市来麻友子 何よりも大切だった高校時代の部活

運動部、体育会系…そんな言葉を聞いて思い浮かべることは何でしょうか。

熱血？ 脳みそまで筋肉でできているの？ 暑苦しい？

私自身、中学時代を海外で過ごしたこともあって(日本のような部活はないので)、高校に入るまでまともに部活に入っていたことはなく、そんなイメージをずっと持っていました。小学生のころは外で遊ぶのが大好きな子どもだったのに、中学生になると授業の体育ですら億劫になり、運動とは無縁の生活を送っていました。

帰国して高校に入学した当初はサッカー部のマネージャーをやりたいと思っていました。サッカーのことは全然知らないくせに、昔からサッカーをやっている人を見るのが好きだったとかそんな単純な理由でした。しかしうちの高校のサッカー部にはマネージャー募集はなく、きっかけは

よくわからないけれど気付いたらハンドボール部に入部していました。練習は放課後週3回と土日のどちらかが一日中、その上定期テスト期間とかぶる公式戦が2回あり、必然的にそこから引退までの二年間は部活が生活の中心にありました。

元々私は勝負事に熱中するわけでもないし、球技が得意だったわけでもないし、団体競技に向いているわけでもありません。それでも何かの縁で部活に入って引退まで続けられたのは先輩・同期・後輩のチームメイトやマネージャー、顧問の先生、コーチ、OB・OGなどたくさんの仲間に恵まれたからです。そのことを強く実感したのは引退してからでした。引退後は切り替えて文化祭の準備と並行しながら受験勉強を始めなければならなかったのに、それまでの2年間の時間をあまりに部活に割きすぎていて、どうしていいかわからなくなりました。部活仲間とだべったり、無駄な時間を過ごしたいと強く思いました。そうした時間を自分がどれほど大切に思っていたかがようやくわかりました。

受験後の春休み、初めてOB・OG会に呼ばれて新卒OGとして参加したとき、部活の縦のつながりって本当にいいなって思いました。厳しくて怖いだけだと思っていた先輩が卒業生として同じ立場になってみるととても面白い人だとわかったり、現役時代は気軽に話しかけられなかった憧れの先輩と普通に会話を楽しめたり、卒業してから先輩のありがたみを実感しました。自分も同じように後輩と付き合えたらいいなと思いました。文化部に所属していた友達にこの話をすると、「運動部はそういうつながりがあって羨ましいな」と言われたりもしました。そう言われるたびに嬉しくなりました。

プレーヤーからサポート側に

そんなわけで高校時代すっかり運動部の雰囲気になれてしまった私は、大学でもやっぱりサークルとかでゆるゆるやるよりも、部活の方がいいなと思いました。そこに高校のときにやりたくてもできなかった、サッカー部のマネージャーという

選択肢がありました。なぜどこかの部でプレーヤーをやらずにマネージャーなのか。それは高校時代にプレーヤーを経験して、マネージャーのありがたみを身をもって知り、次は自分も同じようにサポートをする側の人間になりたいと思ったからでした。細かい気遣いのできる人間になりたいとも思いました。「プレーヤーをやっていた頃と違って注目されたりしないけどいいの？」と聞かれたこともありました。注目されることには執着しないというか、むしろあまり好きではないので、注目されるか否かで判断されたことの意味がよくわかりませんでした。そこでいくつかの部活の新歓に行ったり話を聞いたりして、最終的には、最初に思っていた通りア式蹴球部を選びました。

運動会は部活動で、制約や時間的な拘束も多いです。もっと別の大学生活もあったと思います。それこそ高校時代とは全く別の生活を送ることも出来ました。それでも高校の部活動を通して得たものの大きさを知っているのも、同じような経験を大学の部活動でもできると信じて、この先頑張っていきたいと思います。

ただ、一つ変えたいことは、高校時代は部活ばかりだったので、大学では部活を頑張りつつバイトやクラス付き合いなども上手く両立したいです。

東京大学ア式蹴球部に入って

白百合女子大1年（AT） 溝端一美 母の反対

私は5月7日から正式に東京大学ア式蹴球部のマネージャーとして入部しました。入部を決意するまでは今まで何かのマネージャーをやっていた経験などは全くなかったし、ただサッカーが好きだという気持ちだけで入部を決定していいのだろうかとか、何度も悩んでいました。実際もう一つ入ろうか悩んでいるサークルがあったので、本当にギリギリまで決めかねていました。でも何回かの

見学、新歓を通し、実際にマネージャーの先輩や選手の人、部活の雰囲気にもふれてみて、私もこの人たちと一緒にこのア式蹴球部に参加したい、力になりたいと思うようになり入部を決意しました。

しかし入部のことを家族に言うところまで反対されました。まず他人の世話をするというマネージャーの仕事に何の意味があるのか。次に私の家は母子家庭なのですが、そのために家のことをしなければいけないということ。他にも時間のことなどでいろいろと反対されてしまいました。確かに母の言うことで間違っていることは何一つないとは思いましたが、自分のやりたいことに対して反対されたことに初めは戸惑い苛立ちました。他の家庭ならすんなり承諾してもらえるのではないかな。自分だけがいつも我慢しているのではないかな。でも冷静になって考えてみて、なぜ自分は許してもらえなかったのかと思うようになり、快く承諾してもらえない自分が悪いのではないかなと思うようになりました。そもそも何の苦勞もない人なんかなくて、ミンナはちゃんとそれを乗り越えていて、私は対処しきれてない、ただそれだけのことだと気付きました。確かに今まで家のことも自分のこともしっかりとやっていれば、家族に反対されることもなかったのだと思います。結局その旨を母に伝え、入部する事は許可してもらいました。このことは今回だけではなくこれからの自分の人生においてとてもいい教訓になりました。自分のやりたいことに対して周りから気持ちよく送り出してもらえるような自分をつくる。今までの私には足りなかったことです。

日々成長し続ける

なんだかんだでやっと「ア式」に入部できることになり入部式を経て正式に部の一員として部活に参加させていただきました。実際部活に参加してみてもまず何もできない自分に驚きました。ただ立って先輩マネージャーさんの仕事を見ているだけしかできなくて、何かしようと思えば逆に足手まといになってしまい、部活の部員として入りきれていない自分が本当にショックでした。先輩方

は初めはミンナ何もできないよと仰っていただきましたが、初めの3日ぐらいは正直少し鬱でした。でもいつまでも新入気分ではられない、先輩が教えてくれるのをただ待つだけではなく、自分から積極的に参加していかなければいけないのだと思い、仕事のことで無駄に質問してみたり、選手さんの名前を覚えたりなど…とりあえずア式に少しでも早く慣れることを考えていました。だんだんと部活の雰囲気や流れがわかってくると、今度はあらためてア式は部活なのだという事に気付かされました。もちろんア式が部活であるということは知っていましたが、時間のことや部活中の態度のことなどもっとしっかりと意識しなければいけないことがたくさんありました。

仕事に関してもマネージャーという仕事を少しあまく考えていたところがあって自分にはそういった自覚が足りないのだと反省しました。

あと一つ訂正で、先ほど私は母の言葉について、母の言っていることは間違っていないと言いましたが『マネージャーの仕事に何の意味があるのか』という質問について、これは意味があると私は思います。というより意味があるようしなければいけないと思います。

4年後に自分自身も周りからもやっていてよかったと思えるよう、また思われるように何か得るモノがあるといいです。これからア式蹴球部のマネージャーになるにあたって絶対こんなマネージャーになるのだと決めつけるのではなく、日々成長し続けられるマネージャーに、私はなりたいと思います。私はまだまだMGとしてもATとしても何もできませんが、1日でも早くア式蹴球部にとって必要とされる存在になりたいです。ではなく必要とされるように頑張ります!!

臨機応変に。

天真爛漫に。

東大ア式蹴球部 90 年記念誌「東京大学のサッカー」は 2 冊に分け、1 セットとして刊行した。

(A)「闘魂 90 年の軌跡」(主として歴史的な読み物と資料、記録)

(B)「ライトブルーの青春譜」(主としてOB、学生、関係者の寄稿)

(A)「闘魂 90 年の軌跡」の目次は次の通り。

東京大学のサッカー 闘魂 90 年の軌跡

目 次

巻頭 グラビア

90周年を迎えた東京大学ア式蹴球部 …	1
1930年	
極東選手権大会蹴球競技で1位 ……	5
東大主力の極東大会優勝(1930年) ……	6
関東大学リーグ 6連覇の時代 ……	8
日本サッカー殿堂入りした東大LB ……	10
第1回大学選手権に優勝 ……	12
巻頭言 ……	15
ごあいさつ ……	18

第1部 歴史編

草創期に礎築いた3偉人	
新田 純 興 ……	20
野 津 謙 ……	28
竹 腰 重 丸 ……	36
東大サッカーの源流を探る ……	44
史上不滅の6連覇 ……	47
国際大会で初優勝 ……	51
歴史に残る大金星 ……	56
座談会	
東大サッカー 戦中・戦後の思い出 ……	61
第 1 回大学選手権を語る ……	68

第2部 年代誌

1918 年(大正 7 年)	
～ 1920 年(大正 9 年) ……	79
1921 年度(大正 10 年度) ……	80
1922(大正 11) 年度	
～ 1923(大正 12) 年度 ……	81
1924 年度(大正 13 年度) ……	82
1925 年度(大正 14 年度) ……	84
1926 年度(大正 15 年度) ……	86
1927 年度(昭和 2 年度) ……	88
1928 年度(昭和 3 年度) ……	90
1929 年度(昭和 4 年度) ……	92
1930 年度(昭和 5 年度) ……	94
1931 年度(昭和 6 年度) ……	96
1932 年度(昭和 7 年度) ……	98
1933 年度(昭和 8 年度) ……	100
1934 年度(昭和 9 年度) ……	102
1935 年度(昭和 10 年度) ……	104
1936 年度(昭和 11 年度) ……	106
1937 年度(昭和 12 年度) ……	108
1938 年度(昭和 13 年度) ……	110
1939 年度(昭和 14 年度) ……	112
1940 年度(昭和 15 年度) ……	114
1941 年度(昭和 16 年度) ……	116
1942 年度(昭和 17 年度) ……	118
1943 年度(昭和 18 年度) ……	120
1944 年度(昭和 19 年度) ……	120
1945 年度(昭和 20 年度) ……	120

1946 年度 (昭和 21 年度)	122
1947 年度 (昭和 22 年度)	123
1948 年度 (昭和 23 年度)	124
1949 年度 (昭和 24 年度)	126
1950 年度 (昭和 25 年度)	128
1951 年度 (昭和 26 年度)	130
1952 年度 (昭和 27 年度)	132
1953 年度 (昭和 28 年度)	134
1954 年度 (昭和 29 年度)	136
1955 年度 (昭和 30 年度)	138
1956 年度 (昭和 31 年度)	140
1957 年度 (昭和 32 年度)	142
1958 年度 (昭和 33 年度)	144
1959 年度 (昭和 34 年度)	146
1960 年度 (昭和 35 年度)	148
1961 年度 (昭和 36 年度)	150
1962 年度 (昭和 37 年度)	152
1963 年度 (昭和 38 年度)	154
1964 年度 (昭和 39 年度)	156
1965 年度 (昭和 40 年度)	158
1966 年度 (昭和 41 年度)	160
1967 年度 (昭和 42 年度)	162
1968 年度 (昭和 43 年度)	164
1969 年度 (昭和 44 年度)	166
1970 年度 (昭和 45 年度)	168
1971 年度 (昭和 46 年度)	170
1972 年度 (昭和 47 年度)	172
1973 年度 (昭和 48 年度)	174
1974 年度 (昭和 49 年度)	176
1975 年度 (昭和 50 年度)	178
1976 年度 (昭和 51 年度)	180
1977 年度 (昭和 52 年度)	182
1978 年度 (昭和 53 年度)	184
1979 年度 (昭和 54 年度)	186
1980 年度 (昭和 55 年度)	188
1981 年度 (昭和 56 年度)	190
1982 年度 (昭和 57 年度)	192
1983 年度 (昭和 58 年度)	194
1984 年度 (昭和 59 年度)	196
1985 年度 (昭和 60 年度)	198
1986 年度 (昭和 61 年度)	200
1987 年度 (昭和 62 年度)	202
1988 年度 (昭和 63 年度)	204
1989 年度 (平成元年度)	206

1990 年度 (平成 2 年度)	208
1991 年度 (平成 3 年度)	210
1992 年度 (平成 4 年度)	212
1993 年度 (平成 5 年度)	214
1994 年度 (平成 6 年度)	216
1995 年度 (平成 7 年度)	218
1996 年度 (平成 8 年度)	220
1997 年度 (平成 9 年度)	222
1998 年度 (平成 10 年度)	224
1999 年度 (平成 11 年度)	226
2000 年度 (平成 12 年度)	228
2001 年度 (平成 13 年度)	230
2002 年度 (平成 14 年度)	232
2003 年度 (平成 15 年度)	234
2004 年度 (平成 16 年度)	236
2005 年度 (平成 17 年度)	238
2006 年度 (平成 18 年度)	240
2007 年度 (平成 19 年度)	242
2008 年度 (平成 20 年度)	244

第3部 随想録

グラウンドと部室 今昔物語	248
御殿下少年サッカークラブ 思い出の記	252
部長・監督 それぞれの思い	258
服部さん いまどこに 居るんですか	268
ベルリン・オリンピック 竹内悌三	270
名選手は娘に優しい父だった	271
東大LB会 法人化のいきさつ	273
創部90年 おめでとうございます	278

第4部 資料編

定期戦の足取り	290
日本代表 東大が生んだ監督・選手	294
東大出身の国際審判員	298
活躍した“身内のチーム”の横顔	299
年表	308
東大LB会員	
東京大学ア式蹴球部員名簿	314

現役部員のエッセーに出てくる特殊用語、学生用語・略語

スポ身：スポーツ・身体活動。1～2年次に駒場キャンパスの教養課程で行われる体育の授業科目名。

ア式：ア式蹴球部（サッカー部）。東京大学運動会に属している部を他のサッカー・サークルと区別して、部員が「ア式」と称している。

新歓試合：新入生歓迎試合

新勧活動：新人勧誘活動

追いコン：追い出しコンパ。卒業生歓送会。

スイパラ：スイートパラダイス。カップルや女性同士のお客が多いケーキのお店の名。

オールする：徹夜で遊ぶこと。

トレセン：日本サッカー協会が実施している年代別の選抜強化。トレーニングセンターの略だが、特定の場所ではない。

インハイ：インターハイ。夏休みの高校総合体育大会をさす。本来は高校の大会のこと。現在の日本のサッカーでは、冬の高校選手権と区別して呼んでいる。多くの高校では、夏のインハイで3年生は部活をやめ、受験勉強に専念する。

MG：マネージャーの略。現在、日本の学校スポーツでは、練習、試合の運営を手伝う女子学生を「女子マネ」と呼び、チームの事務を統括する者（多くは男子）は「主務」とすることが多い。英国のサッカーでは「マネージャー」は監督をさす。

学連：大学サッカー連盟。大学リーグを運営する組織。各大学から、学生の委員あるいは幹事が出ている。

AT：アシスタント・トレーナー。体調、体力を管理するトレーナーの手伝いをする女子マネージャーを、現在の東大ア式蹴球部で、こう呼んでいる。米国ではスポーツのATは「アスレティック・トレーナー」の略で、資格を持つプロの体調管理専門家。

編集後記

東大ア式蹴球部 90 年誌の一部に、御殿下グラウンドで青春を過ごした人たちのエッセーを収録しようというのが、最初の企画だった。原稿の集まりが予想より、かなり多かったので「エッセー集」を別冊にすることになった。

編集委員会では、歴史的な資料を集めたものを「A 本」、エッセー集を「B 本」と呼んで区別した。集まったエッセーを編集委員が手分けして整理し、B 本にまとめるのを牛木が担当した。編集の都合による一部削除や見出しの変更は、牛木の責任である。執筆者にご不満もあると思うが、お許しをいただきたい。

現代かな遣いを原則にしたが、漢字熟語などは筆者の好みをできるだけ尊重することとし、難読と思われるものには振りがなをつけた。

いろいろな年代の思い出を並べてみると、大学のサッカーのあり方、部員たちの取り組み方、それぞれの人生に与えた影響が、時代とともに移り変わる様子が浮かび上がってくる。それを材料にして「東京大学のサッカー」の今後の在り方を考えてみたい。さらには大学のスポーツが社会で果たすべき役割も考えてみたい。そういう、ちょっとオーバーな狙いをもって「東京大学のサッカー」を 2 冊 1 セットにして送り出したつもりである。

B 本は「エコ出版」という新しい印刷製本の方式を使った。経費を安くあげるためであるが、カラー写真を本文中で自由に使える利点を生かしたいと思ったからでもある。本格的なカラー印刷ではないので、発色が十分でないのは覚悟の上である。

印刷製本方式の違う 2 冊の本を一つのコンセプトでまとめるために、装丁デザインをお願いした藤沼佳世さんに苦心してもらった。

残念だったのは、若いメンバーからの写真の提供が少なかったことである。年配の O B からの貴重な写真の提供は多かったが、カラー写真が普及する以前の時代のモノクロばかりだったのは、やむを得ない。

(牛木素吉郎)

東京大学のサッカー ライトブルーの青春譜

東京大学ア式蹴球部 90 年記念誌

発行日	2008 年 12 月 19 日
制作著作	一般社団法人 東大 L B 会 東京大学運動会 ア式蹴球部
発行者	浅見俊雄
発行所	一般社団法人 東大 L B 会 東京都文京区本郷 7-3-1 東京大学運動会内
制 作	有限会社スタジオ・ビー・フォー
装 丁	藤沼佳代
印 刷	S B L 株式会社 E C O 出版

© Light Blue Football Club 2008 Printed in Japan
無断転載を禁ず